

戦  
国  
軍  
記  
の  
変  
容  
と  
伝  
播

山  
上  
登  
志  
美



# 目次

序章	戦国軍記研究の意義	一頁
第一章	室町軍記から戦国軍記へ	十頁
第一節	島原松平文庫本『明德記』作成の目的	十一頁
第二節	永享の乱・結城合戦関係軍記の検討 ┆『鎌倉持氏記』『結城戰場記』『結城戰場別記』の関係	三十四頁
第三節	加越能文庫本『結城戰場記』の位置	五十頁
第四節	『松若物語』の限界 ┆「記」と「物語」の流れ	五十八頁
第二章	戦国軍記の変容と伝播	七十頁
第一節	『播州御征伐之事』の受容	七十一頁
第二節	『別所記』の変容	八十八頁

第三節 別所重棟の虚像と実像

―『別所記』に見る赤松の誇り―……………一〇六頁

第四節 『妙善寺合戦記』諸本の検討……………

一二〇頁

第五節 丹波赤井氏関係軍記について……………

一三五頁

第六節 赤井悪右衛門伝説の行方……………

一五四頁

第七節 播磨の戦国軍記『長水軍記』小考……………

―東京大学史料編纂所図書室蔵本を中心に―……………一七六頁

第八節 「家記」の中の関ヶ原合戦……………

一八七頁

終章……………

二〇〇頁

後記 発表論文掲載誌一覧……………

二〇四頁

資料 東京大学史料編纂所図書室蔵『長水軍記』翻刻……………

## 戦国軍記研究の意義

(一)

近年、軍記研究の中で最も遅れていた戦国軍記の研究が進み始めている。戦国軍記をタイトルに冠した単行本の出版や、『軍記と語り物』各号巻末の「軍記物研究文献目録」が載せる戦国軍記に関する論文数の増加、学会等で演題に取り上げられる機会の増加など、軍記文学研究史上、これほど戦国軍記研究が進んだ時期はない。

しかし、戦国軍記の把握しきれない作品数の多さを考えたとき、これまでの戦国軍記研究の進展は、着実ではあるものの小さな一歩にすぎないと認めざるを得ない。正確な作品数さえわからないのであるから、戦国軍記が軍記文学史の上でどのような位置を占め、前代の文学作品とどのようにつながっているのかなど、解き明かさねばならない多数の問題は残ったままである。

戦国軍記は定義と分類も未だ明確ではなく曖昧である。これに触れた各氏の御論を紹介したい。戦国軍記の分類に最も早く着手したのは梶原正昭氏である。氏は、戦国軍記を含む後期軍記を、①室町幕府の内訌や主要な政治的事件を素材としたもの②特定の家の戦闘ないし戦功の記としての性格を帯びたもの③特定の武将の戦闘的経歴や言行等を記述したもの④特定の地域における戦闘や事件の展開を叙述したもの⑤特定の戦場における合戦の経緯を描いたもの⑥特定の個人の武功談や回想などを内容とするもの、の六種に分けられた<sup>④</sup>。加美宏氏は、『応仁記』以後、一種の中央軍記というべき公の視点を持つ軍記がなくなり、もっぱら一族、一家あるい

は一個人の盛衰・興亡というものに眼目をおいた「私の軍記」が中心となってくる、これを戦国軍記への移行と捉えられた。<sup>②</sup>更に、戦国軍記は「家記・一代記」、「合戦記・戦場記」、「治乱記・兵乱記」の三種に大別できるが、この他にも覚書、聞書、日記なども多く、形態の多様化や視野の狭い局地的性格が戦国軍記の特色である、とされた。戦国軍記がこうした地方性・局地性から再び時代と人間を総体的に捉えようとする広い視野を回復するのは、『信長記』や『太閤記』においてであり、『太平記』以来の「記」系統軍記の伝統を継ぐものといえる、しかし両書とも軍記的な性格は副次的なものとなっており、近世実録物、あるいは仮名草子の一種とみなされることが多いように、このあたりに中世軍記もののジャンルとしての終焉・転生が見られようと、述べられた。<sup>③</sup>鈴木孝庸氏は、「基礎的な研究の積み重ねによつては、その定義ももつと厳密なものになるはずであるが」と断られた上で、「今のところ戦国時代の戦乱を扱った作品・記録類を戦国軍記と称しているようである」とされ、戦国時代については、「応仁の乱より後（東国ではこれより先に戦国化）、大坂夏の陣の終結・元和元年（一六一五）までの大凡百四十年」とされている。<sup>④</sup>一方、笹川祥生氏は「中世と戦国軍記」の中で、戦国の合戦を扱った軍記の多くは、元和偃武以後の成立であり、成立時期からすれば戦国軍記は近世文学であり、記述の姿勢など内容の面からすれば、中世的な要素も近世的な要素も含み得るが、戦国軍記の多くが戦いのなくなつた時期に書かれた戦後文学という性格を持つている以上、中世の枠内に入れ込むことに少し無理があるのではないかとされ、戦国軍記が中世文学史の一部として論じられることに疑問を投げかけられた。「古典遺産の会」が戦国期の軍記の中から主要なものを取り上げ解説した『戦国軍記事典 群雄割拠篇』<sup>⑤</sup>では、応仁の乱後の文明五年（一四七三）ごろから元和元年の大坂夏の陣までの百三十八年間を戦国時代とらえた上で、戦国軍記の概念を示している。戦国軍記と呼ばれる軍記作品には、①戦国時代の戦乱を対象とし、しかも戦国時代に於いて筆録されたもの②戦国時代の戦乱を対象としているが、戦国時代以降

に筆録されたものの二つの場合があると考え、②を近世軍記として区別するべきであるという意見もあるが、残されている諸軍記には筆録の時期を特定しがたいものも多く、近世軍記と戦国軍記を厳密に分けることは困難であり、近世以後に書かれたものも含めて、戦国時代の戦乱を対象とする作品をすべて戦国軍記と概念づけ取り扱っている。戦国軍記を「応仁の乱関係諸軍記以降の軍記作品」とすることは、各氏ともほぼ一致するのだが、その下限をどこに設定するか、つまり、戦国軍記から近世軍記を分けるべきかどうか、分けるとするならば、どこに境界線を引くかが問題のようである。

戦国時代の合戦を戦国時代に書いた軍記（『戦国軍記事典 群雄割拠篇』が示した分類では①に属する軍記）を『戦国軍記』と呼称するのに異論はあるまい。戦国時代の合戦を描きながらも近世に入ってから成立した軍記（『戦国軍記事典 群雄割拠篇』が示した分類では②に属する軍記）をすべて戦国軍記と大きく捉えることにためらいがある。

戦国軍記とはどのような軍記を指すかを考える前に、戦国という時代の特色を確認しておく必要がある。戦国時代は、中央の集権的な政治力が微弱になった時代である。足利幕府は衰退し、朝廷の政治力もわずかな権威を残すのみで消滅した時代である。中央の権力が弱まるにつれ、地方では守護や国人たちが成長していく。彼等の衝突によって全国各地で多くの戦が起こり、強者は弱者を取り込みながら地域支配を広げていく。こうして広大な領地を治めるまでに至った守護や国人の中には、強大な経済力と軍事力を背景に戦国大名に成長する者もいる。中央の権力が消失し地方にまで及ばない時代、それぞれの地域が独自の動きを見せる時代が戦国時代である。「公」がない時代が戦国時代であるから、戦国時代に数多く起こった地方の合戦を描く戦国軍記に「公」の視点はないはずである。戦国軍記の多くは、描く合戦に興味を抱く人々のいる地元の限られた地域でしか享受されず、それによって益々地方性を色濃く帯びながら成長していく。戦国時代が地方の時代であるから、戦国時代の合戦を描いた戦国軍記に地方

性が見いだされるのは当然であろう。

中世戦国時代の合戦を題材とすることが戦国軍記の基本的な定義であるなら、戦国軍記は、地方の時代である戦国時代の特徴を、そのまま反映した軍記だと言ってよい。公の視点を持たないこと、限られた一族や限られた地域の戦を描くこと、地方性を持つこと、梶原・加美両氏が挙げられた戦国軍記の特徴は、戦国時代の特徴に一致する。これらの条件を含み持つ軍記は、近世に成立したとしても戦国軍記として扱うべきである。

「戦国軍記とは、戦国時代から江戸時代にわたって執筆された戦国時代の特定の地域の合戦や限定された一族の戦いを、公の立場でない視点で描いた軍記を指す」と本論では設定し、当否を確かめながら取り扱っていきたいと思う。

## (二)

このように狭い視野で書かれた戦国軍記は、洗練された文章を持つ前代の軍記―例えば覚一本『平家物語』などと比較すれば、文学性が劣るのは否めない。文学的評価の低さゆえに戦国軍記は、同じ後期軍記に属する室町軍記と比べても研究が格段に遅れ、近年ようやく調査が行われるようになったものの、基礎的な研究を待つ軍記作品が大半を占める。

戦国軍記の文学性が低いことは、軍記における文学性がどのように養われていくかを考えれば納得できる。執筆された当初から高い文学性を持つように構成された軍記作品はほとんどないだろう。軍記がノンフィクションである以上、軍記作者は歴史事実や自らの歴史観を伝えることを意図していたはずである。何度も改訂が繰り返され、歴史そのままから歴史離れが生じたとき、初めて高い文学性が育ちはじめると。覚一本『平家物語』が現在見るような豊かな表情を持つようになったのは、題材となった戦乱から離れた時代や場所で、ある程度の教養を持つ

複数の改訂者が文章の出し入れを繰り返して、磨き上げた結果である。戦国軍記の作品の多くが、時間的・空間的に合戦に密着した作者によって書かれ、複数の改訂者の手を経ることもなく、現在見るような姿を見せている。このように流動段階の違う前代の軍記作品と戦国軍記を横一列に並べ、文学性が劣る末流軍記といった理由でその価値を決めつけるのは早計であろう。戦国軍記を他の軍記作品に比べて特別扱いしているわけではない。文学的な評価だけではない。戦国軍記の価値や魅力を引き出すべきである。価値や魅力がなければ、あれほどまでに多様な量の戦国軍記が制作されるはずがない。多くの戦国軍記が書かれた目的と労力の意味を考えるのは、軍記文学の成立に関わる問題を考えることにつながる。

先行軍記の享受という点でも戦国軍記は有益な資料として活用できる。軍記文学の流れが、戦国軍記にどのように伝わり、どのように変化しながら次の時代の文学作品へと流れていくのかを見極めることが、戦国軍記研究の大きな目的の一つであろう。

前代の軍記作品のように一部の限られた人にしか軍記が書けない時代ではなく、身分の低い人でも自分の思いとともに軍記を書き綴れる時代が戦国軍記の生産された時代である。作者と題材との距離が近いために、戦国軍記には飾りはないが戦の生々しい臨場感が現れているのであろうし、同時に冷めた視点を持ってない、いわゆる「私軍記」に陥ってしまうのも無理ないことである。それゆえ戦国軍記の執筆動機は直接的で理解しやすいものが比較的多い。異本の数もさほど多くなく、本文流動の過程を容易に辿れるものも多い。この点に注目した松尾葦江氏は、「軍記物語の成立契機を個別の利害やある一族の固有名詞に結びつけることの当否、もしくはそのための要件、また諸本が分岐してゆく以前からすでに異本発生をはらんだ成立の経緯、といった問題を解く鍵」を戦国軍記を含む後期軍記研究に求められている。<sup>⑧</sup>一方、背景にある文化的状況の違いから、戦国軍記に『平家物語』や『太平記』の成立の具体を求めるのは誤り、とするのは大津雄一氏である。<sup>⑨</sup>『平家物語』も『太平記』も戦国軍記も素材は同じ戦争である。



戦いの記録を後世に伝えようとする意志は前代の軍記も戦国軍記も変わりはない。その意志に共感し育て更に後の時代に伝えようとする感覚は、どの時代の軍記文学にも通じるところであろう。軍記文学の流れは、前代の軍記作品からとぎれることなく戦国軍記に至るまで続いている。軍記が大衆化した時代を背景に持つ戦国軍記と、『平家物語』などのように一部の人々によつてしか軍記を扱えない時代に成立した軍記の成立環境の違いをおさえる必要はあるが、戦国軍記研究の成果が、室町軍記以前の軍記作品の成立の経緯や本文流動の研究に新たな手がかりを与えることは可能である。

(三)

このように、軍記文学研究において戦国軍記研究は重要な意義を持つと考えているのだが、歴史学の方面でも戦国軍記は再評価されつつある。

「太平記は史学に益なし」と言われて以来、軍記は娯楽のための読み物であつて史料的な価値は低いものとされてきた。史料として軍記を扱うのをよしとしない歴史学者も少なくない。その中で上横手雅敬氏は、「『平治物語』以外に抛るべき史料の乏しい平治の乱に関する研究が不振であるのは、軍記を史料として利用することを躊躇する研究者の態度が原因だと思ふ」と、軍記は歴史叙述の一形態であると歴史学の立場から提唱されている。<sup>⑤</sup>川合康氏や近藤好和氏による軍事的な研究にも『陸奥話記』や『平家物語』、『太平記』といった軍記が史料として扱われている。<sup>⑥</sup>合戦密着型が多い戦国軍記の史料価値は、これらの軍記よりもさらに高いと私は考えている。

織田信長が敵対する勢力を攻め滅ぼし平定していくありさまは、信長や周囲の武将たちの書簡などの古文書、あるいは『信長公記』などに追うことができる。しかしこれらの史料は信長

方から、つまり勝者側からの記録が多く、敗者側がどうして信長に敵対したのか、どのように戦ったのか、敗者側の陣内の様子はどうかだったのかはほとんど知ることはできない。滅亡した側の記録は残りにくいし、勝者側は都合の悪い記録は残さないためである。たまたま第三者の記録が残っていても、それは合戦から遠く離れた人が書き残したものであり、具体性に富むものではない。そのように考えると、現在使用される史料の多数は、非常に偏っている可能性もある。ところが幸いにも滅亡した側の視点から見た記録が得られる場合がある。軍記もそうである。落城記と呼ばれる敗者の記録が多く残っている。なぜ城主たちは信長に反抗し攻められ滅んでいったのかを、城内の様子や名もない兵たちの戦いぶりとともに伝えてくれる。これらの軍記を辿っていけば、信長とは逆の立場から見た戦いの様子が知れるのである。

戦国軍記を史料として役立てるには、作者や執筆時期などの成立環境をはじめ、伝本間の異同、加筆や削除の有無とその目的などを明らかにする基礎的な研究が必要である。これらの研究成果から、たとえ作者が主観的に描いた場面でも、我々はその戦国軍記を客観的にとらえ、史料として利用できるのである。第一級とされる史料でも、その史料が伝わってきた環境や残された意味をまず考えるのは当然であろう。史料批判が必要なのは、軍記だけに限らないはずである。日記・文書などの第一級史料と軍記が同じ事件を記述している場合、異なるのは記述の角度だけであり、内容の優劣をつけるのは無意味である。最近、地方自治体の地方史編纂事業の中で、活字化され紹介される戦国軍記も多い。地方史研究において戦国軍記研究の進展がみられるのは、戦国軍記と地元が深く関わっていることの証しでもあり、戦国軍記が良質の史料として利用できる証しでもある。

国文学においても歴史学においても戦国軍記には多くの可能性が期待できるが、戦国軍記の研究は、多量・多種多様への挑戦でもある。数ある戦国軍記の中からキーポイントとなるような作品を選び出し、基礎的な調査を施した後、軍記文学史の上に置いていく作業が今後必要

である。ある程度の戦国軍記が位置づけられたとき、戦国軍記の全貌が見渡せるようになり、戦国軍記の定義も確かなものになるであろう。それまで地道な努力を積み重ねていかねばなるまい。

(四)

軍記が制作され伝えられていくとき、何らかの改変が施される。改訂者の手が多ければ多いほど、多くの異本が生産されていく。前代の軍記より改訂者の手が少なく原態の面影が残る戦国軍記は、先に述べたように比較的容易に本文流動の跡を辿ることができる。どのような条件のもとで軍記は改変され、どのような環境のもとで伝えられ広まっていくのか。その過程を解く鍵を戦国軍記に求めるには、戦国軍記を産みだし育んだ地方に目を向ける必要がある。戦国軍記の発生と変容、その後の伝播を考えるために、本論では合戦の舞台であり成長の土壌となつた地方に中軸を置く。そして、個々の戦国軍記の持つ特質を明確にすることで、戦国軍記全般を見渡す手がかりの一つでも見いだせたら、と願う次第である。

注① 「中世後期の諸軍記」(『解釈と鑑賞』二十八―四 一九六三年三月 『室町・戦国軍記の展望』二〇〇〇年 和泉書院)に再収)

② 「軍記物の行方」(『国文学研究資料館講演集八 軍記物語の展開』一九八七年三月)

③ 「軍記の展開」(『日本文学新史中世』解釈と鑑賞別冊 一九九〇年七月)

④ 「戦国軍記 公から私への一軌跡」(『解釈と鑑賞』五十三―十三 一九八八年十二月)

- ⑤ 『中世文学』 四十一（一九九六年六月）
- ⑥ 一九九七年 和泉書院刊
- ⑦ 「戦争の物語―軍記物語を産み育てた時代と文化―」（『国文学』 四十五―七 二〇〇〇年六月）
- ⑧ 「戦国軍記研究の困難さ」（『日本文学』 五六九 二〇〇〇年十一月）
- ⑨ 『源平争乱と平家物語』（二〇〇一年 角川選書）
- ⑩ 川合康著 『源平合戦の虚像を剥ぐ』（一九九六年 講談社選書）・近藤好和著 『弓矢と刀剣』（一九九七年 吉川弘文館）参照。

## 第一章 室町軍記から戦国軍記へ

戦国軍記と同じ後期軍記に分類される室町軍記は、年号をタイトルとした政治的事件を描く作品が多く、戦国軍記の「私の視点」に対して「公の視点」を持つとされる。しかし、室町軍記の伝本の中には、中央の視点から離れた立場で事件を書き直したものもあり、そこには戦国軍記の兆しを感じる事ができる。

第一章では、室町軍記の中から『明德記』と『永享記』をとりあげ、戦国軍記が持つ私の視点や地方性といった特質を室町軍記の中に捜してみる。また、軍記の主流をなす実録的な「記」の表現と物語的な「和文調」の表現が、室町軍記から戦国軍記へどのような形で流れて受け継がれているのかを考えてみる。

## 第一節 島原松平文庫本『明德記』作成の目的

(一)

明德の乱を扱った『明德記』の諸伝本は、かつて富倉徳次郎氏によつて三つの系統に分けられていた。<sup>①</sup>

- 1 神宮文庫本（群書類従本）に代表される初稿本系
- 2 再稿本系（近衛家蔵本）
- 3 内閣文庫蔵二冊本など初稿本より派生したものの

このうち2再稿本系はその奥書によつて、明德の乱の一、二年後に成立した作者自筆本（初稿本系の祖本）を乱後七年目の応永三年（一三九六）五月に作者自身が訂正して成つたことが明らかである。

富倉説がほぼ定説化していた中で、一九七七年大森北義氏は、島原市立公民館蔵松平文庫本を紹介され、本書が富倉氏の整理された『明德記』諸本体系内に収まらない特異な伝本であり、「原初的な形態の性格」を持つと予測された。<sup>②</sup>これに対し和田英道氏は、松平文庫本と初稿本系の書陵部本の記事を詳細に対照され、本書が「同系統の天理本と共に初稿本系統本文を簡略化したもの」と結論づけられ、大森氏による松平文庫本先出本説を否定された。<sup>③</sup>

この松平文庫本先出本説と後出本説が対立しあつたまま現在に至っているが、本節では松平文庫本が初稿本系の伝本を再編成したものであり、その目的は山名氏清の家臣小林重義を主人

公にした軍記の作成にあることを論証する。

(二)

はじめに松平文庫本後出本説を唱えられた和田氏の御論を紹介しておこう。<sup>④</sup>氏は松平文庫本と初稿本系書陵部本の記事について興味深い比較をなさっている。

(事例一)

書陵部本

抑近日京都ノ式何ト力被ニ思食ニ候。只事ニ触テ此一家ヲ可レ被レ亡御結構也。其謂ハ去年ハ貴殿様我々ニ被仰付テ与州ノ一跡ヲ失ハレ当年ハ又彼等ヲ御免有ハ定テ我等ヲ御退治可有御意已ニ色ニ顯レタリ。

松平文庫本

近日京都ノ時儀何ト力思食候ラン。只事ニヨセテ当家ヲ亡サレヘキ企ナリ。

又

亦

当家代ヲ取テモ難カルヘキニ非ス。一族悉同心シテ分国ノ勢ヲ集テ方々ヨリ京都ヘ責上ラハ今程誰力在京ノ大名ノ中ニ当方対揚ノ合戦ヲモ可仕。先京ヲタニ一散シ々シナハ他家ノ一族共モ大略ハ同心コソ仕候ハンスレ。其外土岐富樫ヲ始トシテ近比世ニ狭ラレテ面目ヲ

当家世ヲ執ラム事カタクカルヘキニモ非ス。一族悉ク同心而分国ノ勢ヲ合テ方々ヨリ責上ラハ在京ノ人々ノ中ニ誰力当家相<sup>サウケンヤ</sup>掎ノ合戦ヲモ至スヘキ。一先都ヲ追チラシタラハ他家ノ一族モ皆同心仕ラン。中ニモ佐々木ハ御烏帽子子ト申御縁ト言イ争力都ヲ引ヤフラテ候ヘキ。左候ハ其ニ与力ノ人々モ亦ハ候ヘシ。

失者共余タ有ハ此等ハ最前ニ同心仕ルヘシ。御謀叛トコソ披露ハ無クトモ先事ヲ武州ノ恨ニ寄テ御合戦ニ可及。時ノ儀ニ随テ御旗ヲ上ラレン事何ノ子細力候ヘキ。謀叛トコソ御沙汰無<sup>トモ</sup>其事ヲ武州ノ恨ニ寄テ御合戦ニ及フヘシ。時儀ニ随テ御幡ヲ上ラレム事何ノ子細ノ有ヘキ。

氏は「亦（又）」の使い方について、

この場合の「亦（又）」は、それまで説明してきた事柄にさらに別の事柄を追加する接続詞である。となれば、「亦」の前後には同等（必ずしも同量でなくてもよいが）の記事が配置されて然るべきであろう。この点、他の伝本では「亦」を挟んで前に義満の策謀の内実、後に山名方勝利を予測する記事がバランスよく配置されている。その二つの記事は両相俟つて効果が生じるのであり、一族の運命を懸けた謀叛を説くことばとしては、両方あるのが適しい。すなわち松平文庫本は義満の策謀を伺わせる記述を除去したのであり、「亦」はその際の不手際を暴露したものとと思われる。

と述べられている。更に次の例についても同様で、書陵部本のように対立する複数の意見を示すなら「又ハ」は生きてくるが、松平文庫本のように穏便な意見を一つだけ示す場合には「亦ハ」は不必要なものである。

（事例二）

書陵部本

御合戦ノ御評定有ケルニ意見区々ニシテ合戦ノ評定有ケルニイケン区ニテ更ニ一決セス。

松平文庫本



更ニ一決セス。或ハ京中ヲアケラレテ東  
山辺ニ御陣ヲ被レ召テ敵寄来ラハ川原面  
ニ出合テ御合戦可有歟ナント云義モ有リ。

又ハ

天下静謐コソ肝要ニテ候ヘハ彼等カ訴訟  
ヲ尋ネ聞食シテ申処子細ナクハ被<sup>ナクメ</sup>ニ宥<sup>メ</sup>仰  
事モ一途ニテ候者ヲナント申議モ有リ  
ケレ共

亦ハ

天下ノセイヒツヲソ肝要ニテ候ヘ。彼等訴詔ヲ  
尋聞召サレテ申所ヲ<sup>ナク</sup>諍<sup>メ</sup>メラレム事仰ラレム事モ  
一道ニテ候物ヲ何ト、謂センキモ有ケレハ

このように見てくると、「亦ハ」の表現のまずさもそうであるが、出来上がった文章（松平文庫本）の中に違う文章を上手にわり込ませて以前の文章より表現を正確にスムーズになくのは至難の技であり、それよりも説明的な文章（初稿本系伝本）から主語等や余分な話を除去し、簡略な表現を作り出す方が容易ではなからうか。

松平文庫本後出本説の傍証として、いま一つ挙げよう。松平文庫本には山名征伐のため足利義満のもとに集まる武士たちの着到を付ける場面があり、その中に次のような人物名を記している。

先ツ一ノ筆二ハ、喜良ノ治部大輔頼猶・石堂ノ兵部少輔・茲波ノ左兵衛佐義重（中略）佐々木六角判官満綱・同京極治部少輔高詮<sup>⑥</sup>

この中の佐々木満綱について、初稿本系のうち阿刀家本のみが「六角判官満綱」の名を挙げ、書陵部本・神宮文庫本・内閣文庫二冊本などには見当らず、近衛家蔵本（再稿本系）では「六

角判官満高」の名で記されている。

更にこの後、義満方の手分けを記す場面に松平文庫本は「佐々木六角判官満綱一千余騎、赤松越後守一千余騎、東寺二陣ヲ取タリケル」とここでも「満綱」となっているのに対し、阿刀家本のみが「満綱」とするだけで、他の初稿本系・再稿本系では「満高」となっている。佐々木満高と満綱は父子の關係にあり、父の満高は『系図纂要』によると応永二十三年（一四一六）十一月に四十八才で死去しているから、明德二年（一三九一）の明德の乱の折には二十三才である。子の満綱は文安三年（一四四六）に自殺しているが、生年や年齢については不明である。満綱が満高の長子であるにしても明德の乱に満綱が参戦するのは年齢的に無理であり、後世の人の修正でなければ、阿刀家本と松平文庫本が満高を登場させる初稿本・再稿本以前の成立とは考えられない。

この満綱を登場させるのが初稿本系に属する阿刀家本と松平文庫本のみであることは注目される。他の部分でも松平文庫本と阿刀家本のみ共通する表現がしばしば見られ、松平文庫本が阿刀家本、もしくはそれに近い本文を持つ伝本に拠ったと考えられるのである。

(三)

山名氏清の家臣小林重義について、かつて望月満夫氏は「松平文庫本において小林は山名氏清派内から隔絶された局外者として描く反面、称揚的に描かれ、作品中において小林が作者に最も近い立場をとっている」と指摘され、「エピソード末尾に評語を付しエピソードの終結を知らせるストイックな類型こそ自然で原初的な叙法である」と大森北義氏の松平文庫本先出本説を支持されたことがある。⑥確かに松平文庫本において小林重義が破格の扱いを受けていることは首肯できる。ある程度まとまった話で他の本にはなく松平文庫本のみが伝える話に、小林

が子や郎等を集めてこの合戦で一番に討死をする覚悟を述べる場面がある。出来る限り簡略に表現しようという姿勢を保つ松平文庫本が、わざわざ紙幅を割いてこの話を付け加える理由はどこにあるのだろうか。

次に松平文庫本の合戦描写のうち、半分以上の量を占める小林勢と義満方の大内義弘勢の対戦について見てみよう。ここでもやはり松平文庫本は、初・再稿本に比べて相対的に簡略な表現になっている。

#### 阿刀家本<sup>⑦</sup>

去程二十二月晦日ノ卯刻二四条大宮ニ押寄テ山名上総守小林上野守今日ノ軍ノ先懸シテ討死スルソト声々ニ呼テ時ヲ噓トソ揚ケル。

#### 松平文庫本

既二天明、東二横雲引ケレハ、風ノ音モアラマシク、キモソ、ロニ身フルウテ、今ヤク、ト待ケルニ、山名ノ上総介・小林ノ上野守、其勢七百余騎ニテ二条ヲ、チヘ押寄テ、今日ノ師ノ先懸シテ討死スルト声々ニ呼ハツテ、時ヲ噓トソ挙タリケル。大内勢五百余騎、指当ツタル敵ナレハ、時ノ声ヲソ合ケル。継々ノ陣々、ウケトリク、時ヲ挙ク。上ハ一条北野ノ森、下ハ二条雀ノ森、西ハ大宮ノ内野島、東ハ堀川西ノ洞院、其間ニ満々タル諸軍勢、一同ニ尻籠箆ヲタ、イテ時ヲ噓トソ挙タリケル。大内左京権大夫義弘一番勢ノ事ナレハ、此勢ニワタリ合、

大内左京権大夫義弘是ヲ聞テ一番勢此口ヘ寄タリ、遁レヌ処也。敵ハ定テ大勢ニテソ有ラン。此小勢ヲ以テハ何ト存スレ

共、面々ハ皆名ヲ知レタル人々也。西国ニテ度々ノ合戦毎度高名ヲシタル兵ナレ共、都辺ノ軍ハ只今カ始也。一人モ残ラス切死シテ名ヲ万代ノ誉ニ残シ尸ヲ一戦ノ刃ニ碎ト呼テ、兼テ定シ道ナレハ、三百余騎ノ兵共一度ニハラリト下立テ楯ヲ一面ニ衝双テ、射手ノ兵二百余人両ノ手崎ニ進マセ、中ヲ破ルナ敵若馬近付ヨラハ馬ヲ切テ驛落セ。落ハ押ヘテ差殺セ。若又敵モ下立テ懸ラハ、指覆テ弓手ノ袖ヲユリカケテ敵ニ切函入組テ勝負ヲ決スヘシ。敵ハ引トモ引ヘカラス。手痛ク切テ懸ルトモ一足モ退ナト大声ヲ上テ下知シツ、我身モ真前ニ下立タリ。義弘カ其日ノ装束ニハ練貫ヲカチンニ染テ威シタル鎧、同毛ノ三枚冑ノ緒ヲ占テ、二尺八寸ノ太刀ヲ帶キ青地ノ錦ノ母衣ヲ懸ケ三尺八寸候ケル荒実ノ長刀ヲ引ソハメテ近付敵ヲ待懸タリ。

小林カ先懸ノ兵二百余騎引勝テ二条大宮ヘ懸出テ敵ノ陣ヲ見渡ハ、宵ニ降タル雨晴テ夜霧モ深ク立残り色モサタカニ見ヘ

小林カ先懸二百余騎引ツスクツテ二条大宮ヘ懸出テ、敵ノ陣ヲ見渡セハ、夜半ニフリタル雨ハレテ、霧少シ立残り、物ノ色合サタカ也。峰ニツ

ネ共、峰二分ル、横雲ノ間ヨリシラム夜  
八明テ、篠ノ、メ見ユル程ニ、ヒタ甲三  
百計リ下立テ南向ニ楯ヲ衝並テ間々ニ切  
先ヲ並テ静返テ控ヘタリ。内野ノ方ヲ見  
渡セハ、陣々ノ勢打立テ大幡小旗ヲユラメ  
カシテ二三万騎モ有ラント雲霞ノ如クヒ  
カヘタレハ、大山ニ向フ心地シテ上総守  
モ小林モ退屈シテ覚ヘリ。去程ニ二条大  
宮ヨリ軍始テ馬ノ足音矢叫ノ声天地モ響  
計也。

ラナル(破)黄雲ノ隙ヨリシノメ見ユル程ナルニ、  
ヒタ甲二百余騎、南面ニ楯ヲマハラニ而、其合  
々ヲ見テ有レハ、切ツ先ヲ並テシツマリカエリ  
ヒカヘタリ。内野ノ方ヲ見テ有レハ、陣々ノ猛  
勢打立テ、大旗小旗ユラメキテ、五・六百騎モ  
有ラムト雲霞ノ如ニ見ヘシカハ、大山ノ向心地  
シテ、上総介モ小林モ退屈而コソ覚ヘケレ。既  
ニ矢師始リケリ。馬ノ足音矢サケヒハ、天地モ  
ヒ、ク計也。

大内権大夫ノ兵、神祇官ノ森ヲ後ニアテ  
射手ノ兵皆同丸腹当帽子冑ニテ横ヨリ左  
右へ出流テ、雨ノ降力如ニ射タリケリ。  
小林カ勢是ヲ見テ、五十騎計下立テ大内  
勢ノ真中へ切先ヲ揃テ切テ入。

小林カ兵百四五十騎(降)折立テ、大内勢ノ間中へキ  
ツサキヲソロエテ切テ入。

文章表現が異なるところも多いが、松平文庫本が省略している阿刀家本の傍線部は、すべて大内勢の様子を描いた部分であることが明確である。このあと小林が討死する場面において、松平文庫本は「大内ノ兵二柵ノ筑前」という人物が小林の頸を取ろうとしたところを、小林は彼を引き寄せ指違て死んだとする。「柵ノ筑前」と実名を挙げるのは松平文庫本のみで、他本では「大内カ若党」或いは「権太夫の兵」としか記さない。先に挙げた小林が覚悟のほどを郎等に告げる場面とともに、松平文庫本はここでも不必要なものは出来る限り削除しながら、小

林に関する話題は積極的に取り入れているのである。

そして小林討死の後、松平文庫本は「彼小林力振舞ヲ誉又人コソナカリケレ」と小林賛美の言葉で飾る。松平文庫本のもう一つの評語、大尾の「義弘ノ高名ナラヒハ更ニ無リケリ」の「高名」とは、皆がその振舞を誉めたたえた勇猛な小林を討った義弘の高名を指しているのであって、それはそのまま小林の賛美ともなるのである。

このように小林重義は松平文庫本において勇将として描かれ、作者が小林の姿を描くのに徹していると言っても過言ではないだろう。

(四)

小林重義を描いた謡曲に「小林」がある。明徳の乱を素材にしたこの能は、宝徳四年（一四五二）に春日社頭で演じられた記録が残っているので、これ以前に成立したらしいが、曲中に氏清のことは「昨日や今日の事」とあり、明徳の乱後まもない時期に作られたものであろう。

『明徳記』と謡曲「小林」の影響関係については、天野文雄氏、小林健二氏が論じられている。

天野氏は謡曲「小林」が『明徳記』とは別個に成立したものであり、この曲は石清水八幡男山上で語られていたみやつこの軍語を取り入れて、手際よく再編成したものであるとされている。<sup>⑧</sup>一方、小林健二氏は「小林」はやはり『明徳記』を参照したとされ、更に謡曲中で氏清勢が三千八百余騎とするのに対して、松平文庫本が「氏清八廿六日ノ早旦ニ其勢三千八百余騎、和泉堺ヲ打立テ」（書陵部本・阿刀家本は二千三百余騎、近衛家蔵本は二千余騎とする）という妙に合った数字を有すること、小林が山名氏清に諫言する場面において、謡曲では『平家物語』の「法印問答」説話を挿入し、松平文庫本では「呉王夫差と伍子胥」の説話を挿入していることから、松平文庫本の謡曲に与えた影響の少なくないことを暗示している、と考えら

れた。<sup>⑧</sup>

謡曲の中で氏清のことは「明德記にも作り候へ」とあるのを素直にとれば、謡曲「小林」が『明德記』と無関係に成立したとは考えにくい。「小林」と『明德記』の影響関係を想定するのが妥当な意見ではないだろうか。しかし松平文庫本↓「小林」という影響関係には疑問を感じるのである。謡曲の言う『明德記』は再稿本系の本文を持つ伝本であり、松平文庫本ではないと考えるのだが。もう一度松平文庫本のみが謡曲と符合する氏清の軍勢についてみてみよう。問題の箇所的前後を阿刀家本と比較する。

阿刀家本

去程二播磨守ハ二十六日ノ暮程二丹波ノ然処ニ、山名幡磨守満幸、廿六日ノ暮程ニ、丹

篠村

(二付テカ)

合戦ノ評定有ケルニ小

波ノ篠村ニ付テ合戦ノ評定シケルニ、小葦ノ次

葦次郎左衛門尉進出テ申ケルハ、当国着

郎左衛門○進ミ出テ申様、此勢当国へ付タル事、

タル事ハ定テ京都へモ聞ユヘシ。然ハ敵

定テ京都へモ聞へ候ラム。然ラハ、敵桂川ヲ越

桂川ヲ越

(テ大カ)

江山

(老山ニカ)

馳上テ

テ老山ニ陣ヲ取、

相支ハ由々シキ大事ニテ山ヲハ越候ハン

相支へハ、言敷大事ニテ山ヲ越シ候ヘシ。其時

スレハ国堺ノ勝負□成テハ都へ入ン事不

ハ、国境ノ勝負ニ成テ、都へ入ラム事不定成へ

定ナルヘシ。只今夜山ヲ越テ峰ノ堂ニ陣

シ。只今夜、山ヲ越テ峯ノ堂ヲ陣ニ取テ、京勢

ヲ取テ京勢ノ動ヲ目ノ下ニ見下シテ八幡

ノ働ヲ目ノ下ニ見下、八幡勢ト牒合テ一合戦有

山崎ニ牒シ合セ御合戦可有歟ト申タリケ

ヘキ物ヲト申ケレハ、

レハ現ニモトテ、二十六日ノ宵ヨリ山ヲ

此義尤トテ、廿六日ノ宵ヨリ山ヲ越テ峯ノ堂ヲ

越テ播磨守ノ兵一千余騎峰ノ堂ニ陣ヲ取陣ニ取、都合其勢二千余騎、三引両ノ旗二流打

松平文庫本

テ、三引両ノ旗ニ流桂川ノ河風、松尾山立テヒカヘタリ。

ノ山嵐ニ吹靡カセテ控ヘツ、回天ノ機ヲソ争ヒケル。内野ノ御陣ト峰ノ堂ト三里ニ不足間ナレハ、敵ヲ目懸ツ、両陣共ニ汰ユラヘタリ。

去程二軍ハ二十七日ト定メケレ共、和泉紀伊国ノ軍勢通路難儀ニシテ八幡勢調ツハサリケレハ、合戦ハ延引シケリ。

氏清ハ、廿六日ノ早(旦)且ニ其勢三千八百余騎、和泉堺ヲ打立テ、世ニ住吉トイサミヲナシ、馬ヨリ下、明神ニ参給ヘハ、神主出合、首途イハイ、其ヨリ奥州打上リ、八幡山ニ陣ヲ取。師ハ十二月廿七日ト定タリケレ共、八幡勢汰ツワサリケレハ、延引トソ聞ヘケル。

傍線を施した部分が、他の『明德記』諸本には見えない松平文庫本独自の文章である。この部分は謡曲では「扱も明德二年十二月廿六日、山名の陸奥守氏清は、和泉の堺を打立て、此八幡山に着陣ある」となっており、例の諫言の後に「惣じて氏清の御勢三千八百余騎、あへて退く事なかれ」とあり、謡曲と松平文庫本の関連が認められるのである。

松平文庫本はこのあともう一度氏清の軍勢の数を記している。「山名ノ陸奥守氏清、二千三百余騎ニテ淀ノ大明神ノ御前ニ渡タル浮橋渡リ」、この部分、阿刀家本では「奥州ハ二千三百余騎淀ノ大明神ノ御前ニ懸タリケル浮橋ヲ渡テ」となっており、ここでの軍勢の数は松平文庫本と阿刀家本と一致する。

松平文庫本は阿刀家本またはそれに近い本文を持つ伝本を基にしながらも、阿刀家本にはない氏清が堺を発ち八幡山に着陣する場面を、再稿本系の伝本の影響を受けて成立した謡曲から



取り入れ、軍勢の数まで書き加えたために、阿刀家本に拠った軍勢の数との矛盾が生じるといふ不手際を暴露してしまつたのである。このことから、松平文庫本が小林を主人公にした謡曲の影響を受けて成立したと考えられるのである。

謡曲のように小林が「伝説の勇将」として伝えられていたことを物語る資料に『応永記』と『嘉吉物語』がある。

### 『応永記』<sup>⑫</sup>

又近年山名陸奥守氏清俄二発<sup>ニ</sup>向<sup>スル</sup>京師<sup>ニ</sup>間、不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>催<sup>ニス</sup>遠国<sup>之</sup>勢<sup>ニ</sup>率<sup>ニ</sup>二百余騎<sup>ヲ</sup>堅<sup>ル</sup>陣<sup>ヲ</sup>  
之<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>二彼先陣小林以<sup>ニ</sup>七百余騎<sup>ニ</sup>懸<sup>ニ</sup>当陣之間<sup>ニ</sup>入道（大内義弘）捨<sup>ニ</sup>身命<sup>ヲ</sup>遂<sup>ニ</sup>合戦<sup>ヲ</sup>掛<sup>ニ</sup>  
好敵十余人於手<sup>ニ</sup>。某蒙<sup>リ</sup>二箇所之疵<sup>ヲ</sup>竟<sup>ニ</sup>討<sup>ニ</sup>捕<sup>ル</sup>小林以下<sup>ノ</sup>兵百餘騎<sup>ヲ</sup>。

### 『嘉吉物語』<sup>⑬</sup>

去程に、小林二百余騎にて、きつさきをそろへて、おもてをふらす切てかゝりければ、一色殿の勢も、こゝをせんとゝたゝかいけれども、さすか小林名人なれば、御所かたの御勢をや、俄に九十余騎打とりて、いきほひ、いさみてありければ、小林にひるみて、はせむかふものもなかりける所に、あかまつか勢、東寺のよつみかたとにひかへて有しか、小林なればとて、いかほどの事か有へきとて、赤松か手勢わつかに三百騎にたらすして、小林かひかへたる陣へきつてかゝり、半時計おふつかへしつたゝかひけり。去程に、又一色とのゝ勢もいきおひをなし、とつてかへして切てかゝりけり。あまりにせめたてられて、名人の小林も、多勢に無勢かなはねは、かくるも引も時にこそよれとて、西の朱雀の観音の町まへまで引のきけり。然共いきをくれすおつかけゝれば、小林いまはかなはしと思ひて、むらさきの糸のよろひをぬひて、さいこのいくさなりとて、君よりはしめて十二代つたはりたる黒皮のよろひをきて、同毛の五枚かふとの緒をしめ、四尺八寸

の長刀、くきなかにとりのへ、大勢の中になつて入、抑奥州の御内に、小林上野守なり。我とおもはんものあらは、いさやくまんと名乗もあへず、大勢の中へきつて入。さんさんになつたかひけり。しかりといへとも、小林運のきはめにや、敵の中より矢一すし来りて小林か左のまなこをいぬきければ、たけき心もよはくと成て、終にむなしくなりけり。

いづれも小林重義を討つた自分の手柄を述べる体となつてゐる。彼を討ち取つた手柄を自慢できるほど、小林が優れた武将として伝えられていたことがわかる。

(五)

ところで松平文庫本の氏清八幡山着陣の場面について、大森北義氏は、

短い記事であるが山名の動向を叙述する上で重要なものである。1の記事(筆者注・山名満幸が峰の堂に陣をとる記事)で満幸の動きを記していることとの関係からいっても、氏清の位置を明らかにすべきであり、ここで松平文庫本が氏清の動向について記しているのは記事構成の上でむしろ当然であるし、それが自然でもある。他の伝本はこの氏清の八幡進駐という動きについての記事をもっていないのであるが、これ以前の叙述をみても具体的にはそれと記していなかった。こうしたところに、松平文庫本と他の伝本との記事構成に関する質的な差をうかがうことができる。

とされた<sup>④</sup>。これに対して和田英道氏は、

確かに他の伝本の場合、松平文庫本のように「廿六日」と明記してまとまった形で氏清の八幡着陣を叙述してはいない。しかし、後続の記事を読み進んでいけば、氏清が八幡に陣を敷いていたことがおのずから明らかになる仕懸けになっている。

とされ、「他本はそれを明らかにしていないという大森氏の指摘は妥当ではない」、そして松平文庫本独自の本文である傍線部の文章について「当然であるし、それが自然であるとした大森氏の見解には従い難い」と述べられた。<sup>⑤</sup>

和田氏が指摘なさったように後続の記事を読み進んでいけば、氏清が八幡に陣を敷いていたことが明らかになる仕掛けになっているのなら、なぜわざわざ松平文庫本は謡曲からこの記事を抜き出してここに置いたのだろうか、という疑問が深まってくる。それは、「和泉堺ヲ打立テ」、つまり氏清が「堺」から軍勢を率いて出発したのだ、ということ松平文庫本が強調したかったためではなからうか。他本には見えない堺に関する記事が頻出することからも、松平文庫本の堺にこだわる姿勢がうかがえる。

① 其ヨリ氏清、吉野へ参テ南帝ヲ進メ申、御幡ヲ給リ、則堺へ歸テ一門ノ人々ニ御幡ヲ拜セ、分国ノ勢共ヲ堺ノ浜へソ呼越シケルニ、集ル勢ハ数知ラス。悪キ一家ノ其中ニ、十一カ国ノ守護職ナレハ、是ヲ為<sup>(先達か)</sup>ト、出立テ、ハヤ堺ノ浜へウチ集ル。(他本なし)

② 播磨守満幸ハ数千騎ヲ引具而、丹波口ヨリ責上ル。奥州ハ堺ヨリ八幡へ打上ル。

(陽明文庫本は「奥州は雲霞の勢を聳て八幡へつめ」とし、他の本は「堺」を和泉または泉州とする。)

③然レハ、堺ニハ奥州、一族・若党呼寄セテヨリ、師ノ内談トリ々也。小林ノ上野守重義、時々教訓申共承引ナシ。宇野・蓮池カ申ニ同心シテ、重義ハワカク御意ニ背ク。

(他本なし)

これらの記事の中で特に注目したいのは③である。③の文章の後には、他本に見えない小林が郎等たちに討死の覚悟を告げる場面が続く。

サテ、小林ハ宿所ニ帰り、子共・郎等呼寄テ、氏清天下ニ印ヲ懸給フ事一定セリ。某教訓申共、御承引ナク、宇野・蓮池・桐野カ悪逆ニ御同心有、小林ヲハ臆病者ト思召タル御心中コソ口惜ケレ。然レハ、当家ノ御運モ小林カ命モ今ヲ限ナリ。アワレ、此事カ夢ニテサメヨカシ。サリナカラ、人数ナラネト、小林カ不思議ノ御方ニ成、世ニモ進マヌ此弓矢トルモウシ。取レ共人ノ数ナラス。然トモ、此キワニトカクノ事ハ入ヘカラス。後ノ落ハトニモアレ、先ツ一番ニ某討シニ為サント、経読念仏而、思切ラル計ナリ。

③の文章から続けて読めば、小林は堺の宿所で子や郎等たちに一番討死の覚悟を述べたことがわかり、①の記事と同様にここでも場面設定は「堺」なのである。このように松平文庫本は他本に比べて簡潔な文を持ちながらも、他本には見えない堺での出来事を積極的にとりいれている。また、和泉・紀伊の山名勢が遅参したために合戦が延期となり、山名方が不利となった記事について、松平文庫本と阿刀家本の本文をくらべてみる。

阿刀家本

松平文庫本

去程二軍八二十七日ト定メケレ共、和泉師八十二月廿七日ト定タリケレ共、

紀伊国ノ軍勢通路難儀ニシテ八幡勢調ハ  
サリケレハ、合戦ハ延引シケリ。其故ハ、  
延引トソ聞ヘケル。

河内国ノ守護代遊佐河内守国長嵩山十七  
ヶ処兩処ニ城郭ヲ構テ、国中ノ迫リ々ニ  
野伏共走合々々、散々ニ射ケル間、軍勢  
通ラサルニ依テ八幡勢揃ハサリケレハ、  
八幡勢汰ワサリケレハ、  
其故ハ、遊佐ノ河内守、国中ノ勢ヲモヨシテ、  
ツマリくニ城郭ヲカマヘ相支ケレハ、紀伊国  
ノ軍勢通路難儀ニ而、八幡勢汰ハサリケル間、

松平文庫本は阿刀家本の波線部から「和泉」を削除し、氏清の兄、山名義理の紀伊勢のみの遅参をあげている。松平文庫本は和泉勢の失態については触れたくないのである。以上のように、松平文庫本には堺との深い関わりが認められるのである。

「堺」と謡曲「小林」との関係については、村田勇司氏の御論考がある<sup>⑧</sup>。現存する堺市の少林寺が、寺伝からもともとは「小林寺」と号し、小林が大檀越であったことから、小林に関する伝承が堺において管理されていた可能性を指摘されている。松平文庫本には他本に見えない堺についての記事が多いことから考えると、小林の伝承が堺において管理されていたことは大変重要な意味を持つてくる。松平文庫本は大内義弘の描写を少なくするなど、出来る限り本文を簡潔にしながら小林の姿を描くことに徹している。堺関係の記事が増補されているのも、村田氏が指摘された堺における小林の伝承が、松平文庫本に入り込んだ結果だと思える。仮に、松平文庫本が古態をとどめるもので、松平文庫本から初稿本系の伝本が派生したと考えたとすれば、初稿本はなぜ堺関係の記事のすべてを削除したのが説明しにくい。それよりも松平文庫本に到ってから、小林にゆかりの深い堺に残っていた伝承が入り込んだと考えた方が自然で納得しやすい。中央の視点で描く「追討記」的な初・再稿本系『明德記』に対して、松平文庫本は小林重義に焦点を合わせた「伝記」を目指した作品なのである。

大森氏が初めて松平文庫本を紹介されたとき、他の伝本より簡潔な記事構成と独自性の色こい異文について、「原初的な形態としての印象が強いこと」、義満の策謀については詳しく叙述を避ける傾向を示していることや、義満方については独自の記事を多様に加えてもち、義満の勝利に向かう道程を他の伝本に比べて一層強く保障しているところから、松平文庫本が「明確な党派性をうかがわせる伝本」であると指摘された<sup>⑩</sup>。松平文庫本後出本説を唱えられた和田氏も、松平文庫本が他の伝本に比べて、より深く義満擁護に傾斜しているという点については、「本文の流動過程でのちに義満擁護の色彩が濃厚となつていった」と、松平文庫本後出本説の立場からではあるが、大森氏の説を支持なさっている<sup>⑪</sup>。

両氏の説を念頭におきつつ、松平文庫本が小林を描く目的のために書き直された本だと考える立場から、私見を少々述べておきたい。まず、両氏の見解が一致した松平文庫本の「義満擁護に傾斜した性格」の基になつた論拠を検討してみる。松平文庫本が義満の約束違反を詳しく記さない例証となつたのは、次の記事である。義満から一族の時熙らを追討するように命じられた氏清は、どんなに詫びようとも時熙らを許さない、という義満の約束を得て出発する。松平文庫本がどの部分を削除したかを明確にするために、両氏が用いた初稿本系に属する書陵部本と比較してみる。

## 書陵部本

中二モ山名伊与守時義、但馬国二在国シ  
 山名伊与守時義、但馬国二下テ京都ノ成敗二モ  
 テ京都ノ御成敗二モ忒セス、雅意二任テ  
 随サレル間、

## 松平文庫本

振舞ケル間、誠ニ御沙汰アラハヤト思食御退治アラハヤト思食○立セ給ケル刻ニ、立セ給ケル刻、病ニ侵サレテ伊与守早世病ニヨカサレテ伊与守早世シヌル上ハ力無ト思食ケルニ、其遺跡ノ食ス処ニ、  
輩伊与守宮内少輔・右馬頭猶過分ナルノ其遺跡○宮内少輔・右馬頭已下ノ一類猶過分ナ  
ミナラス、父祖ノ惡逆ハ子孫ニ酬ヘキ理ル間、父祖ノ惡逆ハ子孫ニ業トテ、其国々エ討  
二任テ、彼ヲ御退治有ヘキニテ、其国々手ヲ下サレケル、  
アヘ討手ヲ下サレケル。

山名播磨守ハ伯耆国ヲ追罰シテ、臆テ当  
国ト隱岐国ヲ拜領シ、陸奥守ハ但馬国ヲ  
責随テ其国ノ守護職ニ任ス。

其下向ノ刻、奥州御処ヘ參シテ申サレケ  
ルハ、一家ノ者共退治ノ事、偏ニ当家衰  
懲ノ基也。然共上意トシテ仰下サル、上  
ハ、辞申ニ処ナシ。急馳下テ治罰仕ヘシ。  
但彼等定テ若難義ノ時、欲申事共候ヘシ。  
其時御免有ヘキニテ候ハ、氏清下向仕ラ  
又先ニ、籌策ヲモ廻シ教訓ヲ加ヘ召上ハ  
ヤト存候。

又何ト歎申ト云共永御免アルマシキニテ  
候ハ、今一日モ急下向仕、退治セシムヘ  
キ由申サレケレハ、

御返答ニ、彼等上意ヲ背ニ依テ已ニ討手

御退治アラハヤト思食○立セ給ケル刻ニ、  
病ニヨカサレテ伊与守早世シヌル上ハ力無ト思  
食ス処ニ、  
其遺跡○宮内少輔・右馬頭已下ノ一類猶過分ナ  
ル間、父祖ノ惡逆ハ子孫ニ業トテ、其国々エ討  
手ヲ下サレケル、

其刻ニ奥州、御所ヘ參リ申サレケルハ、某シ一  
家ノ者共御退治ノ事当家衰微ノ至也。雖レ然上意  
ト而仰下サル、上是非ニ及ス。罷下、忠節ヲ至  
スヘシ。但、カレヲ難儀ノ時、歎申事モ候ヘシ。  
其時、御免モ御座候ハ、罷下ラメ、其前ニ籌  
策ヲ仕、召上候ヘシ、

ト申サレケレハ、

既ニ討手ヲ下ス上ハ、何ト歎トモ承引有ヘカラ

ヲ下サル、上ハ、誰人ニ付テ歎申共、更ス。

御許容有ヘカラス。不日ニ発向シテ治罰

セシムヘキ由仰下サレケル間、此上ハト

テ奥州馳下テ、彼一類ヲ追罰シテ西国ハ

無為ニ成ニケリ。

急発向有ヘキ由有ケレハ、此上ハ力無トテ帰ス。<sup>(ス)</sup>

書陵部本の傍線部分が松平文庫本には見えない文章である。書陵部本では傍線部アのように、氏清が時熙らを討伐して但馬国の守護職に任ぜられたことが書かれているが、松平文庫本では削除されている。前章でみたように、松平文庫本には氏清・小林と堺の関係を強調する姿勢がうかがえるところから、氏清と但馬とを結びつける文を、意図的に排除したものと考えられる。

さて、大森・和田両氏が、義満の約束反古を詳しく記さないための松平文庫本の削除とした傍線部イの文だが、松平文庫本でも傍線部ウのように義満は約束しており、その後時熙らが義満に「歎申」したので、宇治の紅葉見物の折りに、「其次手ニ、彼等二人力歎申分ヲモ内々仰合ラレハヤ」と、時熙らの赦免を氏清に相談しようとして義満が考えていたこともはっきりと記している。また、満幸が氏清に紅葉見物を欠席するよう勧めたことに関しても、松平文庫本は、「明日宇治へ御出ノ事、能々御思案候。其謂ハ、宮内少輔・右馬頭御免ノ事、明日宇治ニテ直ニ仰有ヘキニテ候ナル。然ラハ、縦難儀ニ思食共、御前ニテハ争力否ト御申候ヘキ。俄ニ病氣ノ由申レテ、明日ノ御参ヲハ御留リ候ヘシ」とし、確かに他の伝本と比べれば、簡潔な文章にはなっているものの、義満が、時熙が何と歎こうとも許さないことを氏清に約束しながらも、その約束を破って時熙らを赦免しようとしたことは松平文庫本の記事構成でも十分読みとれる。つまり松平文庫本は繰り返しになる部分、冗長さが目立つ部分を削除しただけで、決して義満の約束違反を詳しく記さない、義満擁護の立場で削除したわけではないのである。小林を



主人公にした明德の乱を描く、という松平文庫本の目的からすれば、小林に直接関係しない繰り返しになる文章はできる限り省略するのは当然のことと考えられる。

このような松平文庫本の姿勢は、この場面だけではない。例えば、氏清が紀伊の兄・義理に味方につくよう頼みに行く場面をあげてみる。

#### 阿刀家本

又、奥州紀伊国へ越テ舎兄修理大夫義理  
二合戦ヲ思立由被申ケレハ、匠作以ノ外  
二諫メ宣ケルハ、上二対シ申テ弓ヲ可挽  
条、返々モ不可然。乍去若利有ルヘクハ、  
サモ有リナン。千二一モ勝事不可有。サ  
ランニハ一命ヲ棄テ合戦ニ及程ノ義勢、  
何事ヤ。面々左様ノ企ニ及ヒハ、我等マ  
テモ叛逆与同ノ名ヲ取テ已ニ亡ン事、踵  
ヲ不可廻ス。只可思留由被申ケレハ、奥  
州氣ヲ損シテ歸ケリ。其後重テ紀伊国へ  
越、種々ノ事共申サレテ、同心可有由被  
勸ケレハ、此上ハ力無シ。只一命ヲ面々  
二進ルマテニコソ侍レ、ト宣ケレハ、奥  
州眉ヲ開テ打歸。

#### 松平文庫本

聽テ奥州ハ、紀伊国へ打越、舎兄匠作ニ此旨ヲ  
談合ス。一旦教訓シ給ヘ共、  
奥州シイテ仰ケレハ、是モ領承シ給イテ、

傍線部エ「上二対シ申テ弓ヲ可挽条、返々モ不可然」や傍線部オ「我等マテモ叛逆与同ノ名

傍線部エ「上二対シ申テ弓ヲ可挽条、返々モ不可然」や傍線部オ「我等マテモ叛逆与同ノ名

ヲ取テ」と義理が氏清をいさめた言葉が松平文庫本では全く記されず、「一旦教訓シ給へ共」とあつさり削除されてしまつてゐる。もし松平文庫本が義満方に傾いた党派性の強い本であれば、義理のこの教訓の内容は看過できないところである。ここでも松平文庫本は、初稿本の二度にわたる氏清の紀伊行きを一度にし、それとともに義理の諫言もすべてとりのぞいたのである。松平文庫本は義満擁護の立場に立つて初稿本本文の削除を行つてゐるわけではないのである。

また、初・再稿本『明德記』には、義満勝利の予告とされる奇瑞談を二つ紹介してゐる。十二、三才の謎の童が義満軍に現れて、暁に合戦が始まるから戦の用意をせよ、と触れ回つた話と、靈鳥が義満軍の旗の上をしばらく飛び回り、南を指して飛び去つた話が書かれてゐる。松平文庫本には童の話のみで、靈鳥の話は載せてゐない。これについても靈鳥の方は同じような話の繰り返しと考へ、削除してしまつたのであらう。義満方に傾いた性格では、決して削除できない箇所である。

このように、松平文庫本に至つてから削除された箇所を丁寧に見ていけば、義満方に傾いた党派的性格が見出せないのである。松平文庫本の作者が明確な意図をもつて記事の削除を行つたわけではなく、小林を主人公として際立たせるために、合戦の前おきとなる部分で不必要な部分をできるだけ削つて簡潔にしたものといえる。ただし、和田氏も指摘されたように、作者の文才が低く表現が拙劣になつてしまつたため、小林を主人公にした物語の作成に成功したとは言えないであらう。

(七)

松平文庫本が初稿本系の阿刀家本、或いはそれに近い本文を持つ伝本から派出した本で、本

書作成の目的は、優れた武将として伝説化していた（しつづあった）小林重義を主人公にした明德の乱を描くことであつたと考えてきた。『明德記』初・再稿本の伝本のほとんどが上・中・下三巻仕立てだが、松平文庫本は上巻のみしか伝わっていない。小林は初・再稿本においても上巻で討死し、中・下巻には登場しない。憶測の域を出ないが、松平文庫本が兄弟関係にある天理本と共に、小林の活躍を描く上巻のみしか伝わっていないのは、もともと一巻だけの本であつたか、下巻があつたとしても小林に関する後日談を記したものであつたとも考えられる。

初・再稿本『明德記』の作者圏については、幕府方、しかも記録の蒐集・編纂には細川氏が関与していたことが明らかにされている。<sup>⑩</sup>『明德記』初・再稿本は室町幕府という枠の中で、公的な記録として成立し広まっていた。その後、小林重義を主人公とした「武将記」的な明德の乱を描くために、『明德記』が本来持っていた幕府側に立つた視点や、時宗色の濃い性格にはこだわらず、堺に残っていた伝承や謡曲からの文章を採り入れて、初稿本『明德記』を再編成しなおしたのが松平文庫本なのである。

公的な視点を持つものが多い室町軍記の中で、松平文庫本『明德記』は、室町軍記に属しながらも多分に戦国軍記に近い性格を持った作品と言えよう。

- 注① 「異本明德記考―明德記の諸伝本について―」（『文学』十一三 一九四二年三月）  
② 「島原松平文庫本『明德記』について」（『鹿児島短期大学研究紀要』二十一 一九七七年三月）

- ③ 「『明德記』諸伝本中における天理本系統の位置」（『跡見学園女子大学国文学科報』十六 一九八八年三月）

- ④ 同注③

- ⑤ 松平文庫本の引用は、古典遺産の会編『室町軍記総覧』（一九八五年 明治書院）所収の『明德記』（島原公民館蔵松平文庫本）による。
- ⑥ 「松平文庫本『明德記』考―小林重義の形象化をめぐつて―」（『中京国文学』六一九八七年三月）
- ⑦ 和田英道著『明德記 校本と基礎的研究』（一九九〇年 笠間叢書）所収の阿刀家本に適宜句読点等を施し引用した。
- ⑧ 『春日若宮拝殿方諸日記』同年条
- ⑨ 「能における語り物の撮取―直接体験者の語りをめぐつて―」（『芸能史研究』六十六 一九七九年七月）
- ⑩ 「謡曲『小林』考」（『国文学研究資料館紀要』十一 一九八四年三月）
- ⑪ 本曲の伝本は甚だ多いが、引用は『未刊謡曲集続四』（古典文庫 一九九〇年 再版）所収の「観世本」による。
- ⑫ 『応永記』の引用は、同注⑤所収の「大村家旧蔵本『応永記』」による。
- ⑬ 「嘉吉物語」の引用は、『続群書類従 第二十輯上』による。
- ⑭ 同注②
- ⑮ 同注⑦
- ⑯ 「能『小林』の周辺」（『学芸国語国文学』二十五 一九九三年三月）
- ⑰ 同注②
- ⑱ 同注⑦
- ⑲ 望月満夫「『明德記』の作者圏」（『承久記・後期軍記の世界』軍記文学研究叢書十一 一九九九年 汲古書院）

## 第二節 永享の乱・結城合戦関係軍記の検討

### ―『鎌倉持氏記』『結城戦場記』『結城戦場別記』の関係―

(一)

永享十年（一四三八）、鎌倉公方足利持氏は、嫡男賢王丸の元服をめぐって、將軍の諱名を請うことを勧めた管領上杉憲実と意見が衝突し、憲実を討とうとする。かねてから鎌倉と対立関係にあった將軍義教は、好機到来とばかりに憲実を助け、援軍を向かわせた。これを聞いた持氏は箱根を守らせたが敗れ、また配下にも裏切る者が続出したため、形勢の不利なることを悟って剃髪、謹慎する。しかし將軍義教は持氏を許さず、翌年憲実に命じて持氏を自殺に追い込み、更に憲実の嘆願を退けて、持氏の嫡男賢王丸（義久）をも殺してしまふ。この永享の乱の戦火を逃れて日光山に潜伏していた持氏の遺児春王・安王は、永享十二年（一四四〇）、常陸の結城氏朝を頼って挙兵、東国や信州の多くの武士もこれに応じた。籠城は一年にも及んだが、幕府軍の猛攻により結城城は落城。二人の若君は脱出に失敗して捕らえられ、京への護送の途中、美濃の垂井で処刑された。この戦乱を結城合戦という。

永享の乱と続く結城合戦は、東国に戦国時代を招いた争乱とされる程の大事件であったため、乱後、これを題材とする多くの軍記作品が生まれた。これらの諸作品は、かつて梶原正昭氏によつて二つの系統に分類された<sup>①</sup>。第一の系列は、「永享の乱を中心に東国情勢を展望したもの。概して編年的で、その筆致も実録的」とするもの。これに対して第二の系列は、「結城合戦に焦点を絞つて二人の若君の悲劇をクローズアップしたもの。潤色が多く、物語的方向が強い」

と、性格づけをされ、前者には『永享記』『鎌倉持氏記』『足利持氏滅亡記』等が、後者には『結城戦場別記』『鎌倉殿物語』『持氏記』『結城戦場物語』『結城戦場絵巻』『上杉憲実記』等が属するとされ、詳細な系統図を示された。その中の『鎌倉持氏記』、『結城戦場記』、『結城戦場別記』の三本について、梶原氏のお考えを次にまとめた。

- ① 『鎌倉持氏記』が、永享の乱・結城合戦を描くすべての軍記の母胎となったこと。
- ② 『鎌倉持氏記』に依拠して『結城戦場記』が成立したこと。
- ③ 『結城戦場別記』は『鎌倉持氏記』ではなく、『結城戦場記』をもとに書かれたものであること。

④ 『結城戦場別記』が結城合戦を中心に描く第二の系列の作品群のさきがけとなったこと。

「『鎌倉持氏記』↓『結城戦場記』↓『結城戦場別記』↓第二系列の諸作品」という流れを梶原氏は想定されていたようである。これに対して、佐藤陸氏は、「はじめに『鎌倉持氏記』という漢文体の実録的な作品が成立した。真字体で書かれていて読みにくいためであろう。『結城戦場記』（『永享記』）・『結城戦場別記』の二つのリライトが作られた。二つのリライトは個別に、相互に無関係に作られた」と考えられ、梶原氏の『結城戦場記』↓『結城戦場別記』という流れを否定された。両氏とも『鎌倉持氏記』を母胎として、すべての永享の乱・結城合戦関係軍記作品が成立したとする点は一致しており、領ける説である。しかし、『鎌倉持氏記』と『結城戦場記』や『結城戦場別記』との関係となると、更なる検討を必要とする。本節では、永享の乱・結城合戦関係軍記のうち、おそらく最も早い時期に成立したであろう『鎌倉持氏記』・『結城戦場記』（以下、『戦場記』と略す）・『結城戦場別記』（以下、『別記』と略す）の三本の本文を中心に比較・検討し、梶原・佐藤両氏が唱えた作品間の関係を問い直してみる。

まず『戰場記』と『永享記』の違いについて、確認しておきたい。『結城戰場記』と題する伝本は、内閣文庫本、加賀市立図書館聖藩文庫蔵本、長谷川端氏所蔵本、そして金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵本<sup>④</sup>（以下、加越能文庫本と略す）が知られているが、このうち加越能文庫本については、『結城戰場記』と題するものの、他の三本とは異質な本で、『戰場記』の仲間には入れられない伝本である。永享の乱・結城合戦関係軍記の書名には混乱があり、例えば内閣文庫には『結城戰場記』と題する本が二本あるが、そのうちの一本は「結城戰場記」と題しながら、内容は『結城戰場物語』と同じであるなど注意が必要である。

『戰場記』系伝本の内容は、足利氏の系譜に始まって、永享の乱から上杉憲実の出家、結城合戦、そして後日談として足利成氏の事から太田道灌の登場と川越城築城の事、道灌の最期、更に「高見原合戦」に至るまでの長きに渡って描く。一方、『永享記』は永享の乱を描かず、上杉憲実の出家に始まり、結城合戦から結城城落城、成氏の事をとりあげてから、太田道灌の登場と川越城築城の事で筆を終える。つまり『永享記』は、戰場記の真ん中部分をとりあげているわけである。『永享記』と題する伝本は数多くあり、彰考館蔵本や鶴舞図書館蔵本、神宮文庫蔵本、教林文庫蔵本などがあげられる。梶原氏のご指摘どおり、『結城戰場記』と題する本の方が、『永享記』と題する本よりも古態を帯びると考えてよいだろう。

さて『鎌倉持氏記』と『別記』<sup>⑤</sup>は、成立を知る手がかりとなる奥書を持っている。

持氏將軍取後之日記可秘々々 浅羽民部少輔 宝徳三<sup>辛</sup>年八月下旬書之（『鎌倉持氏記』）

右之日記宝徳二年<sup>辛未</sup>八月廿日水谷入道以自筆日記写之者也蓋戰場之覺為後士之物語且者氏朝忠功之事為知子孫也

(『別記』)

『鎌倉持氏記』に見える浅羽民部少輔なる人物については不詳であるが、永享の乱に敗北した足利持氏が鎌倉に幽閉された際、讒臣として上杉に殺された持氏側近の一人に、浅羽下総守という名が記されている。『別記』の水谷入道は結城氏の家老であり、「辛未」は宝徳二年（一四五〇）ではなく、三年の誤りである。『鎌倉持氏記』がすべての永享の乱関係軍記の母胎となつたならば、成立年に誤りがあるわけだが、両書とも奥書によれば、永享の乱や結城合戦に敗北し滅んでいった側の人々によつて書かれているのがわかる。

(三)

それでは実際に問題となる本文を比較検討していく。次に引用した例文一は、上杉憲実の出家の場面であり、『別記』では冒頭部にあたる箇所である。

(例文一)

『鎌倉持氏記』

『別記』

『戰場記』<sup>⑧</sup> (憲実出家事)

去程二鎌倉ニハ鎌倉殿御父子	去程二
御生害ノ後、管領安房守憲実	管領安房守憲実暫時ノ間ハ関
暫ク関東ノ成敗ヲ司ル。威勢	東ノ成敗ヲ司テ鎌倉ニ御座ケ
日比二百倍セリ。世ノ末ノ風	ル。諸大名類ニ媚ヲ入、彼下
俗、義ヲ重スル者ハ少ク、利	風ニ立ン事ヲ望ケリ。本ヨリ
ニ移ル人多ケレハ、管領ノ門	有忠無誤ト云トモ虎口ノ讒言



爰憲実出家法名。身上有レ

忠無誤処、就二虎口一、讒言相

交一、上方思食立処身上也。

所詮依二存命一被二痛存一廻レニ

思案一ヲ、自二越州一舍弟兵庫

頭清方奉レ上、嘸子息成人間

可レ為二三名代一旨申定。

同六月廿八日長春院江參、

御影〇前而致二焼香一無二是非

及二自害一刻ニ、家人高山越後守那波内匠助走

寄刀ニ瓢付ト雖嘍半分切訖。

去共命殘給間、宿陣令二具足

一処ニ、動ハ被レ擬レ果レ命ヲ間、

隱二武具一ヲ、

前二八成市群集一。カ、リシカ  
トモ憲実ハ、普代相伝ノ主君  
ヲ奉傾、何ノ面目有テ栄花ニ  
サカヘン。身二於テ無誤、虎  
口一ノ讒言二依テ背上意故一此  
乱イテキタリ。是吾本意二非  
ストテ、越州ヨリ弟兵庫頭ヲ  
呼テ管領ニスヘ、子息成人ノ  
間代官二可頼ヨシ宣ヒテ、則  
出家シ玉フ。法名長棟。

其後六月廿八日長春院へ参り、  
鎌倉殿御影ノ前二テ焼香一念仏  
唱テ、刀ヲ拔テ自害シ玉フ処  
ヲ御供二候高山越後守那波内  
匠助アハテ、走寄、刀ヲ奪ヒ

御手ニスカリ付、自害半ハシ  
カケ玉ヒシカトモ、前後ヨリ  
スクメ奉リシカハ、無是非留

仍君臣不快ト成事思ハ、未  
来永劫マテノ業障也。公方連  
々京方御退治ノ企ヲ申止ント  
テ度々背上意玉フ故也。有意  
無常ノ世ノ習、明日ヲ知ヌ命  
ノ内ナレハ、因果歴然二身  
ニ報ヘキ事ヲ思、亦譜代ノ主  
君ヲ傾ケ奉、末代ノ嘲ヲ恥テ  
其身ノ罪ヲ謝セン為ニヤ、出  
家シ玉ヒケリ。法名ヲハ高岳  
長棟庵主ト号ス。舍弟上杉兵  
庫頭清方ヲ越州ヨリ呼寄テ、  
子息成人ノ間名代ト定テ管領  
ヲユツル。

六月廿八日長春院工参詣シ  
テ、公方ノ御影ノ前二テ焼香  
念仏シテ後二泪ヲ流被申ケル  
ハ、臣今度讒臣等ノ申ヤウニ  
テ御勘当ヲ蒙リ、心ナラス御  
敵ト成。然トモ心中二不義ナ  
シ。宜有天鑑ト云モ果ス、腰  
ノ刀ヲ引ヌイテ左ノ脇ニ揆立

京都ヨリ御下アル疵医ヲ彼疵口ニ密捻入、遂レ日ヲ次第ニ平愈ノ条、希代不思議ノ存命也。

リ玉ヒケリ。其比京都ヨリ下リシ金瘡名医ヲ以テヤウ々ニ養生シ奉リシカハ、定業ナラ又命ニテ無程平愈シ玉ヒケル。

玉フ所ヲ御供ノ侍高山越後那波内匠走寄テ懐トリ御脇差ヲウハイトル。其時皆々馳参テ屋形エ歸シ奉テ、武器ヲカクシ色々養生シケレハ、定業ナラ又御命ニヤ、無程平愈シ給ケル。

『別記』・『戰場記』に共通する傍線部ア・イ・ウは、同文とは言えないまでも、似通った文章であり、原拠となつた『鎌倉持氏記』には見あたらない。『別記』と『戰場記』との間に、何らかの関係があつたという証拠である。『鎌倉持氏記』と『別記』の二重傍線部は戰場記にはない。『別記』が『戰場記』を介してではなく、直接『鎌倉持氏記』から受け取つた表現と見てよいだろう。一方で波線部「虎口ノ讒言ニ依テ」や「鎌倉殿御影ノ前ニテ焼香」といった三本に共通する表現もある。

(例文二)

『鎌倉持氏記』

爰第二若君始者奉号、大御堂殿、結城氏朝有ルニ御憑一事、召ニ集メ一門以下家人等ヲ、

『別記』

爰ニ亦持氏卿ノ二男ノ若君去年ノ一乱ニヒソカニ鎌倉ヲ落玉ヒテ日光山ニ隠レ玉フ。世上シハラク静リケレハ、イツマテ角テハ有ヘシ。前代ノ

『戰場記』(結城竈城事)

爰ニ又故長春院殿ノ御子達、去年御滅亡ノ刻近衆ノ人々日光山エ落シ申タリケル。其後二爰ノ禅院カシコノ律寺ニ一夜ニ夜ヲ明シ、世上ノヤウヲ

各々被レ尋ニ意見ヲ問、心々  
区ニ申スレ之中ニ、

水谷伊勢守・築修理亮・同  
將監・黒田民部尉等同心如レ  
申者、長春院殿ノ御息○取立  
御申者尤十分也。就三世上ノ  
時宜(一)一度京都へ御降参訖、  
無替ル篇目ニ而令ノ変之事非  
弓矢ノ法義ニ間、雖レ及ニ意  
見ニ旨申中間ニ、

余類ヲ催シ亡魂ノ恨ヲ報シ奉  
ルヘシトテ、大名トモヲ頼ミ  
玉フ。中ニモ結城氏朝ハ代々  
ノ勇將ナレハ、氏朝甲斐々々  
敷頼マレ申テ、子息七郎光久  
ヲ御迎ニ参ラセテ、其跡ニテ  
一門家老ヲ集テ此事如何ニト  
意見ヲトハル、ニ、

水谷伊勢守、築修理亮、同將  
監、黒田民部丞一同ニ申ケル  
ハ、持氏卿ノ御子達ヲ取立申、  
無二ノ合戦アランコト末代ノ  
高名亦当家ノ手柄ト云ヘシ。  
然レトモ去年関東一乱ノ時、  
京都ノ御方ニ成玉ヒ、京公方  
モ管領モ当屋形ヲハ頼母敷由  
仰ラレ候也。シカルニ今サラ  
頼ミ甲斐ナク逆心ハ弓矢ノ法  
義ニアラサルヘシト再三申ケ  
ル処ニ、

隠レ聞テマシマシケルカ、何  
迄角テ在ヘキ。急一味同心ノ  
輩ヲ招キ再ヒ関東ヲ治メ、先  
孝ノ鬱憤ヲモ散シ申ヘシト便  
宜ノ大名ヲ憑レケル所ニ、結  
城氏朝ニ心ナク憑レ奉テ、子  
息七郎光久御迎ニ参ラセケ  
リ。其後氏朝家老一門ヲ召集、  
此条如何ト評定ス。家老トモ  
ハイマタ氏朝ノ御請不被申ト  
思ヒケレハ、水谷伊勢守、築  
田修理亮、同將監、黒田民部  
丞一同ニ申ケルハ、当家ハ累  
代ニ及テ指ル名家ニアラサレ  
トモ、代々義士ニクミシテ一  
日モ曾テ不忠ノ輩ニクミセ  
ス。依之関東ニテハ誰ニカハ  
ヲトリ可申ナレハ、若君達ノ  
タノモシク思召事去コト成ヘ  
シ。然トモ去年ノ一乱ニ京方  
へ御和談アリシカハ、京公方  
モ管領モ殿ヲハ二心非シト深

厚木掃部助来<sup>テ</sup>、氏朝<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>申有<sup>ル</sup>コト<sup>ニ</sup>子細<sup>一</sup>、別座嚙出。其故<sup>ハ</sup>若君既入御訖。意見座氏朝ノ息七郎不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>座、彼郷迎也。余至極落居事、新意見被<sup>ケル</sup>ハ<sup>レ</sup>申失<sup>ト</sup>テ<sup>ニ</sup>面目<sup>一</sup>

彼四人遁世仕<sup>ル</sup>処<sup>ニ</sup>、水谷伊勢守計<sup>リ</sup>種々問答而召皈。残三人遁世訖<sup>ヌ</sup>。

厚木掃部助馳来テ氏朝ヲ別座ニ呼出テ、若公是ヘ御入ノヨシサ、ヤキケル。氏朝ノ嫡子七郎ステ二前日御迎ニ参リ御供申ケレハ、家老一門是ヲ見テ、此事至極落居ノ後吾等ニ相談アル事難心得結城殿ノ御心カナ。カヤウノ主ヲ頼テ其センナシトテ彼四人一同二髪ヲ切テ各遁世ス。其中二水谷伊勢守計、乱<sup>カ</sup>ヲ見テ捨<sup>ル</sup>ハ勇士ノ本意ニアラストテ只一人引返シ討死ヲ一篇ニ思定メタリ。

頼玉フ処ヲ引カヘ謀叛ノ張本トナラセ玉フ御恨何事ソヤ。人トシテ無遠慮必有近憂ト云リ。能々御思案アルヘシト申シモ果ネハ、厚木掃部介馳参テ若君達御入アルト申ス処ニ、氏朝ノ一男結城七郎御供申若君入御アリケレハ、家老一門大驚、扱々是程ノ一大事ヲ吾々ニ被仰合マテニ不及ヲホシメシ立事、吾々ヲハ物ノ数トモ思食サリケルソヤ。今度ノ御大事ニ逢テ無詮トテ、水谷以下四人ノ家老トモモト、リ切テ一同二遁世ノ桑門ト成ニケル。其中二水谷伊勢守計問答シテ、乱<sup>カ</sup>ヲ見テ捨<sup>ル</sup>ハ弓矢ノ道ナラス。無力所也。討死スルヨリ外ノ事有マシトテ取テカヘス。

『別記』・『戦場記』の傍線部と才は、同じ内容を伝えており、『鎌倉持氏記』には見あた

らない。やはりこの例文二からも『別記』と『戰場記』は無関係に成立したのではなく、何らかの関わりがあつたと見るべきであろう。『鎌倉持氏記』と『別記』の二重傍線部「弓矢の法義」は、『戰場記』にはない。また、引用はしなかつたが、『戰場記』ではかなり簡略になつてゐる「寄手諸將の意見書」を、『鎌倉持氏記』と『別記』は同じ位置にほぼ同文のものを全文載せることから、『別記』は、梶原氏が推測されたように『戰場記』を介してではなく、佐藤氏がおつしやるように直接『鎌倉持氏記』と影響関係があつたと考えるべきである。ただし傍線部工・才から判断すると、佐藤氏が言われた『別記』『戰場記』無関係説は成り立たない。

(例文三)

『鎌倉持氏記』

永享十三年改<sub>ム</sub>嘉吉元年<sub>ト</sub>、

『別記』

永享十三年改元有<sub>テ</sub>嘉吉元年  
四月十六日二、大将清方諸軍  
勢二向<sub>テ</sub>被<sub>申</sub>ケルハ、古ヨリ  
合戦二一日二日ノ戦アルト云  
ヘトモ、僅一ツヲ諸軍取巻数  
月ヲ送徒二里民ヲナヤマス事  
コソ心得ネ。京都ノ公方モサ  
コソ云甲斐ナク思食ラン。人  
々イツマテ暗然トシテ守居ン。  
方十余町ノ平城二敵五六百人  
籠タルヲ、東八ヶ国ノ勢トモ

『戰場記』(結城落城事)

永享十三年改元有<sub>テ</sub>嘉吉ト云。  
四月十五日、大将兵庫頭清方  
諸軍二向<sub>テ</sub>宣ヒケルハ、昔ヨ  
リ敵城ヲ責事対陣シテ二三年  
ヲ送事有<sub>ト</sub>云トモ、ソレハ五  
百騎千騎ノ国アラソヒ、是ハ  
又日本半国力向<sub>テ</sub>一城ヲ責兼  
テ当地ニテ数月合戦二不及、  
徒二里民ヲ煩事非本意。京都  
ノ公方モ定未練ニ思食ン。且  
ハ末代ノ恥辱ナルヘシ。明日

カ攻カネテ遠責ニシタル浅増 吉日ナレハ惣責アルヘシト相  
 サヨ、ナント、後マテイハレフレ、  
 ンコソ口惜ケレ。今日惣攻ア  
 ルヘシトフレ送り、

この部分は一見して、明らかに『別記』と『戦場記』との関わりが認められる所である。すべて同じ文章とまではいかないが、『別記』の傍線部「京都ノ公方モサコソ云甲斐ナク思食ラシ」は、『戦場記』では「京都ノ公方モ定未練ニ思食シ」となっていることなど、『別記』と『戦場記』が互いに無関係に、それぞれが『鎌倉持氏記』だけに依拠したのでは、これほど似た表現にはならないはずである。

以上例文を四場面取りあげて確かめたところ、『戦場記』と『別記』は、それぞれ『鎌倉持氏記』に依拠しながらも、同時に影響関係も持っていることが明らかとなった。梶原氏の『鎌倉持氏記』↓『結城戦場記』↓『結城戦場別記』という縦の流れだけでは三作品の影響関係は説明できず、また、佐藤氏の『鎌倉持氏記』↓『結城戦場記』、『鎌倉持氏記』↓『結城戦場別記』という別の流れでも三作品の影響関係は説明できない。『鎌倉持氏記』の後に『結城戦場記』と『結城戦場別記』共通の親となるような伝本の存在を仮定するなど、この三作品の成立は、梶原氏や佐藤氏が想定された縦の流れや単純な横の広がりだけでなく、もっと複雑に入り組んだ影響関係を考える必要がある。この三作品が複雑に影響しあって成立したことは確かめられたが、他の永享の乱関係軍記との関係も少し考えてみるために、もう一例を次に引用した。

『鎌倉持氏記』

十二若君<sup>ヲ</sup>越後ノ国ノ大将長尾  
十三因幡守生<sup>ニ</sup>擒申ス之<sup>ヲ</sup>。乘申シ  
籠輿<sup>カゴ</sup>既<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>御上落<sup>ニ</sup>御有  
様可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>辟<sup>タトヘ</sup>方<sup>モ</sup>無シ。(以下、  
略)

一分捕着党実檢、同十七日。  
総大将上杉清方<sup>小具足</sup>、侍所  
長尾出雲守憲景<sup>着紫、系舟</sup>、并<sup>ニ</sup>家人  
瀬下治部丞景秀<sup>着黒糸、綴之曹</sup>、付役其  
外<sup>ニ</sup>候半袴。

一清方被官人々分捕(以下、  
略)。  
自<sup>ニ</sup>惣陣<sup>ニ</sup>上落<sup>落</sup>頭、廿九、

『別記』

大将春王殿安王殿二十三二  
テ御座シケレトモ、サカタシ  
キ若君ナレハ、軍勢ニマキレ  
落玉フ処ヲ、長尾因幡守見付  
申シ、スキマモナク生擒奉り  
籠輿ニ乗セ奉リ、先ツ鎌倉へ  
ヤリ奉リソレヨリ御上洛アリ。  
(以下、略)

今度分捕着党実檢、同十七日  
惣大将上杉清方<sup>小具足</sup>、侍所  
長尾出雲守憲景<sup>紫系</sup>鎧著并家  
人瀬下治部丞黒糸<sup>綴之</sup>鎧著付  
候其外<sup>ニ</sup>候半袴。

一清方被官ノ人々分捕(以下、  
略)。  
自惣陣上洛ノ頭廿九京著セシ

『戰場記』(結城落城事)

惣大将安王殿<sup>十一</sup>春王殿<sup>十三</sup>ヲハ  
越後勢ノ大将長尾因幡守生捕  
申ケル。則籠輿ニ乗申御上洛  
トソ聞ケル。(以下、略)

又今度討取所首トモ、同十七  
日着到ヲ被付実檢ヲ被遂。惣  
大将上杉兵庫頭清方<sup>小具足</sup>計  
二テ出玉ハ、侍所長尾出雲  
守憲景<sup>紫</sup>スソコノ鎧<sup>二</sup>鍬形ノ  
五枚甲、瀬下治部丞景秀<sup>黒糸</sup>  
ノ鎧<sup>二</sup>同毛ノ三枚甲<sup>鹿ノ角</sup>ヲ  
打立テキタリケル。此兩人付  
役<sup>ニ</sup>テ其外<sup>ニ</sup>候<sup>ノ</sup>人々<sup>ニ</sup>半袴<sup>ニ</sup>  
テソ參ケル。

一清方被官ノ人々分捕(以下、  
略)。  
此頭トモヲ見ケル大名小名

隨京着。五月四日、七日、  
 兩日御実檢。則被<sub>レ</sub>懸<sub>三</sub>六  
 条河原<sub>二</sub>。  
 一若君御迎上洛、而兩佐々  
 木參<sub>三</sub>向於濃州垂井道場<sub>二</sub>、  
 而五月十六日夜亥尅奉<sub>レ</sub>害<sub>シ</sub>  
 云々。

カハ、五月四日七日兩日御実  
 檢則六条河原ニカケラレケル。  
 同五月十六日、兩人ノ若君ヲ  
 ハ京マテ入奉ルヘカラス、路  
 次ニテ失ヒ奉ルヘシトテ、兩  
 佐々木ヲ御使ニ被下、濃州垂  
 井ノ道場金蓮寺ヘ入奉ル。上  
 人出合急キ御コシヨリ出シ申、  
 様々ニモテナシ奉ル。上人ノ  
 タマヒケルハ、其阿弥相州ノ  
 者ニテ候シカハ、鎌倉ニテ切  
 々御所ヘ参リ御幼稚ノ間見奉  
 リニ、イツシカ成人マシマシ  
 御上洛ノ次テニ御コシヲ休メ  
 玉フコソ幸ニ候ヘハ、此寺ニ  
 一兩日御逗留候テ旅ノ愁ヲモ  
 御ナクサミ御入落アルヘシ。  
 先ツ長途ノ御休息ニ御湯ヒカ  
 セ奉ルヘシトテ湯殿ニ入申ケ  
 レハ、二人ノ若君ハ最期ハ今  
 ナルラント思食。ヤカテ湯殿  
 ヨリ上リ玉ヘハ是マテ付添奉

哀ナル哉。昨日マテモ詞ヲカ  
 ハシ肩ヲ双テ見馴シ朋友ナレ  
 ハ、涙ヲ拭テ首ヲ見、悲ノ思  
 散滿タリ。大將分ノ頭廿九、  
 若公ト添申、五月四日京都エ  
 付。若君ヲハ濃州垂井ノ道場  
 金蓮寺ニテ兩佐々木参向テ、  
 同五月十六日御兄弟ナカラ奉  
 害。今年二十三ニソ成セ玉  
 ヒケル。関東ヨリ上ル所ノ首  
 共ハ、六条河原ニ被懸ケリ。



シ二人ノ侍德利文左衛門尉、  
漆桶三七郎君達ノ左右へ寄、  
髪カキアケ奉レハ仏ノ御前参  
ラセ玉フ。上人御盃ヲ奉リ玉  
へハ、二人ノ侍二御盃クタサ  
レ、扱十念ヲ請玉ヒテ座二ナ  
ヲラセ玉フ処ニ、早夜モ亥ノ  
剋計リナリシカハ、討手ノ人  
々参リ向ヒテ終ニ害シ奉ケル。  
御歳二十三トソ聞ヘシ。扱  
是マテ付ソヒ奉シ二人ノ侍、  
則髪ヲ切テ仏道修行ノ身ト成  
テ、亡君ノ後世ヲソ弔ケル。

例文四の場面は、結城城が落城し、春王・安王兄弟が脱出に失敗し処刑される場面で、『鎌倉持氏記』と『別記』では大尾にあたる部分である。諸本によってかなり異なっており、各本の性格が最もわかりやすい場面である。「一清方被官ノ人々分捕」で始まる分捕首注文は長いものなので略したが、『鎌倉持氏記』、『別記』、『戦場記』は、わずかな違いはあるものの全文を伝える。ところが、『永享記』は分捕首注文までは『戦場記』と同文であるが、分捕首注文は載せない。ここで注目したいのは、『戦場記』の波線部である。この一文は『鎌倉持氏記』や『別記』にはなく、『戦場記』に至つてから付け加えられたものである。実検の場に置かれた東国の兵士たちの首を見て、幕府方について同じ関東の武士たちが悲涙にむせぶというもの

だが、この文は分捕首注文の後に置かれて始めて意味のわかる文である。その点、『戰場記』は分捕首注文を書いた後にこの一文を置き、場面設定は整っている。ところが、『永享記』は分捕首注文は省略したのに、『戰場記』の波線部はそのまま受け取っている。問題の箇所を『永享記』から抜き出してみよう。

此兩人付役ニテ其外因候ノ人々半袴ニテマイリケル。是ヲ見テケル大名小名僧俗貴賤哀哉、昨日マテモ詞ヲカハシ肩ヲナラヘテミナレシ朋友ナレハ、涙ヲノコイテ首ヲ見、悲ノ思散滿タリ。大將分之頸廿九、若公ニ添へ申、五月四日京都へ付。若公ヲハ濃州垂井ノ道場金蓮寺ニテ兩佐々木マカリ迎テ、同五月十六日御兄弟ナカラ奉害。今年十二十三二ソナラセ玉ヒケル。関東ヨリ上ル処ノ首共六条河原ニカケラレケル。二人ノ若君ノ御乳母徳利文左衛門、凍桶三四郎出家ス。

『永享記』の波線部の文章は『戰場記』と共通する内容だが、これでは何を見て涙にむせんだのがわからない。また、『足利持氏滅亡記』では、分捕首注文は春王・安王兄弟の処刑の後に置かれ、波線部は『永享記』と同位置である。このことから『鎌倉持氏記』にはなかった波線部が、『戰場記』の段階になってから加筆され、『戰場記』の次の段階の『永享記』では、分捕首注文を削除したが、波線部は残したため、すわりの悪い表現になってしまったことがわかる。さらに『足利持氏滅亡記』では、この場面は『戰場記』ではなく、『永享記』に依拠して書いたものの、『永享記』にはない分捕首注文を『鎌倉持氏記』から補って、春王・安王兄弟の処刑の後に加えたものと推定できる。

さて、諸本間によって異なる多い春王・安王の処刑の場面だが、『別記』が独自の逸話を持っていることは以前より指摘されているところで、この『別記』の処刑場面から、後に『結城

『戰場物語』等の中心部となる春王・安王の悲劇が発展していったと考えられている。『別記』の付き添っていた侍二人の名前「徳利文左衛門尉と漆桶三七郎」と、彼等が若君処刑の後出家したという逸話（点線部）は、『鎌倉持氏記』になく、『戰場記』にも見あたらない。ところが、『永享記』には点線部のように漆桶を凍桶（注）としながらも、一人が出家した事を伝えている。『別記』と『永享記』が「憲実出家事」から書き始めることから、『永享記』と『別記』の関わりが推測出来るところでもある。

（四）

以上、永享の乱・結城合戦関係軍記のうち、主に『鎌倉持氏記』『戰場記』『別記』の関係について考えてみた。この三作品の成立が、梶原・佐藤両氏の提示された単純な影響関係だけでは説明できないことが明らかになったように思う。『戰場記』とひとまとめにして扱われることの多かった『永享記』も別個の作品として取り扱う必要性が認められた。実録的な『鎌倉持氏記』『戰場記』と物語的な『別記』の複雑な影響関係は、永享の乱関係軍記における「記」的な文脈と「物語」的な文脈が、分離の一途を辿ったわけではないことを表わしている。二つの系統は時には交流する機会を持ったのである。

永享の乱・結城合戦を題材とした軍記が、このように多く書かれ相互に複雑に影響しあって成立していったことから、戦国時代の端緒となったこの二つの争乱が、いかに人々の関心の高い事件であつたかがよくわかるのである。

注①「永享の乱関係軍記の展望」（『古典遺産』三十五 一九八四年八月「室町・戦国軍記の展望」二〇〇〇年 和泉書院）に再収）

- ② 「永享記の源流―鎌倉持氏記と二つのリライト」（『武蔵野女子大学文学部紀要』二〇〇一年二月）
- ③ 加越能文庫蔵『結城戦場記』の翻刻は、片山享編『日本文芸論叢』（二〇〇三年 和泉書院）に掲載。
- ④ 『鎌倉持氏記』の引用は、古典遺産の会編『室町軍記総覧』（一九八五年 明治書院）所収の『鎌倉持氏記』による。
- ⑤ 国会図書館蔵『結城戦場別記』に適宜句読点等を施し引用した。
- ⑥ 加賀市立図書館聖藩文庫蔵『結城戦場記』に適宜句読点等を施し引用した。
- ⑦ この二重傍線部については、佐藤氏も指摘なさっているところである（同注②）。
- ⑧ 加賀市立図書館聖藩文庫蔵『永享記』に適宜句読点等を施し引用した。
- ⑨ 佐藤氏は注②の御論文の中で、『足利持氏滅亡記』の前半（持氏自害まで）は、『鎌倉持氏記』に、後半（憲実出家以後）は『戦場記』に依拠したとされている。また佐藤氏は、『足利持氏滅亡記』の分捕首注文は『鎌倉持氏記』のそれを取り入れたことも指摘されている。
- ⑩ 「漆」と「凍」のくずしはよく似ている。

### 第三節 加越能文庫本『結城戰場記』の位置

(一)

梶原正昭氏が、永享の乱・結城合戦関係軍記を実録的な系列と物語的な系列の二系統に分類されたとき、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『結城戰場記』(以下、加越能文庫本と略す)は「実録的系列」の中の「結城戰場記」系(古態系)に属する伝本と紹介された<sup>①</sup>。確かに本書は、古態を残す内閣文庫蔵『結城戰場記』や加賀市立図書館聖藩文庫蔵『結城戰場記』等と同じく『結城戰場記』と題する。しかし、その内容を詳細に検討してみると、他の『結城戰場記』と題する伝本とは全く異質な本であることが明確である。

本節では、加越能文庫本が永享の乱・結城合戦関係軍記のどこに位置付けられるのか、前節の補足として他本との関連を確かめながら考えてみる。

(二)

まず、加越能文庫本の書誌について左に記した。

金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵

一冊

所蔵番号 一六・八二一―一一二

外題 結城戰場記 全

内題	結城戰場記
表紙寸法	縦二六・九cm 横二〇・三cm
表紙	薄茶色
本文	九行 一行平均二五字
墨付丁数	二一丁
遊紙	前後に二丁ずつ

本書と他の『結城戰場記』伝本は、章段分けに違いがある。

『結城戰場記』<sup>②</sup>

公方管領不和事

加越能文庫本

君臣不和之事

千葉介諫言之事

箱根足柄合戦之事付大森憲頼戦死之事

三浦介逆心事  
箱根早河尻合戦事

三浦介逆心之事

持氏鎌倉江帰給事付鎌倉合戦事

持氏鎌倉帰御江讒者自害之事

持氏御出家并憲直以下自害事

持氏御出家之事

持氏満貞御最期事

持氏義久御最後之事

憲実出家事

上杉憲実出家之事

結城籠城事

結城籠城之事

村岡合戦事

村岡合戦之事

大井大森結城後詰之事

結城落城事

結城落城之事

成氏御事

永寿王鎌倉入御之事

堀越御所御下向事

政知御下向之事

京都軍事

古河之城事

古河城之事

太田道灌事<sup>付</sup>江戸川越城築之事

太田道灌最期事

山内扇谷不和事

高見原合戦事

『結城戰場記』になく加越能文庫本には見える章段は、網掛けをした「千葉介諫言之事」・「大井大森結城後詰之事」である。「千葉介諫言之事」は、鎌倉を出て相州海老名道場に到着した足利持氏に、千葉介胤直が上杉憲実との和義を勧めるが持氏は聞き入れず、怒った胤直は持氏を見限るといふ内容である。同じ話は、『結城戰場記』では「持氏鎌倉<sup>江</sup>歸給事<sup>付</sup>鎌倉合戦事」の冒頭にあり、加越能文庫本は『結城戰場記』よりも簡潔な内容ではあるものの、胤直諫言の逸話をひとつの章段として独立させている。「大井大森結城後詰之事」も『結城戰場記』ではすぐ前の「村岡合戦事」の最後に記されており、加越能文庫本はこれも一つの章段として分けている。

逆に、加越能文庫本にはなく『結城戰場記』には見える章段は傍線を施した「京都軍事」と「太田道灌事<sup>付</sup>江戸川越城築之事」以下の四章段である。

「京都軍事」は、応仁の乱の始まりについて述べた章段であるが、加越能文庫本では「政知御下向之事」の中で、「京都二毛細川与山名戦発、諸士手足ヲ置<sup>ニ</sup>隙ナシ」と一文だけで応仁の乱に詳しく触れることはない。

このように加越能文庫本は、他本に比して全体的には簡略な内容となっている。また、日付が異なる記事も多い。一例をあげてみよう。次は「村岡合戦」の場面である。

『結城戰場記』

加越能文庫本

同七月一日一色伊与守武州北一揆ヲ相カタラヒ、利根川ヲ馳越テ武州ノ須賀土佐入道ガ宿城エ押寄、悉ク焼払、須賀方郎等モ暫与テ討死スト聞エケレバ、同三日聴鼻性順、長尾景仲成田ノ館エ発向ス。一色モ少モ不騷馬ヲ東頭ニ立直シ、閑ニ敵ヲ待懸タリ。両陣馳合、追ツ返ツ煙塵ヲ捲テ戦事十余度ニ及ベリ。一日戦暮シ夜ニ入ケレバ相引ニシケルニ、同四日両方戦屈シテ見ヘケル処、一色方ヘ馳加ル軍兵雲霞ノ如シ。御方ニ加ル軍兵、入西ニハ毛品三河守、豊嶋ニハ清方ノ被官ノ輩計ニテ以ノ外ノ無勢ナリ。此勢計ニテ如何ニト引色ニ成所ニ伊豆守是ヲ見テ、スハヤ敵ハ引ケルゾヤ。何ク迄モ追懸テ打取レ者ドモトテ、荒川ヲ馳渡シ村岡河原ニ打立ル。勝ニ乗所ハゲニモサル事ナレドモ手分ノサタモ無事ノ体余ニ周章シテ見ヘタリ。性順景仲只一手ニ成テ魚鱗ニ連テ荒手ヲ先ニ立、蛛手十文字ニ懸ヤブリシカバ、伊与守忽ニ討負一返モカヘサズ手負ヲ助ケントモセズ、親子ノ討ル、ヲ

懸ル所ニ、五月朔日一色伊与守数千ノ兵ヲ帥、刀根川ヲ渡、須賀土佐守ガ居城ニ攻入、悉討捕焼払所、

上杉性順、長尾景仲自道中馳向。

一色好所ノ幸ナレバ進々テ挑戦事、

一日二十四ケ度。

黄昏ニ及ヌレバ軍ハ明日ト約シ敵味方相引ス。

翌日一色方ハ馳加ル兵如雲霞。

上杉方ハ無勢ニテ不進。

一色軍兵等ニ為ニ下知ニ曰、敵ハ引色ニナル。追懸可レ討ト荒川ヲ馳渡、村岡河原ニ至ル。

性順景仲タゞ一手ニ成攻戦処ニ、



不顧物具ヲ捨、小江山マデ引退。ソレヨリ散々ニ成テ落行ケル。修理太夫持朝此由ヲ聞テ岩付ヨリ上杉修理太夫持朝、岩付ノ城ヨリ発兵後詰ノ人衆ヲ出シケレドモ、軍ハ退散シケレバ、懸散ス間、終ニ一色敗北ス。又引返シ玉ヒケル。

加越能文庫本が、簡略な表現になっていることが確認できる。他の永享の乱・結城合戦関係軍記のほとんどに共通して登場する結城氏の家老水谷伊勢守の逸話も本書は持たない。『結城戦場記』の序文にあたる「足利氏の系譜」も加越能文庫本には見えない。前節（例文四）で紹介した分捕首注文も加越能文庫本にはない。また、前節で（例文一）として取りあげた場面を加越能文庫本は、

楮上杉安房守憲実暫時有鎌倉関東成敗ヲ司。諸大名彼下風ニ立ンコトヲ望。雖然依虎口讒言君臣不快ト成行事ヲ思ヘハ、未来永劫マテノ業障ナリ。亡君持氏、將軍家ヲ奉傾トノ御用意ヲ連々奉申止度々背御心故也。有意無常ノ世ノ習、明日ヲモ知ヌ命ノ内、因果曆然、ノカレカタキ身ニ報ヘキ事ヲ思ヒ、又譜代旧功ノ主君ヲ傾、末代迄ノ嘲ヲ恥テ其身ノ罪ヲ謝セン為ニヤ、俄出家シテ高岳長棟庵主ト号シテ、舍弟上杉兵庫頭清方ヲ越州ヨリ呼越、子息成人ノホト為名代管領職ヲユツリ、六月廿八日長松院ニ參詣シテ亡君ノ御影ニ向焼香念仏シテ涙ヲナカシ、臣讒者等ノ申旨ヲ被進蒙御勘氣、心ナラス御敵トナルトイヘトモ心中更ニ無異義ト既ニ自害及ントスル処、近習等取留本所ニ歸トイヘトモ、

『鎌倉持氏記』・『結城戦場記』・『結城戦場別記』に共通する言葉を持ちながらも、全体的には簡略な表現となっている。憲実の自害をとめた武士二人も『結城戦場記』等では「高山越

後・那波内匠」と名前を記すのに対して、加越能文庫本は「近習等」（波線部）とするだけで名前も書かない。逆に傍線部のように「上杉安房守憲実」や「亡君持氏」と名前を詳しく紹介する箇所もある。

このように加越能文庫本は、その筆致から更に実録的な系統に傾いた作品とも見なせるのだが、じつは梶原氏が分類された第二の系列「物語的系列」に属する作品に共通する逸話も持っている。結城城が落城し、二人の若君が脱出に失敗、捕らえられる場面である。『結城戦場記』と加越能文庫本、そして物語的系列に分類される『結城戦場別記』<sup>③</sup>と『鎌倉殿物語』<sup>④</sup>の同場面を次に引いた。

#### 結城戦場記

惣大将安王殿<sup>十一</sup> 春王殿<sup>十三</sup> ヲバ越後勢ノ大将長尾因幡守生捕申ケル。

#### 加越能文庫本

結城氏朝両若君ヲ女房姿ニ出立セ奉リ、女中ニ添テ城外へ出。父子三人切テ出、自身敵ヲ数々切捨、籠所ノ諸将相共ニ四角八方ニ敵陣追散大ニ破ル。撃捨ル手負死人ハ数不知。而本陣へ懸入、皆戦死。時長尾因幡、小笠原信濃女中ヲ分テ両若君ヲ生捕。

#### 結城戦場別記

大将春王殿安王殿十二十三ニテ御座シケレドモ、サカタシキ若君ナレバ、軍勢ニマキレ落玉フ処ヲ、長尾因幡守見付申シ、スキマモナク生擒奉リ

#### 鎌倉殿物語

輿七張ニ女房ヲ乗セテ、其ノ中ニ若君様ヲ女房ニ出立、入參セ、御輿ニ奉リ乗セ、則落シ申シケリ。寄手ノ軍兵、進出テ申シケルハ、此ノ輿ノ内ニハ、定テ若君可シ有ルニ御座ニ。奉テ虜リ高名ニセヨト、成敗スレハ、軍兵共、見テ之ヲ、我茂クトセカシケル。中程ノ御輿ニ、十二三許ノ姫君二人御座ケリ。年ノ程危テ、自リ輿奉リ引下ケレハ、跡ノ輿ニ妻殿乗リタルカ、輿ヨリ飛零、是ハ何成ル事ソヤ。若君ニテハ無シトニ御入ニ、申シケレハ、咎有リニ陳方一トテ、聽テ奉ルレ虜リ。

加越能文庫本は、二人の若君が女装して逃げようと試みた、とする。若君が女装したとするのは『鎌倉殿物語』であり、『結城戰場記』や実録的系列から物語的系列への過渡期に位置する『結城戰場別記』にはない。『鎌倉殿物語』に近い『持氏記』<sup>⑤</sup>にも「こし七八ちやうにねう女房ばうをのせ、そのなかにわか君二人によし女子のやうに出たゝせたてまつり」とあり、若君女装の逸話は、永享の乱・結城合戦関係軍記の中でも物語的な系列の一部の作品に見られる。

加越能文庫本は、実録的な『結城戰場記』系の伝本に依拠し、しかも結城合戦を中心に描く『鎌倉殿物語』のような性格の作品を参照して成立したのではないかと推測できる。簡潔で実録的な文脈を持ちながらも、物語的な系列の内容も取り入れた加越能文庫本の存在は、永享の乱・結城合戦諸軍記の影響関係が、いかに複雑なものであるかを示している。

注① 古典遺産の会編『室町軍記総覧』（一九八五年 明治書院）「永享記」の項による。

② 加賀市立図書館聖藩文庫蔵『結城戰場記』に適宜句読点を施し引用した。

③ 国会図書館蔵『結城戰場別記』に適宜句読点を施し引用した。

④ 『鎌倉殿物語』の引用は、梶原正昭「鎌倉殿物語（解題・翻刻）」（『古典遺産』十二

一九六三年十一月）による。

⑤ 『持氏記』の引用は、梶原正昭「持氏記」(『中世文学 資料と論考』一九七八年 笠間書院)による。

## 第四節 『松若物語』の限界

### 一 「記」と「物語」の流れ

(一)

戦国軍記『松若物語』は、「瓦林正頼記」という題名で『続群書類従二十輯上』に収録されている。これは、中山信名が文化七年に静嘉堂文庫本を書写した際に『瓦林正頼記』と題名を付したためらしい。和田英道氏の調査によると、本書は内閣文庫などに八本の伝本があり、その中の原本と云ってよいほどの善本である尊経閣文庫本は『松若物語』となっており、『松若物語』が原題であった可能性が高いという<sup>①</sup>。

『松若物語』は、「近比の事にや、摂州下の郡の内に一人の大名ありける」と、瓦林正頼を紹介する文章から始まる。前半部では、応仁の乱に触れたのち、細川政元が九条政基の子澄之と細川一族の澄元という二人の養子を迎えたために起こった細川氏の内紛と足利將軍家の継嗣をめぐる争いを編年体で描く。後半部の中心は松若の哀話である。細川氏の家督を継いだ高国方の武将瓦林正頼は、摂津国武庫山の尾崎、灘の鷹尾に城を築き、高国と対立する澄元側についた灘五郷の人々を従えるため奮戦する。彼は、連歌・古文に通じた「文武二道をたしなむ人」であったという。一時は反高国勢力に押されて、伊丹、更には丹波国の波多野の城まで逃れたほどであったが、船岡山の合戦で高国が勝利を収めたことにより、正頼は摂津に戻った。鷹尾城を修理し、また小清水（越水）にも城を構え常の宿所とし、与力・被官が軒を連ねたありさまは、「当国二八双すくなき大名」であったと伝える。その正頼のもとへ、縁を頼って降参してきた河島兵庫助という武士がいた。この男の十六歳になる息子の松若は、「容顔見にくから

す、心又たくひなし。剩歌道をも心にかけて八、心をかくる人そおほか」つた。正頼は松若を側近くに置いて召し使い、兵庫助を鷹尾城に置いたが、やがて兵庫助に敵方内通の噂がたち始める。兵庫助殺害を感じ取った松若は、父に危機を知らせようと、若党の山中に案内をさせ密かに鷹尾城へ向かう。途中、鷹尾城の麓にある姉の比丘尼の庵に山中を留め置いて、一人鷹尾城に入った松若は、父がすでに閉じこめられ、まもなく殺されることを知る。落ち延びるようと人に勧められた松若は、一度は逃げようと試みるが思い返し、父の死出の供をしようと、伯母婿の今西将監のもとに向かい、正頼の前へ連れていくようと頼む。将監は、何とかして逃がせないかと考えるが、すでに多くの人が知るところでもあるので、仕方なく松若に縄を掛け、正頼に引き渡した。正頼は不憫に思い、松若の助命を願ったが、聡明な松若を助けては、後に後悔することになる、との意見を言う人もあり、結局、西宮の六湛寺で処刑と決まる。六湛寺に連れて行かれた松若は母親とかわいがつてくれた正頼の姉の比丘尼宛へそれぞれ文を認め、辞世の句を詠んだ。けなげな松若の様子に六湛寺の僧たちも「命に代る事なら八、我もく代こそせめ」と衣の袖を絞った。切り手は渋谷の彦二郎という者であったが、太刀を引きそばめうしろに廻ったものの、涙にむせびどこに刀を降ろせば良いのかわからない。松若はそのような渋谷をたしなめ、静かに首を切られた。松若の葬送後、渋谷は出家し、靈仏霊社に参詣して松若を弔ったという。松若からの文を見た老母も髪をそり落し、正頼の姉の比丘尼とともに松若の菩提を弔ったと伝え、最後を締めくくる。以上が、『松若物語』のあらましである。

『松若物語』の内容は、瓦林正頼を中心とした前半と松若の物語を中心とした後半の二つに大きく分けられるため、前半と後半がそれぞれ別に成立し、後に一つにまとめられたという説が芳賀幸四郎氏によって唱えられた。芳賀氏は『群書解題』の中で、「瓦林正頼記」というべき前半は、他の史料と比較してもおおむね正確であるのに対し、「松若の物語」ともいうべき後半は、事実かどうか怪しく、たとえ事実としても潤色があると見るべきであり、史料の価

値は低いと述べられた。また、本書の成立年について、松若丸の死が永正八年（一五一一）の船岡山合戦後のことであること、文中に「当御所様義植公」や細川高国のことを「今ノ右京兆」と記していることから、義尹が義植と改名した永正十年（一五一三）十一月以降、義植が淡路に出奔した大永元年（一五二一）以前の数年間に本書が成立したと推定されている。鶴崎裕雄氏は、連歌師宗長が永正十三年（一五一六）新春有馬に遊んだときの句の詞書に「有馬よりまかりいて、芦屋のなたにして瓦林対馬守新城にて」と見えることから、本書中に記載される鷹尾城の修理と清水（越水）城新築が永正十三年新春までに完了していたこと、瓦林正頼の死に触れていない点から、正頼全盛の永正十六年（一五一九）秋ごろまでを本書成立の目安とし、芳賀氏が示した成立年の範囲を更に絞り込んだ。これらの説を否定したのは和田英道氏である。本書の次の記事、

文明五年癸巳三月十九日に八山名宗全入道死去あり。同年五月十一日に八細川勝元逝去ありしか共、乱ハ未しつまらず、十余箇年に及へり。然れハ敵もみかたも合戦にたいくつして、終にハ和睦にそなりにける。然共、畠山の両家ハ和与にもならずして、今に至まで七十年に及ふまで、こゝにたゝかひかしこにあらそハれけり。

を挙げられ、応仁の乱の終息をみた文明九年（一四七七）から七十年たった「今」の時点で本書が執筆されたと傍線部を解釈し、天文十六年（一五四七）を成立年とされた。<sup>④</sup>

和田氏の説では、根拠とされた記事中の「七十年」が、いつを起点としての七十年かが問題となるだろう。実はこの記事の前では、畠山氏の跡目争いについて触れ、

其外の家僕等思々に引別、享徳二年癸酉以来両家取合てうつつうたれつせしか、遂に八天

下の乱となりて、応仁元年丁亥正月十八日御霊合戦をはしめとして、同五月廿六日より京都二に破て大動乱はしまりける子細ハ、山名金吾持豊入道宗全ハ義就を取たてんとす。細河右京兆勝元ハ政長を家督にせんとなす。其外諸大名悉二に分て漢楚の戦に相似り。

と、畠山氏の内紛が応仁の乱に発展したいきさつを述べた後に、和田氏が扱った記事につながっていく。このように見てみると、『松若物語』の応仁の乱は、畠山氏を中心に述べようとしていることが確認できる。「今に至まで七十年」間、畠山氏の内紛が続いたというのであれば、起点を応仁の乱終息の年に求めるのではなく、畠山氏の跡目争いが始まった享徳二年（一四五三）とするべきであろう。七十年後は大永三年（一五二三）であり、芳賀氏が示された義植出奔が大永元年（一五二一）であることを考慮に入れると、成立年は享徳二年から約七十年後の大永元年頃と推定できる。これは細川高国の没年（一五三一）を考へても矛盾しない。ただし、前述したように前半部と後半部の内容と文脈の違いが大きく、別個に成立したとも考えられることから、前半部の内部徴証のみで『松若物語』全体の成立年を推定するのは難しい。大永元年を成立年と推測できるのは「瓦林政頼記」とも言える前半部に限られ、後半部を入れた全体の成立となると、大永元年をやや下る可能性も考えられよう。

後半部の松若の物語について鶴崎氏は、松若の事件は永正十四年（一五一七）の夏頃に起こった悲劇であり、西宮近在の人々の涙を誘ったことであろうと述べられ、更に、戒廻しに見られるように西宮は傀儡師と関係の深い土地であり、松若の哀話が中世の芸能人によって語り伝えられた可能性を示された<sup>5</sup>。後半部の史料価値は低いと言われた芳賀氏は、お伽草子の成立という国文学的視点からみれば、後半の松若の物語にもある程度の価値は認められると指摘されているが、これを受けて松林靖明氏は、「お伽草子の常套文句が使われているところから文芸性への志向は十分うかがえる」と『松若物語』の文芸的成長を指摘された。また、本書の骨



格が死に赴く松若が母と正頼の姉に宛てた二通の手紙にあり、この手紙が人々の涙を誘い物語としてふくらんでいったと推測なさっている<sup>⑧</sup>。

『松若物語』の後半部・松若の悲劇が、松林氏や鶴崎氏が指摘されたように、西宮の人々の関心を大いにひいた事件であったことは、本文中でも確かめられる。父が謀反の罪で殺されるのを知った松若は、一度は落ち延びようと考えるが思い返して伯父・今西将監の宿所へ赴き、正頼のもとへ連れていくようにと頼む。この松若の行動は、「是を聞ける老少男女、『あはれ、けなげなる人哉』とて、皆袖をぬらしけり」と、人々の涙を誘ったとする。死罪が決まり、小清水（越水）城から処刑地の六湛寺へ連れて行かれる松若を書けば、「見る人皆涙をなかしてぞ惜みあへりける」と、西宮の人々の感情を伝える。斬首の刑が行われ、松若の頸が前に落ちるときにも、「見物貴賤、一度に『わつ』とさけひけり」と、ここでも人々の反応に触れている。松若の哀話には西宮の人々の視線が感じられ、感動的なシーンにはそれを見守る人々の様子や思いが描かれている。

松若が処刑された宝陀山六湛寺は暦応年間創建の禅寺である。六湛寺は現在では廃絶し、西宮市役所周辺の地名にその名を残すばかりだが、塔頭の一つであった如意庵が、如意寺と改称し六湛寺町から移転しながらも存続している。如意寺には永正十一年から正保・慶安ころまでの檀徒の没年月日を記した過去帳が残っている。そこには、松若の事件が起こったとされる永正年間だけに限っても十七名の屋号を持った商人が記録されており、越水城下にあたる西宮の商業の発展が確かめられる<sup>⑨</sup>。松若の哀話は、発展を遂げる西宮の人々の中で伝えられ、それが『松若物語』に記されるようになったものと考えられる。「戎かき」で有名な西宮の傀儡師は、西宮神社の神人となり奉仕したという。周知のように西宮神社は商人の崇敬が厚い神社であるから、鶴崎氏のご指摘にあった松若の哀話と傀儡師の接点は、このあたりに求められそうである。

『松若物語』の末尾に書かれた松若刑死後の後日談は、室町軍記の後日談に類似する点が見られる。

さて渋谷彦二郎、「これさいわいの善知識菩提の縁」と思ひ定、葬送以後やかてもといひ切、靈仏靈社に参詣して松若か跡をそ弔ける。あハれにやさしき事とそ聞えし。さて彼老母の方への文を遣ハしけれハ、母ハ此文をみて天に仰き地にふして、りうていこかれなけきけるハ、けにことハりとそ聞えける。その日やかて髪そりおとし、をこなひすまして兩人のあとを弔ける。

松若の母が出家し我が子の菩提を弔つたこと、松若の頸を斬つた「渋谷の彦次郎」が出家し靈仏靈社に参詣して松若を供養したことは、主人公にゆかりのある女性が出家し、無念の最期を遂げた主人公の菩提を弔う設定や、年少者の非業の最期に立ち会つた者が、出家し靈地を廻り菩提を弔う設定が見られる『曾我物語』や『結城戰場物語』などに通じる。ここに、『松若物語』が持つ室町軍記からの「物語」的な流れを汲むことができる。

『松若物語』と同じく「物語」的な要素を持つ戦国軍記には、『笹子落草子』『中尾落草子』『国府台戦記』が知られている。いずれも関東の地方軍記で、加美宏氏は、「合戦・争乱に叙述が、なお作品中の枢要な位置を占めていて、それが作品の主題やモチーフと深いつながりを持ち、しかも主として後日談の形で、争乱にかかわった人達、とくに敗北者とそのゆかりの者達の運命や悲劇を詳しく追跡し形象している」と評され、これらの作品群を軍記もの文芸の正

統的な継承者に位置づけられている。<sup>83</sup>

『国府台戦記』は、北条氏綱が下総国国府台において足利義明・里見義堯と戦い、これを破った国府台合戦をタイトルに冠しているが、合戦記述ではなく義明滅亡に主眼を置いた作品である。巻末に「天正三年乙亥八月十一日」とあるので、国府台合戦が起こった天文七年（一五三八）から三十七年後の天正三年（一五七五）に成立したらしい。<sup>84</sup>『笹子落草子』『中尾落草子』は、上総国真里谷武田氏の内紛による笹子・中尾両城の落城を描く二部作である。『中尾落草子』の奥書に「かなづかいほんのごとくうつし、てんしやう十五ねん ひのとのゐ 十月十三日」とあり、事件の起こった天文十二年（一五四三）から四十四年後の天正十五年（一五八七）に書写されていることより、これ以前に成立したらしい。<sup>85</sup>これら三作品は、『国府台戦記』には謡曲からの影響が、『笹子落草子』『中尾落草子』には幸若舞曲からの影響が認められ、語りの関与も推定されている。三作品ともに和文を基調とした文体で綴られ、全体的に御伽草子に近い印象を受ける。戦を題材としているものの「記」的な表現の印象は薄く、「物語」的な流れに大きく傾いた作品と言える。

一方で『松若物語』前半部の瓦林正頼記は、後半部とは不釣り合いな程実録的な文脈で綴られている。

然れハ澄元もこらへかね、三好筑前守以下馬廻少々相具、四月九日の夜二八屋形に火をかけ、又江州甲賀へそのかれける。高国ハ伏見の津田兵庫助か城にたて籠られしか、相違なく帰洛ありけり。去程に御所さまを八太内左京大夫義興、猛勢を引率して御舟を出され、永正五年春の末に八泉堺に着岸ありけり。近日御上洛あるへき由聞えける間、義澄將軍、同四月十六日夜、江州へそ没落ありける。然間、高国家督たるへき由の御内書頂戴して、堺へ御迎にそ下向ありける。

前半部には、このように年月日順に事実だけを伝えようとする編年体の「記」的な文脈が目立つ。やはり、前半部と後半部の成立を分けて考えるのが妥当だろう。

『将門記』以来、軍記の主流を為すのは「記」系統の表現であった。軍記が歴史を記す以上、歴史叙述に適した記的な文脈を持つのは当然のことである。『平家物語』を代表とする文学的価値の高い軍記作品では、歴史を記録した「記」の表現と、「語り」によつて錬磨された叙情性豊かな「物語」的な表現が融合し、高度な文芸性を獲得している。室町軍記の中でも『明德記』『結城戰場物語』『堺記』は、「語りもの」的要素の強い作品として知られている。物語僧や時衆の関与が認められ、公衆的基盤が与えられて広く流布していった文芸的性格を伴う作品である。これらの室町軍記には、「語りもの」としての特質や機能は引き継がれているものの、「主人公の悲劇的末路を語る場面にもつともその本領が発揮されており、いわゆる『いくさがたり』の占める比重は小さく、その面白味も薄い」と言われたのは、梶原正昭氏である。山名一族の落魄の運命を語る『明德記』と春王安王兄弟の末路を語る『結城戰場物語』は、『平家物語』や『太平記』のいくさがたりの伝統を引きずりながらも、『曾我物語』や『義経記』などの個人的な運命の展開を主題とする別系列の語りへの接近を明白にしており、その結果、永享の乱関係軍記に見るように、実録的性格の強い系列の作品群と物語色の濃い系列の作品群の二つに分裂していく。これは、抒情的・物語的な世界が実録的な文脈になじまなくなったことを示唆している、と氏は指摘する。<sup>46)</sup>

『明德記』などの「語り」の関与が確認できる作品では、「記」的な文脈と「物語」的な和文調の文脈が一体となり、軍記の文芸的な流れをそのまま継承する表現が見いだされる。その後登場する永享の乱関係軍記に表れた「記」と「物語」という二種の系列への分離は、梶原氏の指摘されるとおりであるが、前節で述べたように、この二系列はそれでもなお複雑に影響し

あう様相も見せている。

主人公の運命を歴史的な事件の中に位置づけるため、事件の社会的な状況を綴った「記」的な前半部と主人公の悲劇的な運命を語った「物語」的な後半部をつなぎ合わせた『松若物語』の構成には、正統派の軍記を目指そうとする姿勢が見いだせる。しかし、この構成が読み手に違和感を与えてしまう。物語的な世界が「記」的な文脈と相容れることなく完全に分離して存在するからである。実録的な記述と和文調で綴られた物語的な世界とが完全に分かれながらも一作品中に同居するところに、『松若物語』の注目すべき特徴がある。物語的世界は室町軍記と同様の趣向を求めているものの、実録的な文章にとけ込めず、一体となれないぎこちなさが表面化しているのである。『松若物語』は軍記の流れを継承しようとしている。しかし、そこにこの時期の戦国軍記の持つ限界も感じとれる。

(三)

軍記文学に流れる「記」的な文脈を戦国軍記に辿るのは容易い。戦国軍記のほとんどが実録的な筆致で表現されているからである。では、もう一方、物語性の強い「和文」的な流れは、どうだろうか。

関ヶ原合戦前後の豊後国における黒田如水の戦功を描いた軍記に『豊後崩聞書』という作品がある。ほぼ同内容を記した寛文三年（一六六三）成立の『豊後御陣聞書』より文飾も濃厚で年紀も核実していない点から、『豊後崩聞書』はこれより後の成立とされている。<sup>⑧</sup>「くづれ」は肥後琵琶の「菊池くづれ」などに見られるように、語りとの関連を想像させるタイトルであり、実際、『豊後崩聞書』の冒頭部「比はいつその比か」とよ。慶長五年かの子の歳七月上じゆんごろより。花の天下に弓矢出来る。ゆへをいかにとたつぬるに<sup>⑨</sup>に見られる表現からわ

かるように、「きわめて口あたりのよい和文」<sup>④</sup>を全体に用いて黒田如水の徳川幕府に対する忠誠を描いている。また、語りの特徴である繰り返しの表現も見られる。例えば、「手がへ申は侍の二丁の弓成り。とかく此度善悪の二心にきわめ。太府方を申へし」と如水が言えば、その後の大友義宗（義統）の言葉に「手がへ申はそれ侍の二丁の弓なり。とかく此度異国かたいちんする色成り」と同じ詞章を繰り返すなど、語りを意識させる表現が多い。しかし、この中には『松若物語』や『国府台戦記』には認められた室町軍記と共通する趣向は見られない。『豊後崩聞書』では久野次右衛門という十九歳の武士が奮戦の末討死するありさまを描く。息子の討死を聞いた母親が歎く姿を「扱は此度討死なるか。是はゆめかとなけかせ給ふ。あわれなるとも中く」。申はかりハなかりけり」と口調良く取り上げはするものの、話は若くして死んだ息子の菩提を弔うとは進まず、自害しようと思ひ詰めた母親を如水が思いとどまるよう説得し、次右衛門の弟を元服させて久野家を継がせ一万石を与えたとする。室町軍記に見るような後日談への展開はなく、如水の慈悲深さを強調する逸話に進展させるのである。『豊後崩聞書』は、黒田如水・長政親子がそれぞれ筑紫と関ヶ原で手柄を立てたことにより筑前国を家康からもらい福岡に城を築き、「すゑはんしやうと。さかへこそすれく」と黒田家の発展を寿ぐ言葉で大尾を飾る。悲劇的な最期を遂げた者たちへの鎮魂の思いや個人の運命が語られているわけではなく、黒田家の徳川幕府への忠誠を強調することが、この作品の主旨である。和文的な筆致から、語りの関与を思わせる戦国軍記であるが、語りと関与する室町軍記の設定と共通する要素は見当らない。「物語」の流れは、すでに転換期を過ぎたと言えるであろう。近世に入ってから成立した『豊後崩聞書』の「物語」的な筆致には、室町軍記に見られた内部の要素は抜け落ち、語りものの文的文脈や和文調の文脈へのこだわりだけが、残存しているように思う。

室町・戦国軍記の「記」と「物語」の系譜を考えるキーポイントの作品である永享の乱関係軍記と『国府台戦記』『笹子落草子』『中尾落草子』が、すべて関東を舞台とするのに対し、一作品中「記」と「物語」が完全に分かれた構成を持つ『松若物語』が関西地方の戦国軍記であるのは、偶然だとは思えない。軍記の「記」と「物語」の流れを辿るとき、『松若物語』は示唆的な作品である。今後、関西の戦国軍記の伝本調査が進めば、『松若物語』のような特徴を持つ軍記が発見される可能性もある。「記」と「物語」の流れの継承は、関東と関西の戦国軍記では違うのかどうか、今後の戦国軍記研究の進展に伴って考えなくてはならない問題である。

注① 和田英道「細川氏関係軍記考(一) 書誌篇―永正期を中心とする―」(『跡見学園女子大学国文学科報』十一 一九八三年三月)による。

② 『松若物語』の引用は、和田英道「前田育徳会尊経閣文庫『細川政元記』・『松若物語』翻刻」(『跡見学園女子大学紀要』十八 一九八五年三月)所収の『松若物語』による。

③ 「尊経閣文庫蔵本『不問物語』について―その成立と史実性・文芸性―」(『帝塚山学院短期大学研究年報』二十 一九七二年十二月)

④ 同注①

⑤ 同注③

⑥ 古典遺産の会編『戦国軍記事典 群雄割拠篇』(一九九七年 和泉書院)「瓦林正頼

記」の項。

- ⑦ 『西宮市史 第二卷』（一九六〇年）「第二章 幕藩体制の確立と西宮地方」参照。
- ⑧ 「『国府台戦記』小考―軍記の変貌と冷泉の物語―」（『甲南国文』二十四 一九七七年三月）
- ⑨ 同注⑥ 「国府台戦記」の項による。
- ⑩ 同注⑥ 「ささごおちのさうし・なかおおちのさうし」の項による。
- ⑪ 「中世後期の諸軍記」及び「戦国軍記の展望（初稿）」（『室町・戦国軍記の展望』二〇〇〇年 和泉書院）
- ⑫ 『群書解題』による。
- ⑬ 『豊後崩聞書』の引用は、『続群書類従第二十三輯上』による。
- ⑭ 同注⑫



## 第二章 戦国軍記の変容と伝播

序章で述べたように、戦国軍記の本文流動の幅は狭く、原本の本文を予想することが比較的容易である。そのため、どのような環境の下で、いかなる目的を持って本文が改変され、異本が生まれてきたのかを確認できることも多い。

本章では、戦国軍記が変容し異本が発生する過程を辿り、また戦国軍記が後の文学作品にどのように取り込まれていくのかを明らかにし、軍記文学研究のささやかな一助にしたい。

## 第一節 『播州御征伐之事』の受容

(一)

天正六年（一五七八）に始まった三木合戦は多くの軍記作品に描かれており、この合戦に寄せる人々の強い関心と二十三歳で自害した別所長治への厚い同情をうかがうことができる。

東播磨の三木城主別所氏は、村上天皇の流れをくむ播州の名家赤松氏の末流である。天正六年三月、織田信長より毛利氏攻略の命を受けた羽柴秀吉は、協力を同意した別所長治を頼つて播磨に到着した。しかし秀吉と別所氏の会見は決裂、長治は秀吉に反旗を翻し、毛利氏に通じて三木城に籠城した。別所氏傘下の野口、神吉、志方、淡河等の城々も別所氏に与し秀吉を包囲した。窮地に陥つた秀吉は、同年四月、長井四郎左衛門政重が守る野口城を攻め落とし、続いて七月、神吉城城主神吉民部少輔頼定を謀計をもつて殺害、三木支城の中で最大の神吉城は落城する。八月には志方城を落とし、後顧の憂いを断つた秀吉勢は、三木城を取り囲み、兵糧攻めにする。対する別所方は三木城から討つて出て、平井山に本陣を置く秀吉軍に攻めかかるが破れてしまう。この合戦で別所方は七百八十余人が討死したという。この頃、摂津守荒木村重が織田信長に背き、別所方はこれを好機とし荒木氏の花隈城と内通、丹生山に一城を構え兵糧を運び入れようとするが、秀吉はこの山城に夜討を仕掛け落城させる。別所方の勇将、淡河城主淡河弾正定範は、天正七年五月、陰馬の奇策で羽柴秀長を追い払う活躍を見せた。一方、毛利氏は三木城援護のため吉川元春、小早川隆景を海路派遣する。九月、明石魚住から上陸した毛利軍は、平田を守る秀吉方の武将谷大膳亮衛好を攻め討ち取る。大村坂において激しい戦いがくり広げられるが、またしても別所方は敗北し、別所甚太夫、淡河定範といった武将

を失つてしまう。三木城内の兵糧は底をつき、籠る兵や百姓らは始めは糠を食い中頃は馬や犬を食い、後には死人の肉まで食べあさつたという。兵たちが弱り切つたのを見すました秀吉は、長治の弟友之の鷹尾城、続いて長治の叔父賀相（吉親）の新城を落とす、三木城はいよいよ孤城と化していった。この惨劇を見た城主長治は、秀吉方についた叔父の孫右衛門重棟を介して、自らの命と引き替えに城内に籠る兵たちの命乞いを秀吉に申し出る。秀吉はこれを快諾し、天正八年（一五八〇）正月十七日、別所長治、友之兄弟は切腹、賀相は家来によつて殺され、三木城は開城。約束どおり城内の兵、百姓らはすべて助けられた。

「三木の干殺し」と呼ばれる、これら一連の三木合戦を描いた軍記のうち、別所方の立場から記した『別所記』は、各地に多くの伝本が残っており、岩崎本『別所記』や神戸大学人間科学系図書蔵『別所記』、三木法界寺蔵『別所軍記』などのように後世になつてから手が加えられた増補系ともいふべき伝本も知られている。更に法界寺で行われる絵解きの台本も『別所記』の延長上に位置するものであり、別所方の武士来野弥一右衛門が書いた『別所記』が広く流布し、興味を持って書き継がれ書き加えられていったことがわかる。『別所記』から派生した作品については、次節でとりあげる。

一方、秀吉のお伽衆大村由己が乱後間もない天正八年正月晦日に記した『播州御征伐之事』（『天正記』のうちの一冊、以下、『征伐之事』と略す）も、幸若舞曲「三木」などの作品の母胎となつた。

本節では、秀吉の自己宣伝のために描かれた『征伐之事』から派生したと考えられる作品二本と『別所記』をとりあげ、『征伐之事』がどのように受容されていったかを探っていく。

東京大学付属図書館蔵『赤松末葉記』

東京大学付属図書館蔵『赤松末葉記』（以下『末葉記』と略す）は、『別所家盛衰記』と合綴されている。『別所家盛衰記』は『別所記』系の伝本であり、その奥書には、

元禄三年六月仲旬以自筆本於大坂中寫写之畢

宝永七年<sup>庚寅</sup>十二月於江戸下谷写之畢 高章

嘉永四<sup>丁亥</sup>歲季秋廿八日写之

延平

と見える。これが事実であるとすれば、作者自筆本からの流れが明らかで貴重な伝本であり、実際本文を読むと、かなり古態をとどめた本文であると感じられる。

『赤松末葉記』は『別所家盛衰記』と同筆で、奥書には「喜<sup>（喜カ）</sup>永四丁亥歲十月朔旦 望延年」とある。本書は『征伐之事』に拠りながらも前半には独自の記事が目立ち、他に同類の伝本を見ない。題名の由来も不明で『別所記』系の伝本にも同じ題名を持つ伝本は現在のところ見つかっていない。また、他本に比して格別「赤松色」（別所氏は赤松氏の末流）が強いというわけでもない。むしろこれから述べるように「荒木色」が強いというべきである。

『赤松末葉記』は「天正六戊寅年、荒木撰津守村重ト云武士逆心ヲ企ツ」という文で始まり、以下荒木村重一族が信長勢に攻められ滅んでいく様を編年体を用いて描いている。荒木一族の妻子が捕らえられ、尼崎七本松に於いて誅されたことを記し、花隈城を囲む信長勢の配置図まで載せ説明を加えた後、

同時羽柴筑前守秀吉ハ信長公ノ御差図ヲウケテ、御人数ヲ高槻、茨木ニ引下シ、調略ヲ以テ味方トナシ、有岡ノ城ヲ攻ツメ、播州通ニ所々付城ヲカマヘ心易ク通路ヲナス。三木ノ方ニハ荒木ガ端城花隈ト通路ヲナシ、摂州丹生山ニ一城ヲカマヘ、淡河ノ要害ヲツタヒトシテ、毛利家ヨリノ兵糧ヲハコビ入ル。

と、以下本文は『征伐之事』に拠つたものとなつていく。つまり『赤松末葉記』は『征伐之事』が描くところの三木合戦の由来、野口合戦、神吉合戦、平田合戦をすべて削除し、荒木一族滅亡の記事を入れた後、丹生山合戦以後は『征伐之事』に拠るといふ非常にぎくしゃくとした作品になつてゐるのである。

さて、この荒木一族を描いた部分であるが、これは甫庵『信長記』から抜き出しまとめたものとみてほば間違いないだろう。

(例文一)

『赤松末葉記』

甫庵『信長記』<sup>①</sup>

十四日ニ惟住五郎左衛門、武藤助十郎、氏家左京佐、伊賀伊賀守、伊丹表へ攻寄テ、首級二十余討捕テ、則御本陣エリ持参シ、ソレヨリ伊丹エ推詰放火シテ、  
カ 祢山二陣ヲ移シカヘ、具野ノ郷  
二付ケ城ハ蒲生忠三郎氏郷、惟任五郎左衛門、蜂屋兵庫頭等ヲサシヨカレ、丹野原ニ信忠卿、信雄卿ナリ。幕下ニ  
同十四日に惟住、蜂屋、武藤、氏家、伊賀、永岡等、伊丹表へ相働く処に、城中より足輕を出したりけるを、武藤宗右衛門が手の者共追込み頸計り討取り、あまの郷へ持参す。右の勢ども、伊丹へ推詰め放火して、刀祢山に陣取りたり。貝野の郷の付城に、蒲生忠三郎、惟住五郎左衛門尉、蜂屋兵庫頭、小野原には信忠卿、信雄卿、陣を取り玉ふ。

八十五日二郡山工御本陣ヲ居ラル。

同十五日に郡山へ御本陣を移さる。

十六日二高山右近、此処ニ參テ御礼ヲ

十六日に高山右近、郡山へ參じて御礼申しければ、

申上、御馬、御刀ヲ下サレ、

忝かたじけなき御諛ども仰聞かされ御秘藏はやくの早鹿毛かの

剩、芥川郡ヲ所領トシテ御朱印ヲ賜ル。

馬、吉則の刀下されて、其の晩に又当国芥川郡領

信忠卿ヨリ黄金三百両、信雄卿ヨリハ

知すべき旨、御朱印成し下されけり。信忠卿より

名馬ニ鞍具シテ三匹賜ル。

黄金三百両、信雄卿より名馬三匹、鞆具かいくともにた

(卷十一)

陣を訪れた高山右近に信長等が恩賞を与えたという十一月十六日条について、太田牛一著『信長公記』<sup>②</sup>では次のように記している。

十一月十六日、高山右近、郡山へ祇候致し、御礼申上ぐるの処、御祝ごしう着ちやくなされ、御膚おんはだへにめさせられ候御小袖を祖まがせられて下され、并に埴原新右衛門進上の御秘藏の御馬、是又拝領。忝いよき次第なり。今度の御褒美として播州の内芥川郡仰付けられ、弥いよく御忠節を励まされ然るべきの旨、御使衆に申されおはんぬ訖。  
(卷十一)

『信長公記』には『赤松末葉記』、甫庵『信長記』が伝えるところの信忠から黄金、信雄からは鞍を乗せた名馬が高山右近に下された、という記事がない。更に(例文一)に続く『赤松末葉記』の文章を甫庵『信長記』、『信長公記』と比較してみよう。

(例文二)

『赤松末葉記』

十八日二惣持寺ノ要害普請出来シテ、茨木ノ付城ヲ伊勢ニ渡シ、不破、前田、佐々、金森、  
原田、日野兄弟ハ惣持寺ニ入カワル。十九日二手痛ク攻ヨセテ、力根山ノ要害ヲカマヘ、

甫庵『信長記』

同 八(十八カ)日に惣持寺の要害、普請出来せしかば、茨木の付城をば伊勢国より打立ちし人々  
渡し置き、不破、前田、佐々、金森、原、日根野兄弟をばくり越して、惣持寺に入置かれ  
けり。翌日茨木城手痛く押詰め陣を取り、刀根山に要害を構へらる。(卷十一)

『信長公記』

十一月十八日、信長公惣持寺へ御出で、津田七兵衛信澄人数を以て、茨木の小口押、惣  
持寺寺中御要害、越前衆、不破河内、前田又左衛門、佐々内蔵佐、金森五郎八、日根野備  
中、日根野弥次右衛門、原彦次郎等に仰付けられ、大田郷御取出引払ひ、近々と取詰めさ  
せ、  
(卷十一)

十一月十八日条も『赤松末葉記』の文章は『信長公記』よりも甫庵『信長記』に近く、また、  
十九日にいたっては、『信長公記』には見当たらない。『赤松末葉記』が『信長公記』よりも甫  
庵『信長記』を参考にして成立したことが明らかである。

このように『赤松末葉記』は、基本的には甫庵『信長記』の荒木関係記事を年月日順に抜き  
出し、まとめて並べているのだが、『信長記』の中では三木落城後に書かれた事件を、例外的  
に三木落城前に移しているところがある。荒木一族関係の事件を本文前半にまとめて記してい  
るのである。次に挙げた信長勢が荒木志摩守の籠る花隈城を取り囲む場面は、甫庵『信長記』  
では三木落城以後に書かれているものである。

同年冬、池田勝三郎信輝息紀伊守二撰州ヲ賜リタリ。然ト云ドモ荒木撰津守ガ余党荒木志摩守、花隈ノ城ニタテコモリ、紀州ノ雜賀ヨリモ加力ニ及ブユヘ、

池田ハ花隈ノ北ニ當テ、諏訪ガ峯ト云山ニ要害ヲコシラヘ、息ノ池田古新輝政ト共ニ居陣シ、合戦度々ニ及ブ。(絵図)

又生田ノ森ノ向ヒ城ニ嫡子紀伊守ヲ置、西面ノ方金剛寺山ノ要害ニハ、家臣伊木豊前守、森寺清兵衛等コレヲ守ル。

村重の家臣の子であり後に秀吉に召し抱えられた絵師の狩野内膳のごとく荒木氏と何らかのかかわりのあつた人物が『征伐之事』の

撰津国守護荒木撰津守村重、奉レ対シ將軍ニ謀叛而欲シテ覆シテ天下ヲ、先從ニ京都止ム播州之路ヲ。秀吉聞テ之ヲ、不レ移ニ時日ヲ至テ播州ニ、御結難レ及ニ再三ニ、村重成レシテ疑ヲ不レ聞レ之。然レバ則馳ニ上リ京都ニ請上意、引下御人数高槻、茨木、以テ調略ヲ成ニシ御味方ト、攻ニ詰有岡一城。

とだけ見える荒木村重謀反を甫庵『信長記』に基づいて加筆したのが『赤松末葉記』であると考えられる。

伊丹の城落去せしかば、撰州を池田勝三郎信輝息紀伊守にぞ賜はりける。然れども、荒木撰津守が余党荒木志摩守、鼻隈の城に楯籠るに因つて、紀州雜賀より能き弓鉄炮など、数百人加勢せしめ、堅固にひかへて見えしかば、(中略)

信輝は鼻隈の北にあつて、諏訪が峯と云ふ山を要害とし、子息古新こしんと俱ともに居たりけり。

生田の森の向城には紀伊守、西の方金剛寺山の要害には、彼の家来伊木豊後守、森寺清兵衛尉など有りけるが、(卷十三)



『別所記』系の伝本の中にも、例えば明石市ト部義太郎氏蔵『三木軍記』<sup>④</sup>のように、三木合戦で活躍した先祖の武功を書き加えた「家の軍記」という役目を持つに至ったものがある。同様に『征伐之事』も、祖先の記録を書き入れた『赤松末葉記』のような作品を生み出していったのであろう。

(三)

### 『別所記事』

『別所記事』の伝本は、内閣文庫蔵『別所記事』、国会図書館蔵『別所記』、島原松平文庫蔵『三木別所没落記』、篠山鳳鳴高校図書館青山文庫蔵『別所小三郎長治始末事』が知られている。内閣文庫蔵『別所記事』は、『前別所画像賛』と『別所小三郎長治播州三木落城濫觴之事』の二編から成る。『前別所画像賛』は別所就治（長治の祖父）の画像に賛したもの。従って三木合戦とは無関係であり、ここで問題となるのは『別所小三郎長治播州三木落城濫觴之事』である。他の三本の本文はほぼ同文で、三本とも「龔奉別所小三郎長治三木落城濫觴事」という内題を持っている。加美宏氏は、「これら三本（国会図書館本・松平文庫本・青山文庫本）と内閣文庫本『別所小三郎長治播州三木落城濫觴之事』とでは、本文にかなりの異同があり、錯誤・脱字などを相互に補完し合う関係にあるが、『于時慶長十有七稔<sup>壬</sup>曆 梅雨十一日尾州清須住泰秀盛安居士 記焉』という奥書をもって終る内閣文庫本が、いささか原態に近いのではないか」とされている。<sup>⑤</sup>

『別所記事』<sup>⑥</sup>の成立については本文中に、

茲二空照、一日吉田久次ト一卷ヲ<sup>(袖カ)</sup> 袖ニシテ持チ来ル。焉<sup>(コレ)</sup>ヲ披キ看ルニ、長治没落ノ記

録、句句明カナリ。然リト雖モ、予運行ヲ請ヒ、黙止スルコトヲ獲(得カ)ズ。筆虹ヲ加ヘテ、聊力芻(スウキ)銀ノ学ヲ綴リ、以テ添書セシメ畢ヌ。

とあることや奥書から、長治の菩提寺である法界寺住持諦月空照上人が記したものを尾張清洲の住人泰秀盛安居士なる者が添削して成つたらしく、慶長十七年（一六一二）は長治の三十三回忌にあたる。

本書の三木合戦記事は、明らかに『征伐之事』に拠つて書かれ、それに後日談―法界寺の縁起と衰微、興隆を書いた部分を補つて成立したと考えられる。しかし『別所記事』の三木合戦を叙述した部分がすべて『征伐之事』を写したというわけではなく、独自の文章も見られる。例えば、長治が飢える城内士卒のために死を決意し、その旨を秀吉に伝える書面は、『別所記』『信長公記』等にも見えるところであるが、『別所記事』は特有の文面を載せている。

### 『別所記事』

唯今申入ル、旨趣ハ、三歳敵對ニ附セラ  
ル、ノ条ノ刻、心底ヲ理申スベキノ処、  
意ハザリキ、内輪ノ面々覺悟ヲ贊ルノ  
間、理断絶ノ事ニアラズ。然リト雖

唯今申入意趣者、去々歳以来被レ附ニ置敵對ニ之  
条、連々其ノ理可ニ申分ニ心底之処ニ、不慮ニ内輪之  
面々替ニ覺悟ヲ之間、不レ及ニ是非ニ。

### 『征伐之事』

モ、諸卒三歳ニ至ルマデ籠城シ、堅固ヲ  
保チ畢ンヌ。是只自力ノミニアラズ。群  
士粉骨ヲ尽クシ、比類無ク手柄ヲ励マス。  
誠ニ賢臣二君ニ事ヘザルノ謂ナリ。功  
有リ忠有ル伊等、賞無クンバ、哀レニ

シテ則チ弓馬ノ家永ク捨<sup>(ス)</sup>レナンカ。茲<sup>(ココ)</sup>

二於テ意々愁傷、後世ノ障トナラン。

偏ニ廣大ノ賢慮ヲ以テ、御哀憐ニ預カリ、

群士命ヲ扶ケラル、二於テハ、兄弟伯父

三人、來ル十七日申ノ刻、切腹スベキモ

ノナリ。速ニ御返報ヲ<sup>(コヒネザ)</sup>希フ。此等ノ

趣宜ク御披露ニ預ルベシ。恐々謹言、

某等両三人之事、來十七日申ノ刻、可<sup>(レ)</sup>シト切腹ヲ相定メ畢<sup>ス</sup>。然<sup>(レ)</sup>バ至<sup>(レ)</sup>テ于今相届<sup>ル</sup>諸卒、悉<sup>ク</sup>可<sup>(レ)</sup>討果事不便之題目也。以<sup>(レ)</sup>御憐愍<sup>ヲ</sup>於<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>扶置者可畏入者也。仍<sup>(レ)</sup>此等之趣無相違様ニ仰御披露。恐々謹言。

傍線を施した部分は、『別所記事』独自の文章である。また、この書状に対する秀吉の書状の冒頭にも「三歳以来諸士ノ働キ、感歎膽ニ銘ジ、誠ニ忠臣勝<sup>ズ</sup>テ計リ難シ。殊ニ軍兵ノ苦惱、感涙袖ヲ浸ス」と他に見られない文章がある。これら『別所記事』独自の文章は、三木方の兵士を褒めたたえるものであり、法界寺縁起を主眼とする本書が、在地の人々に広く読まれることを期待して書き加えたものであろう。

その他の加筆部分の中では、別所方について戦った兵士たちの名を連ねたり、長治等の妻たちの容顔美麗さを描く文章を書き加えたり、地元の人々の要望に応えた加筆と考えられるものが多い。切腹を決意し、妻子を害した長治が、二年間苦勞を共にした家臣たちに向かつて言った言葉、

三年ノ籠城堅固ヲ保ツ。<sup>(アマツサ)</sup> 剩<sup>(マ)</sup> エ忠ヲ<sup>(ウキ)</sup> 抽<sup>(キ)</sup> デ功ヲ成ス数度ノ戦功、誠ニ異國本朝ニ比類無キモノナリ。<sup>(ヒトシ)</sup> 一<sup>(ヒト)</sup> ビ會稽ノ恥ヲ<sup>(ウツ)</sup> 雪<sup>(ク)</sup> グ事、是武勇ノ君臣ノ義トナスモノナリ。一<sup>(ヒト)</sup> ビ恩ヲ報ジ、便チ噴鬱ヲ達スベキノ処、先生ノ運命力、天命冥々トシテ歎クニ更ニ甲斐無シ。

然リト雖モ、君子惠ヲ思ヒ仁ヲ<sup>(ヒトシ)</sup>齊クシ、諸士相扶クル為ニ自害ヲ遂グルモノナリ。噫<sup>アツ</sup>  
子孫極ンヌ。後生誰有リテ力名ヲ成サン。歎クベキ哉

のうち傍線部は、本書後半部法界寺の縁起を説く部分の冒頭、「長治日頃ノ恵ニ懷クノ輩、恩澤ニ報ゼン為、後生追悼菩提善苗ノ為ニ、國民一同ニシテ、少志ヲ以テ生<sup>(イッキ)</sup>木ニ靈地ヲ撰テ一院ヲ建ント欲ス」と呼応させ、法界寺縁起をより一層明らかにしようとする作者の姿勢がうかがえる。

本書の作者法界寺住持諦月空照上人は小野の人で、三木市細川町の脇川山教海寺の縁起にも登場する人物である。<sup>④</sup>添削者尾州清洲住人泰秀盛安居士については不明である。三木落城後、長治らの命とひきかえに助けられた兵士たちは、その後、前野長康の手に属する者が多かったという。<sup>⑤</sup>前野氏の本拠地尾張国丹羽郡前野村は清洲に近く、泰秀盛安居士も別所氏家臣であったのが、開城後前野氏に仕え、『別所記事』成立時の慶長十七年には出家し清洲に在住していたのかもしれない。三木合戦に参戦した元別所士卒という古縁から、空照上人は本書の添削を盛安に依頼したとも考えられる。

前野長康は信長の家臣から、永禄九年（一五六六）には秀吉の家臣となっており、<sup>⑥</sup>もし、盛安が三木落城後前野氏の家臣となった人物だとすれば、秀吉の動静についても詳しい情報を得やすい立場にあつただろう。法界寺で語られる三木合戦の絵解き台本が、別所側から描いた『別所記』を基にして成つたことから考えても、『別所記事』が在地に根ざした広がりを持して書かれたものであるなら、絵解き台本同様『別所記』に拠って書いてもよさそうなものゝ、わざわざ秀吉側から書かれた『征伐之事』を利用した理由は、この辺りにあるのかもしれない。秀吉が三木落城後、信長から「白傘ノ蓋」を賜つたと『別所記事』は伝えるが、この話は『征伐之事』には書かれていない。『武功夜話』巻八「羽柴筑前守、三木落城の報告のため安土へ

「參上の事」には、播州における長年の粉骨の働きを賞して、信長は馬三匹を秀吉に下したとあるし、また秀吉の書状の中にも三木城攻略のほうびとして信長から感状と「但州かな山御茶湯之道具」を賜ったと記していること④から何らかの褒賞はあったと考えられる。「別所記事」はこの点についても『征伐之事』より詳しく伝えようとしているし、本書最尾の「抑モ羽柴筑前守秀吉初メ小二シテ織田信長公ノ忠臣タリ」で始まり、秀吉が新八幡と号するのは大日如来の变化であるためだからと締めくくる秀吉称賛の文章は、盛安と秀吉が何らかの関わりを持つていたと推測させるものである。

別所長治の百回忌にあたる延宝六年（一六七八）、法界寺の境内に三木合戦を描出した「東播八郡総兵別所府君墓表」が三木郡十二か村の人々によつて建てられた。また、三木市立図書館蔵『別所記』の奥書には、

四代之先曾祖父小舟太郎太夫ト申人、三木城ニ楯籠、度々之合戦切抜堅固テ、天正八年正月十七日、別所小三郎長治拾貳村百姓被レ成ニ御助<sup>ウ</sup>。四代之孫小舟仁兵衛ト申者、為レ後々ノ此一記綴置、末代迄右不<sup>レ</sup>忘<sup>ニ</sup>御恩、如<sup>レ</sup>斯奥書仕者也

三木 西這田村住人

享保八<sup>癸卯</sup>年二月中旬

小舟氏仁兵衛

平井氏清右衛門

とあり、長治自刃後一四三年も経つた享保八年（一七二三）になつても、末代まで御恩を忘れないために『別所記』を書き写したというのである。

三木の人々を助けるために若い命を犠牲にした別所長治は、悲劇の青年武将として民衆の心に深くしみ込み、彼と共に苦しい戦いに参加したという誇りが三木の人々の意識の中に根ざし

ている。『別所記事』が法界寺縁起を主題として書く以上、『征伐之事』が描く三木合戦を三木の民衆が歓迎する内容に筆を加える必要があつたと考えられる。

(四)

『別所記』

『別所記』と『征伐之事』の間には何らかの成立上の関係があるということは、従来より指摘されてきたところである。確かに、同じ合戦を描いたためという理由だけでは説明できない類似点が多い。

『別所記』<sup>①</sup>

秀吉ハ三人ノ首京都へ上セ、信長卿ノ実  
檢ニ備。播州ニテハ、ゴチヤク、志方、  
魚住、此等ノ城ドモ同時ニ攻伏給ヒ、其  
後信長卿ヨリ武勇ト云ヒ調略ト云ヒ、無  
比類トノ感状ヲ給フ。誠弓馬ノ面目何事  
カ如之哉。依秀吉三木ノ城ニ移リ、地ヲ  
清メ堀ヲサラヘ、今度退散スル人民ヲ引  
モドシ、法度ヲ定。当国ノ儀ハ不及申、  
但州諸士着到ノ旨ニ任セ可在城ノ由相触。  
人々門戸ヲ並ベユ、シカリシ事共也。

『征伐之事』

扱秀吉ハ三人ノ首上ニ京都ニ備ニ御実檢ニ、并御着、  
志、魚住ノ之城敗北シ、但馬一國属メ一篇ニ。此  
外西國四國之使札、日々に到来之旨達ス上聞ニ。云レ  
武勇ト云レ調略ト、無北類之由、御感不淺。寔ニ弓  
矢之面目不レ過レ之ニ。仍テ秀吉移テ三木城郭ニ、清メ  
地ヲ疏レ堀ヲ、改レ家、引テ直シ此ノ先退散スル人民ヲ、  
呼テ出シ町人ヲ、門前ニ成レ市ヲ。当国之大名ハ不レ及レ  
云ニ、但州備州之諸侍任ニ着到之旨、可レ有ニ在城  
之由嚴重之間、人々構ニ屋敷ヲ双ニ門戸ヲ不レシテ経レ日  
ヲ立ツ數千間之家ヲ。皆人所レ驚ニ耳目ヲ也。

右に挙げた例は『別所記』本文末尾の文章で、いかに両書が深く関わっているかがわかるであろう。もう一つ例を挙げよう。

『別所記』

又付城ヲ漸々ニ付寄セ、南ハ八幡山、西又被レ寄付城、南ハ幡山、西平田、北ハ長屋、東ハ八平田、北ハ長屋、東ハ大塚迄付寄玉フ大塚、

『征伐之事』

堀城ノ近<sup>サハ</sup>五六町、築地ノ高一丈余、上<sup>ニハ</sup>二重堀ニ入<sup>レ</sup>石ヲ、模鴈<sup>カリ</sup>、昇楯高結<sup>セ</sup>、重々<sup>ニ</sup>築<sup>レ</sup>柵、川ノ面ニ栖籠ヲ高ク上、前<sup>ニ</sup>逆茂木ヲ引、柵ヲ結、伏<sup>レ</sup>蛇<sup>一</sup>籠ヲ、打<sup>レ</sup>梁杭ヲ、擡<sup>レ</sup>捷<sup>ヲ</sup>、川ノ面ニ大綱ヲ張り、乱杭ヲ打大ヲ入、

橋ノ上ニ番ヲ居、人ノ通ヲ改メ、後ニハ諸国ノ軍勢陣屋ヲ作り並、辻々ニ木戸ヲ立<sup>レ</sup>箒ヲ焼カセ、夜廻無隙マワリケリ。秀吉近習ノ侍ヲ六番二分テ、三百人宛役所ニ名字ヲ書付、組頭ニ判形ヲサセ、少モ無懈怠可相勤ト定メ、城中可為食攻ト云々。

橋ノ上ニ居<sup>レ</sup>番、巴卷<sup>ウズ</sup>水ノ底<sup>マデ</sup>モ用<sup>ニ</sup>心人ノ之通<sup>ラ</sup>。裡<sup>ウラニハ</sup>大名小名為<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>宿作<sup>ノ</sup>陣屋、通<sup>レ</sup>小<sup>一</sup>路ヲ、辻々ニ切<sup>レ</sup>門、不<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>昼夜<sup>ニ</sup>撰<sup>レ</sup>テ人ヲ通<sup>シ</sup>ケリ。成<sup>ニ</sup>ナレバ暗夜<sup>ニ</sup>町々<sup>ノ</sup>篝火灯明<sup>ハ</sup>唯如<sup>ニ</sup>白昼<sup>ノ</sup>。秀吉近習之人々分<sup>レ</sup>六<sup>一</sup>時<sup>ニ</sup>三十人、番屋々々書<sup>ニ</sup>付名字<sup>ヲ</sup>付城主人<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>居<sup>ニ</sup>判形<sup>ヲ</sup>廻<sup>サ</sup>レタリ。若<sup>シ</sup>油断<sup>ノ</sup>輩<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>上下<sup>ニ</sup>成敗<sup>シ</sup>、重者<sup>ヲ</sup>バ懸<sup>レ</sup>磔<sup>ニ</sup>、輕者<sup>ヲ</sup>バ誅殺<sup>ス</sup>。

このように、『別所記』は特に秀吉軍の動静について『征伐之事』に依拠するところが多い。『別所記』の作者来野弥一右衛門は別所方の武士であるから、当然のことであるが、別所方の情報は得やすく秀吉方の情報は得にくい。『別所記』は『征伐之事』を骨格とし、主に別所方の描写を作者自身が体験したことや聞書を基に肉付けして成立した作品である。

さて、『征伐之事』は巻末に「于時 天正八歳正月晦日 大村由己誌之」とあることから、三木合戦直後（三木城落城は天正八年正月十七日）に書き上げられたようである。秀吉の自己宣伝のために書かれたこの書の性格からいって合戦後すぐに書かれたとみて間違いないだろう。作者の大村由己は秀吉のお咄衆であり、物語僧の流れを汲む軍記読みであった。『柴田退治記』（『天正記』の一本）の伝本の中には、「播州三木住大村由己撰」の奥書を持つものがあり、また同じく『天正記』のうちの前田家蔵本『小田原御陣』にも「此の小田原御陣之一巻、播州三木之住人藻虫斎由己、聚楽御城において、太閤様の上意を蒙り、これを作るものなり」とあるところから、由己は三木の人であったらしい。三木には「大村」という地名が現在でも残っており、三木合戦の折にも「大村合戦」と呼ばれる激しい合戦があった所である。彼は故郷に起こった合戦を描いた『征伐之事』で『天正記』の第一巻を飾ったのである。

『顯如上人貝塚御座所日記』天正十三年七月十日条によると、由己は自作の軍記三番を教如の所望によつて読み、その一番は「別所小三郎兄弟腹切諸卒を助ける事」であったという。また『言経卿記』天正十七年九月一日条には、由己が興正寺門跡の前で『天正記』三冊を読んだとある。『言経卿記』には、他に本願寺の幽庵という人物などが『天正記』を借りたとの記述も見える。これらの諸記録から判断すると、『天正記』は、耳からの享受とともに、熟読書写されて流布していったと思われる。地元の合戦を描いた軍記、また由己が三木出身という縁から、『征伐之事』は三木やその周辺にも広く流布していったことであろう。

『別所記』奥書に拠ると、作者来野は平山合戦で受けた傷のため歩行叶わず、三木城落城後は「作州側山家」に引き籠っていたという。この来野が『征伐之事』を手に入れ、或いは語られるのを何度も聞き、自分が得た情報を上書きして、「合戦の次第討死武勇ノ跡モ後世二八名ヲダニ知人アルマジキヲ歎カシクテ如此綴留」め、成立したのが『別所記』である。

『征伐之事』と『別所記』は、同じ合戦を全く別の立場から描いた作品をして対峙されるが、



このように見てみると『別所記』も『征伐之事』が受容され成立したものと位置づけることができる。

(五)

次節で取り上げると、『別所記』が各地に広く流布していき、それぞれの思惑をもって加筆されていったのと同様に、『征伐之事』にも手が加えられ、新たな命を吹き込まれていった。『別所記事』のように、別所氏菩提寺法界寺縁起という役目を担わされたもの。『赤松末葉記』のように特定の一族の記録を書き加えたもの。『別所記』のように三木方兵士の活躍に彩られたもの。

秀吉の広報活動の一環として書かれた『征伐之事』に、敵対した別所氏ゆかりの者が筆を加え、別所方の記録として生まれ変わった『別所記事』や『別所記』を読むと、三木合戦が与えた影響の大きさと深さに驚かされる。敵方の記録さえも取り込む三木の人々のしたたかさは、飢える士卒のために自刃した別所氏に対する哀悼の念から来るもののだろうか。著者の大村由己でさえ秀吉のために書いた『征伐之事』が、敵方や特定の一族の記録として書き替えられるとは、予想できなかったはずである。

注① 甫庵『信長記』の引用は、神郡周校注『信長記 上・下』（一九八一年 現代思潮社）による。

② 『信長公記』の引用は、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』（一九九二年第七版 角川書店）による。

- ③ 国立公文書館内閣文庫蔵『播州御征伐之事』に適宜句読点等を施し引用した。
- ④ 卜部家蔵『三木軍記』は、一一八九年に茨木一成氏によつて翻刻され、『卜部家蔵三木軍記』に収められている。
- ⑤ 青木晃・加美宏・藤川宗暢・松林靖明編『畿内戦国軍記集』（一九八九年 和泉書院）『別所記事』解題。
- ⑥ 『別所記事』の引用は、注⑤所収の内閣文庫本による。
- ⑦ 松村義臣「教海寺縁起覚書」（『みなぎの通信』四 一九六三年）による。
- ⑧ 『武功夜話』巻八「前野長康の事」による。
- ⑨ 吉田蒼生雄訳注『武功夜話』（一九八七年 新人物往来社）の「はしがき」による。
- ⑩ 『大日本古文書 家わけ第二 浅野家文書』十「豊臣秀吉披露状写」による。
- ⑪ 東京大学付属図書館蔵『別所家盛衰記』に適宜句読点等を施し引用した。
- ⑫ 以下、大村由己や『天正記』の享受については、桑田忠親著『太閤記の研究』（一九六五年 徳間書店）によるところが大きい。

## 第二節 『別所記』の変容

(一)

三木合戦を別所氏側の立場から描いた『別所記』<sup>①</sup>には次のような跋文があり、その成立事情を知ることができる。

此日記別所譜代ノ士、来野弥一右衛門為軍使、平山二ノ目ノ合戦半二行、敵味方入乱ル。直ニ敵陣へ駆入、一人切伏首ヲ得ル。残ル敵六七人ニ被取籠、三ヶ所手負既ニ討死スベキヲ中村茗之助ト云者助来リ、長刀ヲ以テ敵二人切伏、残ル敵ヲ追払、傍輩ニ被助歸候ヘドモ、深手ニテ平愈ノ後歩行不叶。其後軍場工不出。三木落城ノ後、作州側山家ニ知人ノ許ニ有テ存命也。合戦ノ討死武勇ノ跡モ後世ニハ名ヲダニ知人有マジキヲ嘆カハシクテ、如此綴リトムルモノ也。心有ン人ハ此日記ヲシルベニ文章ニモノセ置玉ヘカシ。

これによれば、別所方の武士であつた来野弥一右衛門が負傷しながらも生き残り、作州の側山家に身を寄せ記したのが、『別所記』であるという。『別所記』の伝本は、日本各地に三十冊以上を数えることができる。「心有ン人ハ此日記ヲシルベニ文章ニモノセ置玉ヘカシ」と来野が願つたように、『別所記』は広く流布していったのである。地元三木周辺にも多くの『別所記』が伝わっている。現在でも三木城主別所長治の命日にあたる二月十七日、法界寺に別所氏ゆかりの人々が集い、長治を始め三木合戦で死んだ人たちの霊を慰め、絵解きを行うことから、三木の人々の三木合戦に対する並々ならぬ熱い思いを感じ取ることができよう。地元

に残る『別所記』は、別所氏へ深い哀悼の念を寄せる三木周辺の人々によつて書き継がれ広まつていつたため、強い思い入れや地元でしか知り得ないような情報を取り込み加筆されていつたと思われる。

一例を挙げると、「長治、友之自害」という章段の中で、長治を指して、「別所小三郎源朝臣長治」と呼んだり、神吉城城主神吉定範が一族の神吉藤太夫の裏切りによつて討たれたことについて、「無情討タリシハ、前代未聞ノ事トモ也」と評したりするのは、東京大学付属図書館蔵『別所家盛衰記』や内閣文庫蔵『別所長治記』など早くに地元から流出した伝本には見えず、地元に残る伝本にしか見えない「在郷性」を帯びた表現である。このような表現は、地元から外に出たからといってすぐに消失するようなものではないから、ない形、つまり、三木周辺以外の地に残る伝本の方に、かえつて古態性が認められるのである。

この「在郷性」に注目すると、『別所記』伝本は、

- 一 第一類 比較的在郷性が認められる本
- 二 第二類 在郷性が認められない本
- 三 第三類 増補の著しい本

の三種に分類できる。第一類には、三木市立図書館蔵本や加古川総合文化センター図書館蔵本、ト部家蔵本など、主に三木周辺の地に残る伝本があてはまる。第二類には、先に挙げた東京大学付属図書館蔵本、内閣文庫蔵本の他に、島原市教育委員会松平文庫蔵本、神宮文庫蔵本、加賀市立図書館聖藩文庫蔵本などが入る。第三類は『別所記』を大幅に改訂した増補系と言うべき伝本であり、岩崎家蔵『別所記』、今村家蔵『別所在城伝記略書』、三木市立図書館蔵『播州太平記』、神戸大学人間科学系図書室蔵『別所記』、法界寺蔵『別所軍記』がこれに属する。

本節では『別所記』から派生した第三類に分類できる作品から、岩崎家蔵『別所記』（以下、岩崎本と略す）、神戸大学人間科学系図書室蔵『別所記』（以下、神大本と略す）、法界寺蔵『別所軍記』（以下、法界寺本と略す）の三種を選び、『別所記』がどのような変容を遂げていったのかを追いかけていく。

(二)

一 岩崎本『別所記』

岩崎本は兵庫県加西市北条の岩崎家所蔵本で、上下二巻から成る。「享和二年戊五月吉日写之 山下千歳 重僖（花押）」の奥書を有する。同系統の写本に、三木市立図書館蔵『播州太平記』、兵庫県西脇市今村家蔵『別所在城伝記略書』がある。『播州太平記』には、卷三に「繪本太閤記に野口の老番衆は加藤左馬助と有」と割注があることから、「もしこれが原作のままであつて、後の書き入れでなければ、本書は、少なくとも『繪本太閤記』の成つた寛政以後（一七八九）、恐らくは文化・文政頃（一八〇四〜二九）に著されたといふことになる」と『図説三木戦記』<sup>②</sup>では推測している。『播州太平記』と岩崎本は極めて近い本文を持つが、『播州太平記』は「評に曰」として岩崎本にはない様々な逸話を紹介しているため、岩崎本の方が先出本であると考えられる。今村家蔵『別所在城伝記略書』は、藤田素淳が高砂において文化四年（一八〇七）に書写したものを今村氏の祖先で医師だった今村正興が取得したものだと思ふより確認できる。「略書」という題名の示すとおり、『播州太平記』に近い本文を持つ本から一部分を順不同に抜き出し写したものである。

岩崎本では羽柴秀吉に関する増補が賞賛を伴って多く見られることから、中前正志氏は「岩崎本は、別所家特には長治の没落物語を中心としつつも、その上に、秀吉一代の出世物語を重

ね合わせているのである」とし、「岩崎本や『播州太平記』は、没落と繁栄という正反対の方向に向かいながら、共に地元三木のために尽力した、長治と秀吉という二人の英雄の交錯する場として、三木合戦を描いている」とされている。

岩崎本は『別所記』を読み物風に増補したものであるが、内容をアレンジするにあたって『平家物語』、特に江戸時代最も流布していた『源平盛衰記』を参考にした箇所が数カ所見られる。『別所記』においても、淡河合戦で三木方の淡河弾正が牝馬を五六匹集め敵陣の中へ駆け入らせ、牝馬に驚きはね狂う馬から振り落とされた秀吉勢が敗北する話は、俱利伽羅峠の「火牛の計」を思い出させるし、平井合戦で三木城へ引き上げる勢の中から取って返し、十七歳で討死をする長治の弟小八郎治定は、敦盛像と重なるなど、『平家物語』を感じさせる記事を持つ。それが岩崎本においては、更にはつきりと『平家物語』の影響が感じられるのである。以下、注目する箇所を紹介する。

(例文一)

長治の叔父、別所山城守賀相（吉親）の妻は武勇に秀でた女性であつた。「三木城後詰附吉親妻女之事」では、

山城守の内室は長井が陣に居られしが、鉄漿黒カネツクロにうす化粧シヤウして、たけと等ヒトしき黒髪クロカミを打すべらかし、紅の鉢巻クチバイロし朽葉色クチハヤシロの下着に小桜を黄キに返したる鎧ヤロイを着て、白シロ芦毛アシゲの馬に鏡鞍カウミツザラを置ゆらりと打乗ウチノリ、式尺七寸の太刀を以て敵の中へ一文字にかけ入、やにわに七八人切伏キレフシければ、元より騒サハギ立タテたる敵なれば、是に恐れて近寄チカ者なし。猶敗軍ナラハイグンの敵を蹄ヒジメにかけ蹴ケちらかし、三木勢の中へかけ入れしかば、大将始め皆々大オホに感じける。

と活躍し、また賀相が守る新城に秀吉勢が押し寄せた際にも、夫の賀相は本丸に居るのに彼女は一人で大男と渡り合い、首をかき切るなど大層勇ましい。彼女の勇姿は『別所記』には全く描かれておらず、岩崎本の彼女の姿は巴御前を彷彿させるものである。

(例文二)

別所方についた高砂城主梶原景行は、天正六年十月十八日、高砂での合戦で「時ならね共、紅梅の作花を一枝後にさし、真先に進み」(「毛利家後詰」梶原景行退高砂事并重植相生松「事」とあり、景行が例の梶原景時の子孫であることから、梶原源太景季の生田の森における籠の梅を明らかに真似ている。

なお、籠の梅の話は『平家物語』読み本系の諸本に見えるが、梅とする本と桜とする本とがある。「梅」とするのは『源平盛衰記』・長門本などであるが、どの本も梅の色までは記さない。岩崎本がなぜ「紅梅」にしたのかは不明である。

(例文三)

『平家物語』橋合戦からの引用もある。上巻「神吉軍之事」梶原道庵武勇之事」中の道庵の活躍ぶりは『別所記』にも描かれる。この部分、岩崎本と『別所記』を比較してみる。

『別所記』

岩崎本

掛ル処ニ二丸ノ引橋ノ板ヲハネハツシ、二の丸の橋板を刎はづし、行柝ばかり残りたる  
行柝計残シタル橋詰ニ、六尺余ノ男、昔橋詰に、六尺有余の大法師、黒皮威の鎧に星白  
甲猪頭ニ着黒皮威ノ腹巻ニ三尺余ノの兜を坊主天窓にむずと着し、三尺計の大長刀、  
大長刀ヲ提ゲ、高声ニ名乗ケルハ、「鎌弓張月の光る如く水車にまはし、大音上、「桓武

倉ノ権五郎景政ガ末葉、梶原十右衛門入道道庵ト云者也。三木ノ城ヨリ一騎当千ニ被撰加勢ニ来ル。近国ノ者共ハ某ガ手ナミハ知ツレドモ、東国武士ハ今日初テノ見参ナリ。寄テ手ナミノ程ヲ見ヨ」トテ、橋ノ行桁ヲ走渡ル。東国勢目ニ掛、我打取ント五六騎道庵ニ打カ、ル。道庵カラ々々ト打笑テ、「ヤサシキ人々也。イデ物見セン」ト、長刀ノ石突取延、八方不透切廻リ、敵三人堀ノ中へ切ハメ一騎ニハ深手負セケル。残一騎ト引組デ首カキ落シ左ノ手ニ提テ、橋ノ行桁閑ニ渡リ本ノ陣ニ歸リ、暫ク息ヲゾ続ニケル。味方はヲ見テ誉ヌ人ハナシ。其後梶原ガ跡ニツマキ、三木ノ加勢ノ内、小寺主馬助、柏原治部右衛門、中村壱岐守、長谷川権太夫、藤田藤次ハ道庵ガ渡リタルヲ手本トシテ、敵味方行桁ヲ走り渡々々戦ヒケル。或ハ討死スルヲアリ。或引組デ堀底エ落ルモアリ。

天皇の後胤鎌倉の権五郎景政が末葉に梶原十右衛門入道道庵とて、一騎当千に撰れ、三木の城より加勢として来る者也。いで東国の人々に手並の程を見すべし」と、件の長刀を打振ながら、

橋の行桁を飛蝶の如く走り渡るを東国勢五六騎、やにわに打てかゝる所を入道からくと打笑ひ、「やさしき汝等、目に物見せん」と、長刀の石突取のべ、透さず敵三人まで堀の中へ刃込み、一騎は手負て逃行にぞ。今一騎とむざと組、馬より引落し押伏て首かき切、たぶさを引さげ元の行桁の上へ立帰り、悠々と衝立ながら暫く息を継居たり。

同じく三木より加勢に來、柏原治部左衛門、長谷川権太夫、小寺主馬助、中村壱岐四人、道庵が渡りしを手本にして行桁を走り渡り、爰を大事と戦ひけり。寄手は梶原入道を目がけ、堀の中へ射落さんと一同に射かくる矢は、雨よりもしげかりしを入道少も騒がず、橋桁を彼方へ飛越、此方へうつり、件の長刀にて薙払ふ勢は、古の筒井の

淨妙、一來法師、矢切但馬も斯やらん。余の面



—白さに敵も味方も軍をやめ、暫く見物いたしける。

実録的な『別所記』に対して、岩崎本は、「橋合戦」で活躍した「筒井の淨妙・一来法師・矢切の但馬」に道庵をたとえ、合戦描写も物語風にもむしろ書き直していることがわかる。岩崎本には、別所氏に味方し滅亡した播州の氏族の末路や子孫の行方を出来るだけ詳しく伝えようとする姿勢がうかがえる。また、姫路関係の増補が目立ち、岩崎本の作者が播州や特に姫路にゆかりのある人物であつたらしいことが推測できる。岩崎本の大尾には、

扱是より益々秀吉公の猛威盛んにして、東は奥州、西は薩摩、南は四国、北は越前越後六十余州切なびけ、猶外国大明をおびやかし、朝鮮を征伐して、終には関白大政大臣に経上り玉ふ。豊国神の豊秋津洲、統いて東照神君の恵みに潤ふ大日本、動かすゆるがぬ男山に、契りは深き姫路の御城府賑ひわたる幾万年、おさまる国こそ目出度けれ。

と、秀吉賛美の言葉と徳川家康の恵みを説いている。「男山」とは、八幡神社をまつる姫路の男山をさしており、「おさまる国」の国とは播磨の国である。小寺祐隆の勧めで秀吉が姫路城へ移る話が『別所記』にはなく、岩崎本に至つてから増補された事などと合わせて、岩崎本が姫路にかなりこだわっているのが認められる。中前正志氏はこのような本書の性格について、岩崎本は三木に留まらず、より広く播磨一国へと拡大していく視野をもっている、と述べられた。この岩崎本に見られる播磨一国へと拡大していく視野は、本書の赤松色の濃さと無縁ではないだろう。岩崎本は、別所氏が赤松氏の末流であることを『別所記』以上に強く意識している。例えば、長治の協力を期待して毛利氏攻略のため播州に下向した秀吉に、別所賀相、三宅治忠が会見した折、岩崎本では『別所記』には出てこない「赤松家の系図」を持ち出し二人が

長軍議に及んだので、退屈した秀吉が無礼な態度をとり別所氏と秀吉が決裂するきつかけとなつたとする。また、「三宅肥前守最期之事」の中では、「誠に別所一党、赤松家の最期いづれも潔くせしかなと感ぜぬ人こそなかりけり」と、別所氏の滅亡を赤松氏の最期と捉える文章を添えている。岩崎本に近い本文を持つが、後出本だと考えられる『播州太平記』になると、強い赤松色は、やや薄れていく傾向がある。

江戸時代に流行した太閤人気に影響を受け、「あの秀吉と戦つた三木合戦」という意識が岩崎本には垣間見られる。岩崎本は、三木方の武将の武勇談を『源平盛衰記』を用いてアレンジし、彼等の活躍を華々しく飾り、『別所記』を江戸時代の播磨の人々にうける読み物に改訂した作品である。

(三)

二 神戸大学人間科学系図書室蔵『別所記』

神大本も岩崎本同様、『別所記』に筆を加えて成立した作品である。ただし、神大本と岩崎本・『播州太平記』との関連は認められないので、岩崎本等とは全く別個に『別所記』から派生した本と考えられる。

神大本について、かつて石田善人氏は冒頭部分を『別所記』(ことわっていないが、おそらく群書類従本『別所長治記』であろう)と比較した結果、

文脈の展開は彼此すべて同巧異曲と言って良いが、文体はかなりの相違があり、ことに後半部分は『別所記』(神大本)のみの記述になっている。『別所記』は『別所長治記』の広本であるようにも受取られるが、後者を前提にして前者の広本が作られたとは必ずしも

言えず、むしろ『別所記』の方が古態を存しているように思われるふしもある。『別所長治記』をはじめ『信長公記』『増補筒井家記』『陰徳太平記』『播州太平記』などの諸書には長治・友之らの辞世の歌を載せている。歌詞は諸書によつて小異があり、さらに、長治の妻・友之の妻などの辞世までも載せている。しかしこの辞世はいかにもわざとらしく、歌そのものに疑問なしとしない。辞世の歌のない方が古態かと考えられる。しかし、『別所記』に載せる長治から浅野弥兵衛に宛てた書状、秀吉から長治に宛てた返書は文章は怪しく、『別所長治記』に載せるものの方が当時の書状としては素直であると思われるから、必ずしも『別所記』の方が良本だとも言い切れない。

とし、神大本古態本説を唱えられた。石田氏が疑問視され、神大本古態本説の根拠とされた長治等の辞世の歌については、『別所記』が依拠した『播州御征伐之事』にも見えることから、偽作であるとは言えず、また、たとえ偽作であつたとしても疑問を持つた後世の人が意図的に削除したともとれる。

より詳しく三木合戦を描こうとする神大本の姿勢を素直にとつて、神大本は『別所記』を増補・改訂した後出本であるとするのが無難かと思われる。中前氏も、『別所記』にはない神大本の記事は、林羅山の『豊臣秀吉譜』に見えるものであり、神大本は『豊臣秀吉譜』と同系統の秀吉方の本文を参看し、主にそれによつて増補を行つた、後発のものであるとなさつてゐる。

神大本に至つて増補された記事の多くは、秀吉の行動や上月城攻防に関するものである。これらの記事のほとんどが、中前氏が指摘された『豊臣秀吉譜』や『豊鑑』、或いは『播州武名事实記』の中の『羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事』にも見える記事である。『豊鑑』は、秀吉の家臣竹中半兵衛重治の子、重門の著。竹中家伝来の作者自筆本の奥書により寛永八年（一六三一）の成立だとわかる。『播州武名事实記』は明和六年（一七六九）に成立、天川友親著。

播磨に關係のある武将・英傑の武勇に關する事柄を種々の戰記物、史伝などから抄録したもので、友親が編集した『播陽万宝智恵袋』に収められている。神大本の増補部分のほとんどが、江戸時代成立の色々な本に書かれ、広く親しまれた話であつたことが確認できる。

さて、神大本には武士のあり方を描こうとする姿勢が見受けられる。別所氏に味方した神吉民部の楯籠る神吉城をめぐる攻防戦は、神大本だけでなくすべての『別所記』諸伝本の中でも読み応えのある合戦場面の一つであろう。『平家物語』における橋合戦を念頭において書かれた梶原道庵の活躍の後、神大本では三木からの援兵が「美誉ヲ道庵ニセバ、三木ニ帰テ人ニモノ云フベキヤ。名ト命ト何レカ惜キ」と橋桁に立並んで戦う。しかし、三木勢の奮戦もむなしく城主神吉民部は、叔父藤太夫の裏切りによつてあえなく首を討たれてしまう。この藤太夫について神大本は、

其親ヲ云ヘバ甥也。其義ヲ云ヘバ君也。斬之テ命ヲ繼ント思ヘル藤大夫ガ所為城兵ハ論ズルニ不及。信忠、秀吉モ心中ニハ悪之ナガラ、敵ヲ来格セシメン為ナレバ、先是ヲ捨置ヌル。有志ノ士語ラバロヲ漱、聞ハ耳ヲ洗フベシ。

と、その不忠を非難する。「藤太夫ガ為ニハ甥ナリ。惣領ナリ。前代未聞ノコトナリ」とだけ記す『別所記』に比べれば、武士のあるまじき姿をさらした藤太夫をいかに神大本は憎んでいたのがわかる。

また、梶原道庵が幼い頃、親の敵を討つた手柄について神大本と『別所記』は次のように記している。

『別所記』

神大本

此道庵十三ノ歳、親ノ敵備前国ノ住人荻原与市トテ、大力ノ者ヲ組打ニ討取りシヨリ以来

度々ノ高名不知数、無双ノ勇士ト信忠卿モ感ゼラル。

抑此道庵ハ、幼弱ノ時備前国ノ住人荻原与一ト云モノニ其父ヲ殺レタリ。生年十三ニナリテ讎ヲ報ント思立ケルヲ其母、「荻原ハ聞ル勇力ノ士也。道庵ハイマダ童子也。仕損ズルコトモヤアラン」ト思ヒ、セメテ十六七歳ニナランヲマテト強テ止ケレドモ、「人ノ命ハ明日ヲ不可知。荻原モシ病テ死セバ悔トモ何ノ益力アラン」トテ、遂ニ斬之テ本意ヲ達シタリシヨリ以来、度々ノ功名指ヲ屈スルニ余レリ。

神大本は道庵の逸話の上に、武士道的賞賛をかぶせている。

あしかけ三年にわたる籠城の末、飢餓に苦しむ三木城内の兵や雑人たちを救うため、別所長治は弟彦之進友之、叔父山城守賀相の三人の命とひきかえに兵たちの命乞いを秀吉に申し入れる。しかし賀相はこれに賛せず全兵玉砕を主張し、一人櫓に上がったところを家人たちに殺されてしまう。この事件について神大本は、「賀相下ヲ愛スルノ道ナク其下賀相ニ事ルノ義ナシ。君臣両ナガラ虎狼ニ均シ。」と賀相主従を厳しく批判する。

一方、城内の兵たちの命とひきかえに若い命を犠牲にした別所長治の最期については、

「長治死ニ臨テ士卒ヲ慰ムコトヲ不忘、士卒生ヲ貪テ長治ニ報ルコトヲ知ザランヤ」ト云テ、或ハ敵ニ遇、或ハ自尽シテ心々ニ死スル者モ多カリケリ。

と、賀相主従とは対照的な姿を描く。『武功夜話』によると、長治の後を追ったのは彼等の介

錯をした三宅治忠のみらしく、他の家臣たちは悉く許され三木城を出ている。<sup>①</sup>たとえ事実とは違つていても、自分たちのために命を断つ主人に追い腹を切つて従う君臣の道に沿つた家臣たちを神大本は描きたかつたのだろう。

以上のように『別所記』にはない文章を書き足し、武士道に背いた者を手厳しく非難し、武士のあるべき姿を説く姿勢が神大本の所々に見られる。これは神大本が武士道の観念が定まつた時代、すなわち江戸時代に入つてからの成立であるという傍証にもなるだろう。

『別所記』系伝本の巻末には、先に紹介したように著者来野弥一右衛門の跋文がある。神大本の跋文は『別所記』とは違つた表現をしている。

右此記ヲ書者ハ別所小三郎長治ノ譜代来野弥一右衛門ト云士也。平山ノ役二度ノ迫合最中二軍使二行、両陣入乱タル時、敵ノ備二馳入一人ヲ斬伏テ首ヲ取処二、敵五六人二挟マレ三ヶ所ノ創ヲ被リテ既ニ撃死スベカリシヲ、我友中村塵之助ト云モノ走来テ以薙刀二人ヲ斬棄、残ル者ヲ追払危急ヲ救レタレドモ、重創ナレバ、平愈ノ後モ手足不具ニ成テ、鎗ヲ握馬ニ跨コトアタワズ。サレバ戦場ニ趣コトナシ。三木ノ城陥テ作州ノ片山里ニ旧識ノアレバ、其便ニ就テ廬ヲ結、世ヲ渡ル。別所家ノ驍将壮士其戦功武名モ知之者ナクシテ、膚骨トトモニ腐果ナンコトヲ惜テ、略茲ニ記シ畢ヌ。後ノ見ン人拙キ文ヲ削テ改正サレバ、是愚ガ素ヨリ所冀也。

この跋文をどう捉えるか問題の残る所であるが、神大本の「右此記ヲ書者ハ別所小三郎長治ノ譜代来野弥一右衛門ト云士也」という書き出しは、『別所記』に比べて他人ごとのような感、つまり来野自身が記したものでない、という印象をうけるがどうであろうか。

神大本は『別所記』の文章をより豊かな表現にしようとしたためか、難解な文章も多く、堅

苦しくなつてしまひ、同じように『別所記』から派生した大衆向けの岩崎本や『播州太平記』に比して文学性が低いのは否めない。神大本と同系統の伝本が現在見つかつていないのも、神大本が人々には読みづらい文章であつたため、広く流布することがなかつたからであろう。

(四)

三 法界寺蔵『別所軍記』

別所長治の菩提寺である三木市別所町東這田虚空山法界寺は、三本の『別所記』を所蔵する。そのうちの二本は多少の加筆は認められるものの、先に示した分類のうち、第一類「比較的在郷性が認められる本」に属する伝本である。残りの一本がここでとりあげる『別所軍記』と称する三巻一冊の本である。

本書は、先にあげた岩崎本や神大本と同様『別所記』を大幅に増補したもので、他に同系統の伝本は見つかつていない。この本の特色は、岩崎本や神大本のように不特定多数の読み手を想定して書かれたものではなく、法界寺縁起を伝えるという明確な目的をもつて増補されたことである。

法界寺縁起を伝えるものとしては、前節でとりあげた『別所記事』と、『別所記』諸伝本中、ト部家蔵本、加古川総合文化センター図書館蔵本、徳田和夫氏所蔵本、残缺本『別所記』(三木市立図書館旧蔵。現在所在不明。三木市野田仁郎氏が複写本を所蔵するが、原本の欠損が甚だしく巻末の法界寺縁起も前半数行のみ判読可能)の四本がある。また、法界寺で長治の忌日に行われる三木合戦絵解きの台本も『別所記』に依拠して成つたもので、法界寺の縁起を伝えるが、本書の本文末尾に載せる法界寺縁起は独自のものである。加古川総合文化センター図書館蔵本記載の法界寺縁起と合わせて次に紹介する。

加古川総合文化センター図書館蔵『播州三木別所記』

夫以バ別所ノ家ハ遠ク天潢ノ余流ヨリ出テ、其後武臣ニ下テ名ヲ戰場ニ揚ゲリ、終ニ相統シテ加賀守就治、其子大蔵大輔安治、其子小三郎長治ニ至ル。此三代徳ヲ修、民ヲ受ス。民マタ親ムコト父母ノ如シ。是ニヨツテ天正六年ヨリ同八年マデ三年ノ間、百姓不殘一味同心シテ死ヲ守テ籠城ス。忠義凜々トシテ秋ノ霜ノ如シ。愛レ人感義心ヲ結ブニアラズンバ此ニ至ランヤ。サレドモ運尽スレバ得ズ勝利ヲ。身ヲ殺シテ士民ヲ助ク。哀哉、事ハ来野氏ノ記ニ詳也。既ニ右ノ如シ。天正八年正月十七日、長治切腹、十ヶ村ノ名主ノ内、横山三郎左衛門治重、神沢源左衛門治武、兩人悲悦ニ不堪、秀吉公ニ乞テ、長治等ノ一族ノ尸ヲ生木ト云所ニ葬リ、其地ニ一寺ヲ建テ同心ヲ報ジ菩提ヲ弔イ奉ル。虚害山法界寺ト号ス。毎年七月十七日、施餓鬼ヲ執行シ、年中念仏ヲ勤修ス。慶長六年ノ秋、池田輝政公播州ヲ領シ玉フ。一國不レ殘檢地ノ時、横山氏、神沢氏、寺領三十石ノ折紙ヲ申請、其後慶安元年八月十七日、大猷院殿源君御朱印ヲ被レ下、永代三十石施入レ給フ。誠ニ古ノ良將義士ヲ重シ給フ。御志難レ有御政道也。此時於ニ江戸ニ御評定、御僉議アリテ、別所長治ハ播州半國ノ主ナレバ山号不レ可有トテ、生木法界寺ト御朱印ニ書レタリ。弥此地尽未來不ニ退転、長治ノ遺徳ヲ称ズベキニヤ。棠梨一樹ノ花児山隨淚碑ト云ベキカ。感慨ナキニアラズ。

法界寺藏『別所軍記』

扱亦法界寺ハ行基菩薩ノ開基シテ、代々繁昌ノ靈地也。殊堂舎棟並、数建物有。則別所家累祖代々ノ廟地ナレバ、或ハ高峯耕月大嶺性山居士等ノ忌日ハ有ニ廟参、寔累代々之守護殿ヨリ嚴重仏事執行有靈寺也。又知行既二百五十石余賜レ之。然ニ今天正ノ戦為秀吉、終長



治亡玉シ其時、法界寺回祿、因州將是定坊之為陣、而後及長治公ノ御首十一人ノ納骨ヨリ、  
殘將士卒殊ニ十二ヶ村之人民、長治公ノ菩薩、為レ弔勵志一字建、冢山上人開山シ從レ夫  
永世毎年正月十七日、於ニ法界寺ニ右人々之後世菩薩弔者也。

『別所軍記』の縁起は、本文中にある長治兄弟が家臣三宅治忠に言つた遺言、「扱其骨八何  
レ一所致、先祖ヨリ之御廟生木法界寺山葬ベシ」と合わせると、本書の目的が更に明確になる。  
この遺言は、加古川総合文化センター図書館蔵本などの法界寺縁起を載せる『別所記』や『別  
所記事』にも見えないものである。また、『別所軍記』は、長治の百回忌に東播十二ヶ村の人  
々によつて法界寺境内に建てられた石碑の文章を載せる。「東播八郡総兵別所府君墓表」とい  
う題名からもわかるように、大きな石碑に刻まれたその文章は、百年後の今に至るまで「太平  
無事」であるのは、「府君」―別所長治が「万衆之命」に代つて自殺したからだ、という別所  
氏への恩を強調した内容である。以上から『別所軍記』の成立圏は、法界寺と密接な関係を持  
つと考へて間違ひあるまい。

中前氏も、法界寺で行われる三木合戦絵解き台本との関係から、『別所軍記』の成立環境を  
法界寺内またはその周辺に求められる、と考へられた。氏は、絵解き台本のうち神戸市北区藤  
本卓氏所蔵の『三木合戦軍図縁起』をとりあげ、長治に助けられた士卒や百姓の子孫にあたる  
ような後世の民衆からの視点が『別所軍記』に共通すると指摘され、群書類従本以上に色濃い  
別所方寄りの立場と、殊更地元地域に向かう視線とを持つことになつたとしてゐる。

『別所記』以上に別所方に傾斜した『別所軍記』の姿勢は、同じように『別所記』を増補し  
て成つた神大本と比較すると、更に明らかである。神大本が『豊臣秀吉譜』などの資料に拠つ  
て秀吉関連の記事を多く取り込んでゐるのに対して、『別所軍記』は秀吉については興味を示  
さず、別所方に偏つた加筆を行っている。その一例として、大村合戦に負けた別所方の戦死者

の数を記す場面を、『別所記』、神大本、『別所軍記』で比べてみよう。

『別所記』

其日三木方ノ大将分  
七十三人、都合八百  
余人討死ス。痛手負  
ハ数不知。

此合戦ニ打負三木方  
弥氣ヲ失ヒ、重テ可  
戦便モナシ。

神大本

其日三木方二討ル、  
者、歴々ノ武士七十  
三人、軽卒共二八百  
余人也。創ヲ被テ死  
生ノ間ヲ不分者ハ算  
之二違アラズ。此戦  
ニ大負シテ三木方愈  
氣衰力賒テ、本意ヲ  
達セン便モナシ。

『別所軍記』

扱其日、三木方討死大将分七十三人、侍雑兵  
都合八百余人討死、其外痛手負者不<sub>三</sub>数知<sub>一</sub>。  
三木方又々此大事之合戦打負、城中大<sub>二</sub>失<sub>三</sub>勇  
氣<sub>一</sub>、殊更城ノ四方断切ラレ、中国勢或ハ諸方  
ヘノ通路及<sub>ニ</sub>難義<sub>一</sub>、次第兵粮乏成、士卒始<sub>メ</sub>皆  
安キ心無<sub>ク</sub>、明暮ナゲキカナシミ、唯軍儀之事  
捨、互身ノ上ノ事語り合計リ也。去レバ大将  
長治公始一家中、勇氣タユンデ見エタリケリ。  
嗚呼哀哉。会者定離ノ習、昨日迄勇ハヤル武  
士ノ今日ノ合戦討死、修羅ノ闘場之奴ナリ、  
戦場骸晒、鳶鷹之エジキトナリヌ。誠九月十  
日ノ事ナレバ、秋風荒吹テ物哀虫ノ鳴音イヤ  
マシテ、別所家歎北ノ方ハイトゞ猶、「此行未  
如何ナラン。譬イ此身劔下臥テモ、稚子ノ存  
命如何」トゾ、神ヤ仏祈誓有心ノ中社哀レ也。

神大本の内容は『別所記』を大幅に変えていないのに対し、『別所軍記』は、三木城内の兵たちの詳しい様子や長治の北の方の歎きを、「会者定離」という仏教用語や「秋風」「虫の鳴音」という自然描写を伴って書き加えている。

秀吉方の記録『播州御征伐之事』でさえ書き替えられて法界寺縁起を伝える『別所記事』が生み出されたのであるから、別所方の立場から書かれた『別所記』が、別所氏の菩提寺である法界寺と結びつき『別所軍記』のような作品が作り出されるのは、当然の現象であろう。

(五)

『播州御征伐之事』から『別所記』、『別所記』から岩崎本、神大本、『別所軍記』へと、三木合戦を描く軍記の変遷の一部を前節から通して追ってみた。一地方の一つの合戦がこれほど数多くの軍記を生み出した理由は、どこにあるのだろうか。秀吉と戦ったということ、別所氏が多く軍記と関わってきた赤松氏の末流であったということ、足かけ三年にもわたる合戦であったということ、そして何よりも、長治らが飢える百姓や兵たちのために命を捧げたということ、これらのすべてが理由となろう。三木合戦関連軍記は、戦国軍記の誕生や変容、享受を考える上で、一つの指針となれる可能性を持つ作品群である。

注① 東京大学付属図書館蔵『別所家盛衰記』に適宜句読点等を施し引用した。

② 三木文庫編 一九六八年 三木産業株式会社

③ 「『別所長治記』の転身」(『女子大國文』百十五 一九九四年六月)

④ 同注③

⑤ 『三木市史』「各説編 三 三木戦記」(兵庫県三木市編 一九七〇年 三木市役所)

⑥ 同注③

⑦ 『武功夜話』卷八「別所一族辞世の事」

⑧ 「別所一族の絵解き 上、中、下」 (『花園大学国文学論究』十六〜十八 一九八八年十月〜一九九〇年十月)

### 第三節 別所重棟の虚像と実像

#### 一 『別所記』に見る赤松の誇り一

(一)

本章第一節で述べたとおり、『別所記』の作者が、三木合戦に参戦した別所氏譜代の家臣・来野弥一右衛門であるにもかかわらず、敵方の秀吉の自己宣伝のために書かれた『播州御征伐之事』(以下、『征伐之事』と略す。)を全面的に取り入れ、それに別所方武士たちの活躍を書き加えて『別所記』が成つたことは明らかである<sup>①</sup>。

#### 『別所記』<sup>②</sup>

翌十八日城中ノ者トモヲ出シ、悉ク助ラレ候。秀吉ハ三人ノ首京都へ上セ、信長

扱秀吉三人ノ首上ニ京都ニ備ニ御実檢ニ、

#### 『征伐之事』<sup>③</sup>

卿ノ実檢ニ備。播州ニテハ、ゴチヤク、志方、魚住、此等ノ城トモ同時ニ攻伏給

并御着、志、魚住之城敗北、但馬一国属レ一篇。此外西国四国之使札、日々到来之旨達ニ上聞ニ。

ヒ、其後信長卿ヨリ武勇ト云ヒ調略ト云ヒ、無比類トノ感状ヲ給フ。誠弓馬ノ面

云レ武勇云レ調略無北類之由、御感不浅。寔弓矢之面目不レ過レ之。

目何事力如之哉。依秀吉三木ノ城ニ移リ、地ヲ清メ堀ヲサラヘ、今度退散スル人民

仍秀吉移ニ三木城郭ニ、清メ地、疏レ堀、改レ家、引ニ直此先退散スル人民ニ、呼ニ出町人ニ、門前成レ市。

ヲ引モドシ、法度ヲ定。当国ノ儀ハ不及申、但州諸士着到ノ旨ニ任セ可在城ノ由

当国之大名不レ及レ云、但州備州之諸侍任ニ着到之旨、可レ有ニ在城之由嚴重之間、

相触。人々門戸ヲ並ベユ、シカリシ事共  
人々構ニ屋敷ニ双ニ門戸ニ、不レ経レ日立ニ数千間之  
家ニ。皆人所レ驚ニ耳目ニ也。

これは『別所記』と『征伐之事』の末尾部分である。秀吉への賛美とともに戦後の復興を遂げていく三木の町を書いているが、『別所記』はこれさえもそのまま取り入れ、秀吉を誉める言葉で末尾をしめくくっている。この他にも『別所記』が『征伐之事』をそっくりそのまま取り込んだ箇所は多くあり、『征伐之事』を全面的にとり入れた跡がよくわかるのであるが、唯一、例外的に、『別所記』が『征伐之事』とはまったく違った描き方をしている点がある。長治の叔父二人―賀相（吉親）と重棟についてである。

まず『征伐之事』と『別所記』の冒頭部分を比べてみよう。二つの作品の末尾部分が酷似しているのに対して、冒頭部分にはかなりの違いが見られる。

### 『征伐之事』冒頭部

抑播磨東八郡之守護別所小三郎長治、对ニ羽柴筑前守秀吉、尋ルニ矛楯之濫觴、天正六歳  
三月之初、秀吉承ニ將軍之御下知、西国為ニ征伐之備、下ニ向彼地ニ事、長治一味同心之故  
也。同月七日、秀吉至ニ于播州国衛ニ布陣。爰ニ有下謂ニ長治伯父別所山城守賀相俊人上。相  
ニ語長治曰、秀吉入ニ此地ニ有自由之働。殊終ニ可上テ及レ身、逆ニシテ戈從ニ中途ニ歸、楯ニ籠於  
三木城郭ニ。同名孫右衛門尉重棟、与秀吉為ニ久要。依レ之左右之半、其理雖レ覃ニ数十ケ度  
一、彼讒人賀相破レ事不レ用。

### 『別所記』冒頭部

別所小三郎長治八村上源氏具平親王二十六代ノ孫、赤松入道円心之末葉也。領播州東入

郡在三木城。得武將之譽、其門葉繁昌シテ風俗異于他。同姓ノ侍大將山城守吉親、舎弟之孫右衛門尉重棟兩人執權政道明也。永祿年中三好修理大夫企惡叛奉討大樹義輝卿。御舎弟義昭公從南都牢々シテ往濃州岐阜頼織田信長。追討三好一族刻、別所ガ館工可為合力ノ由被成御教書。故一家会合シテ孫右衛門ヲ撰出シ、軍勢以三百人令上洛、京白河ノ戰二畿内無陰、尽粉骨追扨敵。依之三好ガ殘党敗北シテ義昭卿被遂御本意ノ後、一番二孫右衛門ヲ被召出、蒙御感。一家ノ名望也。依之修高大ニシテ不<sup>（不）</sup>一族ノ侍、剩舎兄山城守ヲモ侮ル故兄弟不和二成、吉親方、重棟方ト二派二成、背法者多シ。当家滅亡ノ端也。然バ今度秀吉ト度々ノ合戰二モ味方失利、一家右往左往ニナリシモ此故也。

『征伐之事』は「佞人賀相」が信長に同意していた長治をそそのかしたことを別所氏滅亡の原因としているのに対して、『別所記』は三好氏追討に功績のあつた重棟の奢りによる兄弟仲の悪さに原因を求めている。このように賀相と重棟の描き方は、そのまま別所氏滅亡の原因のとらえ方につながる問題であるといえる。

長治の二人の叔父、特に別所一族の中でただ一人秀吉方についた重棟の虚像と実像を追いながら、『別所記』が『征伐之事』とは違つたところに別所氏滅亡の原因を求めたわけを探っていきたい。

(二)

一旦は信長の傘下に入りながら、何故、別所長治は秀吉を裏切つたのか、その理由について『別所記』は次のように書いてある。別所氏の協力を期待した織田信長は、毛利氏攻略のため秀吉を播州へ出兵させる。そこへ、別所山城守賀相と三宅治忠が、軍評定のため秀吉と面会す

る。「不日ニ擒敵スル謀計モヤアル」との秀吉の問いに、治忠は別所家に代々伝わる兵法を延々語る。現実には意味を成さない長談義に退屈した秀吉は、「各ハ先手ノ役ニテ候ヘバ、働等ノ事随分被入精候ヘ。得勝利下地(マ)ハ大将役ニ此方ヨリ差図可申」と「ニクテイ」に言つたとする。閉口して三木城に帰つた賀相が、

今度秀吉当国工下向シテ、近国他国ニ威ヲ振フ。別所ノ家臣ニ向ヒ遠慮モナク我意ヲ振舞ノミナラズ、剩我下人ノ如ニ挨拶シ、国人ニ首ヲ上サセヌ様ニスルコト心底ヲ察スルニ、信長ノ謀計ト存ズ。其子細ハ、近年東国ノ沙汰ヲ聞クニ、関東ニ有四大将。北條氏康、武田信玄、織田信長、上杉輝虎也。其内信長ノ武勇力タキハ表裏(マ)弟一也。表裏ニ善悪ノ二ツアリ。武士ノ敵ヲ計ル謀略ハ各別ノ事也。信長ハ偽ヲ専成シ給フニヨリ家風下々迄輕薄多シ。唯今思案スルニ、秀吉当国工下向ノ内談ハ、先長治ニ中国ノ先手ヲサセ、西国於靜謐ハ初ノ變約、往々長治ヲ退治シ播州ハ秀吉ニ可与行信長ノ心底如移鏡。敵ノ表裏ヲ知りナガラ謀ニ乘ランコト、武士タラン者似無思慮。此方ヨリ色ヲ立ン。

と一族を前にして言うと、長治は、「信長昨今ノ取立漸ク侍ノマネヲスル秀吉ヲ大将ニシテ、長治カレガ先ニテ軍セバ、天下ノ物笑タルベシ」とまで言い切つて秀吉に反旗を翻し、籠城の支度を始める。

『征伐之事』が先にあげたように長治の翻意を讒人賀相のせいと簡単にすましているのに対して、『別所記』は、かなり詳しく別所氏の内情を書いている。『別所記』の賀相が、信長は偽りを専にする武将であり、ゆくゆくは秀吉に播州を与えることは明確である、と述べているところは、『征伐之事』が佞人賀相が長治をそそのかしたところと呼応しているようでおもしろい。『別所記』は、『征伐之事』が賀相を「佞人」とした理由を説明しているかのよ



うである。

このあたりを読むと、別所氏がいかに赤松氏の流れを汲む血筋に誇りを持っていたかがわかるであろう。それは、『別所記』が「別所小三郎長治ハ村上源氏具平親王二十六代ノ孫、赤松入道円心之末葉也」という文章で始まることや、「敵引取バ付慕ヒ、敵返サバ城ニ引籠」戦法が、「当家ノ累祖赤松円心苔繩ノ城ヨリ打出、右ノ手立ヲシテ敵ヲ攻亡シ、上武名ニ末代被賞。元弘ノ吉例ニ候カシ」との別所甚太夫の意見によつて取り入れられたことを見ても明らかである。秀吉との対立の始まりを三宅治忠の兵法論議とした理由は、松林靖明氏のご指摘にもあるように、赤松氏の末裔を以て任ずる別所氏にとつて、南北朝以来の兵法の家としての面目を、成り上がり者の秀吉如きに侮辱されたのは許し難いことであり、播磨にあつて赤松氏を知る者にとつては納得しやすいことだからであろう。「信長昨今ノ取立漸ク侍ノマネヲスル秀吉」の指図で動くことを、赤松氏末流としてのプライドが許さないのである。『別所記』は、たとえ有能な武将であつたとしても、氏素性のわからない秀吉の風下に立つことを長治が拒んだ理由も十分に描ききつていると言える。

別所の逆心に慌てた秀吉は、重棟を呼び寄せ真意を尋ねた後、彼を通じて長治へ文を送り、長治を説き伏せようと試みるが失敗に終わる。重棟が『別所記』に登場するのは、この場面が最後である。史実の上では、この後も彼にはかなりの活躍が認められるのだが、何故か『別所記』は重棟についてはこれ以上触れてはいない。その理由を探る前に、三木合戦における重棟の足跡を史料に見てみよう。

別所重棟は、元亀元年（一五七〇）ごろから、長治を伴つて度々上洛して信長に謁見し、また、天正五年二月には、重棟と長治は信長の雑賀攻めに従つてゐる。別所氏が信長に組するに至つた契機を『武功夜話』<sup>⑤</sup>が伝えている。

播州別所氏は、元播州の地頭赤松円心の後胤、播州印南郡別所の郷より起る筋目の家なり。始め大蔵少輔安治、播州東三郡を領す、三木城に拠る嫡子小三郎なり。大蔵少輔安治の舎弟孫右衛門は、去る天正乙亥年信長公に一和の人。此度蜂須賀彦右衛門尉、伊丹の荒木摂津守仲人、三野庄の別所小三郎を論し信長公に同心候なり。別所賀相は孫右衛門尉の舎弟なり。播州飾西郡五着の城主小寺藤兵衛尉子なきゆえ、族の国衛庄姫路の城主小寺美濃守なる人、美作の岩屋城責口に討死名を宗円という。その子加賀守また討死、その後藤兵衛尉の家老小寺右近大夫なる者目代と相成り姫路の山城を守るところなり。そもそも此度五着城主小寺藤兵衛尉、信長公に一身同心の濫觴は、蜂須賀彦右衛門、荒木摂津守をして五着城主小寺藤兵衛尉政職を説得、この兩名の者、一和別所孫右衛門を引き入れ、別所在城の三野庄別所小三郎を論し候なり。（中略）先頃西国毛利輝元、信長公に御敵の色を立て、大坂石山本願寺の顕如上人に同心、五百有余艘の軍船をもつて難波木津口に乗り入れ、余勢をもつて播州を窺うところ、三木本城の別所族中の意見まちまち、すなわち孫右衛門尉兼てより信長公に同心の者に候も、伯父御の別所賀相なる人猜疑の念あり。本城の小三郎も仲々もつて決着仕らずのところ、彦右衛門尉、荒木摂津守並に小寺藤兵衛同座して説得候なり。此度の筑前様播州表へ出向に付き、右の旨相伝え質子を進上し同心候なり。

（巻六 織田信長公、別所長治、小寺政職と拝謁する事、黒田官兵衛孝高の事、播州表の事）

荒木村重と小寺政職がまず重棟を引き入れ、「猜疑の念」のある賀相の意見もあって、毛利・石山本願寺につくか、信長につくか、三木城内でも意見が分かれ迷っていた長治を、重棟が口説いて信長方につかせたらしい。天正五年（一五七七）十二月、重棟は、秀吉の口ききで、小寺政職の家人・黒田官兵衛孝高の嫡子松寿丸に娘を嫁がせている。重棟を味方に強く引き入れ、別所氏とのつながりを深めようとする秀吉の意図が読める。しかし長治は突然反旗を翻し、秀吉と対立する。

一連の三木合戦において、重棟の参戦が確認できるのは、野口合戦と高砂城攻めである。別所方に味方した長井四郎左衛門尉邦時が籠る野口城を攻める直前、重棟は野口城の南方、海辺近くに位置する阿閉の砦を守っていた。天正六年四月二日、この阿閉に毛利軍と雑賀の者が攻撃をしかけたので、秀吉は黒田官兵衛を派遣し、撃退した旨を伝える、信長から秀吉に宛てた書状が残っている。おそらく毛利水軍を警戒して阿閉を守っていたのであろう。その後、重棟は野口城攻めに参加した。合戦は激戦であつたらしく、重棟は負傷しながらも手柄をたてている。更に、『征伐之事』も『別所記』にも記されていないが、別所方の武将、梶原平三兵衛景行の守る高砂城攻めは、重棟が主になって攻め寄せている。このように史料の上では重棟の戦功がいくつか確かめられるのだが、重棟が最も活躍するのは三木落城のときである。『武功夜話』にはこのときの重棟の奔走が詳しく伝えられており、『征伐之事』も『別所記』も書かなかつた重棟の素顔を垣間見ることが出来る。属城をすべて落とされ、孤城となつた三木城は、糧道を絶たれ、極度の飢餓状態に陥っていた。立て籠る兵たちは刀を持つ力も尽き、誰の目にも秀吉軍が攻め入れれば、手間もなく落城するのは明らかであつた。

三木取詰め模様、前野将右衛門尉、浅野弥兵衛尉、蜂須賀彦右衛門尉御三将二の丸まで

押し入り、御門前に陣取り候由に候。別所類縁の者孫右衛門切々に嘆願候。城中の士卒の命何とぞ御助けあるべく行申し語り候。御三将御聞き入れなされ候。

(『武功夜話』第八「播州三木別所一党の者、一歳有半の籠城の末、落去の顛末の事」)

続いて重棟は、「兄賀相は自分を不忠者だといった、黒田官兵衛の息子に自分の娘を嫁がせたが、これは長治も納得ずみのことだったのに、賀相一人は了承しなかった」と言つたと『武功夜話』は伝えている。「斯くなる上は是非無き事に候、先年荒木が見せしめもこれあり、家来ども不憫と思ひ候えば、武門の面目を相立て心置きなく切腹候え」と、長治の家来の小森与左衛門を呼び出して、重棟は長治に切腹と開城を促したという。

羽柴与力別所孫右衛門、城中より小森与三左衛門と申す者を呼び出し、小三郎・山城・彦進三人の方へ状を遣はし、摂州の荒木・丹波の波多野果て候ごとくに候ては、末世の嘲哂口惜敷候。尋常に腹を切り然るべきの由申遣はし候処、両三人腹を切るべく候間、其外諸卒相助けられ候様にと、小森を使にて懇望の歎を申送る。

(『信長公記』卷十三 天正八年正月十五日条)

『武功夜話』と『信長公記』、どちらの史料にも、落城を目前にして城内に籠る人々を助けるために尽力した重棟の姿を伝えていて興味ぶかい。

ところが、『征伐之事』と『別所記』は、このあたりの様子を次のように書いている。

『征伐之事』

同(天正八年正月)十一日白昼、南構着レ人数、放<sub>レ</sub>火山下<sub>ニ</sub>、秀吉、秀長懸<sub>ニ</sub>入鷹尾并山城<sub>ガ</sub>

構<sup>ニ</sup>。討<sup>ニ</sup>果敵數輩<sup>ヲ</sup>、即居<sup>レ</sup>陣<sup>ヲ</sup>、爰詮<sup>セ</sup>度<sup>ド</sup>戰、敵之士卒取<sup>ニ</sup>籠詰丸<sup>ヲ</sup>。今無<sup>ニ</sup>頼所<sup>ニ</sup>、唯相<sup>ニ</sup>待落居<sup>ニ</sup>之時<sup>ト</sup>刻<sup>ヲ</sup>由嘆息<sup>ス</sup>。長治見<sup>レ</sup>之、同十五日來<sup>ニ</sup>使者<sup>ヲ</sup>而出<sup>ス</sup>懇望<sup>ニ</sup>之狀<sup>ヲ</sup>。其辭曰、

唯今申入意趣者、去々歲以來被<sup>レ</sup>附<sup>ニ</sup>置敵對<sup>ニ</sup>之條、連々其理可<sup>ニ</sup>申分<sup>ニ</sup>心底<sup>ニ</sup>之處<sup>ニ</sup>、不慮<sup>ニ</sup>内輪<sup>ニ</sup>之面々替<sup>ニ</sup>覺悟<sup>ヲ</sup>之間、不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>是非<sup>ニ</sup>。某等兩三人事、來十七日申ノ刻、可<sup>レ</sup>切腹<sup>ヲ</sup>相定<sup>ス</sup>畢。然<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>于今相屈<sup>ル</sup>諸卒、悉可<sup>レ</sup>討果事不便<sup>ニ</sup>之題目也。以<sup>ニ</sup>御憐愍<sup>ヲ</sup>於<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>扶置者<sup>ヲ</sup>可畏入者也。仍此等之趣無相違樣仰御披露。恐々謹言。

正月十五日

別所彦進友之

別所山城守賀相

別所小三郎長治

淺野弥兵衛尉殿

別所孫右衛門尉殿

『別所記』

則彦之進畏テ状ヲ調、近習ノ土宇野右衛門佐二持セ、淺野弥兵衛方工遣ス。淺野状ヲ請取使者ヲ具シテ、秀吉ノ前二踞テ一封ノ書簡ヲ捧グ。披テ見之レバ、

唯今申入趣意ハ、去々年以來敵對ノ事雖非無其故、今更不能述素意。併時節到來運既極。又何嘯臍哉。長治、山城守、彦之進兩三人事、來十七日申刻ニ可切腹相定訖。殘士卒雜人以下無科而可被刎首之段、不礼之題目也。以憐愍於被助置者、今生之悦來世之樂何事歟如之哉。此旨宜被披露者也。

天正八年正月八日

別所小三郎長治

淺野弥兵衛殿

重棟が秀吉方の武將に懇願して、城内の者たちの命を助けるため長治に切腹を促したとする『武功夜話』や『信長公記』が伝える落城の有様とは違って、『征伐之事』と『別所記』は、長治の側から使者を送って切腹と士卒の助命を申し入れた形になっている。『征伐之事』では、重棟は浅野弥兵衛とともに書状の宛名に名を連ねるだけである。『別所記』になると、宛名は浅野弥兵衛のみで、重棟は名前さえも消されてしまう。身を呈して城内の飢える者たちを助けたのは、もちろん長治であるが、それを許してくれるよう嘆願したのは重棟であり、重棟がいなければ、荒木村重の一族の如く、皆殺しの惨劇が三木城でも有り得たということ『別所記』の作者来野弥一右衛門は想像できなかつた、というわけでもあるまい。

長治を伴い、度々信長と会見し、信長の手に属して戦った経験のある重棟は、家柄や血筋など問題でない実力のある者が勝つ世がきたことを身をもつて感じたであろう。赤松円心の流れを汲む播州の名家というプライドだけでは生き残っていけないことを重棟は知っていたのである。保守的な兄賀相は、そのような重棟を裏切り者と見たのである。

対立する二つの勢力に挟まれたとき、一族が敵、味方に分かれることは、どちらが勝つても家を絶やさぬようにするための常套手段であつたことはよく知られている。三木合戦においても、加古川城主糟谷朝正は別所方に味方しているが、弟の武則は秀吉方に身を投じている。このように、何も重棟だけが不忠者というわけでもないのに、『別所記』は重棟に対して否定的である。

先に見た『別所記』の冒頭部分のとおり、合戦前、三木城内は、時代の流れにのつた革新的な考えの重棟派と赤松の誇りを捨て切れない保守的な賀相派に分かれ、重棟に従つた一部の者たちは、城を出て秀吉方に味方したのである。城内に残つた多くの者は、赤松の血をひく長治を守り、団結して成り上がり者の秀吉と戦つたのである。長治切腹と決まつた後も、一人抵

抗しつづけ最期は家人に討ち取られた賀相の行為も、裏切り者の重棟の口ききで成り上がり者の秀吉に降参するのは、赤松氏としてのプライドが許さなかったからだとすれば納得がいく。

『別所記』の作者来野も賀相と同じく、誇りを捨てて血筋のいやしい秀吉の下風に自ら立つた重棟を軽蔑し、裏切り者と決め付けていたのであろう。『別所記』が三木落城にあたっての重棟の行動を書かず、その上長治の嘆願書の宛名からも重棟の名を消したのは、来野が赤松氏の誇りを捨てた重棟を心底嫌っていたからである。崇拜にも似た赤松敬愛の心を持ち続けて来野は『別所記』を書き上げたのである。

(四)

三木城内に籠る士卒たちを助けた重棟が嫌われるのは、何とも皮肉なことである。時代が下つても重棟の汚名は晴れるどころか、地元でますますひどくなつていく。

江戸時代、播州にゆかりの深い人物が、『別所記』を著しく増補したものに前節でとりあげた岩崎本『別所記』がある。この本の中で重棟はひどい扱いをうけ、逆に賀相(吉親)とその妻は別所家を守る人物として描かれている。

長治若年なるを侮り、伯父孫右衛門重棟、元より奸佞邪慾の男にて、長治を失ひ其家を押領せん事を心懸ける。然れ共、長治には伯父山城守吉親後見し、家老三宅肥前守治忠守護しければ、重棟の我意に任せざりける。依之重棟益々兄吉親を憎ければ、彼家互に、吉親方、重棟方と家子郎等二ツに別れける。

(別所家来由之事)

岩崎本もやはり兄弟仲の悪さを指摘しており、非はすべて重棟にあるとしている。また、別

所の離反を知った秀吉が重棟を介して長治をなだめようと書状を送ったことも、「重棟畏て三木へ其旨を言送れ共、日頃悪人の孫右衛門が言越事なれば、秀吉と心を合せ落し穴へ入ん為也」と返答もせず（三木城初度合戦之事）」と書き、更に落城の後も、

別所孫右衛門尉重棟は、三木落去に及びたるを聞、早速御悦びに参りける。され共、一族、兄弟と引分れ、しかも其落城を賀して参る事、甚不義の至りなれば、秀吉さのみ称美もなかりけり。重棟が心には、今度一門の謀反に組せず秀吉の味方せば、別所の知行播州東八郡をも給らんと思ひしに、案に相違して指たる恩賞もなかりしかば、播州の諸士も其奸佞を惡みける。

（秀吉三木入城白子左衛門狂歌之事）

と重棟をけなすことはなほだしい。別所氏の菩提寺である三木の法界寺で現在も長治の命日に行われる三木合戦の絵解きの中でも、重棟は全く登場せず、長治の士卒助命を乞う嘆願書の取り次ぎも、浅野弥兵衛と織田信忠とするなど、重棟は無視され続けている。

このように地元での「悪人重棟」のイメージがエスカレートしていくのに対して、播州から外にでて加筆された『別所記』伝本に、かえって重棟の名誉回復のきざしが見られる。仙台市の鹽竈神社所蔵の『別所記』は、秀吉方、別所方にかかわらず、人物の批評を削除し、事件を客観的に描こうとしているが、この伝本の中に、他の『別所記』伝本にはない次のような一文が見られる。

伝二曰、別所孫右衛門尉重棟ハ、「此事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然」ト様々被申ケレドモ、舎兄山城守同心セズ吉観重棟令知十万石宛依<sub>レ</sub>之重棟五百余騎ニテ引退シ也。



「三木合戦の折、先祖は城内で苦勞した」という仲間意識のようなものが、三木の人々の心底にあるのかもしれない。

天正六年ヨリ同八年マデ三年ノ間、百姓不残一味同心シテ死ヲ守テ籠城ス。忠義凜々トシテ秋霜ノ如シ。愛人感義心結ブニアラズンバ此ニ至ランヤ。

地元に残る『別所記』の中の一本、本章第二節で紹介した加古川総合文化センター図書館蔵『播州三木別所記』の法界寺縁起にこのような記述がある。百姓までも別所家に忠義を誓い籠城したという。別所一族でありながら、一人秀吉方についた重棟を白眼視する要因は、この強い仲間意識にあるのだろう。『別所記』の作者来野弥一右衛門も、このような仲間意識を持っていたのだろうか。彼は名族ゆえに滅びざるを得ない別所家の不幸を描きたかったのかもしれない。

注①『別所記』と『播州御征伐之事』の関係については、本章第一節参照。

② 東京大学付属図書館蔵『別所家盛衰記』に適宜句読点等を施し引用した。

③ 国立公文書館内閣文庫蔵『播州御征伐之事』に適宜句読点等を施し引用した。

④ 『武功夜話』に見る「別所謀反」(『別所記』研究と資料) 一九九六年 和泉書院) 参照。

⑤ 『武功夜話』の引用は、吉田蒼生雄校訂『武功夜話』(一九八七年 新人物往来社)による。

⑥ 黒田家文書「小寺孝高、別所重宗宛消息」(『豊太閤真蹟集』第三号)

⑦ 黒田家文書「羽柴秀吉宛黒印状写」(『織田信長文書の研究』第七 六二号 吉川弘

文館)

- ⑧ 「惟任五郎左衛門長秀書状」及び「村二郎右頼家等連署書状」(『播磨清水寺文書』第二八三号、第二八四号)
- ⑨ 備前积文書「摂津荒木村重宛黒印状」(『織田信長文書の研究』第七六七号)
- ⑩ 『信長公記』の引用は、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』(一九九二年第七版 角川書店)による。

## 第四節 『妙善寺合戦記』諸本の検討

(一)

戦国軍記の執筆目的は多様である。みずからの体験を記録するためであったり、一国の歴史を長期間にわたって綴るためであったり、仕える主人の一代記を著わすためであったりする。あるいは、笹川祥生氏が指摘なさる「当代政治批判」を主目的に執筆されたものもある<sup>①</sup>。本節でとりあげる『妙善寺合戦記』は、「由来記」、「地誌」としての側面もあわせ持つ戦国軍記である。執筆目的を問われれば、作者は、万灯会の由来を記すために『妙善寺合戦記』を著わした、といえるであろう。地方性・局地性が戦国軍記の特色としてあげられるが、『妙善寺合戦記』は執筆意図からしても、在郷性の極めて濃い作品であることがわかる。

『妙善寺合戦記』は、備前の宇喜多直家と備中の三村元親の、妙善寺城をめぐる攻防を描いた軍記である。事の発端は直家による三村家親暗殺事件である。浦上宗景の家臣、宇喜多直家は、数々の戦功をたて、その勢いは主家の浦上氏をもしのぐ程であった。備前一国のほとんどもを平らげた直家は、その触手を美作まで伸ばし始める。その頃の尼子氏にはかつてのような勢力はなく、作州は安芸の毛利氏におさえられつつあった。直家の行動に恐れを感じた毛利元就は、備中松山の城主三村家親に命じて作州へ出陣させる。これを知った直家は、周囲に敵をかかえた今、三村と一戦を交えるのは不利、と考え、新参の家来遠藤喜三郎・修理兄弟に家親暗殺を命じる。遠藤兄弟は、作州穂村興禅寺に忍び込み、軍談中の家親を鉄砲で撃ち殺してしまふ。家親の長男・元祐は庄氏の養子となっており、三村家は次男の元親が継ぐ。二人の息子は

直家を父の仇と恨み、毛利の援軍を得て、宇喜多の属城・備前上道郡妙善寺城を攻め落とす。直家は居城の沼城から出陣し、妙善寺城をめづつて三村軍と宇喜多軍の激しい戦いがくり広げられるが、遂に直家は妙善寺城を三村から取り返す。庄元祐は討死、三村元親は敗走する。「妙善寺崩れ」と呼ばれる、この合戦は、宇喜多直家の一生の中で、最も多くの敵を討ち取ったといわれる程の激しい戦いであった。戦後、宇喜多氏と毛利氏との和睦が成ったため、これを恨んだ三村元親は毛利氏から離反。後に元親は備前松山城に籠るが、毛利軍に攻め滅ぼされてしまう。妙善寺合戦の折り、三村方に参陣して戦った毛利軍の多くの兵も討死したため、元就は直家に、敵味方に関わらず妙善寺合戦で討死した兵たちの霊を弔うための万灯会を行うことを命じる。

備前、毛利家と和談に成てのち毛利家より、いつぞや三村勢備前へ乱入の時、妙善寺の城、又は上道郡にて備中の諸士其数多く亡し事、皆毛利家へ奉公の者にて不便に思ふ間、弔ひ得させんと思ふよし備前へ申来。直家も尤と申され、則大分僧を供養して、討死の諸士の亡魂を弔ひ給ひぬ。扱宇喜多より被申付、湯迫村出田村辺の者共、毎年七月十四日十五日には爰元にて大勢討死せし諸侍の亡魂を弔ひの為、万燈を燈して生霊を慰むべしと被申付。是より毎年七月に万燈を燈し怠らずとぞ聞へし。扱沢田の西と八幡村の北の辺に、かなたこなたに有首塚は、皆此時の塚なるよし。

『妙前寺合戦記』は、備前上道郡湯迫村で毎年七月に行われる万灯会を述べてしめくくつて  
いる。

さて、『妙善寺合戦記』の伝本について調査を行ったところ、次の六本の写本が確認できた。

内閣文庫蔵『妙善寺合戦記』（明治七年十月以岡谷繁實本謄写）

大阪大学付属図書館蔵『備前国上道郡湯迫村万燈由来之事』

正宗文庫蔵『備前国上道郡湯迫村万燈由来之事』

西尾市岩瀬文庫蔵『妙善寺合戦記』（天保十二年九月十一日 越智直澄）（『備前文明乱記』、

『中国治乱記』、『吉川家譜』と合綴）

岡山総合文化センター図書館蔵『上道郡妙善寺軍記』（寛保三写之）

岡山総合文化センター図書館蔵『浮田直家三村紀伊守合戦湯迫万燈記』（明治十五年二月四日調之 沼村津下言吉所持）

『国書総目録』には、このうちの岡山総合文化センター図書館蔵の一本が『備前文明乱記』（『松田記』）と合冊されている、とあるが、それは誤りで、「邑久郡長船村俵藤太石塔由来」が岡山総合文化センター図書館蔵『上道郡妙善寺軍記』の後に合綴されている。確かに、岡山総合文化センター図書館は『松田記』を所蔵しており、『松田記』、『上道郡妙善寺軍記』のどちらにも「塚本家蔵図書」の印があるのだが、『松田記』の奥書には「永禄元年三月九日 目黒祐欣作 元禄六年八月廿二日 頼在 花押」とあって、本のサイズも筆も『上道郡妙善寺軍記』と違い、また合冊されていた跡もない。

刊本としては、群書類従本、史籍集覧本、他に吉備群書集成の第三輯と第五輯にそれぞれ一本ずつおさめられている。これらの諸本は大きく二つに分類できる。

A類 比較的簡略な本文を持つもの。

内閣文庫本、岩瀬文庫本

B類 加筆が認められるもの。

① 大阪大学付属図書館本、正宗文庫本、岡山総合文化センター図書館蔵『上道郡妙善寺軍記』

② 岡山総合文化センター図書館蔵『浮田直家三村紀伊守合戦湯迫万燈記』

刊本では、群書類従本・史籍集覧本がA類に、吉備群書集成所収の二本がB類①に分類できる。簡略な本文を持つA類に属する伝本がより祖本に近い形と考えられ、B類①、②の伝本はA類の伝本を加筆して成立したと推測できる。また、古態本と思われるA類の二本は、ほぼ同文である。

(二)

それでは実際にA類に属する伝本と、B類①に属する伝本の本文を比較してみる。A類からは岩瀬文庫本、B類①からは岡山総合文化センター図書館蔵『上道郡妙善寺軍記』（以下、岡山図本Iと略す）をとりあげて比較検討を行う。なお、B類②岡山総合文化センター図書館蔵『浮田直家三村紀伊守合戦湯迫万燈記』（以下、岡山図本IIと略す）については後述する。

A類にはなく、B類①に至って加筆された記事は数カ所あるが、次にあげたのは妙善寺合戦の発端となった三村家親暗殺事件である。

岩瀬文庫本

岡山図本I

宇喜多直家思はれける、今所々取直家思われけるやうは、今所々の取合最中に、三村は合最中に、三村は大敵なり。たや大敵と云、老功の大将にて、たやすく取ひしきがたき  
すく取ひしきかたきあいだ謀を以敵なれば、謀を以て討とらんと思われけるに、其節新

て討て取んと思はれ、遠藤喜三郎といふ侍にひそかに申けるは、其方は三村家親備中成羽に在城ありし時、其方成羽に有て能見知りたり。

此度三村へひそかに忍び入、討取手立は有まじきや、一重に頼み入由申されければ、

遠藤、心易く請合、則喜三郎弟修理と唯二人、作州へ忍び行。

三村は作州穂村興禅寺と云寺にたむろして被居けるを、遠藤兄弟忍

参に遠藤喜三郎と云者あり。三村家親未備中成羽城主なりける時、喜三郎は浪人にて暫く成羽に居ければ、家親を能具に知りたる事を直家案られ、遠藤をひそかに閑所へ招寄、其方は成羽に有て家親を能く見知らん。此度、三村大軍作州に出勢し、我に隨ふ者共を責亡すよし。我たとひ後難を得るとも後詰せずんばあるべからず。然共、此節所々の敵に国おだやかならず。我多くの勢を以て彼に敵戦の為、作州に出勢せば、其留守の間を窺国中に不慮のわざわひ発り、おもわぬ敵おそひ来らん事、如何に思へばいかにもして三村を謀を以て討んと思ふ。汝は案内と云勇士といひ、瀧に思ふの間、作州にしのび行、よく（マカ）窺て家親を討とらんや、といわれければ、遠藤承り申ける様、誠三村此度多勢にて出張の儀に候得ば、我ら一人忍入易々と討得ん事、十として一つなり。然共かゝる御意を蒙は勇士の眉目として望所に候。不叶までも忍入、討見候べし。死は近く生は堅く候得ば、死後に一子が事奉頼なりと申、則時に作州に立越ける。喜三郎弟に修理と申者、兄が大事の命を得て作州に赴を聞て、助の為に友なひける。

三村は作州穂村の興禅寺と云山寺にたむろして居けるを遠藤聞て、則夜にまぎれて忍入、彼寺の椽に揚り、

入、頃は八月十八日の夜、宵の内  
に三村は家臣を集物語して被居け  
る。

障子紙を破り、ひそかに鉄炮にて、  
三村家親を討殺し、無恙退出して  
兄弟ともに備前へ帰る。

障子の紙をつばにて穴を明て見ければ、家臣を集軍談  
をして居られける。遠藤、鉄炮を差出し持んとせしに、  
如何しけん、火繩の火消へたりければ、喜三郎弟に申  
けるは、かくまで忍入しに今迄有し火の消し事、是弓  
矢神に捨られしと申ければ、弟の修理申ける様、御こ  
ゝろ易かれ。火を取可参と居たる所を立、夜廻りの土  
の躰にもてなし、有番所に篝たき居たる所へ行、敵の  
方の様に申、油断なく被廻候へと申、彼篝火の側へ寄、  
羽織のすそに火を付け何となく立去り元の所へ帰り、  
喜三郎に火を渡しければ、天のあたへと悦び、彼障子  
の穴より則時に討殺す。座中大きにあわつる間に遠藤  
兄弟難なく逃出て備前へ帰る。

直家に命じられた遠藤兄弟が三村家親を鉄砲で討ち殺す場面をひいてみたが、岡山図本Ⅰが  
具体的な描写や修理の機転などを加筆し、物語としておもしろくなっていることがよくわかる。  
このようにA類の伝本に比べてB類①の伝本は物語性が豊かになっている。合戦場面の中では、  
例えば三村元親の兄・庄元祐が討死するあたりで、岩瀬文庫本が、「大將庄の元祐は、我人数  
崩れなびきて逃るにもいとはず引返し、猶宇喜多勢の追掛るに戦て、終に討死せられける」と、  
あるところを、岡山図本Ⅰでは、

大將庄元祐は、我が人数の崩靡て逃るにもいとわずして、有岡某と云土と主従五拾騎斗、  
国富村の川原を東に向て馬の鼻を立直し、勝ほこりたる浮田が勢の延原土佐守が手へ討て



かゝり、堅横追ひまくり浮田左京亮朱の四半に兎と云字の馬印を見て、是直家が一族、望所と小踊して掛合、東西南北へ割立戦ける。元来小勢なり。数多の敵に打合ければ、大将元祐数ヶ所の疵を蒙り、終に討死せられ、首は左京亮が手へ討取たり。残る兵、主の討死に氣を入、取て返て我おとらじと一人も(ついで)討死す。

と、元祐の動きも詳しく、人名・地名も追加されている。また、岩瀬文庫本では登場しない直家の猶子・与太郎元家の奮戦を描くなど、B類①の伝本はA類の伝本よりも逸話を多く挿入し、読み物としておもしろくなっている。

いまひとつ例をあげてみよう。合戦に負けながらも、なお父の仇を討つことに執着する三村元親の動きを描いた場面である。

岩瀬文庫本

此躰を湯迫村の前国府市場村にひかへたる惣大将三村修理元親、是を見て、田の中溝の中ともいはず味方に力を合て戦や者共と下知して馬の鼻を南頭に立直し、一文字に宇喜多が旗本へ切掛り、合戦を始むべしと進みける。

直家も是を見て、今日の合戦に備中勢は老人もこのらず討取たるものぞ、すゝめ兵共と采幣おつ取、下知をなし、高屋村の西にて合戦を始める。

岡山図本 I

惣大将三村修理亮元親は、両方の味方の軍勢共が軍を初て追立らるゝ躰を見るよりも続や者どもと味方に力を合て戦と云もあへず、南に向て一文字に鞭を揚て馳られければ、惣軍一度に直家の旗本を目懸け突てかゝり、早合戦を初。

三村元親は元來備中に名を得し勇者、殊には父家親をば作州にて討らるゝ恨、今日散んと期したるに、天運不至にや、謀相違して妙善寺の城あへなく責落され、兼ての約束相違し、二方負色に見へけるに、齒がみをなし血眼に成て、口惜き者かな。父のあだを報ぜん為、たまゝ大軍を催せし甲斐もなく、負軍を仕出候事、天運に違ひたり。何時かは期さん。宇喜多が陣へ掛入て骸を軍門にさらし、恨を泉下に報ぜん、とまつしぐろに切掛る程に、宇喜多先陣開きなびきて切崩されければ、三村勝時を造り掛、諸軍を励して、すゝめや者共、真先に下知して進みけるが、

初、国留にて切勝ける宇喜多勢も、原尾嶋にて切勝ける宇喜多勢、皆敵を追なびけ、漸くいとまに成にける時、宇喜多の本陣三村に切立られぬるを見て、惣軍一度に西の方より横間に備中勢の中、会釈もなく討て掛りける。備中勢、

元來元親は、中国に名を得し勇士。殊更父家親を作州にて討取し恨、今日既にさんぜんと期したるに、謀相違し妙善寺の城あへなく討落され、二方へ合遣したる味方、負色に見へて追立らる。遙に是を見て、齒をかみ、眼を廻にして詈て曰、口惜や、我父の怨を報ぜんため、適々大軍を催し出勢せし甲斐もなく、相図立所に相違せし事、天運に違たり。何時の時を待て恥をすゝがんや。直家が堅る陣に無二無三に懸入、撰討に直家を打取か、元親が首を敵に渡す歟二つの内を過ぎ物を、と独詈て、切かゝる。直家の先陣・明石飛驒、岡信濃が手を切崩しければ、三村勝に乗て諸軍を励し、掛や、進めや者ども、敵は負色なるぞ。此場を揉立ずんば戦はあやうき物をと、鎧ふんばり下知して自身手を碎き、数刻合戦に直家の諸軍ひら靡て既に追立られんと見ける所に、

はじめ国富村にて備中勢を追立し、戸川・長船・浮田・延原が勢并原尾嶋辺にて戦し浮田元家の軍勢敵を退て、漸隙に成にけるが、三村が勢勝ほこつて旗本危く見へければ、西の方より横合に鉄炮を搏かけ、鎗ふすまを作て突かゝりける程に、さしも勇士の三村が勢、前後の敵と横より懸る敵

心はやたけにはやれ共、横間にかけて立られ、前後の敵に討あひて、進退道なくかけなやまされ、東北へ開きなびき、ひた崩に崩たつて追討に討るゝ者、数をしらず。三村修理、猶取て返し掛入を討死せんと馬の鼻を引戻されけるを、家臣共立ふさがり、御合戦今日に限るべからず。いかにも御身を全ふしてあだを報はせ給はんこそ亡父の御供養にも成候はんど、と諫め、馬を西頭に立引廻し、釣の渡りを打渡り、備中へ無恙引返しける。此三村退口にて普代の家人引返し、主をたすけたりける間、今の八幡村の辺にて備中勢討死の数かぞふるにいとまなし。此度備前へ押入敵二万余人数大方三方にて討死して、生残て備中へ帰る者は十分に於て其二つばかり也。

元親は、敗軍にもかまはず、馬の鼻を取て返し、せられけるを、家臣ども曆々謀を加へ、命を全してかさねて讎を報たまへ、と謀れども、猶しも掛出給ふを取付、只今討死被成なば、誰人か三村の相続して先君の恩報じ奉る人候らん、と馬の頭を引返し、釣の渡り迄の間にて危き事多く候得共、普代の家臣共引返合討死し、終に主をたすける間、

此合戦に備中勢討死式万余の人数、残少く成にける。

岩瀬文庫本が傍線部Aのように、三村元親の動きの間に宇喜多直家の下知を入れてしまし、視点が定まらないのに対して、岡山図本Iは直家の動きを取り除き、三村方に視点を固定している。また岡山図本Iは、傍線部B、Dのように人名を詳しく追加したり、傍線部Cのように軍

記によく見る言い回しを用い、傍線部E・家臣が制止するのきかず再び宇喜多勢へ掛け入ろうとする元親の行動を二回に増やすなど、軍記としての体裁を整えようとする努力が認められる。岩瀬文庫本の表現がぎくしゃくとしていているのに対して、岡山図本Ⅰは全体的にすっきりしたものになっている。

更に、B類①の伝本は地理に詳しい。古態本と考えられるA類の伝本も、軍勢の地理的な動きに詳しいのだが、B類①の伝本は更に精密になっている。例えば、A類の伝本が「あくた川」とするのを「朝日川（旭川とも）」と訂正したり、三村軍の進路を、岩瀬文庫本が「大將余多五千斗、伊福村の中道より」とするのを、岡山図本Ⅰでは、「勇士五千余り首部村よりひやけ鼻を廻り、上伊福村の中道より」と付け加えるなど、B類①の伝本では、地名が詳細に、或いは訂正した箇所が多く見られる。

このように、B類①の伝本はA類の伝本よりも更に在郷性が強くなっているといえる。これは、B類に属する四本の伝本のうちの三本までが岡山周辺に伝わっていることと無関係ではないだろう。局地的な性格を持つ戦国軍記は、地元に残った伝本の方が加筆が多く、早くに外に出てしまった伝本の方がかえって古態をとどめる本文を持つことがある。自分の住んでいる地域で起こった合戦や土地に対する愛着や思い入れが、軍記作品に筆を加えるきっかけとなるのである。そしてこの加筆によって特定の家の軍記へと変貌する伝本も現れる。先の分類でいえば、B類②岡山図本Ⅱがこれにあたる。

(三)

岡山総合文化センター図書館蔵『浮田直家三村紀伊守合戦湯迫万燈記』は、巻末に「明治十五年午二月四日調之 沼村津下言吉所持」とあり、A類の伝本に加筆したものはあるが、B

類①に属する伝本とは別に「津下家の軍記」として生れ変わろうとしたものである。大きな加筆部分は二ヶ所ある。ひとつは、妙善寺城をとりかえすべく出陣した直家の留守を狙って、直家の居城・沼城へ三村勢が押し寄せる場面である。

岩瀬文庫本

岡山図本Ⅱ

扱本大将三村修理、一万余りの人数にて津嶋村より福林寺繩手を真直に北海道を土手の前へうち通る。扱釣の渡りを越て上道郡国府市場村へ打通、湯迫村の山へ取揚り、四の御前村の上を宿奥村観音寺村打口沼の城へ押寄、直家留<sup>（守）</sup>口の透に沼の城を乗取て、鉄村へ勢を出し、直家を真中に取挟て討捕謀略に云合説に三方の備中勢、相図の貝鐘打揃次第を不

扱本陣之大將軍三村修理亮、老万騎をいんそつし、津嶋村より福林寺繩手を真直ぐに北海道を土生の前打通り、釣の渡りを越して上道郡国府市場村より、湯迫村へ取上り、四御前村の上を宿奥観音寺村より沼の城西北宮山迄押寄、直家留守の透に沼城取べしと、其後鉄村へ勢ひを出し、無二無三に直家を真中に取挟み討とるべしと謀略の言合、既に三方備中の勢、相図の貝鉦<sup>（守）</sup>うちそろへ次第乱さず打て出、弓手式百騎斗宮山より沼の城へ矢を射込事雨の降に事ならず。

然る処に浮田直家物見に付置たる侍あわたゞしく走り帰り、辛川村首部村辺より三手に割押寄由注進す。

直家の惣軍勢ども、前には妙善寺の注進す。

直家の惣軍勢共、前には妙善寺の城を責る取中未勝負

城つよくして未だ勝負を決せぬうち  
備中勢数を尽してせめ来り、今日の  
合戦有無の二つとかたづを吞で居た  
り。扱直家の下知いかゞと思ふ所に、  
又物見の者立帰り、急に三方の敵ち  
かく一手は川下春日の宮の前をこし、

妙善寺の城の後詰仕躰と見へ候とい  
ひも果ぬに、直家立上り甲おつとり  
忍の緒をしむるやしめずに馬引寄打  
乗、かゝれ者共、妙善寺の城を一時  
にもみ落せ。さなくば軍は大事ぞ。  
生る者は稀ならん。

なき所、又備中勢雲霞の大勢押寄と聞より、今日の  
合戦有無の二つとかた酔を吞で居たりけり。扱直家  
公の下知如何とおもふ処に、又物見の武士立帰り、  
三方敵ちかく責入、一手は春日の前を渡り、妙善寺  
の後詰と相見へ申しとゆふもあへぬに、

直家立上り甲追取忍びの緒をしめるやいなや馬引寄  
打乗、かけられ者共、妙善寺の城を一時もみ落なり。  
さなくば軍負なり。

面躰憑て進み玉ふ処へ、田中忠太、吉田源次あせを  
ひたして掛け来り、直家之御前に畏り、敵雲霞の如  
く沼の宮前より御城内へ矢を射込事雨の如し。尤奥  
方様并女中不残、横山、中川、内藤、草野、津下、  
竹森などが引連て、奥の御丸へ退申候。後に船岡、  
長船、宗正等ふせぎ、未御城内へ敵者人も入不申。  
此段御注進申上り、と申切らぬ内に、直家、此節油  
断致すな。敵者人にも城中へ入るならば、二度目  
懸り不叶と、血眼になつて給ひける。早帰れく斗  
にて御心せき上玉ひけり。兩人急ぎ帰りけり。

妙善寺を落しなば、備中勢何千万騎  
たり共かばねは備前にさらさせん、

扱直家公、妙善寺を落しなば、今日の備中勢何万騎  
成とも骸を備前にさらさせん、と呼わつて真一文字

とよばゝつて真一文字に田中畑中とに乗出し、田の中畑の中共いとひなく、武捨四町が  
もいはせず、廿余町斗の道を馬煙り其間沓ばみを揃、馬煙りを立る。  
を立て、

傍線部が独自の加筆部分である。沼城の様子が詳しくなっており、敵が雲霞の如く攻め寄せ、  
矢を雨の如く射こんでくるが、留守を守る家臣たちが奥方たちを無事奥の丸へ退かせた、と使  
者の侍が直家に知らせている。沼城を守る家臣の中に「津下」の名が見え、この記事は「津下」  
の活躍を記録するために加筆されたと考えてよいだろう。この伝本は妙善寺合戦における祖先  
の働きを記録した軍記として、沼村の津下家に伝わっていたのである。

さて、もうひとつの加筆部分は冒頭部分である。

一、抑備前児嶋郡之獵師共打寄、此間別に天氣の相違も無き処、獵場にて少も魚とれ不申  
事、不思議に候。何を家業にいたすべし。如何はせんと、とりくくに評判有之処に、番田  
村義兵衛と申者かけ来、扱も不思議なる事にぞあれ。西の浜沖に船とも知れず、うきく  
と波にゆられて見へけるゆへ近々と寄窺ひ見るに、人出て人声有。不思議ものと人々に物  
語しければ、皆々引連て波の海辺へ立出て様子を見れば、うつろ船なり。扱は是故此間魚  
少しも捕れず。いざ引上て見届け申さんと引上げ、うへなる方を打破り見れば、扱美しく  
き若君達三人おわします。君達何ゆへ是にましますぞ。国里何国何人ぞ。御いとはしやと  
尋るに、名もなきものと申され儀斗におはします。其分にては置がたく、其頃備前の国和  
気郡天神山の城主浦上宗景児嶋の領主にて、児嶋百姓共用所之右之趣申出候得ば、早速召  
れ参れとの御事にて、三人共御覽じて、如何様たゞ者と見へず。不便に思ひ能きにいたは  
り給ひけり。其後本国を御尋あれば、我らこそ百済国一天の流よな。父母の御勘気を三人

とも請て哉仕合父の名をくだす。我々父母の名をば御免下さるべく御いたわりの御恩深き程は、国民を申上て候也と打しほれ語けり。宗景肝心仕玉ひて、道理尤至極せり。弥々よきにいたわりけり。三人とも其生付申もなか／＼おろかなり。其後宗景の御娘子と御縁むすび、御名を直家、二男中納言、三男仲家と御名も改めて、然者宗景と直家は舅也。其後天元暦卯月下旬之比、宗景家臣に中山備中守とて勇侍を沼の城に居城させ有ける処に、備中守何としけんや、宗景直家親子に諫れ、既に直家公に討亡され、それより直家沼の城に帰り、二男中納言は一ノ宮之城に居城す。三男仲家公は邑久郡片岡の城に居置。

宇喜多氏の先祖が百済国から船に乗り、備前国児島に流れついた、という伝承が、『陰徳太平記』、『宇喜多戦記』、『宇喜多直家軍記』、『宇喜多略伝』などの宇喜多氏関係の軍記や記録等に多く見られる。大永四年（一五二四年）に書かれた『宇喜多和泉守三宅朝臣能家像賛』<sup>②</sup>（能家は直家の祖父）に「竊按和泉之前司能家家牒。世居乎百済国。甫児時。兄弟三人。泛船来于備前一嶋。始厝新第。旗帜皆書児字為紋矣。仍其所曰児嶋焉。」とあり、これに拠つたものと考えられる。

ところが、岡山図本Ⅱだけは、直家と弟二人の三人が百済国から流れ付いた、としており、他の書が宇喜多氏の祖が兄弟三人でやってきたとする点で相違する。また、「番田村義兵衛」という者が兄弟の乗つた船をみつけ、児島の漁師や百姓たちがそれを天神山城主浦上宗景のところ知らせるといふのも在郷性の濃い逸話であり、岡山図本Ⅱ独自の話である。岡山図本Ⅱは、地元に伝えられていたこの逸話を取り入れ、冒頭に書き加えたと思われる。



安永三年（一七七四年）に成立した、岡山藩士・土肥経平著『備前軍記』は、戦国時代の備前の争乱を集大成した作品である。経平は、備前に伝わる軍記や神社仏閣に所蔵される古文書を典拠として、『備前軍記』を書いているのだが、妙善寺合戦の記事は『妙善寺合戦記』を参照してまとめている。先にとりあげた庄元祐討死の場面も、A類の伝本ではなく、詳しく描いているB類①の伝本に近い。また、宇喜多直家の一代記である『宇喜多戦記』も『妙善寺合戦記』によく似た記事を載せるが、内容はやはりA類よりもB類①の伝本に近い。『宇喜多戦記』が後出本のB類①の伝本に近いところから、『妙善寺合戦記』の方が先行する作品であり、『宇喜多戦記』は『妙善寺合戦記』を典拠として成立したと見て差支えないだろう。このように、『妙善寺合戦記』は、『妙善寺合戦記』を、早くから地域外に出たA類の伝本よりも、B類の伝本のように地元に残って書き継がれていった伝本の方が、後出の作品に大きく影響を与えたと考えられる。

注① 「『石田軍記』と『北条五代記』」（『軍記と語り物』二十二 一九八六年三月）、『朝倉始末記』の本文を考える」（『女子大国文』百十七 一九九五年六月）参照。

② 『統群書類従』第八輯上所収。

## 第五節 丹波赤井氏関係軍記について

(一)

戦乱の時代が終焉に向かい始めると、中央だけでなく地方でも地元で起こった合戦を題材にした軍記の執筆活動が盛んになった。地方において生まれた戦国軍記の中には、やがて地元を離れて伝播していくものや、より大きな視野に立って歴史を描いた軍記などに取り込まれていくものもある。一方で、地元の人々の共感を得て地元根付き書き伝えられていくものもある。郷土に残った軍記は、題材となった合戦との空間的距離が近いため、強い思い入れによる改変を被りながら伝えられていく。このような現象は、本章第二節や第四節で見えてきたところである。

本節で紹介する丹波赤井氏関係軍記四本も地元に残り伝えられてきた作品である。軍記文学研究の中でとりあげられることもなかったこの作品群は、伝本間の異同が大きい。各伝本の性格がとらえやすく、地方軍記の異本展開の仕組みを探る手がかりにもなる。赤井直正の活躍を中心に直正没後の黒井城（兵庫県丹波市春日町）落城のありさまを描く赤井氏関係軍記四本を比較し、戦国軍記が地元において変容を遂げていくさまを確かめたい。

(二)

西国征伐を急ぐ織田信長の前に立ちはだかる丹波の武将がいた。黒井城城主赤井悪右衛門直正である。「丹波の赤鬼」<sup>①</sup>と畏怖された直正は、『甲陽軍鑑』に日本十七大将の一人と紹介さ

れるほどの優れた武将であった。

赤井直正は、丹波国後屋城城主赤井時家の次男に生まれ、幼名を才丸といった。幼い頃から優れた素質を持っていた才丸は、叔父にあたるという黒井城城主荻野伊予守秋清とその重臣荻野十八人衆に乞われて荻野氏の養子に入り朝日城城主となった。このため直正自身は荻野直正と名乗っているが、ここでは一般に知られる赤井姓を用いる。その後、荻野秋清を殺した直正は黒井城を乗っ取り城主となる。直正の兄家清は弘治元年（一五五五）に起こった香良村の合戦で受けた傷がもとで死去、直正は兄の幼い嫡子忠家をたすけ、事実上の赤井氏の頭領となる。弟幸家・時直の協力を得て次々と近隣の諸将を攻め配下におさめた直正は、但馬国にまで進出する。元亀元年（一五七〇）、直正の意を受けた忠家は織田信長に対面し、所領を安堵されているが、間もなく赤井氏は信長から離反、天正三年（一五七五）、明智光秀の攻撃を受けることになる。このとき直正は甥太田垣朝廷が城主であった但馬国竹田城にいたが、急遽黒井城へ帰城し光秀軍と戦っている。光秀に従っていた八上城城主波多野秀治ら丹波衆の裏切りもあり光秀は大敗、命からがら逃げ帰ったという。この頃、直正は足利義昭をはじめ、武田氏・毛利氏・石山本願寺と連携し、丹波における反織田勢力の筆頭として注目されていた。天正五年（一五七七）、光秀は再び丹波に攻め入り丹波の諸将を次々と降伏させていく。このような中、天正六年（一五七八）直正は病死する。嫡子が幼少であったため、弟幸家が後見人となり黒井城を守るが、直正を失った赤井氏の衰微は誰の目にも明らかであった。直正の死を好機とした光秀は、翌年八上城を囲み落城させ、波多野氏は滅亡。鬼が城など黒井城の支城は攻め落とされ、八月黒井城は遂に落城する。丹波国で最後まで抵抗していた黒井城の落城によって、光秀は丹波全域をようやく従えることができたのであった。

赤井悪右衛門直正の名は意外に広く知られており、先に触れた『甲陽軍鑑』の他にも、『陰徳太平記』<sup>②</sup>・『常山紀談』<sup>③</sup>などが彼の勇猛ぶりを伝える逸話を載せる。豪傑赤井直正と黒井城

落城の顛末を地元の人々が「ふるさとの話」として書き伝えたようとしたのが、赤井氏関係軍記四本である。

(三)

これまでに確認できた赤井氏関係軍記は次の四本である。

『赤井伝記』

丹波市春日町芦田確次氏所蔵。『史跡黒井城跡保存管理計画策定報告書』<sup>④</sup>・『丹波戦国時代史資料』<sup>⑤</sup>に翻刻、所収。分量は約二七〇〇字。

『丹波氷上郡黒井赤井悪右衛門尉直政落城事附明知日向守光秀没落之事』（以下「没落之事」と省略する）

奥書に「貞享元年（一六八四）子年」とある。黒井地区の区長が代々所蔵。『史跡黒井城跡保存管理計画策定報告書』・『丹波戦国時代史資料』に翻刻、所収。分量は約二四〇〇字。

『黒井城山軍書』（以下『軍書』と省略する）

卷末近くに「黒井落城より天明二壬寅年（一七八二）まで凡そ二百四年になる」とある。春日町荻野久幸氏所蔵。『丹波戦国時代史資料』に翻刻、所収。分量は約五二〇〇字。

『赤井悪右衛門伝記』（以下『悪右衛門伝記』と省略する）

東京大学史料編纂所所蔵。「丹波国水上郡長見村 善積佐兵衛藏本」を明治二十一年（一八八八年）六月に謄写したもの。分量は約三七〇〇字。

書名は違うが、これら四本は異本関係にあり、いずれも黒井周辺に残る伝本と言ってよい。四本の先後関係については不明である。『丹波戦国時代史資料』によると、『没落之事』と全く同じ伝本を「原家」が所蔵しているようだが未確認である。その他の伝本は知られていない。なお、『悪右衛門伝記』以外の三本は巻末に黒井城の大きさ、直正の紋所と戒名、主だった家臣名の列記などを付す。これら四本の記事比較表を次に示した（各伝本には章段名はなく、記号と記事名は筆者が付したものである）。

記事比較表（○あり ×なし △簡略 ◎詳細）

記号	記事名	赤井伝記	悪右衛門伝記	軍書	没落之事
ア	赤井氏由来	○	×	×	×
イ	直正、朝日城主となる	○	○	○	×
ウ	荻野十八人衆の不満 赤井家清からの手紙	○	○	○	×
	工直正、荻野秋清を殺害 黒井城城主となる	○	○	○ 赤井氏由来	×
	才香良村の合戦	○	○	○	×
	力日本十七大将の事	○	×	×	×
	キ信長、秀吉・光秀を 山陰道へ派遣する	○	○	◎	×

ク光秀、丹波に入り 黒井城を囲む	◎	○	○	○
ケ波多野、光秀を攻める	○	○	○	○
コ光秀、敗走する 細見兵太の討死	○	△	○	○
サ直正死去	◎	○	○	○
シ黒井城落城	○	○	◎	○
ス八上城落城	○	△	◎	○
セ本能寺の変	×	○	◎	○
ソ山崎の合戦	×	◎	○	○
タ秀吉、天下を治める	×	○	○	○

(四)

各伝本の性格を明らかにするために、記事を細かく比較検討していく。

『赤井伝記』

『赤井伝記』は、ア「赤井氏由来」を冒頭におく。

そもそも丹波国氷上郡黒井の城主、赤井悪右衛門尉直政の由来をくわしく尋ねるに、清和天皇の後胤源満仲公の次男、河内守源頼信の男掃部頭頼季より八代赤井九郎為家十二代の孫、兵部大夫侍従家光、初め赤井五郎と言ふ、南丹波半国を配領し、播州三郡押領す。

赤井氏の出自について触れるのは、『赤井伝記』と『軍書』だけで、『軍書』はエとオの記事の間に「源頼光公のこうえい」とする赤井氏の由来を置く。赤井氏の出自については、内閣文庫蔵『赤井家譜』や『寛政重修諸家譜』にも見えるが、『赤井伝記』・『軍書』の伝えるところと一致しない。いずれも真偽の程は測りがたいが、先行の軍記作品に倣って主人公の出自を冒頭で紹介し、赤井氏の武士としての正統性を強調しようとする『赤井伝記』の姿勢は指摘できる。

カ「日本十七大将の事」も『赤井伝記』独自の記事である。『悪右衛門伝記』や『軍書』は、直正が香良村の合戦に勝利し芦田氏を従わせた後、但馬国朝来郡の竹田城も手に入れ、「天下に名高く成たまふ（『軍書』）」とだけ記すところを『赤井伝記』は、直正がいかに優れた武将として知られていたかを詳しく説明する。

次第に大身となり、官は少将に任ぜられ、近衛龍山公の御婿となり、其名は天下に高く且又甲州源氏武田信玄公と内々合体し給ひ、およそ国中他国所々合戦の次第は永禄、元龜、天正の年記等に録しあり。此時天下は大いに乱れ国々鬪戦止む事なし。（※）先ず伊豆国平氏大聖院北条氏康公 甲州源氏法性院大僧正武田信玄公 越後ノ管領入道上杉謙信公 尾州平氏織田右大臣信長公是を日本四大将と言ふ。次に三河国徳川家康公 丹波国赤井直正 土佐国長曾我部元親 安芸国吉川左京 伊予国久留島信濃 越前国朝倉金吾 伊予国小早川景隆 三好家松永弾正 近江国浅井備前守 上杉家太田三楽 安芸国正木大膳 上総国万喜少弼 奥州会津盛氏 右を十三大将と言ふ。

（※印以降は、『甲陽軍鑑』（本篇卷十五）に見える内容と一致する。）

『赤井家譜』によると、足利義昭に京都を追放された関白近衛前久（龍山）を直正は庇護し、その娘を妻に迎えたという。また、直正からの書状に対する武田勝頼の返信が残っており、直正が甲州の武田氏と呼応しながら信長打倒に向けた準備を整えていたことが確かめられる。『赤井伝記』は、『甲陽軍鑑』記載の直正の記事を用いて直正の名将ぶりをアピールするとともに、傍線部 a のように直正の妻が関白の息女であったことや、傍線部 b 甲斐の武田氏との交流を挙げて直正が当時いかに注目される人物であったかを強調している。四本の伝本は、いずれも赤井直正に好意的であるが、このように『赤井伝記』は名将直正像を印象づけようとする意図が他の三本よりも更に明確である。サ「直正死去」の記事でも『赤井伝記』は、

惜しい哉、今戦国の時に当って大敵を取りひしぎ数度の戦功をあらわし四大将に続いて十  
三将の其一人にして四海に名を発し、知勇兼備の大将といえども無常の風は防ぎかね、一  
族郎党諸士下部に至るまで大きな力を落し暗夜に燈を消したる如く。

と、直正の死を悼む声を書き綴る。これは他の三本には見えないものである。

他方で『赤井伝記』は「故郷の名将直正」に従った名もなき武士たちの活躍も描いている。ク一五七六年光秀の第一次黒井城攻めが始まったとき、直正は但馬竹田城に出向いていた。

外に直政多年居城なれば、恥を知り義を重んずる金鉄の武士多く、敵もたやすく責め寄らず、其のひまに直政急ぎ帰り、翌日も矢合せなく碁、酒宴の興をなし旅の疲れを払ひける。

城主不在の黒井城を守ったのは、多くの「金鉄の武士」たちであったと『赤井伝記』は伝える。更に、光秀が攻撃を始めると、



城中の兵は互に義をはげまし命を塵芥よりも軽くし、黒煙を立て短兵急に取りひしげば、度毎に味方利を得ずと言ふことなし。

というありさまであつた。「義を重んじ」「義をはげまし」た城中の兵たちの活躍によつて赤井方は戦うたびに勝利を治めたとするこの文章は、『赤井伝記』独自の文で、『軍書』の同じ場面と比べてみると、

直政留守とはいへども城内には旗を上げ用心きびしく見へにけり。敵も卒時に入る事なし。其隙に直政急ぎ帰城す。翌日も矢合なく酒宴の興をなし旅のつかれを休め、又其日敵軍押寄せける。味方はかねて用心なれば黒井馬橋、多田表へ討て出、相戦ひ数度の戦ひに味方利を不得ということなし。

『赤井伝記』が黒井城内の兵の活躍を誇張した表現になつてゐることが明らかである。このように『赤井伝記』には、局地的な戦いを描いた戦国軍記によく見られる地元根ざした加筆が行われている。赤井直正とともに黒井城を守つて戦つた在地武士たちの活躍の加筆は、郷土への強い愛着の表われと言えよう。『赤井伝記』は本能寺の変や山崎の合戦、秀吉の出世を描くことなく、八上城落城後、丹波一国を拝領した光秀が、龜山城に入ったところで筆を措く。視線の先が丹波国からでることなく終つてゐるのも『赤井伝記』だけで、この伝本は赤井氏関係軍記四本の中で最も郷土色の濃い伝本である。

局地的な戦いを題材とした戦国軍記が地元において書き継がれる過程で、地元に残る伝承などを取り込んでいくのは、当然起こるべき現象である。合戦の起こった現場に生きているという共感と郷土への思いが作用し、前項で紹介した『赤井伝記』の如く、地方の戦国軍記は、更に郷土色を濃厚にしていく傾向が見られる。前節でとりあげた宇喜多直家と三村元親の戦いを描く『妙善寺合戦記』は、地元岡山県に残る伝本の方が、物語性豊かで地名にも詳しい。羽柴秀吉の攻撃を受けた長水城（兵庫県宍粟市）の落城を扱った『長水軍記』は、戦後の秀吉の動向には触れず興味を示さない。このように地方戦国軍記は、極めて限られた視野の範囲で描出しようとする姿勢を保つことが多い。

しかし次に紹介する『悪右衛門伝記』は、視野を丹波国から外に向けようとする、地元に残る戦国軍記の伝本には珍しい性格が認められる。例えば、コ光秀が直正に呼応した波多野氏に裏切られて敗北し敗走する場面の中で、他の三本では光秀をかばって討死した細見兵太の逸話を伝える。

明智も今は危ふく見へける処に、細見兵太とて一騎当千の侍申すは、君は急ぎ落させ給へ、それがしここに踏留まり防ぎ申さんとて駒の手綱を引かえし防ぎ戦ふ。その隙に明智は須知まで逃延びける。細見兵太は今は最後のいくさと秘術を顯わし縦横無尽に切廻り、広言放つて討合しが多勢の軍兵折重なり隙間もなく切結べば終に兵太も討死す。今に兵太墓とて栗柄に有り。

（『赤井伝記』）

地元の地誌的な要素も含むこの記事は、『悪右衛門伝記』には見えない。ス「八上落城」のシーンも、他の三本は波多野秀治が光秀の謀略によって討たれるありさまを描いているが、『悪右衛門伝記』は、「扱日向守は八上の城をも責落し、丹波一国を拜領して亀山に居城せられけ

り」と一文で終らせる。このように丹波国内の出来事については、他本より簡略な記事を持つ『悪右衛門伝記』が、詳細に伝えるのがセ「本能寺の変」とソ「山崎の合戦」である。特に山崎の合戦については、『軍書』や『没落之事』よりもかなり詳しい。『軍書』が「日向守光秀は山崎の合戦に秀吉方に討負、終には百姓の手に掛り死果給ふなり。日本国中に隠れなければ秀吉公に随わず」という事なし」とだけ記すところを、『悪右衛門伝記』では、

然るに明知は洛中に居て秀吉の勢を待請られけれども、秀吉少もゆる成給わず、山崎にまします間、明知こらへ兼而、同六月十三日の晩、山崎へ押寄、宝寺の山東のそわより責上りけり。秀吉方には山の峯より少し下て、楯陰より鉄炮のす口を押並て待請たり。秀吉の御下知に相凶の鐘を撞まで鉄炮壺つも打べからずと仰ければ、しづまり待かけたり。其あひ半町ばかりに成時、貝鐘をならし給へば、数千挺の鉄炮一度に逆矢にうちける間、先陣にすゝむ者は老人もはづるゝ事なし。寄手色めき立て逃足に成ける所を、秀吉の勢ども太刀長刀を以一度に懸合ければ、明知勢一足も踏みも留らず、淀・伏見を指して逃ける間、秀吉の勢勝に乗て追詰く、討留ければ、淀・こが縄手の道には寄手の死骸尺寸のあき所もなかりけり。かくて明知ほろびける事出書委しければ省略たるに依て、中国西国秀吉へ随はずと云事なし。

とかなり詳しい。『悪右衛門伝記』の記事の分量に注目したとき、丹波国以外で起こった事件であるセ「本能寺の変」からタ「秀吉、天下を治める」の記事量は、丹波の中での出来事を描くイ「直正、朝日城城主となる」からス「八上城落城」までの記事量とほぼ同じである。『悪右衛門伝記』は題名とは異なつて、視野を地元から外に広げようとする意志が働いている伝本だと判断できる。局地的な戦いを描いた地元に残る戦国軍記には珍しいこの『悪右衛門伝記』

の性格は、いくつかの要因が重なって現れたものであろうが、その一つに丹波という土地柄が考えられる。峠一つを越えればすぐ都という丹波の立地は、中央の動きに常に敏感な風土を作っているはずである。『悪右衛門伝記』が被った改変は、丹波ならではの地方性を示しているともとれるのである。

### 『黒井城山軍書』

直正の伝記から光秀の丹波攻め、黒井・八上両城の落城から本能寺の変まで、知り得た情報の全てを書き伝えようとしているのが、『軍書』である。『軍書』はキ「信長、秀吉・光秀を山陰道へ派遣する」の中で、他の本が全く触れなかった播磨別所氏の三木城落城にまで言及し、シ「黒井城落城」ス「八上城落城」の中でも両城の落城にまつわるエピソードを詳細に伝える。天正七年八月、光秀は町人に化け、釣りをしていた茶坊主から黒井城の用水が白毫寺から引かれているとの情報を得、用水に毒を流し入れる。城内に籠る雑兵たちを毒殺して黒井城を落城に導いたという落城伝説を『軍書』は伝えている。この伝説について『赤井伝記』は、「殊に水の手を敵にとられ、水の手は白毫寺奥山より笥を仕込み取り来つたり」とするが、内容は『軍書』に比べかなり簡略である。黒井では、白毫寺から城へ水を引いていることをある老女が光秀に教えたため、水を断られた黒井城は落城したという伝承が残っている。地元に残るこの伝承をほぼそのまま伝えたのが、郷土色の最も濃い『赤井伝記』であり、より詳しい情報をもとに脚色を加えたのが『軍書』であると思われる。

去程、明智左馬之介、川島権八を召連れ軍勢一万五千騎と<sup>(ママ)</sup>ど記しける。今度は柏原道に來て石負村より六七町北に當つて悪七郎の番所ありけるを皆討ち殺し通行す。夫より其処を木戸岩というなり。

『軍書』は更にこのような地元の地名の由来も書き加え、黒井城落城に関するあらゆる逸話を網羅しようとする姿勢がうかがえる。この姿勢が地元に関する内容だけにとどまらないのが、『赤井伝記』と趣を異にする『軍書』の特色である。

続く八上城落城に関しても、『軍書』はかなりの紙幅を割いて他本とは違った落城譚を描いている。『赤井伝記』や『没落之事』と同記事を比べたとき、最も注目される違いは、光秀の母についてである。『赤井伝記』と『没落之事』が伝える八上城開城のありさまは次のとおりである。兵糧責めに耐えかねた八上城城主波多野秀治（『没落之事』は照政とする）は、光秀に従う旨を告げ降参する。

明智今は仕済したりと悦び、然らば起請文取べしと言ふにより、秀治承り候と供人少々引具し、明智が陣へ馳行き、弓弦をはずし甲を脱ぎ起請文たり。是に事よせ彼秀治をからめ取り、首を切り河原にさらし、心しずかに帰陣せり。此事天下第一の無道の明智が働きと後の嘲りとなれり。  
(『赤井伝記』)

秀治をだまし討ちにした光秀に痛烈な批判を加えているが、光秀の母は全く登場しない。一方、『軍書』では降伏を勧める光秀に秀治は、

貴殿も勇士なれば此一言相違無之候得ばいかにもからめとらりよふが右に相違無之ば、貴殿の母人を此秀治が城内に預け被下候得ば右辺なり。

と、母親を人質に出すようにと要求する。母親を八上城内に送り込んだ後、光秀は秀治を捕ら

え急ぎ安土に赴き、信長の前に秀治を引き据えるが、

信長公かれは丹波黒井の城主、又は播州三木の城主杯と軍組なれば心得ぬと秀治が降参我に追附討もらせし無念やな、何より秀治を討留をき候得ば心置なしと刀引さげ秀治只一討にしたまふなり。光秀黙然たり。是非なく亀山に帰城したまふなり。

信長は秀治を殺してしまふ。光秀の裏切りに怒った八上城内の兵たちは、

右の老人引出し、能く改め、是こそ君の敵なりと、大板の上へのせ、出刃包丁にて魚切のごとくに一家中のうらみ一出刃づつ寸分のあき所もなく一分刻になりたまふなり。夫より一家中行儀改め、白上下にて切腹仕りにけり。

非常に残酷な方法で光秀の母を殺して自殺する。これを伝え聞いた光秀は、「聞くより光秀身をもみあせり、たしかに母人の敵は織田信長公なりと思へ共、外心にて軍慮作るばかりなり」信長こそが母の仇だと考えるようになった、とする。

八上城開城の際、光秀の母が人質に出され殺された件は、『織田軍記』・『常山紀談』・『絵本太閤記』・『初井家日記』などが伝える事件だが、いずれも『軍書』の光秀の思いとする「母親の敵は織田信長だ」とまでは書かない。光秀が波多野氏に降伏をすすめるために、母親を人質に差し出したということ自体が虚構であり、阿部一彦氏によると、『織田軍記』や『常山紀談』の光秀母の人質殺害事件を本能寺の変の原因に求めるのは、後世の者の憶測以外のなにもでもないという。『軍書』が書写されたのは巻末の記載から天明二年（一七八二）であろうから、遅くともこの頃には八上城開城の際の母殺害事件から、光秀が信長を親のかたきと恨ん

だという本能寺の変の原因説が世間で取り沙汰されていたことがわかる。また、『織田軍記』や『常山紀談』等の光秀の母は磔にされ処刑されたとするが、『軍書』の同場面は、目も当てられない程の残酷さで脚色されている。女性が凄まじい拷問の末に惨殺される説経「さんせう太夫」を彷彿させる場面でもある。

更にセ「本能寺の変」で信長が死ぬ場面でも、『軍書』は読者の興味を引くようなエピソードを用意している。『軍書』と『悪右衛門伝記』『没落之事』の同場面を比較してみよう。

### 『軍書』

去る間、光秀は西国え発向のためにとて丹波一国の勢を催し、都合一万騎とぞ記しける。俄に逆心の企有て兵卒を引卒して、天正十年五月二十九日の夜半に龜山を打立、明る六月一日未明に京都にのぼりつき、本能寺の四面を二重三重に取まき、四方より鉄砲をはなしかけ揉立揉立攻入ける。百六拾騎殊に不意に出ければ、皆々すはやに出合せ過半討死いたしける。信長公もたまりかね、管谷藤八に夫弓よと仰られ重藤の弓を握りたまひ一矢射出し給ふやとや。乙矢をもつて下り拳に八幡大菩薩、けんりん地神照覽あれ、明智という人非大畜生、下郎日向めが眉間をくだきたまへ。あれめが子孫加担の奴ばら等を生し無之冥途黄泉に下し、召捕て地軸に投よ、てつせよとのたまひ終に御弓を捨て客殿へ御入あつて羽林は如何にやと、皆々終に死に果は(ママ)てたまふなり。

### 『没落之事』

去間、日向守光秀西国発向の為にとて丹波の勢を催し、都合一万余騎とぞ記しけり。俄に逆心を企て有り兵卒を引具して、天正十年五月廿九日の夜半に龜山之城打立、明る六月朔日の未明に都に上り着、本能寺の四面を二重三重にをつ取りまき、四方より鉄砲を放ちか

け、もみたてく、責入けり。味方は僅百六十騎、殊に不意出てければ皆素膚にて出合、過半討死ければ信長公もたまりかね、甲斐なく切腹せられけり。

『悪右衛門伝記』

明知日向之守能き折柄を得て、丹波一国の勢を催し、備中下国と披露して、天正拾年五月廿九日戌の刻に龜山を打立て、大江の山に懸り、明る六月朔日又早天に、本能寺に押寄たり。其勢一万余騎にて四方を取囲み、鬨音をどつと上、鉄炮を打懸け責たりけり。寺中の侍思ひよらざることなれば、あわてふためきおき上りけれども、早鉄炮寺中に入れば、鎧を取てきる間もなし、すはだにて大庭に掛け出、何も分捕高名して討死したりけり。其間に信長公御腹めされければ、はや寺中に火を懸け焼上りたり。それより二条の新御所に信長の一子ちやせん御曹子におはしますを押寄、即時にほろぼし奉る。

三本を並べてみると、『軍書』の「本能寺の変」は、『悪右衛門伝記』よりも『没落之事』と共通する箇所が多く認められる。しかし、傍線部は『没落之事』にはない。

丹波八上城の波多野氏滅亡を描いた戦国軍記に『丹波興廃略記』<sup>④</sup>がある。この中に次のような文章が見える。

信長卿聞召、菅谷藤八ニソレ弓ヨト仰ラレ、シゲ藤ノ弓ヲ取寄一箭射玉エバ、又兵衛ガ射向ノ板ニアタリ是モ目眩デ進得ズ。乙矢ヲ取テ下リ拳ニ八幡大菩薩、堅牢地神昭覧アレ、明智十兵衛ト云人非人大畜生、下臈メガ眉間ヲ射クダキ玉エ。彼メガ子孫荷擔人等ヲ七迄迷途黄泉ノ下ニ召捕ント地軸エヌケヨ、徹セヨトノ玉ヒ御弓ヲステ玉ヒ客殿ニ入玉フ。羽林如何ニト春長軒ニ仰セラル、迄ニテ御自害有シナリ。  
(光秀叛逆之事)



傍線をほどこした『軍書』の記事が、『丹波興廃略記』の一場面に近似している。『軍書』と『丹波興廃略記』の前後関係はわからないが、どちらも丹波に伝わる軍記であることから、直接の影響関係、あるいは共通する資料の利用が想定されるだろう。

また、記事比較表に示したように、『没落之事』が持たない「直正、朝日城主となる」からキ「信長、秀吉・光秀を山陰道へ派遣する」の記事を『軍書』が持つことから、『軍書』は『没落之事』に直接拠つて成立したのではないと考えられる。この二本が拠つた伝本は、同じ伝本とまでは言えなくとも、近い本文を持つ伝本であったことが推測できる。『軍書』と『没落之事』は、兄弟関係に近い立場に位置付けられよう。

以上のように『軍書』は、様々な伝承を場面を選ばず積極的に取り入れ補入していることが明らかである。より多くの読者に受け入れられるように、『軍書』は人々の興味をひくような内容に仕立て直した伝本だと考えられる。

#### 『丹波氷上郡黒井赤井悪右衛門尉直政落城事附明知日向守光秀没落之事』

さて最後に『没落之事』にふれておく。記事比較表からもわかるように、『没落之事』はアからキの記事、すなわち直正が丹波国内を謀略と武力で治めていく過程を書かないという不思議な伝本である。他の三本の冒頭部は、「そもそも丹波国氷上郡黒井の城主」（『赤井伝記』）、「一抑天正三年五月八日」（『悪右衛門伝記』）、「そもそも天正中にあたつて」（『軍書』）であり、『没落之事』では「そもそも天正年中明智日向守光秀は」と他の三本と揃えたような書き出しになっていることから、欠落ではなく意識的に削除した跡がうかがえる。地元に残る本ならば直正の剛勇ぶりを強調してもよいぐらいであるのに、なぜか『没落之事』は直正の所業に

触れたがらず、対明智軍の活躍だけを描くのである。直正は実家の赤井一族とともに、荻野十人衆や黒井城の重臣たちを懐柔して味方につけ、綿密に計画を練った上で荻野秋清を刺殺したという。主人を殺された秋清の家来たちは、抵抗もせず直正に従っている。<sup>⑩</sup>『没落之事』が、叔父であり養父でもあった荻野秋清を殺し黒井城を乗っ取った直正の「悪行」を伝えたくなかったからアからキの記事を持たないとも考えられる。現時点では、秋清の家臣の子孫にあたるような人物が、主君の仇を討たなかった先祖を恥じて、江戸時代に削除を行った可能性もあるということだけを指摘するに留めたいと思う。

(五)

今回とりあげた赤井氏関係軍記の祖本の作者は、黒井周辺に生きた人物であろうし、それぞれの伝本に見た改変も地元に生きた人々によってなされたものである。僅か四本の伝本だけでもこれほどに違った改変が認められるのは、赤井直正と黒井城をめぐる出来事が地元の人々にとって興味深く共感を得る題材であったことの証しである。地元に残らなければこの四本は、これほどの改変を被ることもなかったであろう。

題材となった地方の合戦の地元で生きる人が書いた軍記が、地元において改変され、地元で根付き伝えられていく。軍記の誕生から改変、享受まで地元と密接に関わるこのような性質は、前代の軍記作品にはほとんど見られないものだろう。この性質はこの時代の軍記の特殊性ではあるが、軍記文学史の上で違った流れを感じさせるものではない。地方で起こった戦を題材に軍記が生産され、積極的な改変が行われることが可能であるのは、地方の人々が前代の軍記作品に触れ馴染み、そして憧憬を抱いていたからである。『平家物語』や『太平記』といった軍記物語が、時間や空間や文化圏を越えて地方に浸透し、局地的な戦いを題材とした戦国軍記製

作の下地を提供していたとも言える。先行軍記からの影響を地方の戦国軍記に見るのは容易であり、『赤井伝記』にも「揉みに揉んでぞ責め戦ふ」といった表現が見られるのは、地方の人々が先行の軍記物語に触れる機会の少なくなかったことを示している。

軍記文学の流れの中で戦国軍記を捉えるとき、地方が果たした役割を抜きにして論じることには出来ない。赤井氏関係軍記は、戦国軍記における地方性とは何かを考える手がかりを我々に与えてくれる。

注① 『丹波興廢略記』（篠山市民センター図書コーナー蔵）上巻に、光秀を敗走させた直正を「丹波の赤鬼」と世間の人々が称したとの記載が見える。

② 『陰徳太平記』巻六十二「但馬の国竹田城合戦之事」

③ 『常山紀談』拾遺巻四の十二「赤井惣右衛門武勇の事」

④ 春日町歴史民俗資料館編（一九九四年三月）。なお、『赤井伝記』・『没落之事』の引用は、本書所収の本文による。

⑤ 芦田確次・青木俊夫・村上完二・船越昌編。なお、『軍書』の引用は、本書所収の本文による。

⑥ 伊賀上野市赤井直通氏所蔵古文書。芦田確次・青木俊夫・村上完二・船越昌著『丹波戦国史』（一九七三年 歴史図書社）「第三章 戦国動乱期の丹波」掲載写真による。

⑦ 『長水軍記』については、本章第七節で詳しくとりあげる。

⑧ 『悪右衛門伝記』の本文には、句読点等を適宜施した。

⑨ 芦田確次・青木俊夫・村上完二・船越昌著『丹波戦国史』（一九七三年 歴史図書社）「第五章 黒井城とその遺構」による。

- ⑩ 「本能寺の変と戦国軍記―明智光秀謀叛原因説の展開とその位相―」（『淑徳国文』三十五 一九九四年二月）
- ⑪ 篠山市民センター図書コーナー蔵 『丹波興廃略記』に適宜句読点等を施し引用した。
- ⑫ 同注⑨ 「第三章 戦国動乱期の丹波」による。
- ⑬ 先行の諸軍記からの影響を明らかにした論文に武田昌憲 「『大友記』と『太平記』―『太平記』の影響―」（『茨城女子短期大学紀要』二十一 一九九三年三月）・北川忠彦 「戦国軍記『清良記』にみる『平家物語』『太平記』の受容」（『女子大國文』百十五 一九九四年六月）などがある。

## 第六節 赤井悪右衛門伝説の行方

(一)

丹波国黒井城城主赤井（荻野）悪右衛門直正が武勇に秀でた人物であったことは、次にあげた『陰徳太平記』<sup>①</sup>の記事からもうかがえる。

抑く、此軍監（筆者注：竹田城城主大田垣朝廷）は、丹波の荻野悪右衛門直正が甥にて、近国無双の勇士也、直正胄に唐の頭かしらを付て著たりければ、渠敵陣かたに赴まけるに、唐の頭よと見るや不いなや、敵恐懼戦慄して、不る戦に逃散する程の至剛の名ある者也けり、さる故近国に於て唐の首を付て著る者無りけり。

（巻六十二「但馬の国竹田城合戦之事」）

敵が直正の姿を見ただけで恐れを成して逃げ去るほど、彼の勇猛ぶりは近隣に鳴り響いていたのである。「丹波の赤鬼赤井悪右衛門」という魅力的な異名を持つ直正の姿は、近世に作られた出版された軍記や軍談の類にも様々な形で描かれ、「赤井悪右衛門伝説」が形成されていった。

本節では、赤井悪右衛門伝説を近世の文学作品の中に追うことで、武将伝がどのように展開し発展していくのかを探っていく。更には、丹波で書かれた戦国軍記の中の悪右衛門像を押さえ、地方の戦国軍記は、一般に広く流布している武将伝をどういった形で取り込んでいくのか、その一例を示したい。

織田信長の命を受けた明智光秀の丹波攻めが始まったのは、天正三年（一五七五）十月である。直正を取り巻く丹波の情勢を確かめるため、『史料綜覧』から関係記事を抜き出し表にまとめた。

年月日	事項
天正三・10・1	信長、惟任光秀ヲ遣シ、丹波荻野直正ヲ伐タシムルニ依リ、同国片岡藤五郎ヲシテ、忠節ヲ效サシム、
天正三・10月	是月、信長、但馬山名氏政等ノ請ヲ納レ、惟任光秀ヲ遣シテ、荻野直正ヲ同国竹田ニ攻メシム、光秀、直正ノ本国丹波黒井城ニ退クヲ追ヒテ、之ヲ困ム、同国ノ諸士、光秀ニ一味ス、
天正四・1・15	丹波八上城波多野秀治、惟任光秀ニ背キテ、其營ヲ襲ヒ之ヲ破ル、尋デ、光秀、近江坂本ニ歸ル、
天正四・2・18	惟任光秀、丹波ニ下向ス、
天正五・10・29	惟任光秀及ビ長岡藤孝、信長ノ命ニ依リ、丹波ニ入り、諸城を攻ム、是日、萩井城ヲ攻略ス、
天正六・3・4	信長、長岡藤孝、惟任長秀等ヲ丹波ニ遣シ、惟任光秀ヲ援ケテ、波多野秀治ヲ八上城ニ攻メシム、
天正六・3・9	丹波黒井城ノ荻野直正歿ス、
天正六・4・10	信長、瀧川一益、惟任光秀等ヲ丹波ニ遣シ、園部城ノ荒木氏綱ヲ攻メシム、尋デ、一益等、之ヲ降ス、

天正六・ 9月	是月、信長ノ將津田信澄、惟任光秀、長岡藤孝等、丹波ニ入り、長澤義遠ヲ小山城ニ攻メテ、之ヲ殺ス、尋テ、高山、馬堀両城等ヲ攻略ス、
天正七・ 3・ 28	信長ノ將惟任光秀、丹波龜山ニ出陣ス、
天正七・ 5・ 5	信長、羽柴秀吉ノ請ニ依リ、諸將ヲ丹波ニ遣シ、惟任光秀ヲ援ケテ、同国水上城波多野宗長、宗貞父子ヲ攻メシム、是日、宗長父子、自殺ス、
天正七・ 6・ 2	惟任光秀、丹波八上城波多野秀治、秀尚兄弟ヲ降シ、近江安土ニ送ル、是日、信長、之ヲ磔ス、
天正七・ 7・ 19	惟任光秀、丹波宇津城ヲ攻メテ、之ヲ陥レ、尋テ、同国鬼城ヲ攻ム、
天正七・ 7月	惟任光秀、長岡藤孝ト共ニ波多野氏ノ余党ヲ丹波峰山城ニ攻メテ、之ヲ陥ル、
天正七・ 8・ 9	惟任光秀、赤井直照ヲ丹波黒井城ニ攻メテ、是日、之ヲ降ス、

光秀との戦いが続く緊迫した状況の中、直正が死去したことは、前節でとりあげた『赤井伝記』等の赤井氏関係軍記の他、『兼見卿記』、内閣文庫蔵『赤井家譜』にも見える。「丹州荻野悪右衛門尉病死云々」（『兼見卿記』天正六年三月十四日条）、「天正六寅戌年三月九日直正四十九歳病テ癰ヲ而卒ス於黒井ニ」（『赤井家譜』）との記述より、直正は討死ではなく黒井城内で病死したものと確認できる。直正の死去から一ヶ月後の四月十日には園部城が落ち、翌年五月には水上城が落城、六月には八上城城主波多野秀治らが処刑され、七月に宇津城、鬼城、峰山城が落城している。反信長派の武将が籠る丹波の城々が直正病死後次々と攻略されていたのである。そして丹波国内で最後まで光秀に抵抗し続けた城が、主直正を失った黒井城である。『信長公記』<sup>③</sup>には、黒井城落城の様子が次のように書かれている。

(天正七年)八月九日、赤井悪右衛門楯籠り候黒井へ取懸推詰候処に、人数を出だし候。則、瞳と付入に外くるはまで込入り、随分の者十余人討取る処、種々降参候て退出。

直正が居城としていた黒井城は、保月城とも呼ばれ、標高三五六メートルの猪ノ口山全体を要塞とした典型的な山城である。直正の死後、この城に籠り光秀と戦ったのは、直正の舎弟「悪七郎」であったと『赤井伝記』は記している。「悪七郎」は幸家のことであろう。幸家は、直正の嫡子直照が幼少であったため、兄直正死後の赤井氏を束ね光秀と戦ったが、黒井城落城の折に城を出ている。『赤井家譜』には慶長十一年(一六〇六)四月二十四日、七十五歳で伏見に没したとある。

『信長公記』には直正死亡の記事はない。天正七年八月九日条の傍線部「赤井悪右衛門」は、「悪七郎」幸家と「悪右衛門」直正を『信長公記』が誤ったものと考えられる。この混同は、近世に成立した秀吉・光秀関係の軍記や講談にそのまま引き継がれ、史実から離れた悪右衛門伝説が誕生する下地となる。

(三)

貞享三年(一六八六)執筆の序を持つ『織田軍記』の巻第十八「丹波国波多野由来事附毛利軍勢播州働事」は、天正六年四月に光秀等が丹波国へ派遣される記事で始まる。

同月十日、惟任、惟住、瀧川等丹波国へ差遣はされ、御敵城荒木山城守氏綱が構を取巻き攻め戦ふの處に、水の手をとられ迷惑し、終に降参開城し畢んぬ、惟任日向守人数籠め置き、同六月廿六日京都に到て、各帰陣す。



これは『信長公記』卷十一の同日条に拠った記事である。この後に『織田軍記』は、「抑も丹波國は、元弘建武より赤井、波多野、久下、長澤の四家、代々の國人にて一國を割分け持來る處に」と続き、丹波國が細川家の領國となり、守護代の内藤氏に國人の四家が従うようになったこと、四家は互いに対立していたが、依藤太秀郷の後胤である波多野氏が他の三家を押さえ、更には内藤氏をも攻め滅ぼし、終に丹波一國を支配するようになったことを記す。

總領を東波多野と云ふ、屋形家と稱し、八上の城に居住す、天文の比の東波多野を上總介晴通と云ふ、嗣子なきが故に、因州の一族波多野秀行が子千熊丸を養ひて其家を續がしむ、今の八上の城主右衛門大夫秀治、是れ也、晴通在世の時は三好修理大夫長慶の舅なりしが、息女離別せられて後、當國住人赤井右兵衛大夫家清を聳とす、今の秀治同胞の妹二人あり、一人は當國穗壺の城主赤井悪右衛門景遠に嫁し、一人は播州三木の城主別所小三郎長治に嫁せり、

『織田軍記』は傍線部のように、波多野家由来の中で秀治の妹二人について触れている。妹のうち一人は「穗壺城主赤井悪右衛門景遠」の妻であったという。黒井城周辺には黒井城の支城を始め、赤井氏旗下の武將の持城が多く点在していた。穗壺城はその中の一つで、赤井氏に従っていた稻繼氏の城である。『織田軍記』はおそらく黒井城の別名である「保月城」と「穗壺城」を誤ったのであろう。また、悪右衛門直正の兄が「家清」であったことは種々の史料に確かめられるが、赤井氏の中に「景遠」を名乗っていた人物は見当らない。悪右衛門が「直正」以外の名を名乗っていた形跡もない。

『織田軍記』卷第十九「惟任光秀丹州働事附赤井悪右衛門景遠事」では、初井城等を攻め落

とした光秀が謀略を以て波多野氏を八上城からおびき出し殺したことを載せ、その後赤井氏について次のような記載がある。

それより奥丹波へ相働き、波多野が殘黨赤井氏が籠る處の、鬼が城へ相働き、近邊放火し、向城をかまへ、惟任人数籠置き畢んぬ、抑も其比の赤井の總領赤井五郎忠家は、波多野上總介晴道外戚の孫なれども、其比幼少たるに依て、伯父の赤井悪右衛門景遠（或は直正に作る）後見して、遺跡を領す、忠家が父右兵衛大夫家清は、丹州氷上天田船井三郡を領すといへども、死去の後、其領所は皆波多野家より支配せしむ、就中悪右衛門景遠は、近国無双の大剛の者にて、縁者の波多野家滅亡の後といへども、猶一分を割據し、甥の五郎忠家を守立て、獨り丹州に臂を張つて、光秀に敵對す、誠に是れ一騎當千の勇士と云つべき者歟、

討死した兄家清の嫡子忠家の後見をし、直正が赤井家を守つたことは『赤井家譜』にも見える。また、悪右衛門を「景遠」としながらも、『織田軍記』は「直正」の名も合わせて記している。更に黒井城落城については、

丹州に於て、惟任日向守光秀、人数を出し、赤井悪右衛門殘黨等楯籠り候ふ黒井へ取掛け候ふ處に、人数を出し候、即ち付入に外曲輪まで込入り、隨分の者數十人討捕り候へば、城兵等種々降參候うて、退出し畢んぬ、悪右衛門直正は、其比疔瘡を煩ひ、病死する故歟と云云、（巻第十九「自奥州進上スル名馬名鷹一事附貞安上人以下被下御褒美一事」）

と、先に挙げた『信長公記』天正七年八月九日条に拠りながらも、直正が病死したことを書き

加えている。

『織田軍記』が『信長公記』以外に依拠した資料としては、甫庵『信長記』や『新撰信長記』、『増補信長記』が知られている。<sup>⑥</sup>赤井悪右衛門の名は、これら三作品には見えず、『織田軍記』が何によつて赤井悪右衛門の名を「景遠」としたのかは不明である。

(四)

元禄十五年(一七〇二)に出版された『明智軍記』<sup>⑦</sup>では、赤井悪右衛門の行動は事実から離れ、『織田軍記』とも大きく相違した内容になる。

丹波に攻め入つた光秀は亀山城などを攻略し、波多野氏の籠る八上城を取り囲む。城方からの降参の申し出を受けた光秀は、飢えた城兵に食料を与え、波多野兄弟を安土へ送るが、信長はこれを許さず切腹を命じる。光秀はその後鬼ヶ嶽城を落し、「高見ノ赤井五郎・保月ノ赤井悪右衛門ナド力楯籠リケル城々順見」のために金山へ本陣を移した。そこへ大雪に乗じた「赤井五郎・同悪右衛門等」が夜討を仕掛け、光秀は亀山まで退く。翌年八月光秀は再び丹波に入り、「保月城」攻撃のため八幡山に着陣する。赤井勢が討つて出て来たところを光秀勢は金山を目指して敗走するが、これは光秀が仕組んだ罠で、追撃してくる赤井勢を伏兵で攻撃する作戦であつた。光秀の陣屋が燃える火を「保月・高見ガ城、黒井・穂坪以下ヨリ是ヲ見テ」味方が勝つたと思ひこんだ赤井勢は、我先にと城から討つて出て来る。「大将赤井悪右衛門尉ハ、紺糸ノ鎧ニ、竜頭居タル白筋ノ甲ノ緒ヲ縮、驪ノ馬二具鞍置テゾ乗タリケル」。光秀は采配を取つて攻撃に転じ、不意をつかれた赤井勢の多くは光秀勢に討たれた。

大将赤井五郎宗夏ハ数箇所疵ヲ蒙リ、南ナル山手ニ付テ、播磨路指テ落行ケリ。赤井悪

右衛門宗重ハ、五拾騎計ニ討ナサレ、居城ヲサシテ引ケルガ、保月ニ早火ノ手ノ上ルヲ見テ、今ハ倍トヤ思ケン。川端ヨリ取テ返シ、散々ニ戦テ、明智左馬助力郎等林半四郎ト云者ニ、終ニ討レテゾ失ニケル。

悪右衛門が宗重という名であったこと、悪右衛門は林半四郎という明智左馬助の郎等に討たれて死んだということ、保月城と黒井城が別の城であったということが『明智軍記』と『織田軍記』の相違点であり、史実とも異なる点である。『明智軍記』が何に拠つて悪右衛門の名を「宗重」としたのかはわからないが、武勇の誉れ高い悪右衛門を光秀が勝れた計略でもつて討取るという内容に発展させている。光秀の有能ぶりを強調するために悪右衛門伝説をうまく利用したものといえよう。

(五)

猛将「赤井悪右衛門」の名が、別の伝説を生み出すのは、『太閤真蹟記』<sup>⑧</sup>においてである。五編巻二十二から二十三に登場する悪右衛門の名は、『織田軍記』と同じ「景遠」であり、奥丹波の鬼が城に籠っていたとする。鬼が城も赤井氏の城の一つであるが、光秀が丹波攻略を進めていた際、鬼が城を守っていたのは、悪右衛門の兄の子忠家である。八上城落城後、光秀はこの城を攻めあぐねる。

ここで新しく登場するのは、脇坂甚内安治である。後に「賤ヶ嶽七本槍」の一人に数えられた安治は、播州で戦っていた秀吉に従っていたが、援軍として五百余騎を率い丹波に派遣される。安治は、秀吉が得たある情報を光秀に知らせる。その情報とは、悪右衛門が立居もままならない程の重病に侵されているということである。これを聞いた光秀は、城に猛攻撃をかける

が、「城將景遠病中なれども流石勇士なれば、其家人共命を惜しまず防ぐ」と城の守りは堅く容易に落城しそうにもなかつた。そこで光秀は、兵の損失を防ぐため悪右衛門に開城を勧める策をとる。安治は自ら進んでその使者の役に任じられた。

このあと『太閤真蹟記』は、赤井家の由来と赤井家の家宝「貂の皮」の由来を挿入する。清和天皇五代の孫源頼季から七代にあたる赤井藤太景広と弟の黒井五郎景次は、兄弟揃って源義経の家来であつた。兄景広は一の谷の合戦で平教経に討たれ、弟景次は安宅の関で義経の身代わりとなつて「忠死」したという。これを聞いた源頼朝は、兄弟の忠義に感じ、一の谷で討死した赤井景広の遺児に丹州船井郡を与えた。その八代のちの景忠は、足利尊氏に従つて六波羅責めに功をたて、丹波六郡のうち三郡を領する程になつた。ある時、景忠が大江山へ狩りに出掛けて貂の雌雄を仕留め持ち帰つたところ、その夜の夢に貂が現われ、首は地中に埋めて弔い、皮を家宝とするならば、子孫の武運を守り、火災からも守るであろうと告げる。景忠はその後細川顯氏の手し属し楠正行と戦う。ある戦いの場で、敵に攻められ急ぎ敗走し、刀を入れた貂の皮を陣中にわすれてしまう。景忠はすぐさま取つて返すが、味方の陣は焼け野原となつていた。陣の跡の灰を除けさせ貂の皮を捜したところ、全く焼けた形跡のない無傷の貂の皮が見つかり、景忠はこの貂の皮をますます大切に秘蔵したという。貂の皮は赤井家の家宝として代々伝えられ、戦死した兄家清から、悪右衛門が譲り受けていた。

貂の皮の由来に触れた後、『太閤真蹟記』は脇坂安治に焦点を戻す。安治はただ一人で城に乗り込み、悪右衛門に対面する。悪右衛門は腫れ物を患つているとは見えず、近臣を遠ざけ腹心の家来に会うように安治を近づけさせた。その大胆不敵な様子に安治は感心する。開城を勧める安治に悪右衛門は、波多野との盟約を貫く信義を強調、その義勇に再び感動した安治は、有名な雌雄の貂の皮を譲つて欲しいと乞う。悪右衛門は雌の貂の皮のみを安治に与え、雄の皮は最期の戦に必要なだから、欲しくば自分を討取つて手に入れよ、と言つて安治を帰らせる。こ

の後、悪右衛門は腫れ物の上を布で堅く巻き付け鎧に身を堅め、雄の貂の皮で作った差物を帯び、城外へ討つて出る。明智勢はこれを見て、「すわや、貂の皮が出たり。例の荒物油断すなと恐怖の心より思はず颯と引退きたゞよふ」有様だったという。悪右衛門は群がる敵をなぎ倒し奮戦するが、次第に兵を討たれ、自身の体も腫れ物が破れて痛みがひどい状態であった。弱った悪右衛門を組み敷いた安治がためらうのを、悪右衛門は下から励まし、終に安治は悪右衛門の首と貂の皮を手に入れたのであった。

『太閤真蹟記』の貂の皮伝説はまだ続く。悪右衛門から譲られた貂の皮を家宝とした脇坂家について次のように記す。

秀吉の御代となつて脇坂安治も淡州須本の城主に補せられ大名なりける故、件の貂皮を以て鎧の鞞とし、往來行列に用ひられける。子孫繁昌して今に脇坂家貂皮の投鞞とて称賞し、諸大名多き中にも勝れて行列美々敷見ゆるも此投鞞の徳なりとかや。

文化元年（一八〇四）に編集された『武鑑』巻之二の「脇坂淡路守安董」の項には、槍印として「てんのかわ」が描かれている。また、天明八年（一七八八）に刊行された『柳多留』<sup>⑨</sup>十二篇に、関ヶ原合戦の途中で関東方に寝返った脇坂氏を評した「関ヶ東へいたちは道をきらぬなり」という川柳が掲載されていることからわかるように、江戸時代、脇坂家の貂の皮の槍鞞は有名であった。しかし、脇坂氏の貂の皮は江戸中期以前にはさかのぼれない。貂の皮伝説は、寛永十九年（一六四二）成立の『脇坂記』<sup>⑩</sup>には見えない。

永禄十二年己巳。明智日向守光秀織田信長の命を請て、丹波国黒井の城を囲み、赤井悪右衛門尉直正を攻る時、安治十六歳にて菅才藏<sup>後に氏を藤と改</sup>を同心し、明智か手につき、黒井の

町口の簀戸を切ひらき、内に入て、十文字の鎗持たる敵兵と戦ひ、切ふせ頸を取。鎗鎧刀脇差までとる。

『脇坂記』卷上「安治」の項には、このように安治が黒井城攻めに参戦していたとするもの、開城を勧めに単身城へ乗り込んだことや、悪右衛門を討ち取り貂の皮を手に入れたとの逸話はない。

大名行列に掲げられる貂の皮の槍鞘に触れて光秀の丹波平定を終るあたり、大衆の興味を引くように仕立て上げた芸能的な軍談にふさわしい内容と言えよう。『太閤真蹟記』は丹波の猛将赤井悪右衛門伝説を脇坂家の伝説に塗り替え、実際に目で確かめられる貂の皮の槍鞘の由来にまとめ上げたのである。

(六)

『太閤真蹟記』に依拠して成立したとされる『絵本太閤記』<sup>⑩</sup>では、悪右衛門伝説がかなり変化する。直正と悪右衛門を別人とし、黒井城と保月城も別の城とする。『絵本太閤記』三篇巻之一「光秀智計滅三亡赤井家」の中で、大雪の夜、赤井勢が光秀の金山城を攻め落としたことについて、

高見の城主赤井五郎忠家、保月の城主赤井悪右衛門景遠は、大雪を便として光秀を追崩し勝利を得しより、其勢遠近に震ひ、當國近國の浪人ども、我もくと赤井に一味し、今は究竟の剛、先龜山の屬城黒井、鹿集、餘田の城どもより征伐せんと、

傍線を施したように、悪右衛門は「景遠」という名で保月城の城主であり、保月城とは別に亀山の属城の黒井城があったとする。黒井城の城主については、「此城の大將は黒井刑部少輔直政」とあり、黒井城の城主直政と保月城の城主悪右衛門は別人であるとする。光秀に攻められた黒井直政は懸命に防ぐが、力尽きて伏見へ落ち延びたと『繪本太閤記』は伝える。一方、保月城の悪右衛門景遠は『明智軍記』の描くところと同じく、光秀の罠に陥り、敗走する光秀軍を追いかけ深入りし、伏兵にかこまれて散々に戦った後、明智左馬介の郎等林半四郎に討たれて死ぬ。『繪本太閤記』の悪右衛門は、『明智軍記』の「悪右衛門宗重」を『織田軍記』や『太閤真蹟記』と同じ「景遠」と替えながらも討死する場面設定は『明智軍記』を踏襲している。ただし黒井城には「直正（政）」という武勇に秀でた城主がいた、ということを入れておきたかったためか、黒井城の黒井直政を登場させている。伏見に落ち延びた、というのも、直正の後を継いだ弟幸家が、落城する黒井城から逃れ、後に伏見で亡くなったとの記述がある『赤井家譜』を思い出す内容である。

『繪本太閤記』は、『太閤真蹟記』ではなく『明智軍記』の描く悪右衛門像を取り入れている。よって脇坂安治の活躍もなく、貂の皮伝説にも触れない。また、できるだけ史実に近付こうとしたためか、「黒井城の直正」を登場させて明智勢と戦わせ伏見に逃がす、といった苦心の跡も見られる。『繪本太閤記』の悪右衛門伝説は、浜田啓介氏の指摘されるように「教養人的に整備されたが、軍談講釈の大衆芸能的なおもしろみは減退した」<sup>②</sup>逸話の一つとも言えよう。

(七)

『太閤真蹟記』が描いた貂の皮伝説は、そのまま『真書太閤記』に引き継がれていく。貂の皮伝説の主人公は、赤井悪右衛門ではなく脇坂安治である。脇坂家は播州龍野藩主となり幕末



まで龍野を治めた。脇坂家の家宝貂の皮の槍鞘は、脇坂安治を祀る龍野神社に今も伝わる。また、司馬遼太郎作『貂の皮』は、この伝説に題材を得た短編小説である。

赤井悪右衛門の勇猛ぶりは貂の皮とともに脇坂家に譲られたかのようなのだが、史実から離れて成長し続けた悪右衛門伝説は、悪右衛門の故郷丹波で作られた戦国軍記ではどのような形を見せているのか。

前節で取りあげた赤井氏関係軍記の四作品に貂の皮伝説は書かれていない。悪右衛門を「直正」とすることや黒井城落城前に病死したことなど、四作品ともに基本的には史実に沿った悪右衛門の行動を伝えている。赤井氏関係軍記の他にも丹波には、『丹陽軍記』『初井家日記』『高城軍記』『丹波家興廢略記』といった地元で書かれたと考えられる戦国軍記が存在する。

『丹陽軍記』は、光秀に味方した丹波荒塚山城の城主近藤秀政の働きを中心に、光秀が抵抗する丹波の城々を攻め落としていく様子を描いている。詳細はわからないが、所蔵者の近藤秀一氏は、この秀政の子孫であろう。家の記録としての役割を持った地方軍記と考えられる。『初井家日記』『高城軍記』『丹波家興廢略記』は、波多野氏滅亡を扱った作品である。いずれも波多野氏側の立場から光秀の丹波攻めを描いている。これら四作品にも赤井悪右衛門は登場し光秀軍を相手に勇ましく戦う姿が書かれているが、悪右衛門の死には触れない。従って、貂の皮伝説は書かれていない。唯一『高城軍記』の大尾近くに次のような一文が見える。

氷上郡を後年秀吉公臣の脇坂甚内と云人赤井責戦ひ黒井の城を責落し依之秀吉公三国平均也

「脇坂甚内」が赤井と戦い黒井を責め落とした、という内容であるが、赤井責めの中心はもちろん光秀であり、脇坂は秀吉から派遣された援軍に過ぎない。この一文は後代の加筆と考え

られるが、貂の皮伝説をわずかにうかがわせる文でもある。

悪右衛門を、『丹陽軍記』は「景遠」、「劔井家日記」は「景遠」「景政」「直次」、『高城軍記』は「景直」、『丹波家興廢略記』は「直政」「家政」「景直」として一定しない。

『丹陽軍記』は巻末に、「元和七酉年六月日／此巻卷者久下弥太郎方有之候／写置者也／干時元禄八年三月吉日藤原秀定／此一冊者従先代有之候処／書中相違有之候様ニ存候へ共／是式之書といへ共古人選述ノ之物ニ候へハ私ニ改申事も如何ノ難致後人之待つ改正のみ／延享三年九月十一日秀元花押」とあり、元和七年（一六二一）に書かれたものを元禄八年（一六九五）に書写し、更に延享三年（一七四六）に書写したものらしい。原本の所蔵者であったという久下氏は、『織田軍記』にも紹介された丹波の国人であり、天正年間の光秀丹波責めの際、居城の玉巻城（久下城）を攻められている。「元和七年」成立を信じるならば、悪右衛門を「景遠」とした最も古い例であるが、広く流布した形跡はない。悪右衛門が「長八五尺八分力ラ八十人ニモ当ルト云リ。形相世ノ常ニカハリテ異相ノ男」であったとするのも『丹陽軍記』のみが伝える容姿である。これらの点を考慮に入れると、悪右衛門を「景遠」とする『織田軍記』などの作品に『丹陽軍記』が影響を及ぼした、とは考えにくい。

さて、この中で注目したいのは『丹波家興廢略記』に登場する悪右衛門である。波多野氏に近い作者圏が想定できる本書は、悪右衛門の剛勇に価値を認めず、彼を批判する点が特徴的である。

『国書総目録』には、国会図書館蔵本や東京大学史料編纂所蔵本など計十一冊の『丹波家興廢略記』の伝本が記載されている。「丹波家」は波多野家を指す。冒頭では、足利義昭が織田信長の尽力により上洛し花の御所に入るいきさつを述べる。後に信長と対立した義昭が支援を求めたのが本願寺や毛利氏・波多野氏であり、足利將軍家と関わりの深い波多野氏が信長によって滅ぼされる顛末を伝える。

『丹波家興廢略記』の中で活躍する重要人物は、畑牛之丞守能である。波多野氏の重臣である彼の名は、『靱井家日記』や『高城軍記』にも見えるが、とりたてて注目されることはない。ところが、本書の守能は、先見の明のある有能な武将として描かれている。

毛利氏と織田氏のいづれにつくかを迷った波多野氏は、使者を安芸に送って毛利氏の様子を探らせる。その使者の一人が守能であった。毛利の家臣たちの無礼な態度と当主輝元の愚将ぶりに立腹した守能は、毛利氏の怠慢を批判し、信長に敵対せず協力するよう勧める。帰路の途中で播州三木の別所氏のもとに立ち寄り、ここでも信長方に味方するよう説得をした後丹波に帰り、衰えの見える毛利ではなく、勢力を拡大しつつある信長に味方すべきであると守能は波多野秀治に強く勧める。この意見を入れ、秀治や家臣たちは信長に従うことを一度は決定する。ところが、長年にわたる毛利氏との交流の断絶を憂えた赤井悪右衛門らは密に秀治を訪ね、信長の命で丹波に進軍してきた明智光秀をだまして生捕りにする計画を勧める。織田氏に味方するには、これに反対する「弓矢に高慢」な「当国の副将」赤井一族を討たねばならないので、軍勢を赤井責めに差し向けて欲しいと光秀に言い送り、光秀が赤井に責め寄せたなら、主立った織田の武将たちを生捕りにして、毛利・武田・上杉・本願寺・足利義昭等と示し合わせ、信長を取囲んで討つ、という策を悪右衛門は提案する。秀治はこの策を入れて光秀に使者を送り同意のそぶりを見せ、これを信じた光秀軍が、天正二年夏、悪右衛門の籠る高見金山城を囲んだとき、赤井・波多野軍は不意に光秀軍に責め懸った。多くの兵を討たれた光秀はわずか四五騎になって敗走、赤井の奸計を知った信長は激怒し、波多野家を根絶やしにせよと光秀らに命じる。畑守能は、悪右衛門らの浅はかな謀計を嘆き、秀治・悪右衛門に教訓して生捕りにした明智軍の兵たちを解放させた。この悪右衛門の計略について『丹波家興廢略記』は、「赤井か武略大なる害となつて国中に蠱毒をは流せし也」「赤井といふ大剛の者か亡国の端と成て丹波家亡果」と評し、「世上に悪右衛門を大剛の猛将と唱」えるが、この度の「呼曳軍」は「武

略余りて不思議なる模様」と、悪右衛門の武勇が波多野氏（丹波国）を滅ぼす要因となった、と独自の見解を述べている。

波多野秀治等が殺されたのち、守能は畑城に籠り、光秀・織田信澄の軍勢に囲まれる。これほどに優れた人物を殺すのは惜しいという信長の意見もあり、光秀は、開城し手勢とともに城を退去せよと守能に勧めるが、守能はこれを断る。仕方なく光秀は畑城を責めるが、城の守りは堅く激しい戦いが続く。光秀は再度守能に使者を送り、子孫に至るまで粗略な扱いはしないから開城するように、と説く。光秀の説得に応じた守能は、城を出て丹波と摂津の境にある曹洞宗永沢寺において出家し、それから高野山や天川にしばらく閑居する。後に摂津国丹生山に移り住んだという。

『丹波家興廃略記』の巻末には、次のような記載が見える。

丹波之事跡を記セル書葦田記ト云有。撰者八久下式部少輔源長家、赤井治郎左衛門源景光、赤井新八郎源眞幸、須知主水正源景民、荒木兵部少輔藤原氏好、神池沙弥普文院快山、天正二甲戌七月篇之。丹波夜話ト云アリ。丹波国乱ノ跡ヲヒロイテ書シ記録也。余田左馬助国弘ガ子権之佐国時、萩野宥之允、神池清次郎、井原窟ノ沙弥霞雲坊、正法山石蔵寺沙弥鉄透、高橋源太夫盛胤等ガ天正三四年ノ間ニ書記スル所也。又丹波茶話ト云アリ。日下部喜左衛門、八木ノ則景書記スト云云。其外初井記又ハ管領東西ノ館ニテ記録スル所、此等ノ篇ヨリ文章ヲ会釈シ元禄元年ニ記録ス。更ニ旧聞ノ説等ヲ以テ校索之由ニテ丹波興廃略記ト号スト云云

天正二、三、四年（一五七四〜一五七六）に成立したという「葦田記」「丹波夜話」とともに、「丹波茶話」「初井記」、および東西の波多野氏の記録を基として元禄元年（一六八八）

にまとめた、という成立事情が記されている。「葦田記」「丹波夜話」「丹波茶話」という具体的な書名が挙がっているが、現在これらの書は確認できていない。『丹波家興廢略記』成立当時、丹波には今以上に多くの書が残っていたことがわかる。波多野氏滅亡を描いた三作品の中の悪右衛門が、「景直」を始めとする様々な名で登場するのは、複数の書物に依拠した結果なのかも知れない。

東京大学史料編纂所には、三本の『丹波家興廢略記』が所蔵されている。そのうちの「丹波国多紀郡犬飼村上田小膳藏本」を明治二十一年に書写した伝本は、次のような記事を載せる。

夜話に同秀吉卿猶子結城少将秀康後に越前黄門殿といふ奥に明知光秀へ降参して東方の先鋒を承り、後には光秀に奔走せられ丹波の似せ七頭と称せられたる者の内に高屋前の筑後宗麟か子の筑後と云し者に四千四百解但内千七百石は与力領外に弟吉右衛門に四百石を玉る。

同伝本は記事の錯綜が甚だしいが、記事の冒頭に「茶話に曰く」などという表現があることから、古い形の文章を残す伝本と思われる。ここに引いた文章も「夜話に」で始まっており、「丹波夜話」から抜き出した記事そのまま入れたらしい。篠山市民センター図書コーナー蔵本では、同記事に「光秀取立之七頭其外国士之事」と章段名を付し、「夜話に」を取り除き、

結城少将ハ秀康公、光秀へ降参シテ七頭ト称ラレタル。内高屋筑後ニ知行四千二百石、但シ内千七百石ハ与力弟善右衛門ニ四百石ヲ玉ハル。

と変えている。この記事の内容を考えると「丹波夜話」が天正三、四年に書かれたという先の

記載は信用できない。また、『丹波家興廢略記』が元禄元年に成立したとすると、「文章ヲ会釈」したという『羽井家日記』の成立は元禄元年より古いことになる。『羽井家日記』の正確な成立年は不明だが、享保年間（一七一六～一七三五）とする説がある<sup>⑦</sup>。以上の点から、『丹波家興廢略記』の成立が元禄元年とは容易に決められない。「世上に悪右衛門を大剛の猛将と唱」えるとした『丹波家興廢略記』の評も、猛将悪右衛門の名が広く知れ渡っていることを前提にしなければ言えない内容である。

『信長公記』から『真書太閤記』に至る作品中に描かれた波多野氏は、敵に欺かれて捕らえられ処刑されるという非常に無様な最期を遂げている。それに対し、赤井悪右衛門は孤立無援になっても義を守り戦い抜くという勇ましいイメージが、『信長公記』から『真書太閤記』に至る間に次第に強められ、脇坂の貂の皮伝説にまで発展していく。同じ丹波の同時代の武将である波多野と赤井の印象は、あまりにも違いすぎる。これは、波多野氏周辺の人々にとって当然好ましくない差異であろう。

『羽井家日記』と『高城軍記』は、波多野氏の不名誉な印象を塗り替えようと試みている。

『羽井家日記』では、降参ではなく光秀が申し出た和議を波多野秀治は受け入れ、主立った武将八十余人と軍勢一千二百余騎を率いて光秀との対面の場である本目城に堂々と臨んだと書く。また、おめおめと捕らえられたとはしない。突然挑み懸る光秀の兵を波多野勢は即座に百余人殺し「大合戦」に及んだが、多勢に無勢で叶わず、秀治を始め十三人が生捕りになってしまった、と状況を説明する。『高城軍記』でも秀治らが八上城を出たのは降参ではなく、光秀が和睦を申し出たからとする。対面の場で突然襲いかかる光秀の兵たちと戦った末、秀治はその場で自害、秀治の嫡男秀直だけが切腹途中で捕らえられるが籠の中で間もなく絶命する。『高城軍記』の中では、波多野氏の誰も安土に送られることはなく、処刑されることもない。

『丹波家興廢略記』が描く波多野氏の最期は『羽井家日記』に依拠したものである<sup>⑧</sup>。そして

『丹波家興廃略記』の波多野胤貞も『靱井家日記』『高城軍記』と同様に強い。「丹波国風は数代の弓矢を取て武道自慢の国柄」であり、丹波を治める波多野秀治・秀貞は「思慮深き知謀武略兼備の器量」である、と畑守能の口を借りて『丹波家興廃略記』は紹介する。「輝元無智柔弱の愚将」、「義昭朝臣は大樹の御器量なき」人であるのに対して「信長は大旱に雨を得たる大将たり。賞罰正敷して士卒を撫育し給ふに依て好士数輩聚り給ふ」と評価する。波多野氏滅亡の原因は、守能の貴重な意見を入れず、「うつけの様に成行」く毛利への義理を重んじた悪右衛門にあつたとするのは、先に見た通りである。名高い悪右衛門の勇猛さが災いし信長の怒りを招いた結果、波多野氏が根絶やしにされてしまったと、本書は悪右衛門の評価を貶めている。『丹波家興廃略記』は悪右衛門の罪を挙げ彼の名声を下げることで波多野氏の名誉回復を図ろうとする。『靱井家日記』や『高城軍記』よりも工夫をこらし波多野氏の不名誉な印象を払拭しようとする試みているのである。世間に流布していたであろう赤井悪右衛門猛将伝説は、『丹波家興廃略記』の中では波多野氏の名誉のために利用されている。

赤井悪右衛門伝説が新たな展開を遂げ、地元の丹波に戻ったとき、世間一般の評価とは異なつて低く扱われた『丹波家興廃略記』の例は興味深い。受け入れる器の状況によつて、武将伝説は様々な変形を遂げるものらしい。時には、このように武将伝の評価を下げることもある。もちろん、『丹波家興廃略記』における悪右衛門の悪い印象を同じ丹波で生まれた赤井氏関係軍記は許容できないであろう。『丹波家興廃略記』の舞台である丹波の範囲は、波多野氏統治下の領土のみであり、赤井氏の勢力地域は含まない。現代の我々が考える範囲より、もっと限定された地域や享受者を地方戦国軍記に想定しなければならぬ場合もあることが、『丹波家興廃略記』が創り上げた悪右衛門像には表われているのである。

注①『陰徳太平記』の引用は、米原正義校注『陰徳太平記』（一九八三年 東洋書院）による。

②『兼見卿記』の引用は『史料纂集』（一九七一年 統群書類従完成会）による。

③『信長公記』の引用は、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』（一九九二年第七版 角川書店）による。

④『織田軍記』の引用は『通俗日本全史』（一九一三年 早稲田大学出版部）による。

⑤芦田確次・青木俊夫・村上完二・船越昌著『丹波戦国史』（一九七三年 歴史図書社）「第六章 水上郡の古城址」「穂壺城」の項参照。

⑥井上泰至「歴史の語りとその擬作―近世軍記から読本へ」（『江戸文学』第二十二号 二〇〇一年二月）参照。

⑦『明智軍記』の引用は、二木謙一監修『明智軍記』（一九九五年 新人物往来社）による。

⑧松林靖明氏所蔵の『太閤真蹟記』に適宜句読点を施し引用した。なお、九州大学図書館蔵『太閤真蹟記』五編二十一「光秀丹州の家護に補せらるゝ事并小西弥九郎秀吉と問答の事附竹中重治病死遺書の事」には、「悪右衛門景遠は当国無双の勇士なるがゆへ両波多野滅亡して国中の諸士尽く光秀に随ひけれ共、景遠老人随はず。勇気を屈せず防戦す。其働きするどにして寄手損する而已なりしかば、秀レ光責あぐんで有ける処に其後悪右衛門疔瘡を煩ひ終に病死せしむ」（句読点は筆者に拠る）とあり、悪右衛門は病死と史実に基づいた記載も見える。九州大学図書館蔵『太閤真蹟記』の特異性については、注⑩参照。

⑨『柳多留』の引用は、山澤英雄校訂『誹風柳多留』（一九九五年 岩波書店）による。

⑩『脇坂記』の引用は、『統群書類従20輯下』による。



- ⑪ 『繪本太閤記』の引用は、有朋堂文庫『繪本太閤記』（一九一七年）による。
- ⑫ 「繪本太閤記と太閤真蹟記」（『読本研究新集』第二号 二〇〇〇年六月）
- ⑬ 『文教大学教育学部紀要』十六号（一九八二年十二月）に掲載された平田澄子翻刻「近藤秀一氏蔵『丹陽軍記 全』」が唯一の伝本である。『丹陽軍記』の引用は、これによった。

⑭ 『靱井家日記』の引用は『靱井家日記』（一九三一年 篠山毎日新聞社）による。

⑮ 篠山市民センター図書コーナーに『高城軍記』、『八上郷高城山城主の事』と題する二本の伝本が現存する。二本の本文に際立った違いは認められないが、『八上郷高城山城主の事』は末尾部分が欠けている。『高城軍記』と題する伝本の上巻末には「安政六歳巳未八月下旬 □<sup>(虫く)</sup> 條 山北澤田邑 久兵衛」、下巻末には「嘉永四亥年七月下旬 後藤氏」とあり、上巻は安政六年（一八五九）八月下旬、下巻は嘉永四年（一八五一）七月下旬に書写されたものと思われる。『高城軍記』の引用は、特に断らない限りこの伝本によった。これら二本以外に、波多野芳野氏所蔵の『高城軍記』三冊本があるようだが未調査である。なお、西尾市岩瀬文庫に『丹波国八上高城書記』という写本が所蔵されるが、代々の八上城城主の履歴を記したもので、『高城軍記』の異本ではない。

⑯ 篠山市民センター図書コーナー蔵本（『国書総目録』では篠山町立本郷図書館蔵本）は上巻と下巻の二冊本であるが、上下それぞれ別個に書写された伝本であるらしく、上巻は漢字平仮名交じり、下巻は漢字片仮名交じりであり、筆跡も異なっている。また、上巻の末尾に脱文が見られる。本節では特に断らない場合、この伝本を引用した。篠山市民センター図書コーナー蔵本及び東京大学史料編纂所蔵本三本を調査した結果、伝本間の本文異同の著しいことが認められた。すべての伝本の詳細な本文研究は、今後の課題としたい。

⑰ 同注⑤ 「第三章 戦国動乱期の丹波」 「二、激動する丹波」 参照。

⑱ 篠山市民センター図書コーナー蔵本は、波多野氏の最期を記さない。『硯井家日記』に依拠した波多野氏の最期を持つのは、「丹波国多紀郡犬飼村上田小膳蔵本」を書写した東京大学史料編纂所蔵の伝本である。

## 第七節 播磨の戦国軍記『長水軍記』小考

### ―東京大学史料編纂所図書室蔵本を中心に―

(一)

織田信長が中国の毛利討伐のため、羽柴秀吉を播磨に向かわせたのは、天正五年（一五七七）であつた。以後、秀吉は三年を費やし播磨諸氏の強い抵抗に苦戦しながらも、抗う東播・西播の城を一つ一つ着実に攻略していった。

播州宍粟郡（兵庫県宍粟市）長水城を拠点に近隣五郡を治めていた赤松氏末流の宇野氏も、秀吉に抵抗し滅ぼされた豪族である。『信長公記』卷十三には、

庚辰四月廿四日、播州の内しそ郡に宇野民部楯籠る。彼者の親・伯父構、羽柴筑前守秀吉押詰め乗取り、二百五十余討捕り、夫より宇野下野居城へ取懸け、是又責破り、爰にても数多切捨て、其後、宇野民部構は高山節所に候、麓を焼払ひ、塞々に取出を三ツ申付け、丈夫に人数入れ置き、

と、天然の要害長水城に籠る宇野一族を攻め囲む秀吉軍の様子が記録されている。しかしこの後の戦に関して『信長公記』は何も書かず、ただ長水城落城について、

播州しそ郡に楯籠る宇野民部、六月五日夜中に退散。木下平太輔・蜂須賀小六追懸け、心ばせの侍共歸し合せく、爰かしこにて相戦ひ、歴々の者共数十人討捕り、

と簡単に触れるのみで、城主宇野政頼の安否さえもわからない。

『信長公記』には見えない長水城攻防戦の詳しい有様は、宇野方の立場から書かれた戦国軍記『長水軍記』によつて知ることができる。『国書総目録』の「長水軍記」の項には、一種二本の伝本の記載がある。「東京日蓮宗不受不施派事務所蔵本」と、それを写した「東京大学史料編纂所図書室蔵本」である。ところが、「東京日蓮宗不受不施派事務所」及び本山の岡山県岡山市妙善寺に問い合わせたところ、現在は所蔵していないこと、戦災で焼失した可能性もあるとの返事を頂いた。原本がすでに所蔵者の手元になく行方不明であることから、今回はその謄写本である東京大学史料編纂所図書室蔵『長水軍記』（以下東大本と略す）を翻刻し、資料として本論に掲載した。

『国書総目録』にはないが、この他に、平成六年（一九九四）八月に宍粟市の伊和神社宮司安黒義郎氏が翻刻・発刊なさった『長水軍記』（以下、安黒氏翻刻本と略す）がある。奥書などはなく、その伝来は明らかではない。両伝本の章段名を対比させ次に掲げた。

東 大 本		安黒氏翻刻本	
宇野下総守処領之事 <small>并</small> 宇野家譜尽之事		宇野家所領之事	
秀吉之使者長水へ来る事 <small>并</small> 政頼姫路へ出仕之事		秀吉之使者長水へ来ル並政頼姫路へ出仕事	
討手之勢下向ふ之事		討手勢下向之事	
祐清狭戸へ向ふ <small>并</small> 狭戸香山合戦之事		祐清狭戸へ向フ事	
		狭戸香山合戦之事	
川戸合戦の事 <small>并</small> 秀吉狭戸阪を越へ玉ふ事		川戸合戦並秀吉狭戸坂ヲ越給事	

香山の勢引退く附たり政頼籠城之事	香山勢引退事
城より出はり之事	政頼籠城之事
長水初度合戦之事	城ヨリ出張ノ事
十六日合戦之事	長水初度合戦之事
城兵夜討付たり後詰之勢長水へ来る事	十六日合戦之事
寄手城之麓へ寄る付たり城を取囲ふ事	城兵夜討之事
搦手の合戦付たり祐清山片表退口之事	後詰之勢長水へ入ル事
溝口城中へ使節の事并城中諸将会合の事	寄手城之麓へ攻メ寄スル事
五月三日城攻附たり寄手城へ夜討之事	城ヲ取囲ム事
五月五日城より討出る事	五月三日城攻之事
城兵秀吉の陣へ寄る事	寄手城中へ夜討ノ事
上町表大合戦之事	五月六日城ヨリ打出ル事
宇野帯刀祐長血戦討死之事	城兵秀吉卿之陣へ寄ル事
宇野祐政が備と長浜甚吉三沢が備へと合戦之事	
春名修理之太夫光俊討死之事	
政頼再び毛利へ救ひを乞ひし事	
石田佐吉安積将監を説事	
長水落城之事付たり岡城豊後之守血戦討死之事	五月九日長水落城之事附安積小林返忠之事

政頼并に一族郎従大森にて血戦討死之事	宇野下総守政頼并一族良従大森ニテ自害ノ事
庄太郎左衛門政春由来 <small>付たり</small> 忠義之事	
政春君を守護して剛力の事	

東大本は一・二・下、それぞれの巻の始めに目録を置くが、目録と実際の章段名は一致しない。ここに挙げた章段名は本文中のものであり、網かけをした章段は各巻の始めの目録にはないものである。網かけをした章段、つまり目録に見えない章段は、安黒氏翻刻本にもない章段である。また、東大本では一章段にまとめられているもので安黒氏翻刻本では二章段にまたがっている章段、例えば東大本では「五月三日城攻附たり寄手城へ夜討之事」となっている章段が、安黒氏翻刻本では「五月三日城攻之事」と「寄手城中へ夜討ノ事」と二つに分けられているが、東大本の目録では、安黒氏翻刻本のように二つの章段に分けて載せている場合がある。東大本は、もとにした『長水軍記』の一伝本の目録をほぼそのまま写しながら、本文には新しく章段を設けたり、章段をまとめたりなど大幅に手を加えたために、目録と本文の章段が一致しない状態になったのであろう。このことから、東大本は安黒氏翻刻本より後出の伝本であると推測できる。ただし、傍線を施した「庄太郎左衛門政春由来付たり忠義之事」の章段だけは、本文に入れ込んだ後、巻始めの目録にわざわざ書き加えたようである。これは、後述するようにこの章段が東大本にとって特別な意味を持つ章段だからである。

章段名が同じでも東大本と安黒氏翻刻本を比較してみると、多くの異文が見えられ、更に安黒氏翻刻の『長水軍記』では脱落している箇所を東大本で補うことができ、東大本が貴重な伝本であると認められる。この節では、典型的な地方戦国軍記である『長水軍記』を東大本中心に紹介し、見ていきたいと思う。

東大本『長水軍記』は、「卷之一」「卷之二」「卷之下」の三卷一冊から成る。墨付111丁。奥付には「天保十二丑年龍野藩中藤江氏にて借用閏正月写之 筆者青木村小林 山内茂作」「右長水軍記 東京市麻布区本村町日蓮宗不受不施派事務所妙覚寺藏本明治三十七年十月謄写」とあり、龍野藩藤江氏所藏の本を天保十二年（一八四一）に青木村の山内茂作なる人物が借りて書写し、更にその本を明治三十七年（一九〇四）十月に写した伝本である。卷之下、本文が終つたすぐ後に、「宇野一家<sup>并に</sup>長臣之面々居前之次第 本主広岡庄氏本家」とあり、続いて長水城城主宇野政頼を始めとする宇野一族九人と春名氏ら七人の重臣たちの居所が書かれている。重臣の七人目には、「庄太郎左衛門政春 元五十波村居後 高下上之の下居す 今俗構と云」と見える。これらの記述は安黒氏翻刻本にはなく、「庄政春」は、東大本の性格を考える上で重要な意味を持つ人物である。

東大本と安黒氏翻刻本との大きな違いの一つに、東大本には安黒氏翻刻本にはない落城後の後日談の見えることが挙げられる。その後日談とは、東大本卷之下、「長水落城之事<sup>付たり</sup> 岡城豊後之守血戦討死之事」の一部、及び、最後の二章段「庄太郎左衛門政春由来<sup>付たり</sup> 忠義之事」と「政春君を守護して剛力の事」である。

城を出て秀吉軍と戦っていた長水城城主宇野政頼は、秀吉の内応者によつて城に火がかけられたと聞き、急ぎ奥方お時の方のもとに向かう。落城を覚悟した政頼は、自分と共に逃げるのは危険だから、末子慶之助を連れて城を落ち、高下にいる庄太郎左衛門政春を頼るようにと、お時の方に命じる。同じ道に、とすがる奥方を説得し、政頼は都多村を目指し落ちていく（以上、卷之下「長水落城之事<sup>付たり</sup> 岡城豊後之守血戦討死之事」94オ、95オ）。庄太郎左衛門政春

は、智仁勇を備えた宇野家の重臣であった。多くの戦功をたて厚遇を与えられていたが、ある時、加増を辞退し高下の地に五百石を賜り、その後は土民となつて暮らしていた。長水城の危機を知つた政春は、出陣の支度をし、すぐに城に駆けつけようとしたが、老母が何度も自害を試みたため、孝心から出陣を取りやめ老母の側に付き添つていた。五月八日暮れ方に老母は自害を遂げてしまったので、翌日、政春は弔いを済ませ、午の刻には若党十人ほどを連れて長水城に向かつた。すでに城は猛火に包まれ、その中を政春は主君を捜し求める。ちようどその時、慶之助と城を脱出しようとしていた奥方と出会い、政春は政頼を追うのを諦め、二人をいったん高下へと連れて帰り、その後、奥方の実家但馬竹田城へと送り届けるために高下を出発する（以上、「庄太郎左衛門政春由来付たり忠義之事」）。しかし、この事は、宇野氏を裏切り秀吉方についた安積泰昌の知るところとなり、政春たちは安積に襲われる。奥方と慶之助を乗せた輿を先に逃がし、政春は一人で安積の兵たちを相手に奮戦する。安積を掴み上げ、田に投げ捨てた政春は、すぐに奥方たちに追いついた。慶之助は政春の忠義ぶりを讃え、宇野家伝来の小柄を与えたという。竹田城に無事逃れた慶之助は、その後明智光秀に従い、一万石を領した。光秀が滅んだ後は、秀吉に仕え、関ヶ原の戦いでは東軍に味方し一万五千石を領するようになったが、乱心したため領地は召上げられた。子の右近は千石を与えられ、宇野を称して江戸城下に住んだという。

是誠に庄太郎左衛門政春の功也。爰時政春斯せずんば宇野家の残る事は有まじきに古今珍らしき忠心也。政春は夫より但州を立て播州（マタ）完粟郡高下に帰り土民と成。今に其家有と言（以上、「政春君を守護して剛力の事」）。

庄政春の活躍を讃える文章で後日談の最後を締めくくる。安黒氏翻刻本では、本文大尾近くに、



政頼ノ妻八但州竹田ヨリ来玉フ由軍最中ノ時落往キ玉フ処山賊ニ出会ハギトリ申難儀ノ  
処里民救之家に連レ帰り鑑墨ニテ顔ヲヌリカクマイ軍終テ竹田ヘ送りシト也

とだけある記述を、庄政春の手柄話に発展させていることから、東大本は庄氏の家の記録としての役割を担っていたと考えられる。享保から慶応までの一三五年間にわたり、郷土の政治・経済・文化について詳細に記録した『公私用日記』一四四冊が現在でも宍粟市の庄家に所蔵されている。江戸時代、大庄家として栄えていた政春の子孫が、宇野の家を断絶から救った功臣である政春を誇りに思い、庄氏が戦国時代には武士であったことを後世に伝えるために制作されたのが、東大本なのである。

東大本は、合戦談の中にも安黒氏翻刻本には見えない逸話を載せる。例えば、安黒氏翻刻本では「城兵秀吉卿之陣へ寄ル事」にまとめて入れられている宇野祐長（政頼の子）と春名光俊（宇野家の重臣）の討死も、東大本では、「宇野帯刀祐長血戦討死之事」と「春名修理之太夫光俊討死之事」の別章に仕立て、内容も細かな描写になっている。この春名光俊の活躍は、東大本の随所で安黒氏翻刻本よりも誇張されている。一例を挙げよう。秀吉は竹中に、春名光俊の陣を物見してくるように命じる。戻ってきた竹中は、春名は既に陣を引とつた、と報告するが秀吉は、「春名は宇野家の古老。何ぞ爰迄出、をめぐると帰る事や有」と疑う。竹中が「春名備を廻し切立く幾度も如乱して、東の方へ趣き候」と春名の陣形を報告すると、秀吉はにっこり笑い、「是は竹中とも覚へぬ者哉。汝不知や。夫は車懸りとして車の廻る如く備を揉がへて、幾廻り目に敵の旗本と我が旗本と打合せ、一戦に勝敗を決する陣法、甚殊勝の備へ也」と言ったと伝える。安黒氏翻刻本ではこの逸話の部分は、秀吉の本陣の大きさを記しており、東大本と安黒氏翻刻本との記述が大きく異なる箇所の一つでもある。東大本では、軍師竹中が

知らない陣形を春名軍がとり、それを秀吉が賞めるといふ、春名光俊の有能ぶりをアピールする内容となつてゐる（巻之下「城兵秀吉の陣へ寄る事」76オ〜76ウ）。

宇野方の武将の活躍を細かく記す姿勢は、庄氏の家の記録として伝わつてきた東大本の性格と反するものではない。戦国軍記が、描く合戦の地元に伝えられていくとき、家の記録として書き替えられるのは、よく見られる現象である。その際、地方性は更に濃厚になり、視野が地元の外に出ることは稀である。東大本でも、光秀、秀吉、関ヶ原の戦いに触れながら、それらは宇野家の末裔を語るためだけにとりあげた出来事であり、視点が地元や庄家から離れることはない。

春名光俊討死の後の割注に、「春名修理太夫光俊は天正八年五月八日上町にて討死す。千草大森にて自害と有非也。尤千草にも墓有。男子三人二人討死内一人治郎太夫と言は後に伯州にて三万石領すと也」との記述が見えることや（「春名修理之太夫光俊討死之事」87ウ）、「扱も長水軍中を姫君唯老入落玉ふを川原田たか之尾にて、はぎ取かをの皮をはぎ捨たり。夫より終りしゆへに姫神とまぼり今に有と言」（「政春君を守護して剛力の事」107ウ）は、東大本、安黒氏翻刻本ともに見え、後世の書き入れかと思われるが、地元に残る戦国軍記に地誌的な要素が加わつていく例として挙げられる。東大本は、地元に残る戦国軍記が持つ特徴的な性格を備えている伝本である。

(三)

秀吉が攻め落とした播州の城の城主には、長水城の宇野氏のように赤松氏末流と名乗る氏族が多い。上月城の赤松氏をはじめ、三木城の別所氏、神吉城の神吉氏、英賀城の三木氏などである。中でも別所氏が城主である三木城の落城は、先に取りあげた『別所記』に詳しいのだが、

『長水軍記』と『別所記』には、興味深い共通点が見いだせる。それは、宇野氏・別所氏が秀吉に敵対するきっかけとなった事件である。

『長水軍記』が伝える内容は次のとおりである。同心を勧める秀吉の使者を迎えた長水城内では、毛利につくか、織田に従うか、意見が分かれたが、とりあえずは織田に従って様子を見よう、という意見にまとまり、政頼は姫路に滞在する秀吉を訪問する。ところが秀吉は碁に夢中で、政頼に会おうとしない。これに立腹した政頼は、「我彼猿冠者めにたばかれしこそ口惜しけれ。目に物見せん物を」（東大本巻の一「秀吉之使者長水え来る事」并政頼姫路へ出仕之事」6才）と言い捨て長水に帰り、籠城の支度をしたという。礼儀をわきまえない秀吉の態度が、離反の動機だったというのである。『別所記』が伝える原因も秀吉の横柄な態度であったとするのは、先に見たとおりである。初めは秀吉に従っていた三木城主別所長治は、叔父の吉親、家臣の三宅治忠を軍議のため秀吉のもとへ遣わした。二人は秀吉の前で陣の張り方などの兵法を長々と語るが、秀吉は、「各ハ先手ノ役ニテ候ヘバ、働等ノ事随分被入精候ヘ。得勝利下地（マキ）を長々と語るが、秀吉は、「各ハ先手ノ役ニテ候ヘバ、働等ノ事随分被入精候ヘ。得勝利下地（マキ）八大将役ニ此方ヨリ差図可申」と「ニクテイ」に言捨てたという。両人は閉口して三木城に帰る。秀吉の無遠慮な振舞を聞いた長治は、「信長昨今ノ取立漸ク侍ノマネヲスル秀吉ヲ大将ニシテ、長治カレガ先ニテ軍セバ、天下ノ物笑タルベシ」と怒り、秀吉からの離反を決意する。『別所記』のこの話について、松林靖明氏は、『別所記』が離反の原因をこの点に求めたのは、南北朝以来の兵法の家としての赤松氏を知る播磨の人たちにとっては納得しやすいことだったためと指摘されている。

赤松氏は、村上天皇の流れを汲む播磨随一の名門氏族であり、宇野氏・別所氏が意識する赤松氏の末流というプライドは相当高いものであった。『長水軍記』と『別所記』が秀吉と対立する原因とした事件の共通性は、偶然に表れたものではない。実際、播磨を支配下に置こうとする秀吉の態度は播磨の国人たちの反感をかっけていたが、この二作品は事実のみを書こうとし

たわけではない。叛意のきつかけは、氏素性の明らかでない成り上がり者の秀吉と、播州の名族赤松氏の子孫の対比の中から描かれたものであり、播磨の人々の赤松氏という血筋に対する憧憬に似た感情から生まれたものである。ここにも、この播磨の二作品の濃厚な地方性を見出すことができる。

ただし、『長水軍記』と『別所記』はどちらも、成り上がり者の征服者である秀吉を決して悪くは書かない。これは、同じ時期、信長の命を受けて丹波を攻略した明智光秀に対する誹謗と大きく異なる点である<sup>⑤</sup>。秀吉は三木城攻めの際、別所一族の命と引き替えに城内に籠る兵や百姓の命を助けたことからわかるように、攻略した地に善政を敷き、人々の暮らしに大きく貢献した。播磨の人々が秀吉を批判しないのは、秀吉のこのような施政によるものであろう。『長水軍記』は『別所記』と同様、播磨の人々でなければ理解できない視点からの描写を持つ。戦国軍記の地方性は、このような点にも見いだせるのである。

注① 『信長公記』の引用は、奥野高久・岩沢愿彦校注『信長公記』（一九九二年第七版 角川書店）による。

② 山崎町教育委員会社会教育課編『山崎町の文化財』（一九八五年）参照。

③ 『信長公記』巻十二（天正七年）六月廿二日条に、「羽柴筑前与力に付けられ候竹中半兵衛、播州御陣にて病死候。其名代として、御馬廻しやていに候つる舎弟竹中久作播州へ遣はされ候」とあり、竹中半兵衛重治は三木城攻めの陣中で病死しているから、この「竹中」は、半兵衛の弟久作を指す。

④ 東京大学付属図書館蔵『別所家盛衰記』に適宜句読点を施し引用した。

⑤ 『武功夜話』に見る『別所謀反』（『別所記―研究と資料―』一九九六年 和泉書

院)

⑥『別所記』における赤松氏末流意識の強さについては、本章第三節「別所重棟の虚像と実像―『別所記』に見る赤松の誇り―」参照。

⑦『武功夜話』（吉田蒼生雄氏校訂『武功夜話』一九八七年 新人物往来社）巻七「黒田官兵衛孝高の事」では、官兵衛のことを、播州の国人ではなく、「小才あるをもつて一城の目代と成り上るも、封地鮮やかなる国人歴々衆には及び難く、身分において遜色あり」と評し、「仁心無く己の欲心のため平地に乱を招くが如き」官兵衛の言いなりになる秀吉に、播磨の国人たちは不信感を抱いていたことがわかる。『長水軍記』では、

爰に同国飭万郡姫路之城には、小寺官兵衛孝高とやは兼て政頼と領分を争ふ事やむ時なし。然れども小寺は兵少なし。宇野と戦ふ事は難義也。日頃うつぷんを含み居たりけるが、幸ひ羽柴筑前守秀吉播州へ下向ふに力を得て、「何とぞ私し御味方を申し当国之氏族を亡し、其次手を以て宇野をも亡さん」と私の意趣をもつて種々に説言を申すといへども秀吉聞入玉わず。「事之実否を聞定め随わざる時は亡すべし」と言れければ（東大本巻之卷「宇野下総守処領之事并宇野家譜尽之事」3ウく4才）

と見え、播州の人々の小寺官兵衛への嫌悪感が表れている。

⑧例えば、八上城城主波多野氏が光秀に攻められ滅ぶ様を描いた『靱井家日記』（野々口政太郎他校訂『靱井家日記』一九三一年 篠山毎日新聞社）には、「そこな人非人の光秀」と罵る場面が見られる。一方、秀吉については、「羽柴殿は播州にて慈悲佛の如し」と評していて対照的である。

## 第八節 家記の中の関ヶ原合戦

(一)

関ヶ原合戦を扱った軍記及び軍記に類する作品は、非常に多い。『関ヶ原軍記大全』のように合戦の全体像を見通す大部の作品もあれば、『田辺城合戦記』のように合戦の一面に限って描くもの、身辺に残る古文書等の史料を編集し合戦の詳細を伝える『関ヶ原陣輯録』のようなもの、『おあむ物語』のごとく私的な回想録にいたるまで、数多くの軍記作品がさまざまな様相を呈している。

各大名や旗本が先祖の由来や武功談をまとめた家の記録—いわゆる「家記」にも関ヶ原合戦はとりあげられている。関ヶ原合戦は、徳川幕府の覇権確立を決定づける重要な事件であったため、徳川統治下でまとめられた家記にとって將軍家と家の関係を示すのに都合な題材であった。一貫して徳川軍に属していた家は忠誠心と武功を強調し、合戦半ばで寝返り徳川方についた家は、石田軍に属していた事実をうまく避けた記述や言い訳がましい記述で將軍家に敵対していたことにはできる限り触れないよう気を配る。家記の中の脚色された関ヶ原合戦からは、それぞれの家の立場がうかがい知れて興味深い。

(二)

寛永十八年（一六四一）に書かれた『一柳家記<sup>④</sup>』は、一柳家の発祥から書き始め関ヶ原合戦で最後を締めくくった家記である。関ヶ原合戦の直前、尾州黒田を領する一柳直盛は、伯父正

齊に居城を預け上杉景勝追討に参加する。留守を守る正斉のもとへ石田三成からの使者が廻文を携えやってきた。「味方してくれるなら美濃一國に加えて金銀も望みのままにとらせよう」との誘いに正斉は、「家康公工堅御味方仕候上者金銀知行何程給候共同心申間敷」と断る。だが使者はあきらめず、「御同心無之候者御母御妻子三人共人質二取濃州三津屋之堤二曝可申二相窮候」と母や妻子を殺すと脅かした。しかし正斉は動じるどころか逆に腹を立て、「母妻子三津屋之堤ニテ火焙ニ仕候者見物ニ可出候」とまで言い放ち、今度来たら首を刎ねるぞと使者を追い出してしまふ。帰城した直盛は三成からの廻文を井伊直政に差し出し、木曾川の戦いに参戦、石田方の織田秀信が籠る岐阜城を瑞龍寺山から攻め立てている。関ヶ原本戦には直盛は出陣せず、大垣への押さえとして「肝要之所」である長松城を守りかためたという。直盛は左和山城攻めにも参戦を願ったが、「家康公御意ニ者堅物（直盛）ハ岐岨川先陣并瑞龍寺攻取殊二長松之城番重々忠節尽粉骨候間佐和山御手当之衆ハ不被仰付候ト之御意」と、これまでの手柄のため、かえって佐和山城攻めには参加できなかつたと伝えている。

厚遇を条件に三成から誘われても家康への忠誠を誓って一蹴し、戦いでは家臣とともに奮戦して家康から絶賛される。『一柳家記』が描く関ヶ原合戦記事からは、先代から続く將軍家への忠誠を積極的アピールしようとする意図がうかがえる。

一柳家と同じく徳川軍に属していた藤堂家も、徳川への厚い忠誠心を全面に押し出し『藤堂家覚書』の関ヶ原合戦関係記事を書いている。

秀吉公御他界之後石田治部少輔謀反之下心有之天下さわがしく御座候付和泉様（筆者注・藤堂高虎）一筋に権現様へ御奉公可被成と思召

高虎の「一筋」の「御奉公」を強調した後、その忠誠心を家康が深く信頼していた証拠を示

すかのように、『藤堂家覚書』は家康が高虎の大坂屋敷に宿泊した記録を綴っている。

権現様石田治部少輔不和之砌天下さわかしく御座候時分伏見より権現様大坂え御越被成候刻御用心被成に付大坂にて和泉様御屋敷四方川にて要害よき所にて御座候故御心易思召大坂之御屋敷御かり被成御舟にてすぐに和泉様御屋敷へ御移被成一日二日御逗留被成伏見へ御越被成昼夜権現様へ御詰被成候事

関ヶ原合戦において藤堂家は、大谷吉継隊と戦い、一族の藤堂新七郎が「一番首」を挙げる目覚しい働きをしたという。その上藤堂家の武功は、鎧や刀を使ったものだけではなかった。

和泉様御鎧先之敵は大谷形部少輔脇坂中務小川土佐平塚因幡此四人にて御座候得共中務と土佐は和泉様御才覚にてうらきり被仕候

脇坂安治や小川祐忠が石田軍から離反したのは、高虎の「御才覚」であったと戦場における手柄の上に寝返り工作を行った手柄を書き添えることも忘れない。このような高虎の働きに応えた家康は、死に際して「御茶入」を形見として与え、家康他界後に秀忠は藤堂家に五万石を加増したと書く。『藤堂家覚書』が描く関ヶ原合戦は、將軍家への忠誠を印象付ける格好の材料なのである。

『黒田長政記』<sup>⑧</sup>は、十三歳の初陣から関ヶ原の戦いまでの戦場における長政の武功を記録した一代記である。『黒田長政記』も『一柳家記』や『藤堂家覚書』と同じく、関ヶ原での長政の忠勤ぶりを強調する。長政は自ら鎧を操り石田三成軍に攻めかかったという。長政軍の激しい攻撃に負け、三成らが伊吹山へ逃げ込むと、長政は跡を追って山を攻め登ったと『黒田長政



記』は書き記す。「今御忠節御手柄共不淺由。御意被成。諸人見申所迄。長政様の御手いたゞき被成候。」長政の奮戦に対して家康が諸人の見る前で長政の手をとったと自慢げに大尾を飾る。『黒田長政記』以外にも『豊後陣聞書』や第一章第四節で取りあげた『豊後崩聞書』といった黒田家に関する軍記が残っている。『豊後陣聞書』は、長政の父如水の家臣の田代彦助と村上長助から直接聞いた話を磯水泡が書き留めた、寛文三年（一六六三）成立の作品であり、当然のことながら黒田軍の情報に詳しい。『豊後崩聞書』の詳しい成立事情はわからないが、黒田方に傾いた叙述から黒田氏周辺を成立圏とできるだろう。『豊後崩聞書』の最後でも、

大府（家康）此由聞しめし。甲斐守（長政）はせきか原にてせんちん申。手柄有ル上。其上如水つくしにおいて手柄をいたす。此上八国は黒田か望のまゝと。ちくせんの国の御はんのたまわり。ふくおかに城くわくを取り。いまかいまで筑前国屋形さまとあほかれたまいて。すゑはんしやうと。さかへこそすれく。

と、家康から筑前半国をもらい福岡に城を築いた黒田家が今に至るまで繁栄したのは、関ヶ原の戦いにおける黒田父子の武功によるものだと寿ぐ。

(三)

では石田軍に属しながら合戦半ばで徳川軍に寝返った家は、將軍家への忠誠をどのように描くのだろうか。寛永十九年に成立した『脇坂記』の描く関ヶ原を見てみよう。脇坂安治は石田方の大谷吉継の手に属し関ヶ原へと向かったはずである。ところが『脇坂記』はそのように描かない。「逆臣石田治部少輔三成陰謀ヲ企テ。東照大権現（家康）ニ背キ奉」り関ヶ原に出

陣してきたので、「大権現彼乱賊ヲ追伐シ。四海ヲ平治シ給ハン」と家康は美濃赤坂に陣を張ったという。脇坂安治は子息安元とともに大坂から美濃へと馳せ向かい、

九月十五日辰ノ刻ノ一戦ニ。筑前中納言豊臣秀秋ト。安治同子息淡路守安元。カネテヨリノ御同意ナレハ。御味方ニ参リケル。其後三成敗軍ス。

『脇坂記』は安治が西軍として関ヶ原に出陣したとは一切書かない。家康が赤坂に陣取ったことに呼応して大坂から出陣してきたという書き方である。合戦後、脇坂父子が家康に面会すると、家康は「戦功ヲ勞シ給ヒテ。台顔悦マシマシケリ。」と大変喜んだという。脇坂父子はその後の佐和山城攻めにも参戦し、城の南大手口から攻め入り「稠敷攻メ」敵十四人を生捕りにする働きを見せた。家康は脇坂父子の武勇を認め、「イヨイヨ悦マシマシケル」と『脇坂記』は伝える。石田三成を「逆臣」と評し、一時はその逆臣に味方しながら寝返ったことには全く触れず、佐和山城攻めの手柄だけを家康の喜ぶ姿とともに書き記した『脇坂記』関ヶ原合戦関連記事も、將軍家への忠誠を印象づけるための記録なのである。

石田方についた主家宇喜多から離れ徳川方に味方した戸川達安の関ヶ原での行動を描く『戸川記』<sup>⑥</sup>は、関ヶ原合戦以前の達安と宇喜多家の関係を細かく書き記す。達安の母が宇喜多直家の弟忠家の乳母になったことが、宇喜多家と戸川家の主従の始まりであったと『戸川記』は伝える。長船・花房と並んで宇喜多家の重臣として仕えた達安が主家を離れる原因となったのは、直家死後家督を継いだ秀家の「花奢」と秀家の室が実家加賀前田家から連れてきた中村次郎兵衛の勝手な振舞いだという。秀家によって暗殺されかかったところを同輩に助けられた達安は、やむを得ず家康を頼って関東へ向かったと『戸川記』は伝えている。その後達安は、「謀反」を企てた石田方についた秀家を諫めるため、「公よりの御内意」により宇喜多家中で唯一采配

をも任せられる人物であった明石掃部に手紙を送り、徳川方につくよう秀家を諭した。しかし秀家からの返事は、「公の御怒を憚り」家康に見せられないほどの内容であったという。秀家が諫めも入れなかったと聞いた達安は、「我備前に（脱力）仮令秀家卿いか様に宣ふ共諷諫すへき物を」と嘆いたと言いつく「戸川記」は綴る。

関ヶ原の戦いで達安は、加藤嘉明の手に加わり、石田三成本隊と戦って六七十騎を押包み一人残らず討殺し、「他家衆是を見て偕も見事成る討様哉と称美」されたとする。この武功が認められ、戦後、達安は備中庭瀬二万五千石を安堵された。一方、達安が見限った主人宇喜多秀家は八丈島へ流罪となった。家康の意向を受けた達安の諫めを入れなかった秀家とその側近に、宇喜多家断絶の責任のすべてを負わせた『戸川記』が関ヶ原合戦を描く際に伝えたかったことは、將軍家に忠誠を誓って奮戦しながらも、主家を見限ったという不利な立場に陥った戸川家の言い分であった。

(四)

合戦の最後まで傍観の態度をとり続けた島津家は、関ヶ原合戦をどのように位置付けて描いたのだろうか。『惟新公関原御合戦記』<sup>②</sup>は、島津義弘（惟新）が石田軍に属して関ヶ原に出陣せざるを得なかった経緯を次のように説明する。家康が上杉景勝討伐のため伏見を出発したのを山科で見送った義弘が大坂に滞在していたところ、石田三成が「野心をさしはさみ」、豊臣秀頼のためと称して諸大名に参集するよう呼びかけた。「西国の大名小名老人として従はざるはなし」という状況の中、島津にも三成からの誘いがかけられる。義弘は「固辞すること数返、且又家康公堅命あるによつて伏見の城に入警衛せん事を請ふこと再三に」及んだという。しかし伏見城を守っていた鳥居元忠に断られ、家臣を伏見城の守りに遣わそうとしたが、これすら

元忠が許さなかつた。三成に「今度の事全く私の遺恨にあらず、秀頼のために企てる所なり」と重ねて口説かれたこと、朝鮮の役で疲れた兵たちを国もとへ帰し、また家臣伊集院忠真の逆に多くの兵があたつてゐるため、わずか二百余りの軍勢しか手許に残つておらず、三成相手に戦えないこと、義弘の妻たちが人質となつて大坂にゐることなどを石田軍に身を投じた理由として並べる。決して將軍家に反旗を翻したわけではない。なりゆき上、仕方なく石田方についた、と『惟新公関原御合戦記』は釈明したのである。この言い訳が幕府に聞き入れられた証拠とばかりに、『惟新公関原御合戦記』は、家康の旗本船越景直からもらった手紙を書き写してゐる。

関ヶ原表合戦之刻、御覚悟之様子、さてさて扨々比類無き成され様与、内府様（家康）始而其外諸人感申（候脱）事大形成らず候。殊二御下々迄、おつかた越度無く召連られ、御退成され候事、前代未聞御手柄与、各御取沙汰是このみに已候事。

関ヶ原合戦における島津の覚悟の様子は、たぐいなく素晴らしかつたと家康を始め皆が誉め、更に「貴老（義弘）逆意と思召されざる儀候」と、家康が島津には逆意はなかつたと認めたと伝える船越の消息を効果的に活用する『惟新公関原御合戦記』からは、西軍に属しながらも、ひとり戦後も勢力を保ち続けた島津の策が垣間見えるようで興味深い。

（五）

寛永十八年（一六四一）二月、三代將軍徳川家光は、太田資宗・林道春（羅山）に『寛永諸家系図伝』（以下、『系図伝』と略す）の編纂を命じ、各藩や旗本などにも資料の提出が求め

られた。

こゝにをひて、諸大小名・御譜代・御近習・御番衆等およそ恩禄おんろくをかうふるもの、大小となくみな其家譜をさゝぐるもの数千人なり。道春をよひ子春齊、件の家譜をみて、其真偽しんぎをわきまへ、其新舊しんくをたゞす

と序に見えるように、各家から献上された記録は吟味され『系図伝』に取り込まれていった。⑧  
それぞれの家ではこれを機に先祖の戦歴や武功談を記録しようとする動きが活発になった。幕府や諸藩のこうした修史事業は、多くの家記―家の記録が作成されるきっかけとなったのである。これまでにとりあげた「家記」のうち、寛永十八年成立の『一柳家記』・『藤堂家覚書』、寛永十九年成立の『脇坂記』は、このとき各家でまとめられ、幕府に献上されたと考えられる。『系図伝』とこれら三本の家記を照らし合わせてみると、依拠の密度が異なることがわかる。例えば、『系図伝』の藤堂家と脇坂家の項で確かめてみよう。まずは、『系図伝』と『藤堂家覚書』を並べて、藤堂高虎の関ヶ原合戦関係の記録を比較する。

『系図伝』藤堂高虎の項

『藤堂家覚書』

同十四日、赤坂に御馬おんまをうつさせたまひ、一権現様九月十四日の晝時分に赤坂へ被成御着  
十五日に三成等の賊徒ぞくどと関原せきがはらにをひてた座先手之上方衆は其夜青野原へ打出野陣御座候  
ゝかひたまふ。高虎が家人藤堂新七郎良よし翌十五日之未明にいつれも青野（原イ）を御立  
勝かつ（高虎が甥おい）あかつきより御先手の候て關ヶ原へ御出被成候路次へ藤堂新七郎先手  
兵つはものにまじはり居ゐ、諸軍しよぐんにさきたち一番ばんにまきれ参りあさがけの首を取出むかひ申候是  
首くびを得たり。高虎すなはち家人高橋金右たかはしきんえは諸手一番首に而御座候故權現様へ高橋金右衛

衛門をもてこれをたてまつれハ、もつとも一番首なる事を感じさせたまふ。

すでに高虎賊徒大谷刑部少輔を撃やぶる時、高虎が家人藤堂仁右衛門高刑、(高虎が甥。)大谷が兵湯淺五助をうちとる。其外首級數おほし。高虎が組頭藤堂玄蕃良政等數人たゝかひ死す。また村越兵庫、高虎が陣にくはゝりて討死す。高虎これが證人となる。すでに三成等滅亡して天下一統す。大権現、高虎が功を賞し、豫州半國をたまはり、すへて二十万石を領知す。(旧領八万石。新知十二万石。)

表現の違い、地名の削除なども認められるが、『系図伝』の内容は、ほぼ『藤堂家覚書』と同じである。しかし、一箇所だけ『藤堂家覚書』の傍線部が『系図伝』では取り除かれている。傍線部は前に見たように、藤堂家にとって関ヶ原合戦の功名のひとつであり、セールスポイントの一つであったはずである。幕府によって編纂された『系図伝』では、この高虎の働きが認められず削りとられたということになる。続いてうらぎった側―脇坂家の『系図伝』の記載を見てみよう。

『系図伝』脇坂安治の項

大権現すでに関東より發向したまひ、濃大権現既二關東ヲ發向シ給ヒテ。濃州赤坂二御

『脇坂記』

門に為持御上被成候其後和泉様御躰先之敵は大谷刑部少輔脇坂中務小川土佐平塚因幡此四人にて御座候得共中務と土佐は和泉様御才覚にてうらきり被仕候刑部少輔人數と一戦御座候刑部少輔内湯淺五助と申母衣之者を藤堂仁右衛門討取申候其外敵あまたうち取申候藤堂玄蕃討死仕候其外御家中之者共多討死仕候權現様衆村越兵庫殿此所に而討死被成候

權現様忠節に思召御歸陣之後御ほうひとして伊豫半國御拝領被成都合廿萬三千石に御成被成候事

州赤坂に御陣をうつしたまふ。脇坂父子は大坂より濃州山中にはせむかひける。九月十五日辰の刻の一戦に、筑前中納言豊臣秀秋と安治おなじく息男安元かねてよりの御内意なれば、御味方となる。そのち三成敗軍す。大権現伊吹山の麓小山に御陣をうつしたまふとき、脇坂父子拝礼しければ、大権現戦功を勞したまひて台顔恰悦ましくけり。是よりはじめ大権現の幕下に屬したてまつる。かくて江州佐和山の城には三成が兄石田木工といひしもの楯籠りければ、また彼を追伐すべきよし鈞命くだりて、その日牧原の宿に陣をとる。

陣ヲ移シ給フ。脇坂父子八大坂ヨリ濃州山中ニ馳向ヒケル。九月十五日辰ノ刻ノ一戦ニ。筑前中納言豊臣秀秋ト。安治同子息淡路守安元。カネテヨリノ御同意ナレハ。御味方ニ参リケル。其後三成敗軍ス。大権現伊吹山ノ麓ナル。小山ニ御陣ヲ移シ給フ時。脇坂父子御禮ヲ申上ケレハ。大権現戦功ヲ勞シ給ヒテ。台顔恰悦マシマシケリ。是ヨリ初メテ。大権現ノ幕下ニ屬シ奉ル。カクテ江州佐和山ノ城ニハ。三成ガ舍兄石田木工頭ト云ヒシ者楯籠リケレハ。又彼ヲ追伐スベキヨシ。鈞命クダリテ。其日牧原ノ宿ニ陣ヲトル。

翌十六日に佐和山の城へぞをしよせける。十七日卯の刻より脇坂父子八城の南大手の口より押入、きびしくせめたり。午の刻ばかりには落城しぬ。石田が陪臣津田泉沙父子・上野喜左衛門父子等十四人生捕にして、城和泉守をもつて上聞に達しければ、大権現いよく恰悦ましくける。

明レハ十六日佐和山ノ城ヘゾ押ヨセケル。十七日卯ノ刻ヨリ脇坂父子八城ノ南大手ノ口ヨリ押入。稠敷攻メタリ。午ノ刻計リニハ落城シヌ。石田ガ陪臣。津田泉州父子。上野喜左衛門父子等十四人生捕ニシ。城和泉守ヲ以テ上聞ニ達シケレハ。大権現イヨイヨ恰悦マシマシケル。

『系図伝』の脇坂安治の条が、『脇坂記』とほぼ同文であることが確認できる。ここに挙げた関ヶ原合戦関係の記載だけでなく、永禄十二年の安治の初陣から寛永三年の安治の死まで、『系図伝』は『脇坂記』をそのまま写している。『脇坂記』が載せる秀吉の朱印状などの書状も、『系図伝』はそっくりそのまま書き写している。このため、関ヶ原合戦で脇坂氏が西軍を裏切ったありさまを『系図伝』は書かず、安治の佐和山城攻めの手柄だけを強調する描き方となっている。

『藤堂家覚書』と『脇坂記』を『系図伝』が取り込んでいくとき、依拠する比重が違っていると確認できる。藤堂家と脇坂家は『系図伝』中ではどちらも藤原氏支流に属し、『系図伝』の序によると、「元良をよひ五岳衆八藤原氏の部をつかさとる。重政これに属す」とあり、担当の違いによる比重の違いでないことが認められる。『系図伝』における家記の取り込み方がこのように違うのは、序に言う「真偽」によるものだけとは思えない。

寛永十七年（一六四〇）八月、安治の子で脇坂家当主であった安元は、実子があつたにも関わらず、将軍家光の寵臣堀田正盛の二男安政を養子に迎え嫡子としている。また、『寛政重修諸家譜』の脇坂安元の項には、次のような記載がある。

十九年諸家の系図をえらばるゝのとき、安元が呈譜は祖父外介安明より系を起し、その以前姓氏等の事をも記せずしてその端に

北南それともしらずむらさきのゆかりばかりのすへの藤原

かく一首の和歌をしるしてたてまつりしかば、ふかく御感をかうぶる。

先祖に有名な人物がいたなどとは創作せず、祖父の代からの記録を提出した安元の実直な行



為と和歌を付した教養の高さに家光が感心した、というのである。実際『脇坂記』は安明から始まり、そこには、「外助江州北の郡脇坂の庄の人也。永禄十一年戊辰観音寺合戦の時討死す。隣花院と号す。洛の妙心寺の内に在り」とだけあり、事実のみを記載したと考えられる。家光の近臣として政治力を持っていた堀田正盛の子に脇坂家を継がせることと合わせて、外様大名であった脇坂家が幕府の歓心を買うために苦心していた跡が読み取れる。幕府への忠誠を印象づけるために工夫を凝らして書かれた家記の中の関ヶ原合戦を『系図伝』が参考にする際、一貫して東軍に属し働いた藤堂家よりも、合戦半ばで西軍を裏切り東軍についた脇坂家の記録の方が重く扱われたわけは、このような政治的な背景があつたからとも推測できる。

(六)

本節でとりあげた家記は、戦国時代の戦いの記録を記し、しかも特定の家の記録であるという点では戦国軍記の範疇に入る。しかし、関ヶ原合戦の筆致に見るように、どの家も徳川家への忠誠を主張し、幕府の歓心を買うことに余念がない。中には幕府に提出する目的で作成された家記もある。「公の視点」を強く意識したこうした家記には、戦国軍記に見た特質が微弱であり、戦国軍記の枠内にすべて入れ込むには、ためらいが残る。徳川幕府の管理下で成立した家記の類をどう扱うべきか、検討すべき今後の課題の一つである。

注① 『一柳家記』の引用は、『新訂増補史籍集覧 第九冊』による。

② 『藤堂家覚書』の引用は、『新訂増補史籍集覧 第九冊』による。

③ 『黒田長政記』の引用は、『続群書類従23輯上』による。

- ④ 『豊後崩聞書』の引用は、『続群書類従23輯上』による。
- ⑤ 『協坂記』の引用は、『続群書類従20輯下』による。
- ⑥ 『戸川記』の引用は、『新訂増補史籍集覧 第九冊』による。
- ⑦ 『惟新公関原御合戦記』の引用は、『戦国史料叢書6 島津史料集』（人物往来社）による。
- ⑧ 『寛永諸家系図伝』（一九八六年 続群書類従完成会）を引用した。
- ⑨ 幕府の修史事業が戦国軍記の集成に与えた影響については、梶原正昭「幕府・諸藩の修史事業と戦国軍記―『寛永諸家系図伝』と『本朝通鑑』を中心に―」（『学術研究―国語・国文学編―』43 一九九五年二月 「室町・戦国軍記の展望」二〇〇〇年 和泉書院）に再収）に詳しい。
- ⑩ 『寛政重修諸家譜』（一九六五年 続群書類従完成会）を引用した。

## 終章

(一)

以上、戦国軍記の変容と伝播を中心に論を進めた。各章の結論を簡単にまとめる。

第一章では、室町軍記から戦国軍記への流れを辿り、戦国軍記がそれ以前の軍記とどのような繋がりを持つのかを考察した。研究対象として取りあげたのは、島原松平文庫本『明德記』、永享の乱・結城合戦関係軍記、『松若物語』である。

第一節では、室町軍記『明德記』諸伝本中における島原松平文庫本『明德記』が、山名氏清の家臣小林重義を主人公とした「武将記」であり、初稿本系統本文を改訂した後出本であることを証明した。また、戦国軍記に通じる私の視点や地方性が見いだせることを明らかにした。関東に戦国時代をもたらした永享の乱・結城合戦を題材にした諸軍記は、室町・戦国軍記の文脈を考える上でキーポイントとなる作品群であり、実録的な系統と物語的系統の作品に分類されている。第二節では、これら二系統の一部の作品が複雑な影響関係を持つことをつきとめ、二種の系統が一途に分岐していったわけではなく、なお影響を及ぼし合う様相も見せていると判断した。

第三節では、実録的な『結城戦場記』系の伝本とされてきた加越能文庫本『結城戦場記』が、古態系『結城戦場記』系列の伝本ではなく、簡略な内容を持ちながらも、物語系列に属する『鎌倉殿物語』に共通する逸話を持つ特異な伝本であると位置づけた。

第四節では、戦国軍記の中でも比較的早い時期に成立した『松若物語』をとりあげた。本書には実録的な表現と室町軍記に通じる設定を持つ御伽草子に近い物語的な表現を完全に分離さ

せながらも一作品中に合わせ持つという特殊な形態が見られる。これは正統派の軍記を目指そうとする姿勢によって表われた現象である。しかし同時に、「記」的な表現と「物語」的な表現が溶け合った文脈を持っていないというのは、この年代に成立した戦国軍記の表現上の限界であるとも推測した。

以上、第一章における考察により、室町軍記の中にも戦国軍記に近い性格を含んだ作品が存在すること、室町軍記から戦国軍記への流れの中で、「記」的な表現と「物語」的な表現が融合を試みながらも、最終的には実録的な性格が戦国軍記に強く現れていくことがわかった。室町軍記から戦国軍記へと続く一筋の流れを追うことができたと思う。

第二章では、戦国軍記の変容がどのような要件のもとで起こるのかを探るため、戦国軍記の成長土壌となった地方に目を向け、これまで未調査であった作品の調査報告も行いながら各作品の成立、そして異本発生の過程や異本の広がりを追っていった。

第一・二節で扱った三木合戦関係軍記は、敵味方の立場の枠を越え様々な変容を遂げた作品群である。伝本調査の結果報告も交えて、諸作品や伝本の持つ特質をpushさせた。その上で、局地的な合戦がこれほど多様な軍記を生み出した最大の要因は郷土への思い入れと考え、戦国軍記の変容や伝播に地方が大きな役割を果たしていると確認した。

また第三節では、三木合戦関係軍記の『別所記』が依拠した敵方の軍記『播州御征伐之事』と相違する点から、赤松末流の別所氏の血脈への崇敬が作品を強く特徴付けていると指摘した。第四節では、備前の地方軍記『妙善寺合戦記』の伝本調査の結果を報告した。地誌的な要素を持つこの戦国軍記にも地元での改変が見られ、それは郷土への愛着が作用した結果と考えた。中には特定の家の記録に変容する伝本も存在した。

第五節でとりあげた丹波赤井氏関係軍記も、これまでの軍記文学研究の中で取り扱われることのなかった作品である。四本の伝本を対象に本文を比較検討したところ、伝本間の本文異同

が比較的大きいことが認められた。これは四本すべてが地元伝わるといふ状況と無関係ではないと考え、ここにも戦国軍記の地方性が見いだされると結論づけた。

更に第六節では、赤井氏関係軍記の主人公である赤井悪右衛門の伝説が、近世に成立した光秀・秀吉関係の軍記や軍談類の中で発展していく様を追った。そして一般に広く流布した武将伝説を地元丹波の地方軍記が取り込む際、賛辞を贈るのではなく、郷土の武将の評判を貶める例もあることを示した。

第七節では、播磨の戦国軍記『長水軍記』二伝本の本文検討を行った。その結果、東京大学史料編纂所図書蔵本は、家の記録として改変された地方色の濃い後出本であると位置づけた。

第八節で取りあげたのは、江戸幕府の修史事業に伴って各藩・各家で作成された家の記録、いわゆる「家記」と称される軍記類である。これらの家記の描く関ヶ原合戦が、幕府への忠誠を印象づける目的で書かれており、幕命で編纂された『寛永諸家系図伝』に取り込まれていくとき、依拠する比重が家記によって異なることに気づいた。この現象には、政治的な作用が働いている可能性があるかと推測した。また、幕府という「公の視点」を意識して書かれていることから、戦国軍記の持つ「私の視点」といった特質が微弱になっており、こうした家記を戦国軍記の枠内にすべて納めるには疑問が残る、と問題点を提示した。

以上、第二章では戦国軍記の地方性がどのように養われるのか、その事例を多く提示できたと思う。

(二)

戦国軍記が作成され伝わった合戦の舞台である地元では、空間的・距離的な近さから戦いや戦いに関わった人々への強い思い入れが存在する。この思い入れが戦国軍記の成立や変容に大

大きく関わることは本論で証明してきたとおりである。

本論において調査対象となった戦国軍記のほとんどが、兵庫県の地方軍記であることは偶然ではない。丹波・摂津・播磨の国々は、戦国時代、織田と毛利の狭間にあって多くの戦闘を経験した。そのため数多くの軍記が制作され現在に伝わっているが、これまで国文学的な研究に取りあげられる機会は僅かであった。また、筆者が生まれ育ち、現在も居住する地が兵庫県であり、筆者自身の郷土への愛着が自然に兵庫県下に伝わる戦国軍記を研究対象とさせたのだと思う。このような思い入れは、戦国軍記の作者や改訂者、享受者の思いと同じであろう。地方の戦国軍記の享受者にも郷土への愛着がある。戦国軍記が細かな地名やその地域でしか知られていないような人物の働きを詳細に伝えるのは、軍記を享受する側に応じた記述であり改変であろう。故に地元に残る戦国軍記は、地方性を益々濃くしながら改変されていく。どの時代でも軍記は、作者・改訂者の興味や使命感が享受者の共感を得たときにはじめて変容を遂げ広まっていくのだということを経験した。戦国軍記の持つ地方性は示している。

今回取りあげた戦国軍記は、非常に偏ったものであるかもしれない。兵庫県の戦国軍記に表われている地方性の様々な要素は、他の地方の戦国軍記にも認められるのかどうか、大きな課題ではあるが、今後の研究目標にしたいと思う。

# 原題・初出一覧

## 第一章

第一節 「島原松平文庫本『明德記』作成の目的について」

(甲南女子大学大学院『論叢』十六 一九九四年三月)

「続・島原松平文庫本『明德記』作成の目的について ―堺との関連をめぐって―」

(『甲南国文』四十八 二〇〇一年三月)

第二節 「永享の乱・結城合戦関係軍記の検討

―主として『鎌倉持氏記』『結城戰場記』『結城戰場別記』の関係をめぐって―」

(『軍記物語の窓 第二集』関西軍記物語研究会編 二〇〇二年 和泉書院)

第三節 「翻刻『結城戰場記』(金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵)」

(『日本文芸論叢』片山享編 二〇〇三年 和泉書院)

第四節 「『松若物語』の限界 ―「記」と「物語」の流れ―」 新稿

## 第二章

第一節 「『別所記事 別所小三郎長治播州三木落城濫觴事』について」

(『甲南国文』四十 一九九三年三月)

「『播州御征伐之事』の受容をめぐって

―『赤松末葉記』、『三木記』、『別所記』の成立の様相―」

(甲南女子大学大学院『論叢』十八 一九九六年三月)

「三木合戦関係軍記の展望」

(『別所記―研究と資料―』松林靖明・山上編著 一九九六年 和泉書院)

## 第二節

「神戸大学人間科学系図書室蔵『別所記』をめぐって

―『別所長治記』から神大本へ―」

(『甲南国文』四十二 一九九五年三月)

「三木合戦関係軍記の展望」

(『別所記―研究と資料―』松林靖明・山上編著 一九九六年 和泉書院)

## 第三節

「別所重棟の虚像と実像 ―『別所記』に見る赤松氏の誇り―」

(『甲南国文』四十五 一九九八年三月)

## 第四節

「『妙善寺合戦記』諸本の検討」

(『軍記と語り物』三十六 二〇〇〇年三月)

## 第五節

「丹波赤井氏関係軍記について ―戦国軍記の地方性―」

(『軍記と語り物』四十二 二〇〇六年三月)

## 第六節

「赤井悪右衛門伝説の行方」 新稿



第七節 「播磨の戦国軍記『長水軍記』小考

―東京大学史料編纂所図書室蔵本を中心に―

新稿

第八節 「『家記』の中の関ヶ原合戦」 新稿

## 資料

### 東京大学史料編纂所図書蔵 『長水軍記』 翻刻

凡 例

東京大学史料編纂所図書蔵『長水軍記』を翻刻するにあたり、出来うる限り底本を忠実に翻刻するよう努めたが、通読の便を計り、以下の方針に従った。

一 句読点及び濁点を加え、会話の部分は「」で示し、適宜改行して段落を設けた。

二 字体は原則として通行のものに改めたが、一部正字体を残した場合もある。また以下の文字は文意により直した。

陳↓陣      良↓郎      矢↓失      斗↓計      江↓へ

三 底本のカスレを始めとする判読不能の文字は、おおよそその文字数に相当する数の□で示した。

四 底本に明らかな誤りがある場合、あるいは意味不明の場合は、右に（ママ）と注記した。なお、同じ誤りが繰り返し返してある場合は、その初出に限り（ママ）の注記を付した。また、脱文があると思われる箇所には、同様に（脱力）と記した。いずれも、底本になく私に記した注記は（ ）で示した。

五 本文に施された返り点（漢文表記部分）・フリガナは底本の通りとし、誤りと思われる場合も私には直さなかった。また、煩雑になるため（ママ）等の注記も付けなかった。

六 底本の「見セ消テ」による訂正、書き入れによる脱文補足等は、その指示に従い訂正した。

長水軍記卷の一

一字野下総守処領の事并に宇野家譜の事

一秀吉之使者長水へ来る事并に政頼姫路へ出仕の事

一討手の勢下向の事

一祐清狭戸へ向ふ狭戸香山合戦の事

一川戸合戦并に秀吉狭戸坂を越玉ふ事

一香山勢引退き附たり政頼籠城の事

一城より出張りの事(1才)

長水軍記卷之老

宇野下総守処領之事并に宇野家譜尽之事

天下は一人の天下にして一人の天下にあらず。天下は天下之天下也と杜牧之(マツ)阿房宮の賦に残せしは万代不朽之一言也。亦孫子之曰く兵は勝を尊しとす。久しきを尊まず。故に兵を知る之將は民之司命国家之主也。

爰に本朝足利將軍義政公之治世に當つて応仁の兵革起りしより以来足利家之末に至り、大永天文天正之頃諸国麻(2才)の如く乱れ蜂之如く起り、干戈尅日も止時なし。旌旗天に翻り英雄猛將独立し各国境を侵し、豪傑は威名を耀さんと欲す。中にも織田信長隣国を征し武威を畿内に振ひ、北国中国へ手配りし、先北国は柴田を討手とし、関東北條へは滝川左近將監一益、四国へは信長之三男信孝、丹羽五郎左衛門長秀、丹波は明智日向守光秀、中国へは羽柴筑前守秀吉を遣し、処々国々へ手を配り天下を治め万民を名附んと仁義を以て征伐す。

爰に播州宍粟郡五十波村之土地に宇野下総守源之(2ウ)政頼と云城主、多郡を領し險阻に依て信長に背く故に羽柴秀吉是を責。先宇野之領地と申すは、揖東郡、揖西郡、宍粟郡、神

東郡、但州之内老郡、以上五郡を押領し、其勢近国に振ふ。是に乗じて処々城郭を責落し氏族家臣是を守る。先伊和岡城には政頼の家臣岡城豊前守、其子豊後守相続して守レ之。杉ヶ瀬之城には一族日向守祐久守之。清野之構ひ是也。高家郷都多村之城には宇野采女正祐政守之。土万郷鳥子が城には同右衛門尉祐光守之。千草黒土村之城には家臣石原右京大夫、其(3才)子勘ゲ由相続して守レ之。其外一族家臣等処々之端城に居す。先宇野家の祖を悉く尋れば、赤松信濃守範資の四男広瀬宮内之少輔師頼此山に入始めて城をきづきしより相続ひて、其子出羽守頼康、頼康に子なきに依て宇野国頼之子掎則之子新太夫朝村、頼康の子と成。然る処に朝村多病にして家を続事あたわず。弟則親に譲り夫より満持、光頼、政頼に至る迄七世長水に居城す。爰に同国飭万郡姫路之城には、小寺官兵衛孝高とやらは兼て政頼と領分を争ふ事やむ時なし。然れ(3ウ)ども小寺は兵少なし。宇野と戦ふ事は難義也。日頃うつぶんを含み居たりけるが、幸ひ羽柴筑前守秀吉播州へ下向ふに力を得て、「何とぞ私し御味方を申し当国之氏族を亡し、其次手を以て宇野をも亡さん」と私の意趣をもつて種々に説言を申すといへども秀吉聞入玉わず。「事の実否を聞定め随わざる時は亡すべし」と言れければ、諸大将、「此義然るべし」と評義是に一決し、木村、樋口に荒木を差添へ長水へ遣しける。

秀吉之使者長水へ来る事(4才) 并 政頼姫路へ出仕之事

時去り時来り天正八年辰の三月十日、秀吉之使者長水差て来りける。此時政頼は一族郎従を集め酒宴をなして居玉へり。「秀吉之使者来る」と申ければ、則ち内海、長谷川、横野、下村、出迎ひて内に入て政頼に対面す。折節一族郎従寄集りたる事なれば、重々に並び居て口上の趣を聞。時に三使進出て申けるは、「此度羽柴秀吉西国討手を承り討向ひぬ。同意に於ては早々姫路へ参らるべし。異義に及び候わば、一戦に決すべくと申され候」(4ウ)と言ければ、政頼暫く思慮し、「皆々と評義に及び候間、先使者の間に参られ御休足有べく候。内海御案内

致されよ」と夫より三使は返事のみを待居たり。時に重清申けるは、「当家は先年より毛利の令を受、今亦織田の下知を受は是武將の義に不<sup>アラ</sup>レ<sup>ズ</sup>非。唯使者之首を切、一人を返し、秀吉が寄るを待て毛利へ援兵を乞、其時内外より挟み討、其虚に乗りて織田を攻落し、唯毛利と謀を合せば何をか恐るべし」と申されければ、祐政申されけるは、「然れ共援兵来らざる時は如何せん」と申す。重<sup>ウヘ</sup>（5才）清曰、「其時は快<sup>ユル</sup>く討死すべし」と申し、評義決せざる時、祐清申されけるは、「各の評義一理有。然といへども左にあらず。今敵より使者を越し候に其を殺せば臆したるに似たり。其上当時織田に敵する者なし。毛利逆も日ならず織田の幕下に成らん。今当城に籠りし敵兵を分、毛利を押へ当方を急に攻ば、落城眼前たり。先織田に隨身し、亦其後時を見て如何様も謀るべし」と利を尽し申されければ、政頼を始「此義甚だ利有」と其義に一決し、使者に斯と申ければ、三使暇を告退出す。政頼、<sup>ウヘ</sup>（5ウ）祐清、祐政、其外小林、春名、一族郎従門前迄見送り、惣翌日政頼數十人召連れ、天正八年三月廿七日長水を立て、同日暮方に姫路へ着し玉ふ。其夜は小寺が方に宿し、翌日登城有て北之間に扣へ待玉ふ。秀吉は折節碁<sup>ゴ</sup>に討入て始終対面し玉わず。依之政頼立腹し、「我彼猿冠者めにたばかられしこそ口惜けれ。目に物見せん物を」と言て、郎従引連れ同日帰り玉ふ。

#### 討手之勢下向ふ之事

少しき成事を忍ばざる時は、後必ず大ひ成謀事<sup>ウヘ</sup>（6才）をば乱といへり。誠や堪忍之二字は人世第一の重宝也。范<sup>ハン</sup>叔<sup>シュツ</sup>は厠<sup>ウツ</sup>やの恥を忍びて秦の宰相と成。されば宇野下総守源之政頼は、秀吉の対面なきを立腹し早々立帰り、長水に一族を集め、秀吉大軍にて攻下<sup>クダ</sup>らば如何して防戦せんと評義まぢく也。

斯て秀吉は宇野政頼が帰りしも不知碁を討居玉ひしが、御舎弟羽柴小太郎秀長、後に大和号大納言、谷大膳清好、兩人御供に出て帰り申されけるは、「政頼は公之出合玉わざるを見て暇

も不<sub>レ</sub>告歸り候。是は早く御征伐有て然り候。捨を』(6ウ) ぎ候は、必後の過ちならん」と申されければ、秀吉此義に同じ、則ち秀長に式万五千を付て城に残し、秀吉自ら向ひ玉ふ。先陣荒木平太夫大將にて林田通りより向ふ。中陣は小寺官兵衛孝高大將にて三千騎、鬻崎より向ふ。後陣は神子田半左衛門大將にて林田通りより向ふ。秀吉の本陣は木村、竹中、石見、樋口、其外大勢にて向ひけり。姫路之城に残る人々には、羽柴秀長、高山右近重友、福富半左衛門、谷大膳清明、浅野弥平長政、蜂須賀彦右衛門正勝、桑名弥太郎、糟屋左近、柏木亦太郎、宮』(7才) 川三郎助、久米与五郎、大原、嶋根、中桐、山田、石津、羽栗、春名、板垣、三沢、杉原、中嶋、桜井、山根、藤岡、柳ヶ瀬、白石等を始、都合二万余騎、事之難に及は、二度攻下らんと<sub>レ</sub>の為也。

祐清狭戸へ向ふ<sub>并</sub> 狭戸香山合戦之事

扱政頼此由を聞て下村治郎右衛門を召て、「如何がすべし」と申されければ、下村畏て申けるは、唯狭戸香山へ向つて防ぐより他事有べからず」と申ければ、政頼此義に同じて、「さらば討手を向べし」とて、則近郡の一族郎従馳集て大略数をつく』(7ウ) して向ひける。先狭戸へは宇野藏人祐清を大將として、侍には 卯野内匠行義、春名修理光俊、小林三河重清、同兵庫重近、同内匠重吉、田路信濃貞政、岡城豊後守吉市、田路五左衛門貞年、同伝兵衛光朝、岡田伴左衛門長宗、同与市兵衛近安、阿黒右京長則、久住外記為時、伊和主税信年、安積將監安昌、同久藏安長、内海多助吉政、長谷川五郎兵衛時重、竹の内八左衛尉政清、真木弥兵衛時信等を宗徒の侍として都合一千百余人、騎馬百五十騎とぞ聞へけり。香山へは宇野右衛門尉祐光、同采女正祐』(8才) 政を大將として随士には神山但馬正明、石原勘ヶ由光時、横野六太夫親義、宇尾墨勘助藤時、阿甫助太夫為重を大將にて右翼之侍には、下村先生則長両大將の侍を不残随ひけり。扱香山へ向ひし勢八百余人、騎馬七十三騎、此両勢四月朔日狭戸香山へ向た

り。

去程に秀吉の陣には軍は明日の事にて有らんと諸軍勢休み居たる処に、狭戸スサの山陰より左り三ツ巴の旗三流真先に押立て、宇野祐清諸軍を卒て時を作て掛入、東西南北へ割て通、四方八方を切て廻る。秀吉の勢あわてさ』(8ウ)わぎてもみ合ける内、祐清の勢悉く乱入して、末(マツ)だ目もさまさずして起くるををこしも立ず切離しければ、秀吉の兵夥敷討るゝを見て、荒木、神子田、木村、竹中、石見、樋口等、鎧をも着せず馬に乗り兵を下知して防戦す。去共大敵流石にかたければ、少し引色に成処を秀吉数千兵ひゑひけくくと物具かためさせ、祐清の兵に掛合攻戦す。秀吉の兵鶴翼と開て取こむとすれば、祐清の兵魚鱗に掛て囲れず。陰にかこふて突破らんとすれば、透間無打寄てあゑて破れず。千変万化の戦ひに』(9オ)末勝負はなかりけり。祐清自馬を馳出、大音に名乗りけるは、「村上天王之末流宇野国頼の末、宇野藏人祐清と言者也。敵方に名有侍あらば、出合て我等が太刀の味を受て試んや」と言もあゑず、大勢の中へ切入ける。秀吉の陣よりも「荒木平太夫」と名乗りて祐清と鏖を合けるが、祐清は元より鎗の名人なれば、荒木一戦に打負て鎗を捨、本陣へ逃入ける。祐清勝に乗て陣中へ乱入しけるに、忽然として鉄砲耳元に響程こそあれ、秀吉の伏兵潮のわくが如く起立てとふま竹葉の処回て鉄』(9ウ)砲を打事百千之雷の落るにひとし。響渡て夥敷聞へける。祐清諸軍に下知して漸々一方を切破り本陣へ帰り玉ふ。斯て日を過四日にも成ければ、羽柴宇野の両勢狭戸香山の間に出合、時を作て攻戦す。先屯番には岡田、岡城、阿墨、安積等、荒木と石を踏割、土をふみならし戦合、互に多く討れて両方へ引退く。二番に田路、久住、内海等、神子田と半時計り血戦して其勢も戦ひ破れて引退けば、三番に小林、春名等、竹中、樋口、石田、石見等と火水と成て血戦す。時に小林重清合図の鉄砲を討』(10オ)ければ、陣の後より足輕甘騎宛一組に成りて雲鳥の陣に備へ段々と討出、透間無く討掛ける。竹中が勢大に破れて兵を引て逃はしる。祐清是を見て、「荒手わ尽、又戦合ば末不決、我当るべき所也。爰に戦合ずしていつか期すべき」

逆、三百騎を左右に立、秀吉と有無を決せんと戦合。両方共大将とくとの戦軍なれば、兵刃を交る程こそあれ、或は引組て首を取も有、取る、も有。或は敵と取違へて同馬より落るも有。是を見て先に戦合て退きたる両勢共、今は何の時をか期すべしとど』(10ウ) つと叫て天を響かし地を動かし、喚叫で攻戦す。祐清又馬を駆出し大勢の中へ突入り。敵軍兵勢ひにへき易して少し引色に成ける。祐清弥勝に乗り諸軍を駆て追散すに、秀吉の勢大に破れて本陣指て敗走す。祐清も伏兵の有らん事を恐て本陣へ帰る。秀吉も軍を納めて本陣へ帰り玉ふ。

扱四日の軍に秀吉の兵多く討れたりと姫路へ聞へければ、御舍弟秀長郎党宮川三郎助、同五郎兵衛、両人大将として中嶋、山田を始、都合三千余騎、四月五日未の刻松山の陣に着にけり。秀吉此勢』(11オ)を合て五千余騎、五日申の刻に狭戸の陣へ押寄、両方進て戦ひける。

時に秀吉陣より老人の大将、浅黄の直垂に白糸威の鎧を着て、月毛の馬に乗り太刀式振り帯て、白木の弓に白羽の矢森の如くをひ、真先に進て矢を射る。其勢ひ鬼神とも譬方無事也。祐清の陣よりも一人の大将、其年廿計り成小男之色白く浅黄の直垂を着し、黒皮威の鎧を着てつま黒の矢ををひ、五尺計りの太刀を引提、彼男に掛合て戦ひけり。余り急に戦ふ故、敵味方見分難し。両方危く見へければ、小林重清、「あれ』(11ウ)討すな」と下知をばなし、当手の軍兵五十余人討出て力を合す。又秀吉の陣よりも中村新蔵、私卒を率て力を合せ責戦す。秀吉是を見て勢を三手に分て取囲ふ逆三方より押寄る。祐清も諸軍を引て追つ返つ半時計り息も続ず喚叫で攻戦す。両方共義重く命を軽しての戦軍なれば、千騎が一騎に成迄と互に一足も不引、命限りに戦ふたり。去共手足弱りければ、両方へ引敵方より一人の大将加藤虎之助と云。味方は不知也。一息続て亦兵刃を交へけり。時に秀吉も祐清も荒手を入かへて責戦す。其内日も』(12オ)西山に入にけり。其日は勝負はなかりける。斯て香山には三日には不戦合して軍使を遣して、軍は四日の卯の刻矢合せと定められける。無程夜も明れば、宇野、小寺の両勢陣中へ出合矢を不交処に、只十余人切り入、四方八面をまくり切に切て廻る。敵一人も此太刀先に廻る者なし。凡千廿余人に手を負



せ、百余人を討取て味方勢に駈加る。是を後に聞ば、副將祐光、祐政、其外一族也。誠に皆無<sup>レ</sup>井勇士也。其後軍始りて祐光、祐政八百騎を魚鱗に備へ、一息に掛破らんとすれば、小寺兵三千<sup>』</sup>(12ウ)騎にて取囲んとす。兩軍共に千変万化の戦ひに、何も義を盤石にひし戦ひける。斯て有べきにあらざれば、猶々兵を進めけり。龍虎の戦ひに何も討死多かりける。されども一足も不引責戦す。戸<sup>カハネ</sup>わ積んで岡をなし、血は流れて紅河をなしにける。

#### 川戸合戦の事<sup>并</sup>に秀吉狭戸阪を越へ玉ふ事

孫子曰彼を知り是を知る者わ必ず勝といへり。是誠に百戦百勝の論にして後世の龜鑑なり。さ<sup>』</sup>(13オ)れば人を謀る事は、おのれに有功をなす事は天にありとかや。

斯て四月五日は酉の刻に狭戸の合戦止ければ、秀吉諸將を集め申されけるは、「今日敵勢を見るに、大略数を尽し狭戸香山にあり。長水の勢少なし。此隙<sup>ヒマ</sup>を伺ひ内より責れば、狭戸香山は自然に亡べし。敵に知らざる様に、夜に入て西成山の嶺を越え、先香山の陣を責破り、其虚に乗じて長水を攻、もし是を知つて川戸にて防がば坂を真下へ責落し、逃るを川へ追こめよ」と理非明白に申されければ、当座に有合諸將各此<sup>』</sup>(13ウ)義に決しける。時に荒木進み出申けるは、「もし狭戸之敵此由を聞ば、山を越る時跡<sup>アト</sup>より攻て味方一人も生残る者は有間敷候」と言ければ、則ち石田が一族の山田、中村、中嶋等を相添て、五百余騎を残し自ら四千五百騎を引、案内者を先立各炬を持って、其子の刻計りに上り、同丑の刻に山の嶺を越る。

時に香山の夜廻り是を見て、「あら夥敷。あの火は如何成事ぞ。狐火」とあやしんでよくく見れば、山を越る諸軍勢の灯<sup>トモ</sup>たるたい松の火也。彼者大きに驚き大将之本陣へ此由を申ければ、<sup>』</sup>(14オ)祐光、祐政、急に石原、下村を呼て此由を申されければ、兩人申けるは、「只山中より追返すより外なし。此敵後より攻懸らば、味方一人も生て帰る者なし。某向ひて一当あてゝ見候はん」と申ければ、「此義然るべし」と石原勘ヶ由に三百騎を付、川戸へ向へけり。

石原が勢秀吉を追返さんと勇み進んで山中迄上る。秀吉は大膽不敵の勇将なれば少しも動ぜず、四千余を一備へにし坂中に陣し弓弦をしめし矢束をば解、鉄砲を備へ静りかへつて待懸たり。宇野の先陣嘖と寄懸鉄砲を討懸』(14ウ)間近く成て、はや先陣へ懸らんとするを得と見すまし、秀吉、「すは時分はよし。防げ」と下知するにぞ待設けたる諸卒等、一同に筒先を揃へ打て出、弓の者は矢種を不惜さし詰引詰散々に射立させ打立、爰をせんど、精神を励まし透間もなく討出し防ぎける。差もの宇野勢将綦倒しにばたばたと討倒され、思わず嘖と引退くを、大将石原是も武功の勇将成故大音揚げ、「きたなき味方の振舞哉。只ひた参りに討破れしか」と勇を励し下知するにぞ、やはり雄の若者ひたくと五十騎計』(15オ)り鞆をかたづけ、飛來る矢石を鎧の袖に受流し、少しも疑ぐせずまつしぐらに攻寄せしを、秀吉の陣より鎗先を揃へ突出し勇を振ふて討懸る。宇野勢武しといへども、秀吉の英気をやしなひし荒手の勇兵に突崩され、四度路に成て引返すを、石原勘ヶ由是を見るより大に怒り士卒を励し声もかるゝ計り下知すれども、触れ懸りしならひゆへ右往左往に乱れ立、紛々として陣列をなす事不能。主討るれども顧ず。親討るれど是を不救。子危しといえども是を不助。さしもさかし』(15ウ)き急なるやまをわれ先にと逃下る。秀吉の兵追掛ければ、石原が兵討るゝ者数を不知。わずか百騎も不足也。亦川戸にてさゝへければ、秀吉の勝に乗じたる兵、石原がつかれたる弱兵なれば一戦にも不及、香山指て引返りける。秀吉の兵益々氣力附て川へ追はめんと勇み進んで追散す。此時歩兵騎將多く討れけり。石原が兵弥つかれて返す者一人もなし。皆我先にと引ける内、夥敷討れて漸河岸に至りけるに、折節舟少し只三ぞう有。此舟に船頭はなくつなぎ捨にして有ければ、』(16オ)各綱を切て一そうには石原が一族七人に手の者都合廿三人乗りて、他の人を乗せず押出す。跡二隻に我もくと飛乗り、誠に小舟に五十余人乗りたれば、ついに二そう共に真中にてしづみ、皆々水に溺て死する者五十人にあまり、中に一人水連に達者成者、水底をくぐり向ふの岸に付にけり。勘ヶ由は廿余人引連本陣へ帰りけり。秀吉は暫く川戸に陣を取

て使者を香山へ被遣けり。

香山の勢引退く附たり政頼籠城之事』(16ウ)

使者香山へ至て小寺に申けるは、「明日辰之刻に後より攻べし。是を相図として前より可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>攻」と申す。秀吉の状を出しければ、小寺返書を認め使者に申けるは、「某し前より攻候を御見知候はゞ、敵にしれざる様後より切入り、兵糧を不<sub>レ</sub>残集め取り火を附玉はゞ、敵戦ひをやめて火を見て引返す其内に急に攻て、一人も不<sub>レ</sub>残討取べし」と申ければ、使者帰りて此由を返状を出しければ、秀吉は夜の明を待玉ふ。

扱六日に成ければ、小寺三千騎を率し祐光の陣へ押寄鉄砲を夥敷討掛け』(17才)れば、祐光も四百余騎を左右に立、百騎陣に留置討出て、小寺と追つ返つ半時計り戦ひけり。其間に秀吉は四千五百余を一手になして、香山の陣に入込み、残兵悉く切殺し兵糧を集取、陣に火を附ける。折節風はげしく吹、しきりに火煙も懸上り、是を見て祐光の兵敵を捨、火を防がんと引返せば、秀吉勢道を押へける。是非無此勢に討掛て生死を不知戦合て、漸く一陣を破て二陣に攻入、命限りに血戦す。三陣に打掛る。天を響し地を動して責<sub>シヤ</sub>戦し、又打破て四陣に当り、荒木、神子田』(17ウ)と喚叫で責戦、又切破五陣に切入る。秀吉二千を一手にしけるを真中にかけて入、火を散らして戦ふ。亦かけ抜て長水指て落行けり。秀吉は五陣を破られて川戸へ退んと用意仕給ひけるを小寺三千騎馳加つて、しきりに勢を進め、亦兵を率て落行勢の跡を追て一里半計行処に、山陰より一千騎計出て祐光の勢を取込責戦。其勢多く真<sub>マコト</sub>立なれば、或は馬より落し首を取も有取るゝも有。生死を不<sub>レ</sub>知戦ひける。是を見て秀吉勢を十手になし十重に取囲ふ。祐光士卒を魚鱗に備へ、一度に』(18才)哄と突崩し、兵を引て逃走る秀吉氣力を持て、人馬に息をも続せず喚叫で責戦ふ。亦御名<sub>ゴノナ</sub>にて追付けければ、祐光わざと精兵三百騎を合せ、其余は河を渡して落し置、祐光は横野、下村二人を陣に留置、御名の川を後に当て待かけ

たり。秀吉の兵近く成ければ、三百余人一手に来て東西南北に掛破りては掛入、抜ては入、稲妻の如く四方八面に馳廻り、当を幸に馬より下へ切て落しければ、終に秀吉の兵夥敷討れて我先に逃引ける間、追に力不<sub>レ</sub>及して十丁引て陣を取。是は祐光古例を引、』(18ウ)韓信の背水の陣になぞらへ如斯陣を取て討勝玉ふ。其時若追かけ玉ひしなば、秀吉を討事案の内に有。去共秀吉に兵糧を大に集られしより、兵糧乏しく追事を不得。川を渡して落行けり。天運とは言ながらうたてかりける事共也。

斯て香山の勢五十波<sub>イカバ</sub>村に付きければ、近辺の百姓に触て思ひ立事有て長水へ兵糧を上る事有。米壺石運びける者に鳥目三百文を与んと触ければ、多くの人五六千集り我もくと運びける間、一時の間に一万五千石をぞ登せける。其後蔵々に有』(19オ)所の金銀を悉く百姓にあたへ、家屋敷等一片も不残焼払て、十一日の暮方に長水へぞ籠りけり。

先此城と申は、東は三津山に続き西は都多山より他国へ続き、南は坂にして廿余丁麓に人家有。北は險難にして屏風を立たる如く数十丁を見くだし、わずか二三丁にもあらざる小城なれ共、要害之好事は播州一の名城也。

則此時使者を親免伊賀守と申合せ、毛利家の援兵を乞。難義に及ば、後詰<sub>ゴツメ</sub>せらるべしと仰合せければ、伊賀守即座に毛利へ使者を遣し家人隼人を召、後詰<sub>ゴツメ</sub>せん』(19ウ)と用意を<sub>(マダ)</sub>しられける。

秀吉は櫓<sub>カシ</sub>木山に向ひ陣を取、四方に壁一重ぬり、其内に白布三十反を松葉を焼て煙にふすべ、色々の紋を画て旗に拵へ立並べて置給ふ。是は敵に十分の威を見せ降参させん為也。扱狭戸には五日の夜秀吉川戸山を越へるも不知敵陣を見渡せば、旗指物夥敷立て連ね風の吹間に翻として大勢替たる様に見へければ、いたづらに日を送りける。

爰に秀吉の刀持有。或時刀を持たながら小べんをしたりしに、刀のさげ紐に小べんかゝりしを見て、秀吉自こぶ』(20オ)しにて討れしが、彼者立腹して此方へ降参す。彼申けるは、「秀

吉は四日姫路より大勢下向したる。明の夜川戸山を越て、松山の陣には三百騎には過じ」と申ければ、是屈強の事也。押寄攻破らんと春名、田路、宇野内匠、小林、岡城、田路五左衛門、宇野蔵人、内海、長谷川等大將にて、其都合八百三方に押寄ける。松山の陣にも是を防がんと山田、中村、中嶋等、兵を三手に分て扣へたり。後陣には石田二百騎を率し、何れ成共弱き方へ向わんと用意して扣へたり。軍四方に始まり、敵味方争ひ交り』(20ウ) 組合揉合石を踏わり地踏ならし、切先より火花を散し戦合たり。時に中村大に破れければ、祐清弥勝に乗て馳廻る。敵蛛の子を散すが如く敗走す。山田は未だ崩れず防戦す。され共少し防ぎ兼たる所を祐清、「活」と叫び一鞭に打破り、石田が兵に攻かゝる。石田爰を破られては不叶とて、爰に顕れかしこに打合生死を知らず戦ひしが、先に敗したる山田、中嶋等、大返しに哄とかへし、祐清勢を取巻内より石田、外より山田、中村等、喚叫で揉立ければ、流石の宇野勢終に打負、長水指て』(21オ) 落行けり。時に石田、山田、中村、中嶋等は、跡を追て秀吉の陣に馳加る。

祐清は十二日長水に引籠りて、皆々本陣に集り酒宴を始ける。其人々には宇野下総守從五位下源之政頼、同右衛門尉祐光、同政頼の一男蔵人祐清、同從弟采女正祐政、同内匠、其外小林、春名、田政、岡城等也。其外の諸臣は此座に不出して口々を堅めけり。城中の勢都合三千余騎城内に充満たり。斯て十二日の酒宴も止ければ各退散す。

秀吉は高家村今之庄に鹿村也に陣を取しとぞ聞へけり。先生谷迄出張す。川を中にはさみ』(21ウ) 勢を扣へけり。其人々には岡田、横野、祐清、祐光、祐政、侍には横治、下村、内海、長谷川、安黒、岡城等也。軍使として小林戸兵衛跡より遣しけり。誠に東西は旌旗天ををゝひ山をつゝみ川風に靡け渡り夥敷、誠や、頼政、清盛、宇治川も斯あらんと思われけり。

### 城より出ばり之事

斯て諸大將川辺バタに出て敵勢を見れば、三四丁計打続て二三方もあらんと思へけるが、真中に

旗指物烈風の吹間に翩翩して、旗の透間に見る山』(22才)もなし。去ば呉魏天下を争ひ石壁の戦ひ、大元宗亡さん黄河の兵も是には過じと夥敷見へければ、士卒も是を望で案に相違やしたりけん、味方を返り見て退出してぞ扣へたり。祐清士卒を下知して三百騎を旗陰に扣へ、百騎川辺に出して遠矢を射させける処に、夫とも不知五十騎計り、「続や者共」と呼び颯と討入けるを、祐清の百騎の者鎌を揃へ、春風に木葉の散如く射ければ、終に破れ向ふの岸にかけ上る。宇野勢之を見て、左右より鉄砲を雨の如く打ければ、互に人を楯にし』(22ウ)て其陰に隠れんとする所を、「得たりや、かしこし」と喚て掛入、真中に取囲んで一人も不残打取けり。是を見て亦五百騎計り一手に來りて、あれ討すなと颯とかけ入。此度は川中にて勝負を決すべしと五百騎を一手になしてかけ入。水手の岸に当て百騎計り一卷に成押流されて、亦如何したりけん、北の岸へ這上るを、下の瀬に扣へたる岡城孫治郎、阿黒陽助、二百騎にて取こめ、一人も不残討取たり。是を見て荒木平太夫千計りにて上の瀬を渡りて、岡田、横治の勢に打掛る。兩人相』(23才)合命を主君に奉り火水と成て血戦す。荒木勢宇野の死に武者に切立られ川より南へ引、式番に神子田半左衛門一手の勢を卒し、中の瀬を渡り右將軍祐政に打て懸る。祐政待設けたる事なれば、旗の手を進め戦ふたり。敵陽に開て取囲まんとすれば、馬を透間無打寄て取かこまれ共破れずして、少しもたゞよわず戦ひける内、人馬共に勞れて両方へ颯と引、三ばんに中村、宮川、柏木、堅田、中嶋、山田、八百騎にて中之瀬を渡りて惣大将祐清に打懸る。祐清喚て真中に懸入、三四尺の太刀』(23ウ)を片手に打振り、当るを幸ひに東西南北に懸散し、命惜まず八方に當りて半時計り揉合ける。終に敵を破りける。亦石田、樋口、小寺、河を渡りて横合へ祐光に懸る所を、横野、下村、内海、長谷川、鉄砲をつるべに掛て打放し、煙の中より槍袞を作り突出る。其勢ひ猛虎のかけるが如く終に両方夥敷討れて引にけり。秀吉は一手の兵を卒して上の瀬を渡らんと川に添て上りける。時に中の瀬に扣へし兵五百余騎、秀吉の兵を上立じと敵の上に随ひ川ばたを西へ打ける。

秀吉の勢四千余也。味方僅か二百

(24才)

にて秀吉の大勢を不逞并行事勇氣勝れたる也。人皆是をほめしと也。

秀吉之

勢おのづから進て懸る勢ひ見へければ、城兵爰ぞ大事の一戦と臂をはりて待懸たり。上と下との両陣調ば、遙に上の瀬を渡し玉へば、下之瀬に扣へたる安黒、岡城、祐清と其間遠くへだゞり中の瀬には扣へる勢も無依之、木村、竹中、中村、宮川、柏木、山田、小寺、樋口、荒木、神子田、七千騎を二手になして、一手は下の瀬を渡り安黒、岡城が後より打懸る。亦一手は中之瀬を渡し前より討懸る。陽助、孫二郎に向て申けるは、「敵前後に有て味方難儀なり。防に手立なし。今は遁間敷と覚へ候。先前なる敵を一散」(24ウ)に追散し心静に自害して名を末代に残候べし。御辺は如何思ひ玉ふぞ」と問ければ、言にや及と二人打連れ百騎の勢を前後に立、木村等の四千騎に向ひ大音に申けるは、「宇野家にて強勇と呼ばれし阿黒陽助時春と申者也。今日爰に討死し君恩をほふぜん」と名乗りもあへず大勢に割入、東西に馳廻り組で落ては首を取。亦馬人共に真向より切倒され、敵を討事鯨のいわしを吞が如し。雷光の如く又稲妻の如く追倒し、前に有とすれば後に有。其とき事如風。終に敵を打崩しす」(25才)つと掛抜て勢を見れば、六十騎は討れける。又半時計りかけ廻り懸抜て見れば、只十騎にぞ成にける。今は是迄と思ひ十騎の兵に防がせて、二人共自殺をぞ仕たりける。誠に勇猛忠良の士とぞ人皆是賞けり。安黒、岡城已に討れて、木村等秀吉と一手に成て祐清に討懸る。然れ共其日も暮ければ、互に白眼合て東西へ陣を張り、南北に旗押立ける。其夜城兵夜討し懸れば、軍利無して長水へ籠りける。斯て夜も明れば秀吉手を合して、大手へは荒木平太夫を大将として千騎にて向ひ、(25ウ)搦手は神子田半左衛門を大将として五百騎にて五十波村より向ひける。亦秀吉は諸大将を卒て五十波村に陣を取り、長水を一時に攻落す謀を廻されけると也。

長水記卷之一をわり」(26才)

長水軍記卷之貳目錄

- 一 長水初度合戦之事
- 一 十六日合戦之事
- 一 城兵夜討之事
- 一 後詰の兵長水へ来る事
- 一 寄手城の麓へ寄る事
- 一 城を取かこふ事
- 一 五月三日城攻之事
- 一 寄手城へ夜討之事
- 一 五月六日城より討出之事（27才）

長水軍記卷之貳

長水初度合戦之事

去程に天正八年四月十三日巳の刻に、大手の大将荒木平太夫一千騎にて押よせ、関を哄と上ければ、搦手の大将神子田半左衛門五百騎にて城の切岸の下迄押寄て同く関を合す。城中是を見て、大手へ下村、横野、手勢引卒し討出て荒木と戦ふ。両人大に負て城内へ引上る。寄手続て攻入らんとするを岡田式百騎にて散々に切ちらす。是に依て一陣破れて二陣に譲りて引返。三陣に入替て（28才）攻倒す。岡田破れて引来る処に、寄手又続て責入らんとす。此度はつなぎ并たる大木大石一度に切落せば、壁に取付たる軍兵皆石に討れて死しにける。荒木是を見て、「味方統ざる故に惜き士卒を討せけるこそ口惜けれ。此落城に何之堅き事あらん。一時に討取よ」と齒をかみ軍勢に下知して押寄る。城中には少も不驚諸將静りけり。時に横野、下村、内海、長谷川、手勢くを引卒して一の木戸を開て打て出。是を前後として生死を不



知戦合たり。荒木大に破れて麓をさして逃下る。城兵』(28ウ)勝に乗じて追殺す。寄手は山道不案内成故、或は岩の角にて頭を碎、或は岸に馬を乗り懸て周章ふためきけり。城兵逆落しに攻ければ、討るゝ者数不知。時に荒木も漸々命計りを助り本陣へ帰りけり。搦手の大将神子田は荒木が敗軍したるを不知、関を三度迄も上れ共、城内静り返つて音もせず。寄手はふしんに思ひためろふ処に、城中より雨の降が如く弓鉄砲を打出す。依之神子田が勢大に破れて、さしも難所の北坂を我先にと逃下る。城兵敢て不追。只大石を投げれば、石に討れ』(29オ)て死する者数不知。神子田命計り助り、秀吉の陣へ駈加る。秀吉大に驚き、又五百きを添て都合二千騎にて向ひけり。

扱十四日にも成ければ、荒木も十三日の戦合に付負たる事を口惜く思ひ、亦寄手は城の体を急度と見上れば、左三巴の旗夥敷烈風の吹間に翻翻として旗旌空にひるがへる、夥し。麓には数千の軍勢、宵の星を輝し鎧の袖を引列ね、山林重りたる地の如し。去共荒木は血氣の大將なれば、少も猶予なく切て上る。城の麓に扣へたる内海、長谷川、一戦に不及、遠矢少く射』(29ウ)捨て城中へ引上る。寄手は勝に乗じてさしも險敷南坂を人馬に息をもつがせず上りけり。爰に少し險敷細道有。此所に至て上り兼たる処を祐清、祐光、祐政、射手を左右に立、南の尾先へ下り、鎌を揃へ射させける。寄手少し討しらまされ色めく所を、得やかしこと抜連て討て懸る。真先に進だる寄手五十人計り谷底へまくり落されて、己が太刀鎗にて貫て死ににけり。荒木は是を不知上りけるが、すでに日も西山に入らんとする時、一天かき曇雨降て、風吹事車軸の如し。雷之鳴事山』(30オ)を崩すが如し。寄手是に驚て、爰の木之下かしこの岩陰と色めく所を、宇野政頼、内海、下村等、五百余騎切先を揃て大山を崩如く二つの尾先へ打出たりければ、寄手は跡より引立返せくと云けれ共、耳にも不入我先にと逃たりける。其道岩道にして馬の足を痛め、或は馬より落てころび、行先弥狭ければ返さんとささるも不叶。或は落行亦は返合せて討死するも有。手負死人数不知。時に政頼勝に乗じて荒木が陣へ責入、

東西南北に懸散し喚叫で血戦す。時に荒木が軍勢多く討れ引にけ』(30ウ)り。搦手の大将  
神子田も城兵大略大手へ討出たると聞て、一時に攻落さんと思ひ勢を三手に分て押寄。城内よ  
りも田政、横治、二百騎にて討出、喚叫て責戦す。去共元來城兵小勢なれば不叶して引上  
る。敵は付け入らんと仕けれ共、式の手に扣へし安積、安黒等、打出敵を麓へ追落す。神子  
田大に破れて本陣指て引退く。

斯て其日も暮、十五日に成ければ、大手の寄手評儀して申けるは、「今夜小勢にて敵不知様  
險処より上り、切岸の下より掛橋にて壁を越へ敵油断したる処へ攻入て、矢倉く」(31オ)  
火を付て焼立れば、定て火の手を見て搦手の勢も上るべし。其時大手より攻れば、明一日の内  
に攻落すべし」と申ければ、皆く此義に同じて桜井が一族に百余人相添て、四月十五日の夜  
丑之刻に山を上りける所に、桜井が一族申けるは、「今夜風雨の間に城中へ忍び入べし」と  
指繩の一丈計長きを四筋一尺置ては結び其端に熊手を結び附持せたり。是は岩石の難処を行時、  
木の枝岩角に討掛て上らん為の支度也。亦端子五丁持、十五日風雨にてくらければ、漸くと  
寅の刻に上り付て』(31ウ)百余人の者其はしごを壁に懸て内へ忍び入も有。或は右の熊手を  
引さげ越も有。各越ければ桜井は真先に切入、跡に続て百余人我もくと討入ける所を、搦  
手の一之木戸を堅めし田政、横治、二百騎にて取込、忝人も不残ふくろの中の物を出が如く皆  
討取ける。時に桜井は手疾三ヶ処迄負、朱に成て漸く命計りを助り、南の尾先へ下り大手の勢  
に駈加る。城兵敵の生取を呼出し夜討の様子を聞に、しかぐの由を白状す。さらば矢倉に火  
を付て敵に夜討の勢の勝たるを思わせ、山』(32オ)の尾を引上、大石にて討殺すべしと諸人  
此義に同じて、搦手の二の木に火を付たれば、案に不違搦手の大将神子田大手の夜討勝たる  
と心得て、味方に力を加へよと勢を引に、險き北坂を我先にと人馬に息をもつがせず上りける。  
是を見て継ぎ并たる大木大石一度に切て落す。先に進たる寄手五十余人をしに討れて死しにけ  
り。時に思ひもよらず祐光、祐政、左右より前後成道をさへ切、神子田勢は左右に敵を受前後

もしらず、夢かうつゝと倒れころび、散ぐくに本陣へ逃入ける。是(32ウ)を見て城兵三百五十き一時に木戸を開て討出、後より攻懸る寄手大に破れて引退。城兵勝に乗じて寄手の陣へ乱入す。時に敵踏止りて鉄砲を夥打懸る。城兵不叶して引退く。此時に政頼敵の前後に有を悔み後詰ならんば叶わじと、岡城豊後守に式百五十騎を付て神戸の城へ返し、若敵長水をかこふ時後造せよと其時城よりも切て出べしと約して、十五日夜卯の刻に岡城へ帰りける。又頼政は長水へ引籠り玉ふ。

#### 十六日合戦之事(33才)

斯て十六日にも成ければ、早大手の寄手城の切岸の下迄押奇攻る事は甚だ急也。時に一の木戸を堅めたる政頼の一族式人討死仕玉ひける。政頼是を聞て、「弥味方続ざる故、多くの一族を討せけるこそ口惜けれ。此恥辱を清がんと岡田に三百騎を付て向わしむ。此人に大力無双之勇士義を盤石に比し、命を塵芥ともせん者なれば、暫時も猶予べき。岡田身の丈六尺余り黒糸絨之鎧を着し、八尺余の棒に鉄を半ば巻たるを馬之首に引添へ、三百騎を前後に立、荒木勢の真中へ会釈(33ウ)もなく打て入、八方に当つて難立る形勢、誠に金剛力士の働が如く、近付者は人馬共に討倒され、手負死人数知らず。荒木が先備へ粉の如く打崩され味得ずして敗走す。是を見て荒木先を助んと備を出せば、亦城内にも小林戸兵衛、同内匠、三百騎を引連れて討出、両軍入乱れ矢叫び鉄砲の音は鳴神より冷じく打合す。太刀の輝は雷の如く、人馬の音喚叫ぶ声、上天に聞へ坤軸にてつし、両軍の勇士等左にあたり右に支へ鎬を削り戦ひしが、小林力尽て大勢に取込られ既に危く見へたり。(34才)城中より小林を救わんと田路、長谷川、右より駆出せば、左よりは祐清、祐光、一度に関を作り哄と叫び、横鎗を入無二無三に突崩せわ、戦ひ勞れし荒木勢、此荒手に討崩され討るゝ者数不知。城兵弥力を得て短兵急に攻立れば、荒木勢味得ず哄と崩れて敗走す。城兵弥力を得て荒木が陣へ会釈もな

く切て懸る。荒木方の本庄、平賀等、是に向ふて突て出、追つ返つ鎬を削り、切先より火花を散し戦ふ形勢、冷じ共中くいわん方こそなかりける。荒木は麓に陣し紺地に荒の字の旗を押し居た（34ウ）り。城将政頼は三の丸に白地に三つ巴の旗に孫子の旗を押し、将机にかゝり、つと戦ひの様を目も放たず見玉ひし処に、祐清僅五六人を卒し馬に鞭打て馳来り、暫く軍儀有て祐清士卒に下知し、急に大繩を南の方たけの上よりさげ、数百人に謀略をさづけ彼繩に取付せて山かげを下り、各麓の笹道より旗指物を伏て荒木が陣の後に廻し、岡城、下村等が勢を押し出し荒木が脇備に討向わせ、政頼自ら五百騎を卒ひ真先進み、関を哄と作や否や荒木が旗本へ無二無三に切て入、八方に当（35オ）り四方に向ひ、当を幸ひ切て廻る。荒木勢も劣らじと、切先揃へ穂先を並べ勇気を励んで戦へば、脇備より旗本を救わんとすれば、岡城、下村、関を揚て是を喰ひ止む。其間に宇野勢烈風の如く荒木が旗本へ突懸、喚叫で戦へば、指もの荒木此勢ひに僻易して見へたる処へ、政頼の旗本荒木が後より関を上げ、鉄炮を打懸ゑいゝ声して懸りければ、政頼馬を駈廻し、「只一息に押せつぶせ、勇めやく」と下知する程に、宇野にて名を得し勇士等何かわ勇まざらん。得物くを進取て散くに戦（35ウ）へば、さしも之荒木討乱れて颯と引。長泉寺太郎左衛門、荒木に追付人と五十余人哄と喚て切て懸る。中にも浅田権六、大谷佐兵衛、浜名与三左衛門、太刀を電光の如く打振り真幕に切て懸る。高松、内藤、馬を返し鏑先迄血に染たる大太刀打ふり、浜名を下へ切て落す。大谷駈来り内藤目掛打てかゝれば、高松振返つて切払ふ太刀、大谷股を切下られ怖得ずして馬より落、高松も左りの腕に疵を蒙り後陣に引。両軍の勇士猛卒死力を尽して戦ふ形勢、誠にすさまじく見へたりける。先に（36オ）南岸を下りたる兵、問道より馳廻り荒木が勢の中へ横鎗に哄と突懸れば、敵是に突崩され哄と乱て敗走す。政頼躍り上て勇み、勝に乗じて進事虎の怪風を起すに異ならず。爰に中嶋は五百計にて片山村に備へたるが、敵の追を静りて見居たりしが、戦ひの汐を見るより采幣を取て、「いざや懸れ」と呼る声、五百余の頭に雷の落るが如く。此勢

ひに勇み立、早雄の軍兵等勝誇たる宇野勢へ真幕に切て入、縦横無尽に戦へば、宇野勢是に切崩れ、ばたくと討倒るゝ者数不知。智将の荒木是を』(36ウ) 見るより、忽ち勢を大返しに返し殺声して切てかゝれば、宇野勢散く討なされ、大手へ引んとする処へ荒木が後備へ三百余人駈来り、中嶋に勢を添へ挟し政頼が旗本を切崩す。宇野勢或は討れ、或は岩にて頭を碎き死者数不知。政頼も怵得ず、漸々五十余人にて山の半迄退き玉ひ、芝居を踏て立怵得給ひしが、亦荒木も麓迄馬を進めたるが、政頼の山中に居るを見て、あれ討取れと攻上れば、勞れたる城兵一戦もせず逃上る。跡より続けて寄手込入れれば、城兵不叶して一之木』(37才) 戸を捨、式之木戸に駈加つて、楯の陰より究竟の討てを揃へ鏃を揃へ、金丸の手垂筒先を並べ散々に討放しければ、荒木が軍勢面を向べき様もなく打倒さるゝ者数不知。寄手是に叩へて少し進み兼たる所を、式の木戸之兵三百騎一時に討出、一度に一の木戸の外成切岸の下迄進出し、亦一之木戸を堅めける。

扱大手の軍もをわりければ、政頼を始一族郎従皆く本丸に寄集り、酒を吞で息をつぎ休居たる処に、亦搦手の寄手切岸の下迄あがり、同音に関を作る。政頼是に驚て田路、』(37ウ) 横治を向わしめ、兩人敵を矢比に引受て鉄鉋を放つる雨の如く、表に進む神子田勢忽ち討倒さるゝ者夥し。然共大敵取ひしぐに堅ければ、如何はせんと矢倉に登り敵勢を見るに、麓より城の切岸の辺迄人無処はなかりける。二人思ひ切て言様は、「此大敵を防がんには、如何成軍師成共防事あたわず。亦如何成勇士成共討出る事不叶と思ひ切れ共、大敵を見ては不恐、小敵を見ては不憚士卒の心くつろがせず、真先に討出るより能事なし」と思ひ、手勢を引連れ討出る。敵一千騎にて』(38才) 真中に取巻、喚叫んで戦ふたり。城兵兼て討死と思ひければ、突ども討とも事共せず。切つ切られつ木の根を踏切砂煙を立、進退度を不知、血に染たる刀を引さげ爰を最期と戦ふたり。去共終に討れ逃上る寄手は格別不追して、山を掘り平き処を土を埋め、高き処をほりて保め、嶮口成山を少し平地になし、城の四方に陣を取重くに取囲び、

昼夜七日の間攻けれ共、要害第一之名城に三千人迄籠りければ、城内よりも手をかへて防ぎければ、一日や二日之内に落城すべき様さらにな』(38ウ) かりけると也。

城兵夜討付たり 後詰之勢長水へ来る事

斯て廿三日にも成ければ、祐清、祐政、大手之出丸へ集り行義、光俊、重清三人を召て評儀をせられけるは、「今敵前後に有て強勇也。大手之敵を退くれば、亦搦手の敵責上る。今は只討て出討死するより外なし」と申されければ、其時三人言葉コトバを揃ソロへ申けるは、「兎角一の木戸、二の木戸、三の木戸、出丸、本丸に勢を分て堅めさせ少しも出て戦わず日数を過ば、退屈タイクツクして油断したる処を夜討にせば』(39才) 敵を追下す事案に有」と申ければ、諸大将此義に同じて大手之木戸へは岡田伊左衛門長宗、同内匠、小林重周、同重宗、同重吉、二之木戸へは横野六太夫親義、下村則長、内海吉政、長谷川時重、三之木戸へは安黒則長、安積安昌、子息安長、竹ノ内政清、搦手之一の木戸へは田路貞年、同光朝、横治信友、二之木戸へは広瀬国数、石田資重、三之木戸へは久住為時、和伊信年、安甫為重、扱大手の出丸には宇野内匠行義、小林三河重清、春名條理光俊、田路信濃貞政、石原勘解由光時、岡城豊後守吉政、神山』(39ウ) 但馬正明、是等は皆代々家の大老也。二之丸には宇野右衛門尉祐光、同采女正祐政、此兩人三百騎にて籠る。本丸には宇野下総守従五位源之政頼、同子息民部太夫祐清、扱侍には宇尾墨勝時、榎木村信、外に四百騎を付て籠りける。此本丸と申は、東西三十五間南北三十七間。去程に寄手は城を討囲みて、二方の木戸口迄押寄て大手の勢大鼓をならして関を哄と上れば、搦手の勢関を合す。其音三度あわせば、城兵三千余人楯之端ヘシを鳴しゑびらをたゝいて関を作り、遠矢少々射懸音』(40才) を静めて一人も出合者はなかりける。四方の寄手一度に岩之上をつたひ城之切岸を上りて、城内を能ウカユ窺ふて込入べしと鎗にて扉ヒを突破り急度見れば、旗指物矢倉の陰より透間無、鎧着カたる武者式千余騎、甲之星を輝し鎧之袖を引連ね、雲霞の如く並居た

り。扱其外矢倉之上さま之陰には射手と思ひし者共、弓の弦をくひしめ矢束をときて押くつろげ、寄手今やと待懸たり。敵是を見て進み兼たる処を、矢倉之上より雨あられの如く、秋風に木葉を散すが如く寄手面を向べき様も』(40ウ)無、大に破れて引退く。され共山の麓迄不引猶城を囲て陣を取たりける。

廿三日の夜にも成ければ、夜討を出すべしと、岡田長宗、同与市近安、此兩人百騎にて敵陣之後へ廻る。敵に不知様小笹多くはへ茂りたる中に隠れ相図を待、貳番に小林兵庫、同重宗、同内匠、三ばん横野親義、下村則長、四ばんに内海吉政、長谷川時重、五番に安黒右京、六ばん安積安昌、同久蔵、七ばん竹ノ内正清、八ばん宇尾墨勘助、榎木時信、九ばん宇野采女正祐政、十番は宇野蔵人祐清、其勢都合千貳百、八方に勢を』(41オ)分、相図今やと待懸たる。扱祐政の一勢敵陣へつと攻入、哄と鬨を上たりける。敵は思ひよらざる事なれば、周章ふためきけるを、荒木大音に「敵は小勢ぞ。引包んで討取れ」と呼びく、下知をなし、城兵は無二無三に切廻る。寄手は毎日の陣に勞れ前後も不知ね入たり、処を起も不立切殺す。荒木も防ぎ兼たる所を祐清相図の鉄鉋を討ければ、八方より一度に鉄鉋を陣中へ討入、黒煙の下より切先を揃へ潮の涌が如く伏兵けつ然と大に起りて陣中へ乱入す。四方は面よりなで切に端より切』(41ウ)まわる。寄手は陣防の心なく、只あわてさわぎ逃走る。城兵勝に乗じて責落せば、且戦ひ且走る。時に城兵大にあなどつて、さんぜんとして左右をわきまへずして懸りければ、寄手の兵坂中にも踏留つて戦ひける間、城兵破れて引上る。荒木は夫より山を下り秀吉の陣へ参りける。

去程に廿四日にも成ければ、長水には政頼諸將を集め評定せられけるは、「大手の敵わ破る共、搦手の敵強大にして攻事甚だ急也。我自ら防がずんば此敵を退る事有まじ」と自ら祐清、祐光を引率して兵千』(42オ)計りにて大波の如く打出、鬨を揚と等しく、両勢一度に駈合せ、鶴翼に開き魚鱗に閉、汗馬東西に駈ちがひ、旌旗南北に入乱れ、矢炮の響き殺伐之声

天地を轟し山川を鳴動する事、唯百千の雷の一度に落かゝるとあやしまる。宇野勢は今日を限りと思ひ定し事なれば、政頼馬を駈廻して烈処下知をなしければ、切共突共少も痿まず敵を討事、只草を薙に異ならず。味方の死人手負を踏越へく殺声を励し、命を塵芥之かるきに比し、我先にと突き進めば、神子田勢此猛威に切（42ウ）崩され、手負死人数不知、哄と崩れて敗走す。荒木自ら踏留つて戦へども、ついに手疵三ヶ処を蒙りたまらずして引退く。大将政頼大に競ひ、「戦ひには勝たるぞ、荒木が首を弄にせん」と頻に士卒を励し、荒木を討取らんとす。中嶋は遊軍と成て扣へしが、味方の崩るゝを見て遊軍の働き此時に有と、競ひ懸りし宇野勢を弓手に引受、数百の鉄鎧を一度に討立る。黒煙天を覆ひ其響き地を轟しければ、宇野勢打倒れて漂ふ処を、荒木勢哄と横入に突て入、猛威を顕して突倒せば、政頼が旗（43オ）本勢横槍に突崩され、足並しどろに成を見て、荒木が後備へ中嶋勢横鎧を入たるは引返せとて攻討やと一度に哄と大返にす。城兵是を引受、手先を廻わして挑合ふ。去ども寄手の大返しに勢ひに各手疵を蒙り、忍びずして左往右往に乱るゝを、政頼馬を駈廻し齒を切て大音に下知して、「義を思ふ者は討死し譽を子孫に伝ふべし。一足も引なく」と烈敷下知し、太刀を馬上に抜て刃を払ひ、対ふ者を堅割にし、近付者を引違へ指通し、こゝに頭われ彼処に変化し、馬武者四騎を切て（43ウ）落し、歩卒七人を討倒し、血戦数く手を碎かれしか共、崩れ立たる城兵大将の働きをも助けず、城をさして引退ば、政頼も詮方なく敗兵に引立られ本城に引返す。中嶋、堀等、三十余人政頼が後を追ふ。政頼に駈近付、無二無三に突かゝるを政頼太刀にて打払ひ、堀が鎧を片扮に打折、電光之如く打太刀を堀身をせずんで払ふとして誤て馬を討れ、たまり得ずして大地に落。政頼も疵を蒙りたる上、敵競ふて追ければ、堀を討に不及して城内へと引入ける。亦二ばんに小林、春名、丑寅（44オ）之木戸を開て討出戦ひ、既に敗せんとするに、寄手俄に後陣より乱れて左三ツ巴の旗多く押立勢之程は三百計り、雲之如く起り風之如く駈、矢叫び金丸之音は百千の雷の一度に落るが如く、馬足之音は坤軸に



徹し、砂煙血煙は空中に朦朧として人之目をかすめ、何れや敵、何れや味方と分たぬ計り、真中に閃くは打合す太刀の輝りきらめいて稲妻之閃くが如く、又は龍の火煙を閃して雲中をくわい廻るに異ならず。村雲立たる敵中に堀、中嶋、勇を振ふて戦へば、城兵も猛威を励（44ウ）し、生死不知戦ふ有様は冷間敷かりける事共也。城兵両方より攻ければ、寄手討死手負数不知、粉之如く崩れ一度に敗走す。宇野勢勝に乗じて短兵急に追に、荒木勢（45ウ）往左往に追乱され、我一に逃、子は親を助ず、家人は主を不救、皆く五十波迄逃下る。岡城豊後守は味方と共に長水へ入にける。神子田は夫より敗軍の士卒を引連れ、秀吉の陣へ引たりける。秀吉諸將を集め言れけるは、「今日合戦に味方負たる様は、後詰之跡より攻る故也。亦味方攻ると聞ば後詰（46ウ）ずべし。早く攻落し後詰の勢（45ウ）無して攻ば、長水を落す早かるべし」との玉ひければ、諸將此義に同じて宮川に三百騎を付て伊和、岡城へ向へたり。扱宮川は岡城に押懸り、只一息に攻干んと揉に揉んで責けれ共、岡城が家臣上原義太夫信里、百五十の兵を卒し身命を惜（47ウ）ず駈出く、防ぎければ、宮川勢死亡多（48ウ）く休得ずして引く処を、上原勢嵩（49ウ）にかつて追立より、宮川が臣何某引違へ城兵が道を遮り、猛火之熾（50ウ）くたる如く切てかれば、上原勢義を励み名を惜み引に道有とも押付を見せじと踏（51ウ）込く戦へば、（45ウ）さしもの宮川勢必死の猛威に討立られ、四度路に成て乱れしかば、宮川自身鎧を引て憤戦すれば、宮川にて無双之勇士と聞へし辻六郎太夫踏留り、敵六人を討て八人に手を負せ、物具はさながら紅に異ならず。太刀より瀝る血を打しばきく、猶敵中を馳廻る形勢は鬼神の如く見へたりける。佐野是を見て、「天晴敵や、そこ去な」と騎寄て戦ひしが、辻其身金石にならざれば、意に佐野が為に討死す。此戦ひの内宮川諸勢を守り返し、岡城を責る事急なれば、城に残る兵士等は防に（46ウ）術（47ウ）つきて、搦手の勢乱入しければ、上原不叶とや思ひけん、若党に防がせ二人の一族と共に腹かき切て死しにける。若党是を見て誰が為に命を惜むべき迎（48ウ）百余人討死す。宮川は三十余人の首を取、五十波村に帰りける。岡城已に討れければ、秀吉は長水を責べしと五十波

村の陣には石田を留、自ら向われける。

此宇野と申者は赤松円心が末流にして数代長水の城に住す。其地山より山に続き盤石峨々として、古松老柏生茂り、樵夫ならでは人倫の通ふ道なく人数を押べき地なき』(46ウ) 嶮岨也。剛勇之士亦是に籠りて、更に織田が武威を恐れず籠りける。

時に天正八年四月廿六日羽柴の先備へ荒木平太夫、神子田半左衛門、柏木亦太夫、片山へは中村新藏、此勢都合七百余人是を一行とす。左備へは堅田佐十郎、宮川三郎助、同五郎兵衛、竹中源助、木村源藏、夫より一丁計り去る。羽柴筑前守秀吉足輕千人騎馬三百五十余人、其後には信長之旗南無妙法蓮花經之旗を立させ、其身は赤地の錦のした垂に火威の鎧の燃立様成を着し、鍬形打たる甲を着し、鹿毛の馬に金幅輪』(47オ)之鞍を敷、もへぎの原総を懸、口取四人に弓を持せ、馬廻りには桜井、樋口、山田、中嶋をば始、馬歩卒打交つて鹿角之立笠幡蓮角切蛇袋日野簾角取紙簾之旗三本颯鱗二本、其外色く、の幡指物を押立、其勢都合五千余騎弓鉄炮を携たり。

扱後陣には小寺官兵衛孝高中白の旗押立一千余人、四月廿六日城の大手へ廻りける。搦手はわざとあけたり。是は敵搦手より落ば五十波村にて討取らん為也。

寄手城之麓へ寄る付たり城を取囲ふ事』(47ウ)

去程に羽柴秀吉は別所一党を亡し播州大方に属しけれ共、宇野下総守政頼嶮岨を頼み要害に依て籠り、毛利輝元と謀じ合せて従わざれば、自ら勢を卒ひて向われける。城兵は敵寄来らば討死せんと覚悟有て待処に、翌廿六日秀吉破竹之勢ひを振ひ、長水の城を十重二重に取囲み急に攻討ず。只尽夜を分ず関を上て攻寄べき勢ひをなして城兵を勞らせ、昼は旌旗天に翻り、夜は篝火山川野に輝し、黒煙天を覆ひ煙塵立登り、誠に長水を一呑にせん勢ひ也。され共名城に猛勇の』(48オ)士三千余も籠りたれば、少しも臆せず。敵寄来らば討碎んと扣へたり。

時に秀吉下知しけるは、「此城わ平攻にては落城なかるべし」と思慮し、「勢楼を組立城壁の下に押上て、是に取籠り攻ずんば能事なし」と下知しられければ、翌日より寄手うんかの如く集り勢楼を組立ける。多くの人する事なれば、日ならず勢楼を立、是に取登り城中へ鉄砲を討入事昼夜怠る事なし。誠に城へは血気に知らせ討て出ば、だまし引出し後を取切、不残討取らん。遣間能ば城へ乗り入らんと亦出ずは毎（48ウ）日薫攻にせよ。随分城内を勞らせよ。斯すれば降参が討死するか此二つ不出と言事なし。今より後は城より討出る事更になし。如期するならば、落城近に有と寄手は勇み進んだり。去共誠に高城一辺之雲を見たる如くに積だる。切岸へ出し塀矢倉之前には竹把を夥敷附たれば、仮へ魯般が雲の掛橋にても城に近付事は叶わざりけり。城兵は敵を眼下に見おろし、逆落しに大筒を討けるにぞ、其音誠に迅雷の如く山を三丁計り討崩し、砂は散て雪の如し。黒煙天に貫きあわれむべ（49オ）し。敵勢一度に三百余騎討倒され、石は飛て人を殺し、誠にたとへん方こそなかりける。寄兵陣中騒動し、士卒は自由に不動ざりける。斯て城兵は静り切て敵は誠に夢の如く思ひける。

扱明れば四月廿九日にも成ければ、城内之諸将会合して申けるは、「今の如く敵に囲れて、籠鳥の雲をこひ雨を恋ふに似たり。竟にはむなく死するも無念也。時に折こそあれ、今日疾風に火矢を射懸て、敵の陣屋を劫かさ」と申ければ、其時宇野行義、春名光俊、兩人進出て、「如何様今日夕陽に一矢宛射」（49ウ）て、人々に眼を覚させん」と言。「扱此上は諸事調合して寄手勢櫓役処を焼立ば、是楚の項羽が秦宮の室を焼しに比しかるべし」と申ければ、小林重清、「殿達の御知略は今に始ぬ事なれ共、能も古事を心懸玉ふぞや。しかし兎や角やせん」としめし合せて各役処へ帰りける。

去程に大手の櫓には岡田持口也。近安、重清共に固めたり。此手より火矢三本、亦辰巳之櫓より横野が持口にて火矢三本、南之門櫓より下村、内海、長谷川等、東之方も彼手之郎從役処を並べ固めたり。南西之矢倉には阿黒父子、（50オ）竹内、共に固めたり。扱出丸櫓には

宇野行義、小林、春名、田路、石原、岡城、神山、是等固めたり。搦手は敵寄る事なければ、所々に大木大石積置、つり堀有。竹把構立かいて是を守る人くは、田路貞年、同光朝、横治信友、広瀬周数、石田資重、是等役処を並べ扣へたり。扱岡城は他の勢を交へずして、百人二百人宛一組にして城中を打廻り、口々へ氣を付たり。手配して不怠廻りける。去程に今日もはや暮ければ、寄手より所くの勢櫓より城中へ鉄炮を打懸る事止時なし。去共城山高なれば敢て益なし。』(50ウ) 皆く退屈して並居たり。斯て黄昏時分にも成ければ、城中より一度に火矢を射懸たり。此火矢百千の流星の如くにて、寄手の勢櫓に当ると忽ち火燃へ出れば、城より一時に進て射る。近辺の小屋くへ火もへ付。殊に西風はげしく吹ければ、猛火盛にして勢櫓尽く火に成ければ、数千の軍兵煙中を逃まどふ。煙にむせて倒れ重り、誠に思ひ懸なき<sup>マギ</sup>死する者数不知。恰も炎火地獄之罪人も是には過じと思われける。斯て城より金太鼓を討ければ、寄手城より打出ると心得、我先にと坂を下り、』(51オ) 川を渡り逃んとす。其比洪水にて水死する者数不知。城兵兼て期したる事たる<sup>マヤ</sup>ば、寄手敗すれば追討せんと然る時は尽く伊沢川へ追はめなば、一人も不残水死すべしと手配して扣たり。懸る処に如何思ひけん、小林金をならし勢を引取ける。斯て此由下の陣へ聞へければ、秀吉より木林源助、中村新藏、宮川三郎助等に足輕大勢差添、段く遣しければ、はや寄手右往左往と敗し、攻口の役処勢櫓焼失せければ、城より出るとも見へず。各山の麓に馬を扣へ城を遙に見上げ、各申けるは、「今」(51ウ) 般之城攻は如何成事ぞや。寄手方便を返て攻れば、城中にも方便を返て戦ふ故、攻あぐんでぞ居たりける。夫より秀吉諸將を集め、焼亡の次第を聞、是より城中如何成方便をなすらんと松吹風にも心をくるゝ計也。士は義を守るを尊しとす。去ば長水城内一人も返心の者も無、義を盤石に比し命を塵芥にして、敵寄らば切て出て義を末代に輝さんと寄手をそしと待懸たり。斯て両日も過けるが、寄手の諸將會合して先非を悔み無念といわん人もなし。此城仮へ鉄壁成とも、攻落さ』(52オ) 有べきと日々竹把を附て猛威を顯し攻寄ける。去程落城のけしき

も無、敵は如何はせんと此城を攻るにも、今討死せば其名を子孫に残し、誠に無益の城攻をし  
て犬猫の死する様こそ無念也と勇む者も多かりける。諸大將是に力を得て各一枚楯を用ひけり。  
外様にわ是ぞ無益の攻様哉と、「あわれ我等が命も朝の霜ときゑん事を」と言て動ぬ人も多か  
りける。陣々の人々思ひく、の心にて押合揉合ふこそふしん也。

斯て五月二日にも成ければ、秀吉手分有て大手先備へは中村、柏木、(52ウ)堅田、脇備  
へ小寺、中嶋、石見、後備へ樋口等五千余騎にて向わせける。搦手は、荒木、神子田、桜井を  
始として、都合二千にて向ひ、亦竹中、宮川等は秀吉の本陣を守りける。去程に秀吉諸軍に下  
知を伝へ、「毎度軍に無利ければ、士卒の疲も不便也。去共今更引退も無念也。勇むべし。城  
攻は十度攻て利なく共、ついに勝ちに寄手に有ぞ。はげむべし」と重ねて両輪先へ攻寄、鉄炮  
を伏置不怠番を付、城より討出ぬ様に取囲み、唯勢ひを見せよと其日より陣を守る事亦前に十  
倍せり。寄手は切岸の下迄(53才)大勢寄て筒先鎌を揃て待懸て、只城を兵糧にて落さんと、  
大手搦手只遠巻にして攻たりける。城中には大手搦手矢倉に出て是を見て、ケ様に道を塞がれ  
ては運を開く事成難し。早く討散さんと門を開き討出。其勢五百計り真先に馳出、矢炮を打掛  
只一揉に突崩さんと天地を轟し、喚き叫んで討て懸る。敵も関を作り鋒を揃へ一足も引じと  
馳せ合せく、砂煙を踏立、木の根を起し馬を八方に馳立、切共突共厭わこそ命を塵芥の  
如く義を盤石の重に比し、両軍の勇將猛士鏑を割、鎬(53ウ)を削り、流るゝ血は瀧つ瀬  
の如く、叱声を上げて戦ひしは冷じき形勢也。城兵横野六太夫、阿甫助太夫、九鬼八助等衆に勝  
れ群る敵を突崩さんと喚き叫んで戦へば、荒木勢是に切立られ少し痿んで見へたりしかば、荒  
木采配を振り立、鞍笠にのび上り大音に下知しけるは、「言甲斐なき者共哉。脇備へは早粉の  
如く打崩したるを只平突に突崩せ、進めく」と罵るにぞ。是に励されて、柏木又太郎、中  
嶋、石田、中村、哄と喚び、短兵急に揉立る。中にも堀久太郎秀政は八方に眼を配り、大將祐  
清に組ん(54才)と爰彼方と駈廻り進退出没処を定めず。近寄敵を切て伏、弥々敵中に駈入

しが、横山治郎吉、堀が働を見て横山是に有り、鎧取のべ突かゝる。堀尻目に見て開き合せ、鎧をからみて戦ふ程に、双方無双の勇士なれば飛越へ勿越へ穂先を電光の如く閃かし、散々に戦ふて更に勝負を分たず。水野新助走來り、「相討ぞ」と名乗りて堀が乗たる馬の前足を横薙に払ひ切れば、馬は暫時もたまるべき。忽ち勿上げて踵と倒れば、堀鞍壺に堪得ず真先様に落る処を駈寄首を討んとするを、堀が「(54ウ)弟馳來り、新助を一鎧に突殺し首を取。横山に突懸らんとする処を横山が郎従にへだてられ、空しく横山を追得ざれば、堀大に怒り歩卒七人を突伏て引退く。其外両勢入乱れ、討つ討れつ追つ追れつ生死を惜まず戦ひしが、樋口、神東、神西等の国人烈風の如く当るをば幸ひ薙立るに、城兵散々に切立られ浮足に成て敗氣色を顯せ共、大将祐清は一足も不引乗返して兵を勵しければ、田路、下村、竹ノ内等、獅子奮ん震の勢ひをなし八方に挑みければ、城兵是に氣を得て芝居をふまへて立」(55オ)こらへ、此表は未だ勝負はなかりける。

搦手の合戦 附たり 祐清山片表退口之事

斯て搦手も田路貞年、同光朝、横治信友、広瀬七兵衛、榎木弥平、石田小兵衛を始として三百余、大波の如く木戸を開き坂下両方に叩へし敵中へ雲の如く起り風之如く駈、矢叫び鉄砲之音は百千之雷の一度に落るが如く逆落しに攻討ば、城兵の猛勇に討崩され、右往左往に追乱され、我一に五十波村へと走りける。然れ共大将荒木は一足も不引、「返せく」と采討ふり勵して下知すれ共、敗」(55ウ)軍のならいに大将の言を耳にも不入逃行ける。斯て城内にも兼て相図有ければ、田路、石田、榎木、久住等、馬を懸合て山を合言葉しければ、追行兵は敵を追捨暫く息をつぎ、夫より山を越へ大手之味方と一処に成て、雲で十文字に討破り相戦ふ。祐清勢は搦手より加勢有と見て、戦ひを加勢にゆづり引色に見へければ、荒木平太夫は度々の合戦に討負し故猛怒し、祐清勢を討碎かんと士卒を真丸に立備へ、祐清の勢の中へ一文じに討て

懸り、四方に当り八方を突立れば、祐清手痛く当り』(56才)て戦へども、荒木が猛勇に敵しがたく粉の如く討崩され、城兵是に氣を臆し、惣勢哄と崩れ立峠をさして引退くを、荒木勢追詰く、切処に追て討ければ、城兵弥乱り深谷に陥入嶮岨に追詰られ討るゝ者夥し。祐清は頼み切たる郎従二十余人踏止りく、敵を打払ひて討死す。祐清は自ら敵十三騎を切て落し、わづか二三騎に討なされ城をさして引処に柏木亦太郎只一騎乗り来り、祐清に討て懸る。祐清馬の三頭に乗り下り、後ざまに刀を抜て切払ひ颯と通れば、又太郎手の甲を』(56ウ)切られ力なく引退く。是につゞひて堀尾茂助と名乗り、鎧引しぼり駆付て祐清を突んとするを、祐清馬上にて茂助が鎧の柄を引掴み一鞭打て駆ける程に、茂助は鎧を持たながら引立られ、馬をはなれて十八九間引ずられ切処にて祐清持たる鎧を放しければ、茂助は強力に引ずられ谷底へ転び落辛じて馳帰り、斯て祐清は片山大手の門に馬を立、敗兵を集めしづくと城中へ引籠り門を閉たりける。

斯して寄手昼夜透間もなく攻るといへども、鎧太刀の目釘メヅキのつゞかんたけは、玉』(57才)葉矢種のあらん限りはやわが敵を城中へは入させじ。万一叶はざる時は、はなぐ敷一戦していさぎよく討死して、日頃の君恩に報ずべしと諸將必死をきわめ、勇を顕アラわし義氣堂くとして見へにける。寄手式万余騎、大手カラム搦手式手に分れ関コホを發し鉄砲を討懸、すき間もなく寄れども、城中にも同じく関を發し、諸將必死に成て面く持口くを堅め、矢玉ををしまず黒煙りを立て防ぎける。寄手の方には長くの籠城コウなれば、矢種玉葉りは申にをよばづ、今は兵糧も尽ぬべしと思ひ』(57ウ)の外防戦甚だ敷重成ゆへ、さしもの寄手責セメあぐみ、しばらく虎口コウをしりぞきけり。城中の諸將士、何れも義を宗とし命を塵芥とをもわざる勇士どもなれば、兵糧今は尽るといへども決して敵に其氣を見せずして、なをく烈しく防ぎける。是に依て秀吉も織田にをいて場数を経たる智將の英士なれば、つくぐ城中の体を考へ見るに、防戦日頃にも異りするど成ゆへ、所詮ソゼン此合戦力攻にせば味方の損亡少なからず。其上手間どり兩用ともに益

なかるべし。斯必死と極め心を一致に』(58才)手痛き戦ひ城之諸將の義を重んずる防禦の次第感ずるに余り有。か様のやから籠城すれば容易に落城しがたし。究竟の者有れば此者を用ひ一計をほどこし落さんと、暫く鉄砲を討懸軍威をしめし、引貝を吹て早く陣屋へ退きにけり。城中も何れも名をおしむ者共なれば、中く落城とは見へざりけり。扱城中存外防戦するどなれば、秀吉思慮を廻し先使者を以て事を計り敵の虚実をうかゞわせ返忠の者を引出さんと使者をぞ遣しける。』(58ウ)

溝口城中へ使節の事 并 城中諸將會合の事

兵は凶器也。戦ひは逆値也とは陶朱公が越を去の秀言也。然れども是上古の事にして当世の時勢に合ず。奇計を用ひ大軍を破るは孫呉が伝へし兵事の格言也。戦国の兵家に尊む処也。去ば長水の合戦寄手大軍といへども必死の城兵に敗する事、あげて数取がたし。

斯て寄手より溝口半蔵を使者として城中へ遣わしける。溝口は從者わづか三人めし連れ、大手の門前迄馬を乗りすへ、「羽』(59才)柴筑前守秀吉、城将へ一言申入れたき義有て、溝口半蔵使者として伺公せり。御通し下さるべし」と町噂に申ければ、城将へ此旨相達しければ、宇野父子諸將と評定すべしと、宇野行義、小林三河重清、春名修理太夫光俊、岡城豊後守吉政、宇野祐光、祐政等集会して申あへる。時に春名修理光俊、蔵人祐清兩人詞を揃へ申けるは、「城中弱り候を見て降参を進むるならん。斯籠城して士卒討れたり共、敵の大軍恐るゝに不足。只速に運を天に任せ、叶わざる時は討死と存る上は、使者を得て無用(59ウ)之義也。早く追返され然るべし」と詞を放て申ければ、政頼は当城の主將たる故、諸將之異見に任せて一言の詞もなし。石原勘ヶ由是を聞て、「勇ぎよし。御両処の義言行の如く当城小城成といゑども毛利の後詰有。討死と存候へば城内へ敵を入れ虚実を計られなば、味方の弱み也。各如何思召や」と有ければ、岡城豊後進み出、「何もの御評定尤なれ共申さば、一人の敵將使者を得て



対面せず此俣に追返さば、却つて敵を恐るゝに似たり。先使者の口上を得て承り、其上にては追返』（60才）す共遅かるまじ。亦謀事の便りにも相成べし。使者の口上に付て宜敷御返云有べき義也」と諫むれば、宇野政頼最前より黙然として居れしが、諸將心まちく成を見て、「我いやしくも当城の主たり。其上亦各之助力有。然る処敵使者を以て対面せざるも臆したると敵方の笑ひを請んも言甲斐無に非ずや。先岡城之詞に付て、使者に対面の上にて事を決し申べし。諸將威義を正し入来を待玉へ」と言ける。程無案内に連れて羽柴秀吉の使者溝口半藏本丸へ通り、一礼おわり申けるは、「（60ウ）「秀吉申越るゝ義は、戦国の習ひにて白刃を取て相争ふ事、我く宿仇の遺恨なしといゑ共、主命よん所なき次第也。先日より永くの籠城有といへ共、勇氣屈せず義を先として猶くはげしく防戦をとげらるゝの段、各の忠誠秀吉におひても感心仕る処也。然れ共合戦の身は私の事にあらず。もつばら公命に従ふ物成故に、罪無士卒の命を取は仁義を重んずる織田信長ふかく是を恥とせり。只諸民の安氣を思ふ計り。後世の譏をなげき玉ふ。仁愛の軍なれば我意をたて民の苦みを顧ざる者を誅するは武門之常。此度毛利家誅伐の為、信長公、丹羽、明智、池田、細川の面』（61才）くを始め、大軍にて近日中国通り御雷発有。其時当城へ御出陣あらば籠城保事危ふし。其元乱れて未治る物あらずと聞けり。方々の籠城益なし。早く当城をあけ渡し織田へ下り玉わゞ、本領安堵たるべし。信長君大軍にて向ひ玉わゞ、仮へ鉄壁の堅城なりとも、大敵の困を得て進退自由ならず。開運むなく爰に埋れん事目前也。御得心有におひては、疎略致ぬ印しに一人の弟を遣すべしと諸將御評定の上にて御返答に任すべし。然れ共承知なきにおいては是非にも不及る次第』（61ウ）也」と弁舌を振ふて申ければ、列座の諸將未だ一言もなかりし故、祐清溝口に向ひ、「御こん情の御使者御苦勞千万也と得と評義の上にて御返事仕らん。先暫く御休足有べし」と小林三河案内し、溝口使者の間へ入て返事をこそは待にけり。羽柴秀吉の使者溝口が口上に依て諸將一言もなかりしに、春名光俊座を見廻し、「只今敵將よりの異見如何思召るゝや」と尋る中に、宇野祐

清、岡城豊後進出て、「某し等不才なれ共、溝口が口上を聞に、是正しく偽て信長の出馬を聞し士卒の英氣を」(62才)ひしぎ、前には人質をもつて我らをすかし、不意に起り乗り取らんと計りし物也。仮へ信長数万にて向ふ共、何条恐るべき。楠正成は僅五百余騎の勢なれ共千破劔の城に楯籠り、六原の百万騎を物の数共せず、終に勝利を得たり。いわんや敵の下知を請て城を出んは、葉武者のわざ。元來我く討死と覚期したる上は織田のともがら当城へ寄ば、無二無三に討て出、亦其内にわ毛利の後詰もあらん。其時討て出、内外より攻れば、敵も亦又難義せん事必定也。当城を出る事は無用成べし。(62ウ)急ぎ使者を追返されよ」と勇を含んで申ければ、政頼を始め諸將此義一決し、此趣を申聞せ、ついに使返しける。斯て溝口は謀計ならず帰りしに、大手門外にて安積將監に風と出合しに、安積終に見覚なき人かなと「如何成人ぞ」と問ふ。「彼者秀吉の使者にて来り」としかぐの由を説る。亦城將のへんとう如何有し」と問ふ。溝口委しく咄しけり。將監や、思慮し如何思ひけん返忠を仕度由をかたり、其印として老母を人じちに遣すべしと溝口と約し、其より溝口を町宿に止置て竟に母(63才)を遣し降をぞ仕たりける。

#### 五月三日城攻 附たり 寄手城へ夜討之事

然るに羽柴秀吉は溝口が歸るを待居たるに、半蔵立歸り城中の様子不残物語れば、秀吉城兵の義を守をかんじ、亦降参せざるを怒りける。時溝口安積が事を咄しければ、秀吉暫く思慮し居られしが、「是敵の反間を用ると覺へたり。其者討殺せ」と、有時亦半蔵右人質を出しければ、竟に秀吉許されけると也。然らば早く城を責べしと降参せざるを憤り、此城近日の内粉の如く討碎かんと(63ウ)亦々両輪先へ押寄せ攻る事甚だ急也。去共城兵少しも屈せず矢石を飛し防合す。斯て寄手切処を打越へ切岸近く押寄、関を作り鉄砲を打懸攻寄。城中にも山本主馬之助勝成切処にて究竟の射手矢じりを構へ金丸の手垂筒先を並べ、散くに打放しけ

れば、羽柴勢面を向べき様もなく打倒さる者数知らず。秀吉是を見て、「騎馬にて横より駆崩し引入を責討よ」と下知有程に、早雄の武者、中相、嶋根、板垣、三沢、大原一度に馳出せば、城勢一度に哄と鬨を作り戦ふ。亦羽栗、春日部同時に鬨（64才）を合せ攻立れど、柵内より弓鉄砲を雨の降如く打出す。先に進みし兵士百余人的に成て打倒され、中相、嶋根も疵を蒙り、乗入事思ひもよらず攻口を退き暫く息を休めける。

斯て其日も暮、明れば五月四日にも成ければ、寄手本陣へ会合し城攻の評義有ける。時に秀吉の近士仕る石田左吉三成進出申けるは、「味方幾度攻る共城兵義を先としてあへて屈せず。只夜討に致すより外なし」と言ければ、諸將此義理有とて則評義一決し、今夜一討仕らんと其用意をぞ触にける。先合印を付、其（64ウ）合印有者は敵たり共討べからず。先勢城中に入ば、役処矢倉に火を付べし。是を合鬨に大手擲てより攻寄べし、と五月四日の夜皆く、両輪先へ忍び入、相鬨の火をぞ待掛たり。

時に城には夜討入とは不知共、兼て夜く、諸大将之中より番手に二手づ、城内詰く、切岸の辺迄相廻り、所々の口へ廻り合ふ。其夜岡田伊左衛門長宗、田路五左衛門貞年、各手勢を引連静に廻りける。斯て子の刻計りの事成が、田路、岡田へ言けるは、「ふしぎや。不レ時寄手之陣中に馬の鳴音は如何」と言ければ、岡田聞て（65才）向ふを聞に所々陣屋にて馬鳴ければ、岡田言けるは、「貴殿能も氣を付玉ふ。去ば軍を心に持と言へり。是正しく夜討せん支度ならん。夫馬は物の変化を知り人に先して進む也。敵定て夜討せん。さらば所々持口へ告知らせ」  
迎、前後の役処式の丸出丸へ遣し、火縄筒先をかくし大手矢倉渡扉之間廻く、に弓鉄砲之筒先を揃待懸たり。寄手危しと言もおろか也。去程に寄手は城より打出ば、追返さんと坂下東西に扣へけり。石田、山田、中嶋、石見、樋口等が亦は中村、柏木、堅田、何も攻口へ押寄せ（65ウ）忍び入らんと橋の外柵を手に破り捨ん。式十人橋の辺へ寄、坂才木などを持来り、橋を引返したれば、続て相渡らんとして後陣の味方を待、切岸の辺へ行。或は熊手指縄など脇

挟み堀之造道忍び寄。搦手は橋板之上成柵を破り入。坂中には小寺、桜井、英賀、曾根、明石、神東、神西等の国人、城より討出ば、爰より追返さんと扣へたり。亦搦手の真向へは加東、加西、荒木、神子田等切岸迄押寄ける。扱城には嶋を静て居たりけり。彼共不知寄手共が叫び合て当るも、日比は耳に立峯の嵐し松風（66才）も今夜は忍びく、我くが鎧の金物音に紛て幸ひ也と悦び進勇て堀を安くと越し、門前にて後備への味方を待居たり。斯ても城の櫓には祐清、祐政兩人目配せして相図の大鼓を打せらるゝとひとしく、所々の持口より同音に闘を哄と上たりける。敵は案に相違し揉合処へ城兵弓鉄砲を討掛たり。矢比に寄たる敵弥上に打倒され、城兵黒煙の中より拔連無二無三に切立れば、敵わ我一に引。城兵謀事をかまへたり。「引やく」と言ほどこそあれ、主討れど臣是を不助、親討れど子是を不救。」（66ウ）我先にと引取て片山の外堀へはまり押伏られし有様は前代未聞の事共也。堀に登らんとする処を上より大木大石一度に切落す程に、人も木も一卷に成て、其響きさへ山に鳴渡り夥し。扱両輪先へ寄来りし者は、過半金丸に討倒さる。後陣は先陣に押落され驚動夥し。時に城には敵の敗軍に乘じ出討追討せんと小林、岡田討出しが、誠にくらき夜に敵の死人充滿したり。地里悪しければ、亦敵兵を伏んも不知とて引入らんと下知する所に、敵の伏兵石田、山田、樋口、中嶋先陣の敗軍（67才）に入代り柵の辺へ来りしに、兵城橋之上成死骸を熊手を持って左右之堀へはね落し、門の方へ引んとする折節なれば、敵足輕一番に進み来りて無二無三に鉄砲を討掛たり。依之小林、岡田の勢山口、大井などを始討れける。皆く敗軍して木戸の内へ引入ける。寄手は亦段くと帰り来り。又橋辺迄寄けれども城兵皆引取。亦橋は落したり。如何はせんと天をあをひで居たりしが、矢倉より鉄砲を打ければ、不叶散くと成引退く。斯て搦手へ寄たる敵も多く討れ敗走す。城より田路、横治、坂中（67ウ）迄追討しけるが、是も桜井、小寺に討破られ、小林九郎を始め大勢討れしが、元来小勢なれば足早に引退く。城の下に小林、岡田、金丸を張りて扣へければ追事不能。引ば城兵も手負なんど介ほふし、城中へ入にけり。搦

手より追討し桜井に討れし者平瀬佐兵衛、田路又兵衛、小林九郎兵衛、同彦右衛門等の宗徒の者五人郎従廿余人討れける。小林、田路坂中に後殿して城内へ引入けり。

#### 五月五日城より打出る事

然るに天正八年五月六日、宇野を征伐せんと羽』(68才)柴筑前守秀吉は上町に陣をはり近辺を放火せり。依て近辺の人民は親子兄弟已れく山林へ逃陰れ諸財宝器を持はこび、東西へ馳違ひ騒動大方ならず。依之政頼大に怒り、「此上は秀吉が寄るを不待、当方より逆寄に押懸追散し、敵にきもを潰させよ」と祐清、光俊、重清等を先手として、宇野政頼二手に備へ先陣之一左右次第期を詰んと、秀吉の陣上町さして逆に勢を出し、只一戦に討散さんと何れも勇み進んで雷動せり。羽柴秀吉は荒木、神子田、中嶋等を大将として城へ向らる。扱』(68ウ)城兵は秀吉の陣へ押寄、有無を決せんと押行所に、秀吉の先陣堅田佐十郎とはしなく行合ひしが、双方期たる事成故、少しも猶予なく鉄鉋を討違へ炮声しばし轟しが、黒煙の下より堅田が弟名瀧之助、今日一番鎧を名乗りて一番に馳出、十文字の鎧をさげて突ぞと見へしが、小林重清を一鎧に刎落し、首を取らせんとせし所に、同首を渡さじと瀧之助を中に取込戦ひける。是を戦ひの始として堅田が家の子郎従我おくれじと鎧を入、追つまくつ二度と四度せり合ふ内、堅田佐十郎』(69才)は大勇猛の大將故、味方足並しどろに見る所は、自ら鎧を取て近付者を突ちらし大音上げ、「引な、進め」と士卒を励し、火水になれと揉立たり。城方にも春名は武功の勇士と言ひ、殊に秀吉の馬印千成瓢單見へけるゆへ是も同「引なく」と下知をなし、五百余人を真丸に備へ陰に閉、彼謙信の秘伝する車がりの如くにして、堅田が八百余人を討破り、秀吉の旗本へかゝらんとくりかへしく、士卒を励し戦へ共、堅田が勢は敵を待の英氣十分に養ひし強兵に、城兵先程よりの合戦に少』(69ウ)し勞れて兵なれども、祐清春名が備への宜敷に依て一時計は双方牛角と見へけるが、堅田氣早き男なれば、時のうつるを大ひに怒り

励しく下知し、「是程の弱兵に何とて時をうつすぞ。言甲斐なき奴原哉」と例の大音にのゝしりながら、真先に進み精神を励し働けば、小一右衛門、辻左之助主におくれじと憤声を出し、一足も不引必死の勇を顯わし諸勢に先立持ぎけり。是に氣を得て堅田が士卒共、突共切れ共討るゝ味方を飛越へゑひくゝ声を合して互ひに力を附合戦へば、(70才) 無難宇野方の先備へを突崩せり。祐清、光俊不思六七丁追立られ、爰にて備を立直さんと祐清、光俊士卒をかり立、「死や者共踏こたへよ。後陣之味方近付ぞや」と下知を伝へあせれ共、勝に乗たる堅田勢追立くゝ戦ふ所へ、宇野政頼は先手の味方難義成由聞へけるにぞ自ら一陣に馬を出し、「続や者共」下知を伝へ、馬上に一鞭加へ駈出せば、宇野の郎從辛川半左衛門、中村宇衛門、平瀬新助、舟引藤八、林新治郎、大嶋宇右衛門、井上六郎、松尾与一郎、長泉寺太郎左衛門等、我おくれじと士卒を(70ウ) 追立、先手へこそは懸付けり。政頼は先手遠く駈来れば、早味方浮足に見へけるにぞかけ入て救わんと続く味方を待揃へ懸らんやと暫し猶予の内、味方の者共追くゝ駈来りしを見るより、政頼大に悦び備へずして長蛇之来たり。是は古への衆毅斎の林薮の戦ひに異ならず。真先に進み無二無三に勝ほこつたる堅田勢の横合へ哄と喚ひて突掛れば、敵も荒手の宇野と突崩され又一丁余引返せり。光俊も主人の救ひにもりかへさんと何れも関を作て押返せり。此体を見て佐十郎大(71才) きに怒り、「きたなき味方の振舞哉。宇野迎も鬼神にも有べからず。かく迄勝たる軍成に引返す法や有。敵に合て後を見せな。爰にて討死し名を末代に残せや」と声枯る計り呼わりくゝ、進み来る宇野勢やにわに五六騎突倒し、すれ違て村がる中へ会釈もなく討て懸る。宇野の家の子辛川、林、奥村等、其外の勇士も踏こたへて立直さんと働きける。去程に堅田勢は数刻の戦ひに勞れける上、宇野に横を討れ前後二つと成。測之助、左之助等わ後陣に有入代りし如く、双方地声憤声目をお(71ウ) どころかし、ひるまず去ず戦へども、兎角堅田勢浮足に成けり。政頼は遙に秀吉の旗馬印の見へけるゆへ何卒此手を切崩し、秀吉に向ひ有無の勝負を決せんと勇氣を励し、無難堅田が備へを切崩し悦

び勇む所へ秀吉の加勢来り。亦是と粉骨<sup>フシコツ</sup>を尽し戦ひけるが、日も西山に入ければ、今は是迄と  
春名後殿して、しづく<sup>シヅク</sup>と引取りけると也。

長水軍記卷之二をわり』(72才)

長水軍記卷之下目録

一 城兵秀吉之陣へ寄る事

一 安積監<sup>レ</sup>將泰昌、小林兵庫、同戸兵衛返忠之事

一 五月九日長水落城之事

一 宇野下総守政頼 并に一族大森にて自害之事

一 庄太郎左衛門尉政春由来 附たり忠義之事』(73才)

長水軍記けん之下

城兵秀吉の陣へ寄る事

斯て七日にも成ければ、長水表にて毎日大勢討れ難義の由姫路へ聞へければ、羽柴小市郎秀長重ねて山本新兵衛、平塚八郎、長浜甚吉、内海孫八郎を始として、都合三千余騎五月七日秀吉の陣へ着にける。其外明石、賀茂之国人駈加りて伊沢谷、五十波谷に充満たり。昼は旌旗<sup>セイキ</sup>天を覆ひ、塵芥<sup>チンカイ</sup>山をかすめ鎧<sup>ヨロイ</sup>の金物日の光りに輝<sup>カギヤキ</sup>し、夜はかゞり火山川野に光り、黒煙天を連<sup>ツラ</sup>ね夥<sup>ワレタク</sup>敷人之心は』(74才) 我にふれて、陣屋毎之語りを聞ばあわれ也。此城幾程も可怵。こんしんの人く、にせん掛なさんとはふ持者を迎、昨日迄も今日迄も城を見上ては恐れふし、弥此城当国一の要害、殊更<sup>コトモツラフ</sup>譜代重恩之侍<sup>ツク</sup>ひ凡三千余騎楯<sup>タテ</sup>籠<sup>コモリ</sup>り、是等が心を合せ計略を廻し防戦する程<sup>ホド</sup>ならば、落城する事更になし。我等が命も朝<sup>アサ</sup>之露<sup>ツキ</sup>ときへなんとあれば、皆く、打しをれ頭<sup>カシラ</sup>を降<sup>シ</sup>て、眠<sup>な</sup>り居たる人も多かりける。か様に取く、人心の不和なれば、陣中<sup>サヘガシク</sup>騒敷<sup>ウラガシク</sup>ぞ見へにけり。

斯て八日城中会合し、如斯<sup>カコハ</sup>困れば籠鳥の思ひ』(74ウ)をなすべし。早く討出追散さんと大略数を尽し討出ける。先千五百人を五手に分、先手は宇野祐長を大将として、真嶋七郎兵衛、中村卯右衛門、林新治郎、芳賀<sup>ハカ</sup>八郎、大崎、松尾、瀬川、進藤、田上、長谷田、山下、是等を



始として三百余騎、弓鉄炮を先備へとし其中に水色に下濃之三ヶ月すそにし、下に左三つ巴の旗山風（ひだり）に吹流し備へたり。中軍は宇野行義を大将として、辛川半右衛門、長泉寺太郎右衛門、平瀬新助、舟引藤八、井上、三沢松、川崎、長尾等を始め、七百余人中軍とす。弓鉄炮の備にて其（75才）次に白旗を立、げんじふに備へたり。後陣は春名修理太夫光俊を大将にて、太田、横山、田中、進藤、永井を始五百余騎、鉄炮を前後とし右之方に白旗に二つ引に春名の紋を付。是勢は東の門より出る。春名勢は彼謙信（ケンシン）が車掛りにて、秀吉の旗本と春名が旗本と戦ひ、手詰の勝負をせん為也。

去程に秀吉の陣には物見来り右之趣きを申ければ、諸軍是を聞て騒て事大方ならず。秀吉は西成山端へ出て寄来る敵を遥に見て、宮部、竹中兩人を召て、「あれ見られよ。城兵三手に寄る兵凡二千に過（75ウ）べからず。味方の勢は百倍せり。城には兵粮尽たりと見へ、止事を不得か様に討出来るべし。味方之疲を討んと謀にも不非。され共今疲たる軍兵を以て平場に戦わんより」とて陣烈固くふれられける。時に春名光俊後陣へ来し体を物見斯と申ければ、秀吉、竹中に「春名が備へ見参れ」と仰ければ、竹中畏て馬を馳出し、春名が陣をよくく見すまし駈歸り申けるは、「春名は既に引取候」と告す。秀吉大に不審有て、「春名は宇野家の古老。何ぞ爰迄出、をめぐと歸る事や有。但し引取様の体は如何印（76才）有や」と尋玉ふ。竹中承り、「春名備を廻し切立く幾度も如乱して、東の方へ趣き候」と申上る。秀吉完尔（ニッコ）と笑ひ、「是は竹中とも覚へぬ者哉。汝不知や。夫は車懸り（カ）とて車の廻る如く備を揉かへて、幾廻り目に敵の旗本と我が旗本と打合せ、一戦に勝敗を決する陣法、甚殊勝の備へ也。春名如何程働く共何程の事の有べきぞ」と宣ひける。諸軍敵懸らば討砕ん勢ひぞ見へたりける。

#### 上町表大合戦之事

斯て宇野の先陣帶刀祐長、秀吉が備と行合ふや（76ウ）否や、鞆（シコロ）を傾け小旗（ヘタ）をうつむけ、

平塚、山本が備へに哄と関を上げ会釈もなく、只一揉に突崩さんと殺氣天を貫き突懸れば、平塚も是ぞ戦ひの始めなれば、勇気を十倍に励し関を上げ槍衾を作つて祐長が一陣を突倒さんと、両陣互ひに喚き叫び切共突共事ともせず、四方を払ひ八面にも当て戦ひ、爰に頭れ彼方に變化して、万卒に面を進め攻戦ふ有様は、誠に百千の雷の一時に唱はためくが如く、中にも堅田佐十郎、堀尾茂助、長浜甚吉等、衆に抽んで死を鴻毛の軽きにひし、近付（77才）敵を薙払ひ切倒し叱声して戦へば、城勢の中よりも辛川半左衛門、大崎卯右衛門、平瀬新助、舟引藤八等、真先に進み敵を薙ぐ事麻を薙が如し。勇み進んで戦ふ。いつ果べきとは見へざりける。祐長も一陣に進み秀吉に廻り合ひ引組んと馳廻る。春名修理も士卒を励まし面もふらず敵と当り踏崩して、「高名せよ、力弱らば討死せよ、一足も引なく」と罵つて自ら敵に当りて挑み戦へば、三沢、大原、羽栗、春日部等も勇を震ふて一足も引じと討立る。城兵山下四郎兵衛、長尾三左衛門、真（77ウ）先に大太刀打振り当るを幸ひ切まくれば、矢庭に鎧武者六騎を切倒し、弥く、勇んで薙立る。平塚方より平塚権蔵を上げて馳來る。三左衛門大太刀にて暫時会釈権蔵がいらち突鋒先を切て落飛鳥の如く付入、権蔵を嚙と切倒し、堅田佐十郎是を見て士卒十二人を卒て突懸るを、長尾、山下事ともせず上段に受、下段に搦み戦ひしが、多勢に取籠れ危く見へし所に、松田弥三左衛門援ひ來り、堅田が郎従三人突倒す。兩人是に氣を得て、堅田が羽翼と頼みし郎従を切て落し、佐十郎大（78才）に怒り鎧を捨て長尾に組んと馳寄を、長尾足を上げて佐十郎が腹を礎と蹴る。大兵の三左衛門に蹴られ如何怵べきぞ。馬より嚙と落る所を郎従馳寄、竟に後陣へ引にける。其外、宇野、羽柴が兵卒死を不顧戦ひしが、海津中相に挟み討れ、さしもの祐長の備へ七裂八裁に切崩され、右往左往に敗走す。春名が備へも四度路に成て崩れんとするを、光俊一足も不引鎧にて叩き立く士卒を励し戦へば、長谷田忠左衛門、多田孫三郎、様山五郎右衛門、田中吉左衛門、安東治郎兵衛等死力を（78ウ）尽し踏へてぞ戦合ける。

宇野帯刀祐長血戦討死之事

斯て祐長が備へは、板垣、三沢、大原三備への軍勢鬨を作り金丸を□に放ち、黒煙りの下より鎧先を揃へ突懸る。宇野も同じく鉄鉈を打掛、一度に叫んで討て入る。鬨の聲、金丸の響き山谷の間に振ひ、天地目前に覆が如し。駈並べ馳違ひ馬足之音、爰に討合彼方に突合ひ、鈬の光りは電光の如く、其烈しき事謂ばかりなし。宇野方には、三沢右京、瀬川六右衛門、森太左衛門、岩本弥吉、藤原幸右衛門（79才）門、永井主税を始として、名有勇将強士、今日を死期と火水に成て戦へば、祐長は士卒を勇めて、「命を義の為に忘れ、名を後代に伝へよ。一足も引なく」と北より南へ駈通り、西より東へ追廻し、祐長、祐義合ふては別れ、別れては廻り合。一息に討崩さんと揉にもんで騎立んとす。城兵は兩人に義を進められ、良山長左衛門、長泉寺太郎左衛門等を始め、猛将勇士死人く、手負を踏越へく奮戦すれば、羽柴勢も爰を破られじと七転八倒して戦へ共、城兵の死武者に切崩され、既に崩れ立んと（79ウ）するを、嶋根、羽栗守り返して挑み戦ふ。時に城兵松本奎之助と云へる鉄鉈之名人、羽栗目懸と討に、あやまたず羽栗が脇壺を討振ば、羽栗馬より下へ真先様に落にけり。城兵首を取らず、只敵を破り秀吉と有無を決せんと戦へば、竟に両備を討碎きけり。斯て一陣を崩すといへども、敵は多勢味方は小勢、亦春日部、中相守り返し、猛威を励し死生を惜ず戦ひしは、恐ろしき事也。流石の祐長勢討死手負数不知、粉の如く突崩れ、一同に敗走す。羽柴勢勝に乗り血浪を蹴立短兵急に追ふ（80才）程に、右往左往へ敗走す。祐長大に怒り郎従廿余人踏止り、敵の真中へ乗り入て無二無三に馳廻り死物狂ひに戦へば、春日部、中相、祐長を討取らんと我一に討て懸れば、帯刀祐長事共せず敵を討事麻を薙が如し。我身も数ヶ所之疵を蒙れ共、些共弱らず死憤を励し近寄る敵を突落し突倒し勇を振ふて戦へば、三十余人の従兵も多く討死し、今は十五人のみ馬の左右に引そふて戦ふ所へ、山本、平塚等百余人、祐長を取囲み一度に哄と討て懸れば、

祐長は是を死期と思ひ定め、「死出シデ」(80ウ)三途迄引連ん」と叫び罵り、進寄る武者を切て落し六七人を突倒し、躍ヲドリ上て戦ひしが、無双之勇士成といへども、数ヶ処の戦ひに身力勞れ、高松源五郎が突懸る鎧を受損じ、右の脇腹突通され馬より墮と落る。高松が郎從深江八左衛門駈來り、祐長が首を取返んとする所を、祐長が組永井主税馳來り、首を渡さじと討てかゝり薙倒し首を取歸し、後陣に引ば、是に引そふたる宇野勢右往左往に敗走せり。

宇野祐政が備と長浜甚吉、三沢が備へと合(81オ)戦之事

宇野祐政が備へは、長浜、三沢が軍勢と矢炮を打合ひ天地を轟し、討つ討れつ関クを作り一足も不引、馳合ひく、砂煙を踏立、馬を八方に駈立切共突共厭はゞこそ、命は塵芥の如く義を盤石の重きにひし、兩軍の勇士鏑を割鎧を削り流るゝ血は瀧の如し。叱声を励ハセマし戦ひしは冷スサマシじき有様也。宇野方の勇士川崎治郎右衛門、中村宇右衛門、平瀬新助、舟引藤八等、群る敵を突崩さんと喚き叫んで戦へば、三沢勢は是に切立られ少し痿んで(81ウ)見へたりしかば、三沢年光采打振り、鞍笠にのび上り大音に下知しけるは、「言甲斐なき者共哉。脇備は早粉の如く打崩したるを平突に突崩せ。進めく」と罵るにぞ。是に励まされ大芥庄太郎、進藤秀や、飯森平六哄と喚び、短兵急に揉立る。中にも進藤秀やは八方に眼を配り大将祐政と組んと爰彼方に駈廻り、進退出没処を定めず近寄敵を切て落し、弥敵中に馳入しが、舟引藤八、進藤が働きを見て、「藤八是に有。雌雄を決せよ」と鎧取のべ突かゝる。進藤後目に見て開き合せ鎧を搦み戦(82オ)ふ程に、双方無双の勇士なれば飛越へ刃こへ穂先を電光如く閃し、散くクに戦ふて更に勝敗を分たず。林新治郎走來り「相討ぞ」と名乗り、進藤が乗たる馬を前足を横薙に払ひ切れば、馬は暫時もたまるべき。忽ち刃上て墮と倒れば、進藤鞍にたまらず落る所を新治郎秀やが首を討たりける。是を見て三沢、大原烈風の如く当るを幸ひ薙立るに、祐政勢散くクに切立られ浮足に成て敗走す。されども大将祐政一足も不引乗廻して逞兵を励しければ、

松尾与一、中村宇右衛門、井上六（82ウ）郎、真嶋七郎兵衛等、獅子奮震の勢ひをなし八方に挑み戦ひしに、祐政の運や尽たりけん、誰が放つ共不知流れ矢来り祐政の脇腹討抜、竟に馬より落て死にける。是に依て此手勢も右往左往に崩れて敗走と成にけり。

#### 春名修理之太夫光俊討死之事

爰に春名修理太夫光俊、今日車懸りの兵を以て敵を追退け、暫く彼毛利家の援兵来りし時、挟み討んと謀る所に、諸将後詰之来るを不待討死する上は是迄と思ひ定め、逞兵二百余人を前後に（83オ）立、各右に鉄砲左に鎗を提させ、合図を待て鉄砲を放ち鎗を入よと命じ一度に馳出す。斯て光俊は秀吉の本陣へと討て懸る所に、端なく海津孫八郎が勢に行合とひとしく、光年持たる鉄砲を馬上より切て放せば、あやまたず馬武者一騎打落す。是を相図に春名が従兵二百余人、一度に鉄砲を片手打に放ちければ、群立たる海津が先手礮くと打倒され、まばらに成て見ゆる処を、「すわや懸れ」と言こそあれ、春名より二百余人鉄砲を捨、鎗取直し海津勢に突て入、破竹の如く戦へば、海津是（83ウ）に突立られ右往左往に散乱す。春名馳通り、山本新兵衛が勢の中へ無二無三に割て入り、死憤を出して戦へば、海津勢も劣らじと死力を尽し戦へども、春名が猛勇に討立られ四度路に成ば、羽柴急に下知を伝へ士卒を左右へ颯と引せ、荒手を入替左右より鎗袞を作て突懸る程より、平塚勢閨を作て押来り、春名勢を押し包み喚き喚んで戦へば、春名光年士卒を下知し、前に戦ふかと見れば、忽然と後に向ひ、或は別れ或は合し、千変万化して戦へば、誠に手足を使ふが如く敵を討事数不（84オ）知。され共敵は大軍なれば引かへく、討程に、多田、横山、田中、進藤、永井を始め、春名が勇士百余人討死す。光年些共痿まず、秀吉が本陣を目に懸、大将に近付雌雄を決せんと眼を配て四方を見れば、秀吉の馬印金の千成瓢單、亦南無妙法連経花の旗は本陣近く翻し、早打合せしと覺しく、金丸の音闐の声高く土煙り一村立て見へければ、春名馬を立直し馳ける所へ、山本、春日部の

先手春名を退すなど哄と喚ひて突かくれば、春名大に怒り、「小賢き者哉」と言まく、釣  
鎧をりうくとひねり、』(84ウ)おつと喚ひて突て入、火水と成て戦ふ有様は、猛虎の群羊  
の中へ入が如く、瞬く内に騎馬武者六騎切て落し敵七十二人を突倒せば、山本、春日部が勢  
不休してはつと退く。春名修理そこを突と馳抜て味方を見れば、僅か廿余人残たり。春日部  
勢春名討取らんと討慕ふを、光俊後目に見ながら少しも臆する気色なく、小高き岡に討上り人  
馬の息を休めしは、大膽不敵の勇士也。春名遙に敵を見下せば、羽柴勢潮の涌が如く見へけ  
れば、さらば最期の戦ひせんと完笑とし、馬引寄飛乗』(85オ)て徐くと岡を下りければ、  
平塚、山本が勢是を見るより引包んと討てかくれば、春名修理血に染まる釣鎧を閃し、小寺、  
山本が勢の中へ叱声を吐て突て入四面に当り八方に突入、勇氣更に十倍し憤せひは獅子の吼る  
に異ならず。騎馬武者八騎切落し追退る事六度砂煙を蹴立戦へば、羽柴勢討死多く春名が士  
卒も悉く討死し、川崎治郎、三沢右京、井上六郎三人のみ未だ馬の口を離ず引添ふて働く所  
に、石田権平大太刀を振り韋駄天の如く駈来りて討て懸る。春名修理釣鎧を下段』(85ウ)に構  
へ、声を懸て馳寄る石田が後より、四田源四郎、谷村五郎兵衛、馬を躍らせ討て懸れば、春名  
が後より川崎、井上の勇士等、同じく鎧をしぼり搦み合、命を限りに戦ふたり。春名修理太夫  
は龍の雲中を馳る如く石田を一鎧に為んと突懸れば、権平は春名を一刀に討取らんと蛟龍の  
逆波を上るが如く駈合せ打開き、大地を轟し戦ふ所へ、石田が從卒江間五郎太夫走来り、横  
合より春名を目懸突懸るを、春名、江間が鎧を払わんと身をかわす所を権平躍入、春名が右之  
肩先鉄壁も通れと』(86オ)討付るに、あわれむべし、春名修理是を払ふに透なく馬より嚏と  
落たりしを、江間走寄て押へて首を搔たりける。惜哉春名光俊謀計を廻し宇野家を輔佐し、雄  
名高ふして鬼神をも欺く名将成しが、命数今日に尽上町に命を落しける。三人の勇士光俊が  
討死を見て今は是迄ぞと枕を並べ討死せり。口惜きや。光俊今年五十一才。勇は孟貴にひと  
し、大力は樊噲が如く、直成事鮑叔が如く、信は微生高が如く、誠に早業弓馬の達人にて能

き大将也。木村は今日味方多く討られけれども、春名（86ウ）を木村が陣へ討取たれば、悦びナ、メナならず。斯て城中より討出たる兵皆く打れ、殘党トウ散くに城をさして引取ける。今日は城より討出討死の者、大将宇野帶刀ウノハキ祐長、同右衛門尉祐政、春名修理太夫光俊、其外部將長泉寺太郎左衛門泰俊、山本主馬之助、中村宇右衛門、平瀬新助、舟引藤八郎、林新治郎、芳賀八郎、大崎宇右衛門、井上六郎、真嶋七郎兵衛、辛川半左衛門、松尾与一、三沢右京、瀬川六左衛門、松田弥三左衛門、長谷田忠左衛門、川崎治郎左衛門、山下四郎兵衛、同佐十郎、長尾三左衛門、多田弥三郎、横山五郎右衛門、田中吉右衛門、安奉治郎吉、久住太郎兵（87オ）衛、森多左衛門、岩弥吉郎、藤原幸右衛門、永井主税チカラ、良山左衛門等を始として、猛將勇士都合千百余人討れける。春名修理太夫光俊は天正八年五月八日上町にて討死す。千草大森にて自害と有非也。尤千草にも墓有。男子三人二人討死。内一人治郎太夫と言は後に伯州にて三万石領すと也。

### 政頼再び毛利へ救スクイひを乞コイひし事

斯て暮しかば、秀吉の陣には諸将会合し、「長水を早く攻落ヲトサずんば毛利の援兵来らば難義ならん」と言ける所に、木村源藏進み出申けるは、「敵昨日討死の兵凡千余人と見へ候。定めて城兵過半討（87ウ）れ候わん。今一氣に攻ば一箇カに得るべし」と利を尽し言けるにぞ、秀吉も木村が申条利有とて爰にて評義一決し、各城を責んと用意せり。斯て秀吉は城攻の計義等悉くして長水を大軍にて取囲み、暫時に揉落さんと軍威強大にして、中軍には五色の吹抜千成瓢単の大馬印を押立させ、諸手何れも将卒武気快然として、其勇壮成事日頃に十倍して、長水を只一呑の勢ひにて、号令厳重にして征くと押寄。鼓の声天を覆ひ、関の声地に響き、鉄桶の如く取囲み水も洩さぬ勢ひ也。此有（88オ）様を見て、城主政頼を始め諸軍勢に至迄輝元出張有て合戦有程ならば、秀吉亦難義成べしと、亦く毛利の方へ羽書を飛し告られけるは、「兼て申合するの謀略、秀吉当城を責動し候事烈火のもゆる如く、当城の危き事は薄水を踏て深淵

に望が如し。此上は何卒一向前後を不顧、織田を攻玉ふに於ては、秀吉進退を計り当方の攻撃少しは油断と相成べし。然らば当城よりも遅兵を以て寄手を破り一手と成、秀吉を討破り申べし。無左に於ては、当城も持怵へがたく、秀吉猶猛威を振（88ウ）ひ龍の雲を得虎の竹林に嘯き獅子奮迅の勢ひと成、弥威風盛んと成ば中国に敵する者もなく相成候。今を過ぎ御計略を廻され然るべし」と追々注進有。早毛利には後詰之勢を出しすむ時也。斯て秀吉之陣追々と押寄りける。時に秀吉小寺孝高を召申されけるは、「当表早く責落さんと思へども、要害堅固にして武備へ亦敵重也。早く責落さずんば毛利の援兵来らば、味方難義也」と申されしかば、孝高申けるは、「夫は安き事也。幸ひに先達て降参せし安積に使を遣し、今日城に火を（89オ）付さすべし」と言ひ、佐吉を呼出し計略を申し含め別れて、佐吉は安積が陣へ急ぎけり。

#### 石田佐吉安積將監を説事

去程に石田佐吉は秀吉の下知を請、只一人政頼の城へ姿をやつし忍び入、爰彼方と伺ひしが、漸く安積が陣へ行、佐吉柵の陰より声をひそめ、「羽柴秀吉の使者石田佐吉と言者也。安積殿へ一言申たき義有て、わざく伺公せり。此通りを通ぜられよ」と頼みける。安積が家人此由を申ければ、將監早くむかひ入、上座に直しける。時に石田、安積に（89ウ）向ひ、「某し斯参りし一言申入んと存る事別義にあらず。貴將は智勇共に兼て義に於て私なき事、某は言に不及、秀吉公にも能存じの所也。其に断（マツ）今城攻の砌に味方寄せし時、城に火を掛玉ひなば、味方は一挙に城を乗り取申べし。亦落城の上は貴將を以て長水の城主となし、五郡の大將にせんと秀吉公の思召也」と、弁舌堂々と水の流るゝ如く言けるにぞ、竟に約束をかためて石田は忍び陣所へ立帰りける。



長水落城之事付たり 岡城豊後之守血戰討（90才） 死之事

斯て秀吉は安積と謀を合せ荒木平太夫を先陣に進め、柏木亦太郎、中村新蔵、宮川三郎助、平塚八郎を一手とし、木村源蔵を二手とし大手へ寄せ、神子田半左衛門、堅田佐十郎、山本新兵衛、杉七郎右衛門、搦手へ向ひ押寄く、寄手は堀辺近く竹束をつき立く、関の声と諸共に鉄鉋を討懸、ゑいゝ声を出し我劣じと押寄たり。

宇野下総守兵を六手に分、田路伊左衛門、広瀬七郎兵衛、石田小兵衛尉、安黒左京、久住外記を大手先陣とす。小林三河、（90ウ）田路信濃、石原勘ヶ由、竹内八左衛門、横治三郎兵衛、是を中備へとす。内海多助、長谷川五郎兵衛尉、安積將監、同久蔵、是を搦手の先陣とす。田路伝兵衛、植木弥平、宇尾墨勘助、是を中陣とす。岡城豊後守、神山但馬、伊和主税、安甫助太夫、是を後陣とす。大て搦ての勢都合千三百余人。

扱本丸にわ宇野下総守従五位源の政頼、子息民部之太夫祐清、一族右衛門祐光、同（ついで）女正祐政を始め、宇野内匠頭、原石左京太夫、此勢五百余人。式の丸にわ宇野左衛門、出丸は宇野主計也。惣勢式千五百余人。時に（91才）はや寄手堀ぎわ迄寄、押寄せ責る事急（き）也。時に政頼諸軍に下知し、「此敵何程の事か有。討ちらし我が勇威を秀吉に見せくれん」と手勢五百計を引卒し、大浪の如く羽柴が先陣荒木平太夫が備へ鉄鉋をばらくと討懸、関を哄と上げ一度に抜連て切て掛れば、荒木勢大に驚き、「今政頼出べきとわ思わざりしに誠にすばやき政頼哉。去ども如何で怖（おそ）るべき。政頼を討て高名を顕さん。敵は小勢ぞ。只一息に討崩せや」と同じく関を合せ、鉄鉋を打懸鎗を合せ喚き叫んで突懸る。政頼の下知（91ウ）励しく、唯一揉に切崩さんと火水と成て働けば、荒木勢は政頼を討得んと四角八面に薙廻り、切ども突ども一足も不引、噴声を励し両陣の矢石は空に行違ひ、死生を不知戦ふたり。此方に田路五左衛門、竹の内八左衛門、久住外記、先手を廻し突立れば、荒木も爰を破られじと鎬を削り鏢を割り、久しく間有とも見へざりける。田路与一兵衛、衆に抽んで雑兵三人突倒し、荒木方の石原源助と戦

ふて首を取。荒木方の大郷源太左衛門は敵を八方に突廻し、鎗の鋒先を紅に染て馳廻る』(92才)を、安甫助太夫よき敵ぞと駈寄て、大郷が馳懸る馬の前足を横薙に切倒す。大郷不怵落る所を駈寄て首を取。是を始とし分取高名数しらず。去る程に宇野下総守政頼は今を限りと必死と成て戦へば、双方の軍勢喚き叫んで一足も不引と争ひける。されども両陣の士卒何も惣身鉄石にあらざれば、討死手負数不知。人死の上を乗り越へく、双方死を争ふて戦ふたり。荒木の先陣堀久太郎秀政物馴たる勇士なれば、政頼と戦ひをせず、つつと馳抜城へ懸りて、空虚を討んと搦手の』(92ウ)味方と両方より堀ぎわに乗り付、喚き叫んで責立れば、留主を守りし政頼の息藏人祐清諸卒を下知して防戦せり。其烈しき事電光の閃く如く城より討出す。金丸は玉を飛し、矢先わ篠を乱すが如し。流石の寄手此勢ひに打碎かれ、名くく人を楯にする処を、城中より切先を揃へ関を揚て討て出、無二無三に打懸り、祐清自ら鎧刀を振て爰を破られじと戦ふ。両軍の矢玉飛行する事雨あられの如し。宇野の士卒わ命を塵芥より軽んじ義を金石にひし、火花を散し戦ひしが、祐清が必死の勇に』(93才)討碎かれ、羽柴勢覚へず三丁計り引退く。時に安積、小林、城に残り居たりしが、安積に向ひ申けるは、「今諸將悉く敵を追出たるこそ幸也」と、小林兵庫、同戸兵衛、安積將監老度に城を焼落さんと手配悉く済にける。時に安積久蔵是を聞父を諫て申けるは、「父君は返忠有由聞及び候。是誠に忠と言べきや。古へより君を逆ひて子孫全き事を不得。知し召や、漢朝には王莽は君を逆き久しからずして光武に亡され、亦近くは日本で平親王将門は朝敵とは成て天下を転さんとせしも、貞盛等』(93ウ)が為に亡さる。父秀吉へ降り玉ふ共、何ぞ重く用ひん。只命計りを助かり、然らざる命を敵に降りて恥をとらんより、義を守りて潔く討死仕玉わざらん。某しに於ては御謀反と組し候まじ」と涙を流し諫めければ、泰昌大に怒り大眼くわつと見発き、「愚生の爾ぢ、何ぞ高明なる大人の胸中を知らん。重ねて諫る事なかれ」。久蔵是を聞天をあをひで、「親ながら重恩の主君に敵す不忠不義の人。一時も従ふ事を不得」と郎従引連れ、本丸へ注進するに、本丸にも

反忠有と上を下へと揉合最中也。

政頼此事を聞て、もはや運尽たりと郎従引連れ城へ帰りけれども、本丸へ入事不叶。北戌奥方の屋敷へ行、奥方お時の方を呼出し』(94才)申されけるは、「我運尽て今日悉く宇野家亡びん。爾何卒此の慶之助を連れ慶之助政頼の末子也軍中を下り、庄太郎左衛門は先年望に依て高下の地に土民と成。彼を頼み何卒宇野家少しにても残る様頼むべし。彼又土民といへども五百石の領主たり。敢て見捨はすまじ」と申されければ、お時申されけるは、「今迄君に従ひ今落城に至り、何の面目有てか他へ落べきぞ。君と死を一処に致し候わん」と申されけるを、政頼涙を流し、「誠に爾が信義至れり。然れども我と一処に落ば敵共に殺すべし。』(94ウ)爰をわきまへよ」と言捨て、亦馬に飛乗り郎従引連れ、西坂を飛下り都多村差して落行けり。斯て奥方は泣く城を出玉ふ。

掛る処に安積久藏、何卒主と死を一にせんと爰彼方に尋ねし処に、「宇野殿は早西国へ落玉ふ」と叫りければ、直に馬を飛し西坂を一文字に懸降り、都多にて追付君を守護し落行けるこそ誠之忠臣也。

扱大手へ打出たる諸将も城に火気の揚りしと見て驚き、敵を追捨城中へ入らんとせし時、政頼早落玉ふと聞て、山伝ひに我もくと落行けり。時に岡城豊後守吉』(95才)政は城の火を見て、「南無さんぼふ城へ敵入たり」と猛火の中へ立帰り、「我一陣をあづかり、斯敵に乗り取られし口惜き事やあらん」と言もあえづ、落残りし士卒を励し死物狂ひに切立れば、荒木勢も責あぐみ見へけるを、堅田、木村両処に分れ、「敵は死武者成ぞ。一人立の手柄を望まず。一人懸れば過ち有ん。一度に懸れ」と時を見切し、即智の下知に敵は氣を得て勢ひ懸るを、城兵是迄也と引組んでは差違へ、組つ組まれつ戦ふ処に、豊後守遙に荒木が差物を見付、御参なれと群る敵に』(95ウ)会釈もなく四方八方へ突散し、荒木を討んと勇氣日頃に十倍し働けば、勇み進みし羽柴勢もはらくと逃出すを追すがつて、人無処を行が如し。煙りを不厭宙を飛ん

で馳来り、「羽柴殿の功臣荒木殿にあらずや。斯言我は宇野家の長臣岡城豊後守吉政也。相手に取て不足はあらず。尋常に勝負をせん」と呼る声は雷の如し。其早き事烈風の起るに似て、鎧の穂先稲妻の如く閃かし、微塵にせんと飛懸るを、荒木が郎従溝口半蔵左はさせじと中にへだたり、太刀打振り懸塞りさゝゆるを』（96才）吉政大に怒り、「悪き奴が振舞哉。目に物見せん」と短兵急にくり出す鎧先、溝口も手練のかせ者、ばつしと払ふて付入太刀、吉政も無双の勇士横にかわし亦突懸るを飛違へ、胡蝶の花に遊ぶが如く、互ひに飛鳥の如く、打合突合ひ双方獅子の吼るが如く、一世のはれと秘術を尽し戦ふたり。吉政は必死の勇猛、溝口は主君の前荒木に近付せじと日頃の勇氣身心を励し、誠に双方惣戦也。荒木勢も碎るが如く忙然として見物せり。荒木は吉政が壮勇を見て溝口が過ちを恐れ、自ら馬を』（96ウ）出さんとするを、諸士等是を見るよりむらくと討て懸れば、溝口も戦ひ勞れ、多勢に譲り退きける。依て物分れと成て豊後守は多勢に取巻れ、死物狂ひに戦ひしが、今は是迄也と鎧投捨、大太刀拔て近付者を切散しく、すつと立て大音揚、「死せん者は閻魔の帳に我名を記せ。近き者は目にも見よ。遠き者は伝へても聞。今運尽て爰に終る大剛の自害するを見て、汝等が運尽死ける時の手本にせよ」と紐引切て兜を投捨、太刀取直し首に当て、えいやくと声諸ともに自ら首をかき落しけ』（97才）り。此時蔵人祐清士卒を勇め、二三四度四五度勝ほこつたる織田勢へ自ら真先に進み、鎧を揚て掛入く追口りく散くに戦ひしが、寡は衆に敵すべからずとの金言の如く宜成哉。蔵人祐清を始宇野家の諸士数度の合戦に悉く討死し、其中に火煙盛んに成て、女子供に至る迄皆く煙りにむせ、爰彼方に討死しける。時に城中の反忠の者、宇野家を亡し城外迄寄手を迎ひける。大手の壱ばん乗り荒木平太夫と名乗り城を取たりける。時に秀吉も山の麓迄出馬し、其勢壱万八千余人、』（97ウ）山之上下に満くす。其時急に製札を出し曰く、「此山へ百姓町人武家出家諸門此山へ立入べからず」として夫より荒木、樋口、石見を大将として、政頼を追て行にけり。是を案ずるに、今長水に堀はなし。右堀と言わ上町表大手の堀成べし。

政頼并に一族郎従大森にて血戦討死之事

去る程に小原の城主新免伊賀守方へ長水難義之由追く、告来りければ、さらば加勢を出さんと一族郎従打寄、敵は大方上町より生谷下町を取切べし。然らば都多村へ越へ後詰せんと、軍勢五千（98才）余人、天正八歳五月九日の朝討立来りける。其時宇野殿は都多より山越に千草岩野部へ越へ、最早道くにて一族郎従追来りし敵と戦ひ、或は切合千草大森迄漸く落行。小原へ越へ夫より毛利家へ行んと思ひし所に、河内川大水にて渡るべき様なく如何はせんと見やる。向ふに勢の多少は見へねども旗見へければ、草木の風に動くさへ追手の勢ならんと恐るゝ弱兵なれば、はや敵之廻りたると心得て、進退必死と覚悟して追手の勢を待懸たり。然れども敵は大勢、味方は次第く（98ウ）に討死し、亦是落失て僅の勢也。其上皆く、勞れたる武者也。去れども一族には祐光、采女行義、郎従にわ重清、勘ヶ由、香山但馬、勘助、七郎兵衛、小兵衛、治郎右衛門、三郎兵衛、助太夫、是を始として三百余騎、義を守りて皆必死を成て追手をそしと待懸しは大膽不敵と見へたりけり。斯て待処に追手の勢寄せ来り、関を作り鉄鉦を放ち黒煙りの下より鎗先を揃へ、哄と喚ひて突懸る。宇野勢は待設たる事なれば、同じく一度に叫んで討て入り、関を合せ爰彼方に突合ふ鉦の光りは電光の如（99才）く、其烈しき事風の如し。宇野方に名有祐光、行義、重清、吉政、安房、則長、資清、光時、正明、勝時を始め、名有勇将今日を死期と火水と成て戦へば、荒木、神子田等は士卒を励し、一足も引なと南へ馳東へ追廻し、荒木、神子田只一息に討崩さんと揉に揉んで馳立て、戦へば、宇野も爰ぞ最期の一戦と七転八倒して戦へども、荒木が猛威に討立られ、散くにて成て崩れけり。政頼は崩る味方を叩立て四角八面に馳立、萌黄威の鎧に糟毛の馬に乗り、大身の鎧をすぎき、勝誇たる荒木勢を追捲りく（99ウ）血の浪を揚て戦ふは、流石五郡の大守たる剛物なれば、此鋒先に当て命を落す者夥し。勇み進み進みし荒木勢東西に打靡ひて見へけるを、神子田弓手に廻

り鎧先を揃へ突立れば、粉の如く崩れけり。政頼大に怒り郎従二十余人踏止り、敵の真中へ乗り入て無二無三に馳廻り死物狂ひに戦へば、荒木勢我討取んと討て懸る。下総守事ともせず、敵を討事麻を薙が如し。其身も数ヶ処の疵を蒙り死憤を励し、近寄敵を突落し勇を振ふて戦へば、三百余人の従兵も多く討死し、今は三（100才）十五人のみ馬の左右に引そふて戦ふ処へ、北條、肉（こづ）粟等五百き計り政頼を取囲む。政頼一度に哄と討て懸り、近寄武者二騎を切て落し六七人を突倒し、最早是迄ぞと主従八人腹十文字にかき切死失けり。夫より荒木平太夫は其首を取て下町の陣処へ帰りける。

其戦場より三才に成玉ふ御子御乳人御乳母と共に落玉ひ、舟越山へ登りて出家仕玉ひ、法名を真賢と申て瑠璃寺の開山也。其落玉ふ時、六郎右衛門と言者落人をはがんと取懸しを、御乳母手を切落し、夫より此者を手ばふと言ふ。

亦（100ウ）は作州よりの敵を見へしは、毛利よりの加勢の旗也。是宇野家滅亡の時來也。時に自害したる所に取納め五つ之五輪をこん立し、法名を記しける。

今日大森にて討死せし人くにわ、宇野下総守従五位源の政頼を始め、同内匠行義、小林三河重清、安積久藏泰長、石原勘ヶ由光時、香山但馬正明、宇尾墨勘助勝時、広瀬七郎兵衛周数、下村治郎右衛門則長、石田小兵衛資清、横治三郎兵衛信友、安甫助太夫、安房子式人討死す。是皆石堂に俗名法名印有。春名理レ修光俊も共に名有。是は子の名と異ひ也。（101才）光俊は五月五日下町の戦ひに討死す。其墓印に松木有。

庄太郎左衛門政春由来付たり忠義之事

古へより聖人天に繼で植を立、仁義礼智の五常を以て諸人を教へ玉ふといへども、信なき時は仁義礼智の道忽然として空に成。是に依て戦国の諸将信をもつて第一とし、義其内に有るとかや。爰に庄太郎左衛門と言智仁勇の三値を兼し英士有。彼は元宇野家之長臣たり。幼名吉三郎宇

野家に仕え廻々に大戦有。宇野小寺等の争戦に大功有』(101ウ)て五百石を領し仕へしが、其後亦親へ孝有主へ忠有て、其戦場の勇亦人に勝れし智仁勇の能士を感じ、亦政頼加増し五百石を賜わり、政頼の政之一字を下され政春と言。其時に庄之曰く、「臣が事、差たる功もなかりしに大禄を賜る之段、面目身に余り候。夫に附臣思ふ事他なし。唯土民たらんを望み申也。只今君亦五百石を賜るとの仰難有候。然れども我が家に五百石玉われば、臣が身に余り候。唯今申上候条我意を振ふの至りに候へども、今君五百石を賜るを差上、元の如く五百』(102オ)石拝し、何れの里成とも家く五百石を領し土民と成度候。此段御聞召分下さらば、臣が願ひ此上なし」と申ければ、政頼暫く案じ居られしが、横手を打て政春の仁心をかんじ、夫に依て弘治元年<sup>(一〇二)</sup>完粟郡之内、高下村の地に五百石をあたへ、土民とならしむ。

然るに此度織田信長の討手羽柴筑前守秀吉、長水を囲び責る事甚だ急也と聞て、然らば長水表へ出陣致し、君恩をほふじ君之馬前に討死せんと、早く出陣の用意致す所に、折節老母氣をうつし、短刀を以て自害せんとす。太郎左』(102ウ)衛門大に驚き、「如何に候」と手早く刀を取る。其時老母如何仕たりけん。後へ倒れたり。政春早うく良薬を与へければ氣付たり。政春に向ひ、「太郎<sup>(一〇二)</sup>右衛門成か。能も信節の事也。我わ如何したりけん。自殺せんとは大に誤り也。重ねてはケ様之事は致す間じ」と平日の如く也。政春母の面色を長目<sup>ナガメ</sup>つゝ、「先く御安たひで座すよな」と一札をなす。夫より其僻止ず。度く刀を取らんとす故に、政春同間を離る事成難し。彼是致す内、はや五日にも成ければ、何卒して戦場へ出、君を救わんと心を碎きけ』(103オ)る。然るに五月八日暮方に竟に老母は草露と成て失にけり。政春早々九日四つ時に葬り忌をも不厭、同日午の刻に高下を出立し、若党十人計り引卒し、人馬に息も不続せ揉にもんで長水指して急ぎける。然る所に長水落城と聞、こわいかにと忙然と立居けるが、何卒宇野御一族成とも御供致し、秀吉の陣へ入レ切秀吉めを微塵に討碎、叶わぬ時は討死し君恩をほふぜん者と思ひ切て、長水の猛火の中を只十余人駈上りける。

此時政頼の奥方お時の方は君の仰を受けて十三才に』(103ウ)成玉ふ若君を供なひ、足輕老人連れ片山を降り玉ふ処に、政春に対面し、魚の水に合ひし心(マツ)智(チ)して奥方申されけるは、「今日当城滅亡し皆く落行。君は我に此慶之助を連落行、庄政春は八年以前高下の守りと成。彼方に行彼を頼み何卒宇野家断絶せざる様頼むべしと言捨落玉ふ。依て敵中を抜つ陰れつ落来りしに、爾に合とは天の宇野家を捨玉わざるにや」と悲み之中に喜び也。政春大に驚き、先に君御安たひにてと計りにて誠に悲み泣居たりける。去れども爰は敵中也と言ひ悲みけり。されば、太郎左衛門政春は主君の仰を蒙り、然らば我家に御供』(104オ)仕り落歸り、臣有ん限りは君の御家を断絶させ間敷迎、夫より高下に歸り日に心を疾(イ)め、何卒君家を取立んと心を碎きける。然れども我預り申共臣は小身、如何にも手立なし。幸ひ成哉、奥方の御郷但州竹田の城主四方天但馬守殿は勇武の大守也。是へ御供致しあづけ、竹田と心を合せ我心計を以て宇野家再立仕らんと夫より軍散じて但州へ送りける。

#### 政春君を守護して剛力の事

爰に安積将監泰昌此事を聞付、討取て秀吉へ奉』(104ウ)り手柄にせんと手勢三十余人引卒し、道に兵を伏せ待掛たり。政春は此事を案之内に知り、何れ安積、小林兩人之内道にて懸らん事必定也と思ひ、主君を乗り物にのせ奉り、其身わはだに鉄之鋼を着し、若党五人召連れて道を早めて急ぎけるが、竹の生茂りし中より鉄鉈之音諸とも三十余人頭われ出。安積泰昌真先に鎗を揚大音に呼わりけるは、「庄爾は君を守護するなんと言ひ、女ををかす馬鹿侍。主人をなひがしろにし無礼者。爾が首を此泰昌が槍先に乗せくれん」と呼びける。政春か』(105オ)らくと打笑ひ、「爾こそ大恩の主を背き敵に下る無忠不義人面会心の無道者、何を言や」と言捨て行んとせしを、安積が勢むらくと討て懸るを振り返り大眼見ひらき、「爾等如く骸骨め、見捨て通るを爾が方よりの手出しこそをかしけれ。よし／＼目に物見せん」と言ひもあへず、



大勢の中へ会釈もなく切て入、三尺四寸の大太刀を真向にかざし、右に当り左に追散し四角八方に薙立る。安昌士卒に下知し、「鎗にて討取れ」と雲霞の如く取巻ひて戦合ける。時に政春馬上に立て大音に呼わり』(105ウ)けるは、「家来ども、爾等は君を守護し先へ行べし。我もはや追付也」と言ひければ、皆く爰ぞ主君の御身之上一大事と思へども、亦若君之事も重ければ、五人奥方を守護し落けり。政春思ふは、我爰にて討れなば、若君之御身有まじと九死一生と成て喚き叫び、石踏砕き地を踏ならし血戦し、何卒泰昌に組んと駆廻りしが、難無安昌が馬前に立、「泰昌叛我首を進候」と言俣、安昌をつかみ馬上に差上げ大音に呼わりけるは、「天上天下唯我独尊泰昌爾が首を取事誠に安し。然れ共汝命を助』(106オ)からんと敵へ下りしを我討取らば不便也。予が仁心を以て先暫く命を助けくれん」と向ふ成植田の中へざんぶと取て投たりける。士卒政春が強力を恐れ安昌を肩に掛、蛛之子を散すが如く逃たりける。政春は打笑ひ、「返せく」と言けれど、耳にも不入我先に矢にけり。政春馬上に立て向ふを見れば、早乗り物十丁計り行ければ、「ほつ」と叫びて一鞭くれて追付て、君の安否を問ふ。其時に若君自ら御手を下され、「政春成か。爾はえらひ者成哉。我身上宜敷頼む也」との玉ひて、宇野伝来の』(106ウ)小柄を賜ふ。夫より但州へ供し、四方天氏と心を合せ守りける。

然るに明智光秀、但州守護故竹田も光秀に随ひ、慶之助も共に従ひ、処く之合戦に行功有故、一万石を領し後に能登守と号し、光秀亡び秀吉に仕ふ。亦慶長五年石田が乱の時に、家康公に随ひ関ヶ原にて戦功有て一万五千石を領し、徳川公に仕ふ。然るに後乱心して領処召上られ、家断絶す。然れ共亦其子右近に千石を賜わり、今に江戸御城下に宇野と号し仕ふと言也。是誠に庄太郎左衛門政春の功也。爰时政春斯せずんば』(107オ)宇野家の残る事は有まじきに古今珍らしき忠心也。政春は夫より但州を立て播州完栗郡高下に帰り土民と成。今に其家有と言。

扱も長水軍中を姫君唯咿人落玉ふを川原田たか之尾にて、はぎ取かをの皮をはぎ捨たり。夫

より終りしゆへに姫神とまぼり今に有と言。

一長水惣廻り二十四丁本丸四十間四方、式之丸三十間に四十間、出丸三十五間、井土<sup>(マツ)</sup>三ツ有。何れも冷水也。』(107ウ)

紙数六十七まひ

長水軍記卷之下をわり』(108才)

宇野一家 并に長臣之面々居所之次第 本主広岡庄氏本家

一宇野下総守從五位源政頼 長水本城居

一宇野於ときのかた政頼奥方也 同断

一宇野民部太夫祐清 政頼一男也 山崎臣之丸之居成ル

一宇野右衛門尉祐光 不知 土万郷鳥子の城居

一宇野日向守祐久 從弟か 杉ヶ瀬城居 清野、構是也

一宇野帶刀 祐長 政頼二男か 本城にて政頼同居か』(108ウ)

一宇野采女正祐政 從弟也 高家郷都多城居

一宇野内匠 行義 政頼三男か 本城にて政頼同居か

一宇野慶之介 実名不知 政頼末子 前同断』(109才)

家老

一春名修理太夫 光俊

一田路信濃守 貞政 同断

五十波長水  
藩中ノ居

一 神山但馬守	正明	同断
一 小林三河守	重清	同断
一 岡城豊後守	吉市	伊和岡城居
一 石原勘ヶ由	光時	千草黒土居
一 庄太郎左之門	政春	元五十波村居後 高下上ノ下居ス 今俗構ト云

(109ウ)

天保十二年丑年龍野藩中藤江氏にて

借用閏正月写之

筆者青木村小林

山内茂作 (110才)

右長水軍記

東京市麻布区本村町日蓮宗不受不施派事務所

妙覚寺蔵本明治三十七年十月謄写 (111才)